

奇譚クラス

新時代の風俗雑誌

宗教刑罰戦慄画譜

1952.11月号



奇譚クラス

11

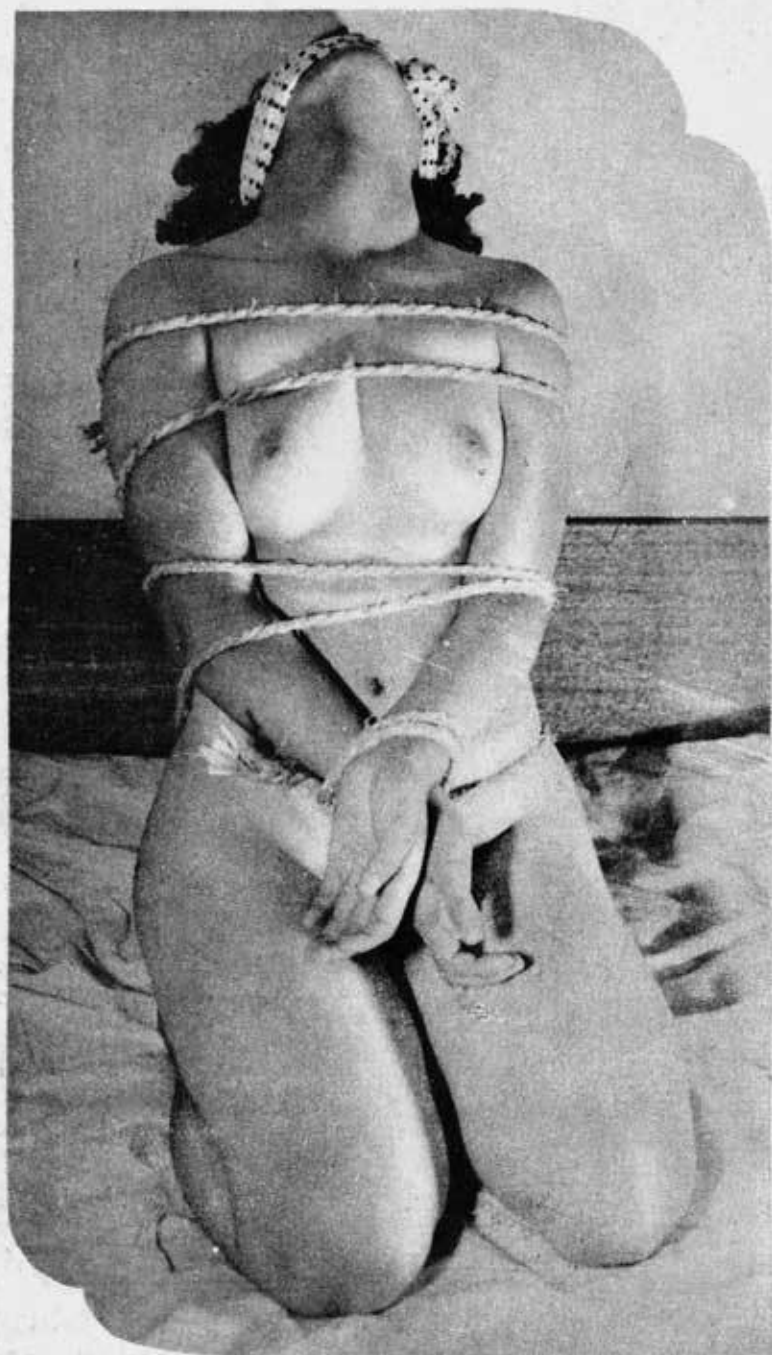
定價九拾円

地方売価九拾参円



27-9-28

緊縛の受難



風俗便所考



中世紀の便所
(1470年頃の木版)



十九世紀の便所
(クラインの銅版画)



十八世紀の便所
(ギルレイの銅版画)



ローマ時代の便所



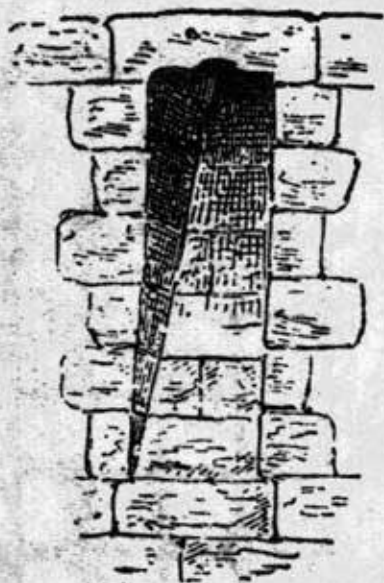
十九世紀の便所
(ヘンリ・モニール筆)



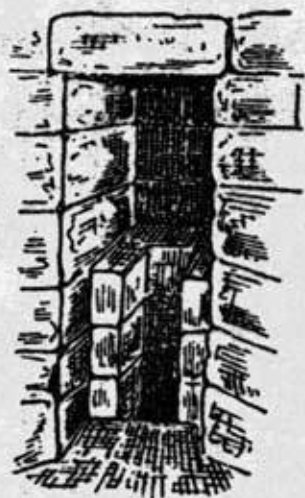
軍隊用の野外便所



ハンス・ナルの石彫



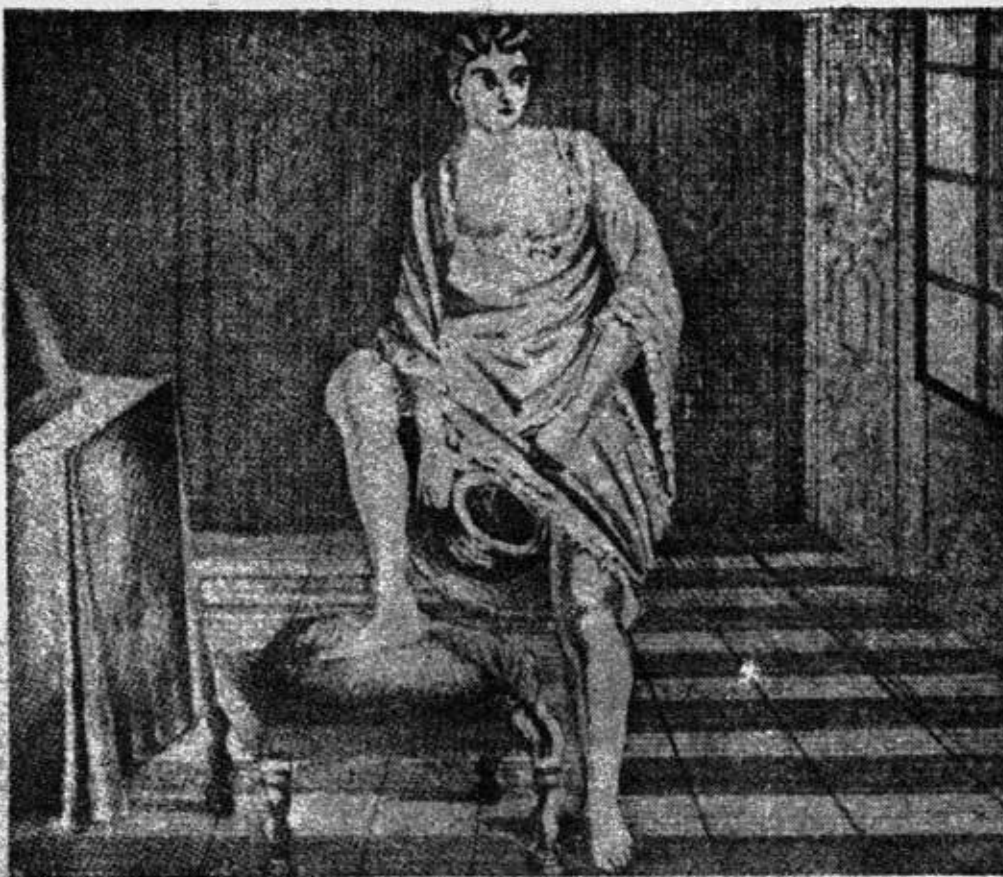
中世紀の市民の便所
(流出口)



中世紀の市民の便所



ラジオの聞ける便所



十九世紀の初頭に現れたグロテスクなカリカチュア



奥様ありがとう



★口繪★ 宗教刑罰戦慄画集(キリスト教)
タイ・セクシヨン (苦痛の表情美)

風俗便所考
★緊縛の受難★

悲戀の笞刑

松井 籟子

局部裝飾としての文身

因 果 (サデイスチック
なスケッチ)

高野 雅 和 (32)
笹 田 豊 (36)

續・へぼきうり

鬼山 絢 策 (39)

羞恥と潮紅

波多野 新 (48)

ストリップ 變態記

朝見 速 夫 (94)

現代陰間茶屋談義

染 田 玄

好き者放談

鷺 見 東 一 (144)

續・變態艷書

岡田 咲子 (70)

誌 上 雜 感

小 田 利 美 (88)

少年矯正院体験記

嶽 收 一 (90)

桃色の地獄

藤 安 節 子 (94)

反戰論者の辯

三 富 浩 生 (102)

夢性の美少年

窪 村 幾 夫 (81)

墮胎と出産風俗

阿 久 津 猛 (114)

血の神秘

島 上 源 一 (118)

競馬二題

赤 野 夢 比 古 (124)

珍版・南国隨筆

井 村 幸 男 (126)

羞恥心の発達

赤 坂 剛 (132)

都會の異態交響樂

中 河 津 規 男 (137)

江戸奇習 縁切寺

畑 村 連 治 (144)

・惡魔と口紅

桂 牧 次 郎 (54)

發狂文學者の研究

杉 山 清 詩 (60)

ジャン・ベルネル夫人の狂樂 シャルロット

(148)

男色魔の虜

井 口 正 憲 (106)

現代風俗手帳

鷺 見 東 一 (60)

性愛描寫の文學

紀 市 郁 榮 (158)

切支丹迫害史

漆 島 迫 平 (168)

当一郎おさねをくどく



当一郎と上島お紋



作造の奮戦



洞之介、切店女郎をこなす



信次郎とおかんのぬれ場



当一郎おさねの合戦



淫書開好記は歌川芳員（好員とも書く）の筆になるもので、彼は浮世絵やあぶな絵のみでなく文才にも長じ、この外「男女教訓華のあり香」「色女男志」「今様年男床」等の作もあるが、淫書開好記が最も巷間に流布された評判の艶本であった。

芳員は戯号を恋々山人、或は房庵と称し、

淫書開好記



江戸末期の関西における浮世絵師、艶本家として隠然たる人気を風流人士間に保持していた。淫書開好記は軍記本真書大開記に擬えた戯作で、登場人物も筋書きも、ほどよく大開記に似せてある。例えば信長を上総屋信次郎、藤吉郎を当一郎に、柴田権六は芝の群六、今川義元はおいらん意満川、と云った訳である。こゝに紹介するのはその挿絵の一部である

当一郎お清を手なづける



三毛田の山三とおつね



洞之介力くらべにて勝つ



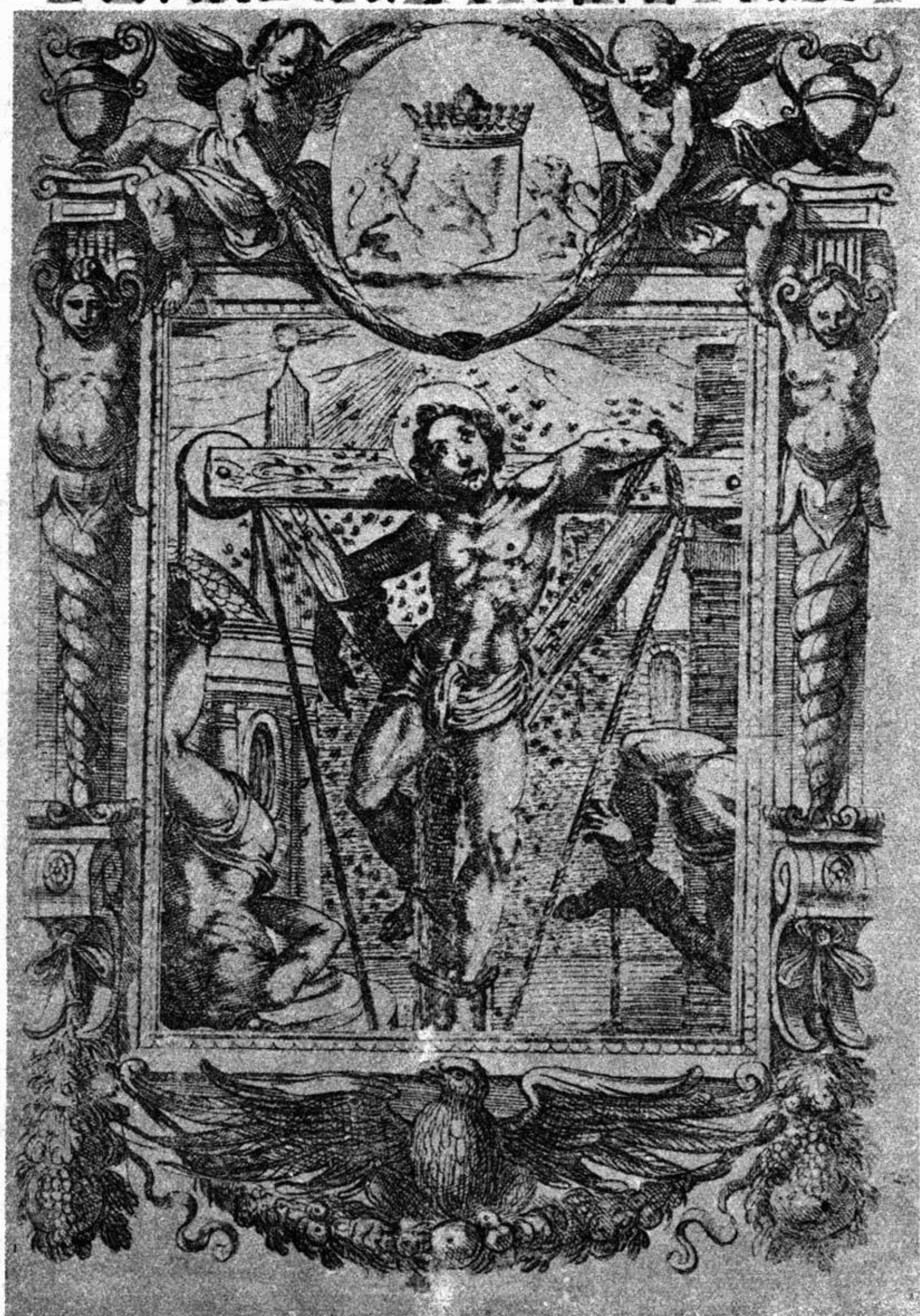
おさね作造



上総屋信次郎おかんを口説



譜圖標戰罰教宗





第 3 图



第 1 图

第 4 图



第 2 图



第 7 图



第 5 图

第 8 图



第 6 图





第 9 図

人間が人間を罰する上に於て考案されたあらゆる戦慄すべき方法をキリストを十字架にかけたローマ人の残酷な刑罰画譜によつて、調べてゆこう。

身体に蜜を塗つて十字架にかけ太陽に曝し蜂に刺させる(屍)
A、尖つた棒で突き殺す。B、腹を切り割る(第一図)
A、手の拇指を縛つて吊り下げ足に重りをつける、B、片足で吊り下げその頭の下で火を焚き数人して杖にて打つ第二図
A、両足を縛つて吊し、鉄槌でその頭を砕く B、両手を背中に廻して縛つて吊り下げ、首と足とに重りをつける第三図

A、車の輪に縛りつけて死ぬ迄晒しておく。B、車の輪に縛りつけ廻転さす。その下には鉄の針があつて身体を無惨に傷つける(第四図)
A、地上に立てた短い杭に両手両足を拡げて縛り杖にて打つ
B、鉄の尖つた短い杭の上に寝させ其の上から杖にて打つ。
C、両手両足を一緒に縛り杖にて打つ(第五図)
A、鉄針の植えた上を車の輪に縛りつけて転し廻る。B、軸の固定した輪に縛りつけその下に火を焚いて火の上を廻転さす(第六図)
A、生き皮を剥ぐ(第七図)

第 10 図





A、咽喉へ短刀を突き通す。B、槍で突き殺す。C、頭を斧で打ち砕く。D、矢で射殺する。E、サーベルで首をはねる
(第十二図)

A、キリを脇腹へもち込む。B短剣の一撃C、背中へ釘を打ち込む。(第十三図)

A、焼け炭の上を歩かせ頭から煮えた鉛を注ぐ。B、焼けた炭の上に寝させる。C、香と炭とを交ぜて掌にのせ、苦しみの余り香を落す時は改宗したものと認められる。(第十四図)
A、頸に鉄の鎖をつけて町を引き廻す。B、焼けた鉄の上をころげ廻される。(第十五図)

第 12 図



A、棒で頭を殴る。B、鋸で引く。C、手足を切断する(第八図)
A、鉄の衣服を着せ焼け靴を履かせる。B、鉄の椅子に縛りつけ焼けた鉄の帽子をかむらせる。(第九図)
A、頭、手足を切り離して鍋へ入れて煮る。B、鉄製の牛の腹中に入れ焼き殺す。C、鉄のサナの上に寝かせ下から火を焚く(第十図)

A、杭に縛りつけ焼き殺す。B、四本の短い杭に四肢を縛りその下から火をつける。C、燃えた大竈に投げ込む。D、焼け炭の穴へ投げ込む。E、一室に閉じ込め火をつける。F、大樽へ入れて火をつける。(第十一図)

第 15 図



第 13 図

第 14 図



A、足を縛つて吊り下げる。B、二ツの足を縛つて吊り下げる。C、十字架にかける。D、頭を下にして十字架に釘付けにする。E、二ツの手を縛つて吊り下げ足に重りをつける。F、女は髪の毛で吊り下げる。G、一本の手を縛つて吊り下げ足に大きな重りをつける。(第十六図)
A、重りをつけて川へ投げ込む。B、網に包んで川へ投げ込む。C、首に重りをつけて急流へ投げ込む。(第十七図)
A、断崖より真逆さまに突き落す。B、焼け籠の中へ突き落す。(第十八図)

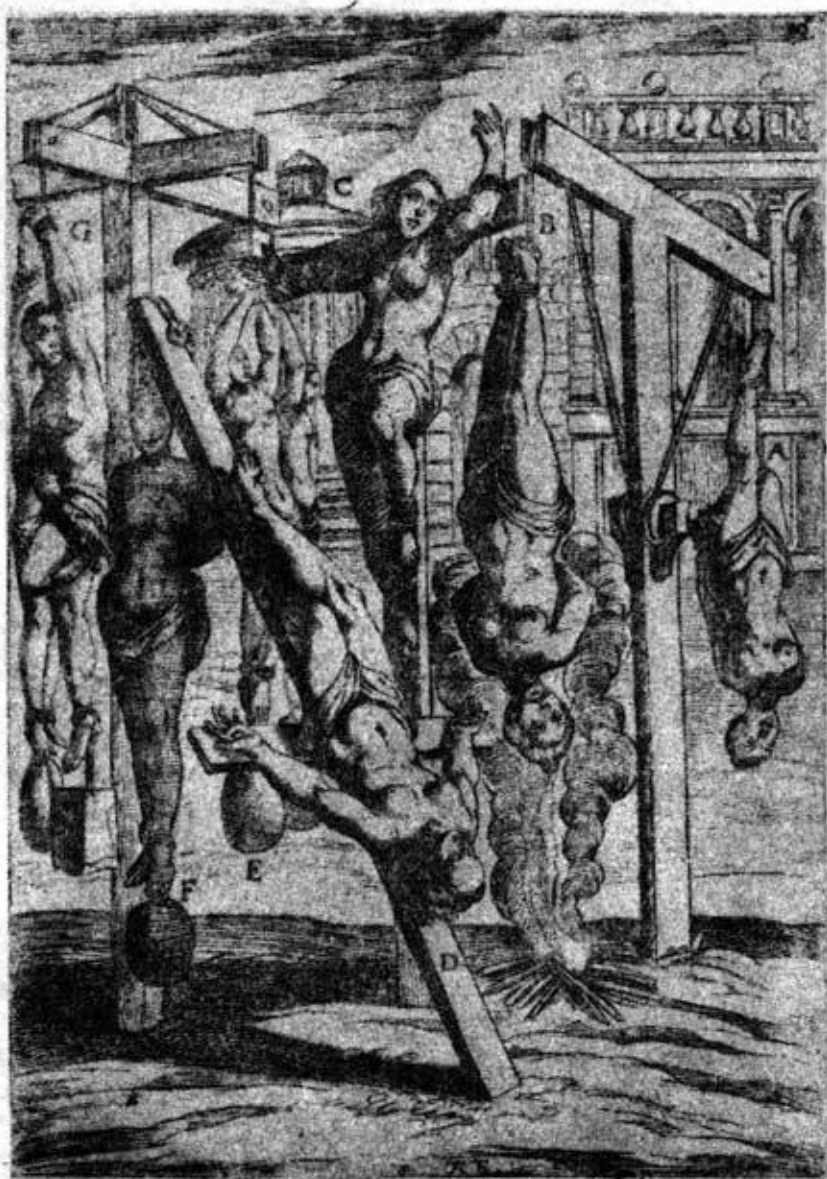


第 17 図

第 18 図



A、首の所まで生き埋めにする。B、腰のところ迄生き埋めにする。(第十九図)
 A、野馬の尾に縛りつけ引っぱらす。B、石塊道を足に繩をつけて引き廻す(第二十図)
 B、地上の杭に両手を縛り、更に両足を滑車に結んで身体を引き延す。C、圧縮台に入れて、葡萄を絞るようにする(第二十一図)
 A、頭から煮え立つた鉛或は油の釜へ突き込む。E、鉄鍋へ入れて炙り殺す。C、煮えくり返った鍋の中へ投げ込む。(第二十二図)



第 16 図



第 21 图



第 19 图

第 22 图

第 20 图



筍盗人

(繪本教歌筍より)



詞書「はちかきし人のなりふりわきまへて我身のためのいましめと見よ」

新時代の風俗雑誌

奇譚クラブ

十一月号

第六卷 第十一号 通刊 第四十九号



悲恋の答刑

松 井 籟 子

画・喜 多 玲 子

「松下さん」

秋代がよばれて振返えると、さきに帰えつたはずの関良子が学校の前の貸本屋から出て来た。秋代が校門を出るのを見張っていたらしい。

ふだんから醜聞めいたうわさのある関良子だったが、秋代とは帰る道が同じだったから親しく話をしないでもなかった。

「ねえ、松下さん、私に一寸つきあつてくれない？」

「なあに？」

「あのね、あんたアルバイトやつてみない？」

良子は秋代と肩を並べて、駅の方へ歩き出しながら言った。

「雑誌の口絵写真のモデルなんだけど、髪の毛の長い人を取りたいんですって……。あんたの髪、黒くて長くてとてもいいと思うのだけど……」



級友のほとんどが、短かく髪を切つてコールドパーマをかけていた。電髪の子リチリしたのにくらべて少女らしく清楚にもみえ、ひとりがやり出してからクラス中の流行になつていたのだ。秋代のように肩までたれる長い髪をパーマもかけずに、細い黒いリボンで結んでいるのは珍らしかつた。いつてみればパーマをかけるゆとりがなかつたのだが、その為、いいアルバイトがあるというのなら秋代にとつてもつけの幸だつた。

しかし、一寸不安になつて

「まさか裸体写真ではないのでしょね？」

秋代は念を押した。ただ黒い髪的美しさをとるだけのモデルなら不服はなかつた。

「モチ、裸体ぢやないわ、それは保証するわよ」

「そんなら行つてもいいけど、これからすぐ行くの？」



「ええ、夕方までには帰えられるわ、そしてお礼もすぐ今日くれるのよ」

「あなたも行くの？だつてあなたの髪短いのに……」

「ポーズによつて違ふのよ、でも写真のモデルつてああしろ、こうしろ、つて注文つけられるから一寸つらいこともあるのよ、でも辛抱してね、そのかわり一時間千円にもなるんですもの、裸ぢやないつてことだけ保証するからあとのことは我慢してくれる？」

「いいわ」

秋代は言つた。

黒い長い髪の美しさをとろうというような写真家は芸術家としていろ／＼氣むづかしい注文を出すのだからと思つた。

何にしても、今日アルバイトの口があるということは、秋代にと

つて天から降つた幸運のように嬉しいことだつた。

というのが、頂度その日は秋代の姉の誕生日だつたのだ。

姉の真知子はひとりの妹を専門学校にやる為、酒場ずとめをしてゐた。姉妹二人、小さな部屋を間借りしてつましく暮らしている。姉の誕生日だからといつて、秋代には姉の為に贈物を買う小遣いもなかつた。せめて学校の帰えりにその辺の丘を歩いて、野に咲く秋草でも集めてこようと思つてゐたのだ。

「本当に今日お礼をくれるの？」

秋代はもう一度念を押しながら、いつか洋品店のショーウィンドーでみた黒水晶のネックレスを思ひうかべた。本物ではなくても黒く光るネックレスは、姉の白い肌にどんなに美しくうつることだろう。そして、それよりも、意外そうに目を輝かす姉を「フム」とふくみ笑ひしながら、いたずらつぽく見ている自分を想像すると、自分で自分がとてもいい子に思えて嬉しかった。

二

良子にともなわれて行つた家は芦屋の高台の映画に出てきそうなブチブルらしい家だつた。

その庭に面した離れにすでにカメラや照明道具がおかれ、三人ほどの男が二人のくるのを待つてゐた。

「おそくなりました」

良子が言うと

「真風間ランデヴァーでもしてたのかい？良子ちゃん随分待つたぜ」と、部屋の中にいるのにベレーをかぶつた男が親しそうな声をかけた。

「黒い長い髪をした美しい人なんて注文出すから、探すのに骨折つたわ。クラスメートの松下秋代さん。いいでしょう？この人……」

モデル発見料もらつてもいいくらい……」

ボン／＼いう良子の横で、秋代はつつましく頭をさげた。

ベレー帽は座り直して

「樋口といます。今日は御苦労さま。まあ冷たいものでも飲んでから、ゆつくりかゝりましょう」

そう言ふと、女中がはこんできたサイダーに葛餅をすすめた。

遠慮なく良子はムシヤムシクとほうばると

「どつちからかゝるの」

と、樋口に聞いた。

「君は又いつでもとれるから、とに角松下さんといいましたね、その方からさきに……」

「そう、衣裳は？」

良子がいうのに、樋口の出したのは、緋縮緬の長襦袢だつた。

「素肌にこれを着て下さい。髪はリボンをといてとかしておけばいいです」

「あの、これ着るんですか？」

秋代はおず／＼と聞いた。

長襦袢姿の写真をとられるとは思ひもかけなかった。

「顔うつるのでしょうか？」

重ねてきくと

「いや、髪の毛で顔半面被うようにしてもいいですし、顔のわからないようにしますよ」

秋代は一瞬躊躇したが、今ここで厭だといつては良子の顔をつぶ

すようで悪いと思つて、気弱く、屏風のかげで長襦袢に着かえた。

「いいね、やつぱり女の髪は長い方がいいね」

三人の男はじろじろと秋代を見ていたが、すぐにカメラの用意をはじめた。

「さて、どうしようかな、やつぱりこの柱に縛りつけるか」

樋口は言ふと、カバンの中から麻縄をとり出して

「手を後に廻して」

と、秋代に命令した。

「え？何するんです？」

秋代が驚いて聞くと

「良ちゃん、話してなかつたのか？」

樋口は良子を振返えつた。

「だつて……。縛つて写真とるなんていつたら誰だつて厭がつてこやしないもの。でもちやんと、ああしろこうしろつて注文つけられるし、少しつらい仕事だけどつてことわつたはずよ、ねえ秋代さん」

「そりやそうですけど……」

たしかに良子はそう言つた。しかし縛られるなどとは思つていなかった。

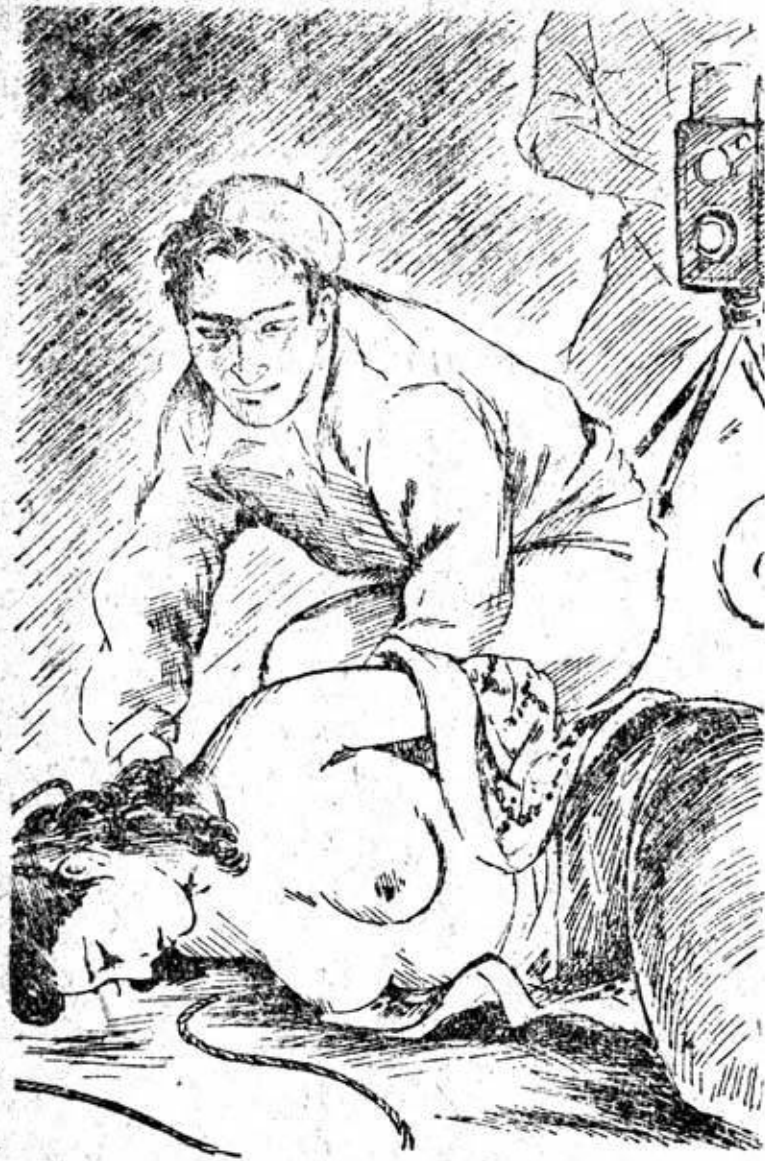
「一寸の辛抱だからたのみますよ、ただ写真とるだけだから……」

まさか逃げ出すことも出来ず四人に囲まれて、長襦袢の前を合わせながら、秋代は小さく座つていた。

「さあ、いいですね」

樋口が後から、秋代の手をとつた。

その手をとられたまゝ



「私……」

と、秋代は首うなだれた。

厭ですと立ち上つて、さつさと着がえて、帰えることは知つてゐる。しかし、そうしたら、折角姉を喜ばせたいと思つた贈物を買うことは出来ないのだ。

うなだれた首を、彼女は小さくうなずかせた。

両手を縛られた麻縄は胸へ廻されてぎゆつと締められ、さらに両方の二の腕へ、絹の長襦袢を透して肉のくびれるのが見える程かく廻わされた。

恥しいのと胸苦しいのとで、秋代は長い髪を顔にたらしうつつむいた。

「こつちへ来て」

と、縄尻を引かれて、よろよろと柱の方へにじりよると、秋代は自分が本当に罪人でもあるように、皮膚がチリチリするような気がした。

樋口は秋代を柱に縛りつけると、わざと裾を乱して白い腿をのぞくようにした。

「あつ！」

と秋代は本能的に腿をせばめたが後手に縛られている悲しさに、乱れた裾は直しようもなかつた。

「いいね」

樋口は秋代の縛られた姿をなめるように見ると言つた。そしてカメラに合図した。

「今度はこの髪まで柱にまきつけられ、キュウつと尻尾が吊り上つて苦悶をこらえる姿をとりたいたんだが、顔がうつつてはいけませんか？」

樋口が聞くのに、秋代は

「それだけは……」

と、小さな声で許しをこうた。

「ぢやあ、猿ぐつわをはめよう、そうすれば目だけしかうつらないから……」

手拭でしつかり猿ぐつわをされた。

「絵空事になると写真がつまらなくなるんですよ」

言いながら、樋口は頬がゆがむほどかたく結ぶ。そして、秋代の長い髪を、柱の上の方へ吊し上げるように結んだ。生えぎわの毛穴が粒立って、秋代はのけぞるように柱に頭をつけなければならなかつた。咽喉の線がぐつとのびて、はだけた衿元が、緋縮緬の赤さと

対照的に白い。

「今度は庭の松の木から吊り下げたいね」

樋口がいうのに

「もうかんにんしててください」

やつと秋代は言つた。

「今日のはじめてなんだもの、慾張るとあと頼めないよ。それにこれつて言つてあるんだし……」

良子是指一本出して、秋代の為に口を添えてくれた。

「よし、ぢや、良ちゃん苛めるぞ」

「毎度のことで……。ほら、この間の縄の痕がまだ残っているよ」

良子はブラウスの袖を二の腕までまくつてみせた。皮下出血したような紫色の痕が、二すじも三すじも残っていた。

三

ネックレスを買つてもまだおつりがあつた。

秋代は一番小さいデコレーションケーキを買つた。はじめて経験したアルバイトのつらさや恥しさは忘れることが出来た。買物というものは何とたのしいものだろう。ノート一つ買うのさえ姉に言わずらい乏しい経済状態は心のびやかささえ失われることが多い。

今までにも秋代はアルバイトしたいと思つたが、働いてくれる姉に代つて、二人の食事から洗濯、掃除と、全部自分がやらなければならぬので、姉妹二人きりの生活でも目にみえない様な、こまごました用事が多く、時間に制限のあるアルバイトは出来なかつたのだ。

今日思いがけなく千円のお金を手にして秋代は口笛をふきたい程

心はずんでゐる。何かしらん、伸びをしたような軽さなのだ。

二階借している家の下の人によて、二十円のキヤラメル一個子供にやつただけで、梯子段をふむ音さえ気がねなしに元気よくふんであがれた。

「お邪魔します」

部屋の中から声をかけたのは、姉の愛人の浅香伸夫だつた。姉よりも年下でまだ学生だつたが、来春卒業したら姉の真知子と結婚する約束になつてゐる。

「姉さん、まだ？」

「僕も一時間程前から来てるんだけど……」
贈り物らしい箱が、デパートの包み紙のままおかれてゐた。

「無理したな」

秋代はわざと浅香に乱暴な口をきく。姉の夫となれば兄とよばなければならぬのだが、年が近いせいか、ぞんざいな口のきき方で親しんでいた。

「君こそ」

浅香は秋代の手を見る。これも包み紙のままぶらさげている箱がキーキらしいと見ているのだ。

秋代は急いで白いサロンエプロンをかけると、窓から張出しになつてゐる手すりの上で野菜の皮をむき出した。

「手伝おうか」

しばらくして浅香が後からのぞき込むと、目に一杯涙をためてゐる。

「どうしたの？」

驚いて彼がきくと、秋代はエプロンのはしで目をふきながら、出

窓にのせた組板の上をさす。切りかけた玉葱がおかれてあつた。

「なあんだ」

浅香は言つたが、秋代の涙を一杯ためた目は妙に印象的だつた。子供っぽい秋代しか知らなかつた彼が、ふと秋代の「女」に気がついたそんな意外さかもしれない。

食卓に料理が並び、デコレーションケーキも、白い卓かけの上で花が咲いたように姉の帰りを待つてゐるのに、誕生日を祝われるべき人はなか／＼帰つて来なかつた。

「真知子さんおそいですね」

浅香は秋代と二人つきりで、せまい部屋に向い合つてゐることが何となく息苦しく感じられて来た。

「今日は早く出て、早く帰えると言つていたのですけれど……」



秋代も答えながら何となく空気の色が気になつた。

真知子の働いている酒場はオフィス街にあつて、風間でも一寸飲みによる客があるので一人二人交替に風間出て早く帰える番を作つていた。今日の誕生日は、真知子が独身で祝う最後の誕生日なのだと言つて、朝から姉はあれこれと御馳走の品を考えていた程で、夕方には帰える筈になつていた。

窓の外に、夜の闇が濃くなつていく。

浅香と秋代は話す話題がないわけではなかつたが、二人とも姉の足音が気になつて、自然言葉少なに座つていた。電燈が円く食卓の上をてらしている。

「バチン」

と、浅香の手が秋代の肩で鳴つた。

はつとすると

「今頃蚊が……」

といつて、浅香の開いた手に、誰の血を吸つたのか、蚊が赤く押しつぶされていた。

又、二人ともだまつていた。夜、せまい部屋の中で、男と女が二人きりでだまつてゐる時、手を取り合う方が自然なようにさえ思われるのは、人間という生きものの習性なのだろうか。夜のもつ魔力なのだろうか。

梯子段に足音がして、真知子が帰えつたらしい気配に二人ともほつとした。それで庭の魔の妖しい空気に新しい風が吹き入れられるように思つたのだ。

しかし、梯子段をあがりきると真知子はハンドバックを畳の上へ投げ出して、うつ伏せになつた。

「どうしたんです？」

「どうしたの？」

二人が同時に言つて、真知子を抱きあげると、口を掩つた真知子の指の間から、赤インキをこぼしたように、真赤な血がふき出していた。それは肺から出る鮮かな血の色だつた。

四

それつきり真知子は寝込んでしまつた。

医者は肺結核と診断し、初発咯血だから今のうち徹底的に治療すればなおると言つた。

しかし、その日かせぎの酒場の女は寝こんでしまつたらあくる日から困るのだ。職業婦人でも健康保険に入つていないから、医者の払いさえその都度しなければならなかつた。

真知子が寝込んだときいて、わざ／＼つとめ先で家をきいて、たずねてくれる客もあつた。見舞品の他に気をきかして、多少の金をおいていつてくれる人もあつたが、二度三度と来る度に、浅香伸夫と顔を合わすことが多くなつた。

まだ学生の身では金銭的なことを自分でみることの出来ない浅香は、真知子の客がくると、こそそと出て行こうとするのだが、病気で氣弱くなつている真知子は、赤ん坊が母を慕うように浅香に甘えた。それを見ると、客はいい氣持がしないらしかつた。

秋代がいると、浅香は客の前に、秋代の恋人のようにふるまうこともあつた。客は氣ずかずに機嫌よく帰えつたあとで、きまつて真知子が秋代をせめた。

そんな時、女は自分の恋人には文句が言えないのか、浅香からし

かけた狂言なのに、秋代が恋人らしく振まつたことを、嫉くのだつた。

そんな姉の心情を、秋代は憎むよりは不憫に思つた。何といつても母の代りに自分を育てあげてくれた姉だつた。姉が肺病になつたのも、自分を学校へやらせてくれる為に、空氣の悪い酒場すつめをしたからだと思われて、姉に済まなく思つたのだ。

学校をやめたいと思つたが、姉がそれを一番心配するので、学校だけはつゞけて行つた。

「秋ちゃん、あんた此の頃一寸も銭湯へ行かないようだけど、お湯銭を節約しなくてもいいのよ、わずかのことですよ……」

ある日、寢床の中で姉は言つた。

「いいえ、お姉さん、お友達のお家で時々入れてもらつてるの、学校の帰えりに……」

「そう、それでおそい日があるの？」

「そうなのよ、心配しなくても大丈夫」

秋代は言つたが、姉の目のとどかない所で、そつと自分で自分の体を抱きしめた。銭湯へ行かない体がいとおしかつたのだ。裸になると、肩に、胸に、みみずの這つたような赤い痕や、その痕が幾すじも重なつて紫色になつてしまつていような痕がところどころ残つてゐるのだ。

秋代は関良子に誘われた「責め」の写真のモデルをつゞけてするようになつてゐた。

そうして得た金は、姉の見舞客がおいていつてくれたのだと姉の前をつくらつて、学費や生活費や医療費の足しにしていた。

浅香伸夫もアルバイトをして得たのだと言つて多少の金を秋代に



渡してくれる。しかし医者は転地をすすめ、遠い所へ姉ひとりやるのが無理なら、せめて須磨あたりの空気のいい所へ間借して、そこから秋代が学校へ通つたらどうかと言つた。浅香も今の下宿を引きはらつて、二人で住めば生活費が少しは節約出来る。それを医療費にむけられもする。しかし、引越するには、やはりまとまつた金が入用だつた。

真知子には知らさず、浅香と秋代はその金を何とかして早く作りたいと思つていた。

五

「今日は裸になつてもらふ、いいですね」
樋口が言つた。

いつもの芦屋の家だつた。

その家の主人がかくれた「責め」のファンで、その雑誌を後援していた。庭も広く外からは見えないし、縛りつけるのに都合のよい椽の柱もあつて、こうした写真をとるにはもつてこいだつた。

今日は庭の池の奥の岩を背景にとるといふ。

秋代は庭先で洋服をぬいだ。どうせ同じだから屋敷でぬいでいけばいいのと言われたが、寸時でも裸になる時間を短かくしたかつた。

樋口は裸になつた秋代を容赦なく縛つた。いつもは細引か、縄でも麻縄を使うのに、その日は炭俵をつむ様な荒縄だつた。秋代のやわらかい肌に、ザラ／＼と目の荒い縄は、ただ胸から廻してしまわれただけでヒリ／＼と肌を傷付けた。

「今日は割増しつけるからね」

樋口が言うのに、秋代は観念の目を閉じた。後手に縛つた縄のさきを首へ廻されて、高手小手にあげた結び目へかけてぐつとひかれると、恥しさに顔をうつむかせることも出来ず、手が痛くしびれてきても、下へさげると咽喉が縄でしめられるので、高々と背中の上にあげていなければならぬ苦しかった。

その上樋口は秋代の両足まで一つにくくつてしまった。秋代は体の安定感を失い、不具者の様に土の上に転んだ。横向きに転んだ秋代の頭から、黒い蛇が這うように、長い髪が乱れていた。

そのまゝ二三枚の写真をとると、やつと足の縄と、首に廻した縄だけゆるめてくれた。

ほつとした秋代の目に、今、庭へ導かれて来た一人の男の顔が見えた。

「あつ！」

と、思わず声をかけると、向うでも驚いて

「秋代さん」

と、声をかけた。

姉の愛人の浅香伸夫に他ならなかった。

「いや！見ちゃいや！」

秋代は我知らず叫んだが、あらわな乳房を掩うことも出来ない。

ただ体全体をくねらせて、浅香の目をさけた。

浅香の目に、後手に縛られた手首の痛々しい縄目が電気にでもふれたようにビリ／＼と感じられた。

「何だ、秋ちゃん知ってる人か？恋人かい？そんならなお都合いいんだがな、今日は姦通の私刑の写真がとりたいんだ。いつもいつも縛られた女だけぢや曲がないからね」

樋口は言う

「浅香さんですね、大体昨日お話していたとおりです、君も裸になつて下さい。この人と同じ様に縛りますからね」

浅香はだまつて服を脱いだ。

この場合、秋代を恥しきから救うことは、自分も裸になることだと思つたのだ。それにこんなにしてまで姉の為にアルバイトをしていたのかと思うと、秋代が可哀想でならなかった。

浅香も何とかして金にしたいと、ふとすすめる人があつて、「責め」の写真のモデルと知りながら、今日始めて来てみたのだ。

男にしてはきめの細い肌だった。胸全体がふつくらともりあがつて二つの乳首がポツンととび出している。男を知っている女ならいじつてかたくしてみたいと思えるような情感がひろいゆたかな胸に

たどつていた。

「少し痛いですよ」

樋口は浅香の手を後に廻しぐるぐるまきに縛ると

「こつちへ来て下さい」

邪険に引いたので、一瞬浅香は横に転んで腕を土につけた。その泥をはらうことも出来ない、秋代も払つてやれない。

二人は縄尻をとられて、大きな岩の前の冷たい石の上に座らせられ今度は背中合わせに縛り合わされてしまった。

さつきから裸にされている秋代の体は冷たく冷えていたが、浅香の体は火の様にほてつて熱かった。その熱い血がふれ合っている肩や腰を通して、秋代の体にもまで流れ入るような気がした。

そうして二三枚とると、今度は手を頭の上で縛り直して、向い合わせに太い木の枝から吊り下げて、背中を打つ鞭のさきを入れてうつすことになった。

足の下ふみ台をはずすと、体が安定感を失つて、二つの体がぶつかり合い、その反動で一たんはなれて又ぶつかり合う。その重量は二人の手首に焼きこてをあてられたような痛みを感じさせた。自分の重さを縛られた手首がはじめて知つた。次に脇腹がヒリヒリと火傷をしたようになる。秋代の頭はのどの皮膚が破れるかと思う程後へひかれ、波打つ髪が腰の辺まで垂れた。

浅香は反対に前へガクツと首をたれている。その目の下に自分の乳房があると思うと、秋代はキュウと乱首がかたくなり、その乱首のさきから体の中心を真直通つて、恥部へ主流が走つた。

手首と脇腹と、もう一ヶ所、秋代の体の中の方が熱く熱く燃えてくる。



それは何か火花のようなものを秋代の体全体から発散させて、浅香の体にジトツと油汗が浮いた。カメラにかかつている男達の目で秋代の火花を自分の体を感じたことを見られたくない。そう思うとよけいにただ一点に凝結して、男の生命が躍動する。そうして二つの体はふれるともなくふれ合つて、不思議な陶醉にしばれていった。

六

浅香と秋代は言葉少なに芦屋の高台から浜の方へおりていく。

阪急の駅を通り越し、鉄道線路を渡り、阪神電車にのるでもなく、ただだらと海の方へおりて行つた。

まだ体がだるく痛かつた。そしてそんな疲れのあとは妙に体の芯

に熱をもつことがあるものだ。姦通罪をおかした男女として、一つに縛られたのは、いわばお芝居で、その場かぎりのそらごとなのだが、その場かぎりですて切れないものが、二人をただ黙々と歩ませているのだつた。

突然、暗くなりかけている道を小型の自動車走つて来た。驚いて秋代の肩をつかんでかばつた。

自動車が通りすぎつてしまつたガソリン臭い埃の中で、彼はまたそのまゝ秋代の肩に手をおいて、じつと彼女を見おろしていた。

何か心の中のものと闘つていらしたがつたが、

「秋代さん」

あえぐように呼びかけた。

「僕はもうだまつていられない。今日君と一つに縛られて写真をとられたということは単なる偶然だと思ふ？僕は偶然というより古い言葉でいう縁の様に思えてならない……秋代さん。君はあの真知子さんの誕生日の晩をおぼえている？あの晩から君は僕の心の中にすべりこんでしまつたのだ。君という人が僕の心の中で大きな座を占めて何だか塊りのようになつてしまつたのだ。けれど、まるで神がその不心得を罰するように、真知子さんが寝込んでしまつた。僕は君を忘れようと思つて、ひたすら真知子さんを看病してきただ。裸体で縛られて写真をとられるという恥しさや、みじめさも君に惹かれる自分の心を自分で責める気持からやつてみようという気にもなつた。それなのに、そのアルバイトで君と一つに縛られようとは……。何といういたずらなのだろう。何が僕をからかつている神があるのだろうか。ねえ、秋代さん、僕がこんなことを言つてはいけない？僕が君を愛することはいけないことかい？」

熱をおびた浅香の言葉に、秋代は体中がさざなみ立つような嬉しさを感じた。

けれど、

「いけないわ」

秋代は小さく言つた。

「何故？今になつて君の姉さんを悪く言いたくない。けれど僕より年上だし、はじめから僕は引きずられていつたんだ、僕の方から愛し出したのではないのだ。僕は君と二人きりで真知子さんを待つていた誕生日の晩、はじめてそれがわかつたのだ。僕の愛しているのは君なのだ。ねえ、秋代さん」

浅香は秋代の肩へおいた手に力を加えた。

「いけません。許して……」

秋代は浅香の手の下をくぐつてもと来た道の方へ小走りに引きかえた。

「何故？何故いけない……」

浅香が追つてくる。

——私もあなたを愛しているから……

秋代はそう言いたい。

愛しているからいけないのだ。ここで浅香の愛はこたえたら、姉はどうなるのだろうか。浅香と結婚出来る日をたのしみに病いとたたかつている姉はどうなるのだろうか。

浅香も若い、秋代も若い。その二人が燃えあがつたら、恋の火がそう簡単に消せるものではない。

姦通して縛られて鞭打たれる苦痛より、それを鞭打つ人の方がどんなに苦しいかということを秋代は思つた。いくら自分が浅香を愛

しても、姉の心にそんな大きな苦痛をどうして与えられるだろう。それは姉にとつて死を意味するかもしれない。浅香が愛してくれると言つた。その言葉だけで沢山な管だ。いえ、それだけで満足しなければならぬのだ。秋代は彼に後を向けて走り出した。

と、爪先よりの道を上からおりてくる人にぶつかつた。

「すみません」

秋代が急いでわびると

「秋ちゃん」

と声をかけられた。

「あつ！樋口さん……」

秋代は声でそれとわかつた。顔のはつきり見えない程仄暗くなつていた。

「樋口さん、つれてつて、私をつれてつて！」

いきなり秋代は口早に言う、樋口の手をつかんだ。

あとから浅香が追いついた。

「浅香さん、姉さんを愛してあげて、私は、私は……」

さすがにそれ以上の嘘はつけなかつた。樋口の恋人だともいえない、あなたを愛していないとも言えない。それはすべて嘘なのだ。たゞ浅香が、樋口と自分の間に何かあるかように誤解してくれればそれでいい。

秋代は樋口によりそつて腕をくんだ。

「今日は何だか君達二人で帰えつていつたのが氣になつてね、僕ははじめて嫉妬という感情を知つたよ。嫉妬というものは実に苦しいものだ。僕はとうとうここまで君達のあとをつけて来てしまったのだよ」

樋口は言つた。

「私が憎らしい？」

秋代はわざと媚をふくんで言う。

「ああ、憎いね、責めてやりたい。ただ縛るだけではなしに、責めて、責めて、責めぬいてやりたい。僕の愛情がどんなに激しいかみせてやりたいと思つたね」

「いいわ、いじめて、思いきりいじめて！」

化石したようにしたように浅香はじつと立っていたが、頭をかかえるようにして海の方へ走つて行つた。海の広さが浅香の心を静めてくれるかもしれない。

秋代は樋口の鞭に打たれて、自分の体の中の浅香への恋心をめちやめちやにこわされたいと思つた。

「本当にいぢめてくれる？」

「ああ、裸で縛つて、頭から水をかけて冷たい体が熱くなるまで打つてやる。君のその長い髪の毛を僕の手の中にまきつけて。」

読者通信

突然とは存じますが、貴誌の十月号の読者通信で紅井良氏のサジストの男よりの書信を拝見致しまして今迄にない喜びを感じ、思わず此の手紙を書きました。それは美しい女性からではなく同性である男性に此の身体を縛り、責め、罰ふられて性的

快感の醍醐味に酔つてみたいと願うマゾヒストで私があるからです。私は女の責絵を見ても何の興味も快感も覚えず、男の責絵（特に裸体）には興味以上に快く感じるのです。深夜人知れず荒縄を自分の裸体に巻きつけて自虐する事も幾度ありました。いれられぬマゾヒストの不満を、少し絵心のある私は、あ

らゆる雑誌の責めの挿絵を模写し異性は同性に書きかえて僅かに慰めていました。私自身が責め苛まれる主人公として人にくれて描く淫虐密画は現在では百枚以上にもなりました。貴誌の喜多玲子女史の責絵の女を男に書き直しまして私の空想も取り入れた拷問地獄絵を只今習作しております。私と同じように

土の上へごり／＼と君の顔をこすりつけてやろうか。そして蹴ったり打つたりつねつたり、体中を傷だらけにしてやる。いいかい、それが僕の愛情なのだ」

「いいわ。そして私の体の中からいけない悪魔が出ていくように、松葉いぶしにしてもいいわ」

「うん、ぎりぎりとする裸で縛りつけて生松葉を焚いてやろう。体中をよじつて、波打たせて、君は呻る。獣のような声で呻るんだ」

「ええ、そうして、何もかも、何もかも忘れられるんだわ」

秋代は悲恋の刑を受けようというのだ。

恋してはいけない人を恋した自分で自分に科す刑罰だつた。

そしてその刑罰によつて秋代は何を得るだろう。普通の愛され方では物足りないマゾの喜びを得るだろうか。いじめて、いじめて、いじめぬかれる陶酔を、麻薬の様に求める女になつていくのだろうか。

潮の香をふくんだ風にさそわれた様に赤い月が上つていた。

同性に縛られ拷問されて見たいと思う方、及び男性を責めることに興味を持たれる方と文通、画通を致したいと思ひます。

◎編集部より◎

(青柳謙次)

読者通信による文通駁旋は今後漸次KK通信の方へ主力を注ぎ本誌には批評とか意見の発表等を載せたいと思ひます。

局部裝飾としての文身

高 野 雅 和



衣服というものの、まだ発達していない裸体生活を営んでいるところの原始人にあつては男女共に相手の局部を見ることが常であつてそれはお互いに顔を見合うように普通であつたろうことは想像にかたくない。何んとなれば一糸も纏わない全裸体にあつて、日常の交際は勿論のこと、途中に於て出逢つた場合等でも、先づ真先に目に入るものは、その人の顔面であつて、それから又直ぐに頸以下の肉体に目が移るからである。

此の顔から肉体に移る視線の迅速なことは真に一瞬間であつて、電光石火といつても過言ではない。衣服を着用した文化人に於て考へても一層よく判明することで、目というものは人の容貌と衣服とを対比して見ることが早い。特に婦人に於ては、人に出逢つた時等

にちらりと一瞥しただけで、どういふ衣服を着ていたか頭から足の先迄見てしまふ。そしてその見方が、殆んど無意識で而かもそれが判然と意識に存している。

そういう理由で、衣服を着ている文化人の目は、顔と衣服とを見ることに慣れているがそれと同様に裸体生活を続けている蠻人にては衣服というものが無いから、目が裸体を見ることに慣れているので、別に珍しくも不思議でもない。従つて文化人にとつて恥部だとか陰部だとかいつて騒ぎ立てる局部に対しても一向に平気でこれに対する感覚も甚だ遲鈍にならざるを得ない。

然し蠻人は冷静で性慾が鈍感であるかといふにそうではない。彼等は性的に発達して、色情はむしろ濃厚である。併しその性慾は單に異性の容貌や裸体を見ただけでは衝動することが少いので、彼等の習慣として、最も強烈な刺激を与えなければならぬのである。これは習慣性、即ち裸体を日常見馴れている所から来る好奇心の消耗鈍麻に基ずくものであつて、此の刺激は裸体という極度の点を超えている。

文化人——少くとも衣服を纏っている人達の最も強く目を惹くものは裸体であるけれど



も、裸体生活をしている蠻人達にはそれが極めて薄弱なことは前に云つた通りである。そういう理由で原始時代の蠻人にとつては、その性慾を挑発亢奮させるものは裸体以外の刺戟物でなければならぬ。故に蠻人はその露出した局部の上に、更に各種の裝飾を施して異性の目を惹くようにしたのは、これが為でその目的の求婚にあるのは勿論である。

此の様な局部に裝飾して人目を惹いた習慣が次第に変化して一方は衣服の発達を來たし一方は文身の発達を促すようになった。

二

世界の各民族に行われている文身の目的を大別してみると威嚇と裝飾と求愛の三種とすることが出来る。虚勢を示して敵を威嚇するために行い、又身を飾りて虚榮を衒い、或は異性の目を惹いてこれを誘引するために行つたものである。文身の目的はこのように異つてゐるけれども、その根本となるところは性慾衝動から起つて次第に芸術化するに至つたのである。

右の三つの目的の中でも最も原始的なものは求愛であつて他の二者も又、性的衝動から発したもので、文身の始まりは實に此處に由來する。手足顔面等の文身は、局部の文身から拡張したものであることは明らかである。原始人は異性の視線を牽くために局部に人工を加え、やがてそれが昂じて更に一層鮮明に之れを表わし、且つその位置を示すために、局部に文身するようになったのである。

従つて文身はその施された場所によつて、その目的を知ることが出来る。例えば性慾衝

動及び裝飾の爲であるときは局部を主としてそれから股、腰部、下腹部に及び、敵を威嚇するためのものは、専ら顔面を主とし、背面及び胸部等を選ぶのである。

現在に於て、局部文身を常習としている民族を挙げてみると、南洋のポリネシア、ヤップ、パラオ、ボナベ諸島の土着民族、アメリカインディアン及びアフリカのリエークノール族等である。

ヤップ島の文身は、之れを施す場所に、甲乙丙の三種あつて、全身に行うものを「ヨウル」(甲)といふ、手首から一握りの間に施すものを「パラオ」(乙)といふ、股から足首までの間に施すものを「セルプチャ」丙と名づけて居る。これは身分階級に関するものであつて、甲は一級から三級まで、乙は各階級に行われ、丙は一級から四級までとしてある。

これは主として、男子に行はるゝものであるが、女子の文身には、手甲と掌指とに施すものと、局部を中心に、臍部から大腿の中央まで施すものとの二種ある。

パラオ島の文身も盛んで、女子は十二三才の時から、既に行ふことになつて居る。面白いことは結婚後の文身で、局部に三角形の文

身をするのである。これは夫の愛を引き続けるためだと云われて居る。ポナベも略ぼ之れと同一で、女子は一人前となれば、局部を中心として、腰から足まで、带状又は線状に刺青した文身を行うのである。

すべて南洋諸島は、文身の最も発達せるところであつて、ニュージーランドのヤオリ族の如きは、極めて盛んである。同族の酋長は、顔一面に文身して、威容を張つて居るが、殆んど完膚がない。此の文身も矢張り線状のもので、これが南洋の特徴である。

それから台湾土人と、アイヌ土人とも、文身を好んで、昔から行い来た種族であることは、周知の事実で贅言を要しないが、兩者とも女子のみ行い、而かもその仕方が類似して居る。即ち口囲文身であつて、生蕃の女は、左右の口角から、耳に向つて放射状の文身を為し、アイヌの女も、口角から斜めに、上方に走つて居るが、生蕃の如く放射状を為して居らぬ。

アメリカの、ハイダ印度人に行われる文身は、南洋的の線状でなく、多くは人の顔面、動物、植物若しくは器具など描いたもので、それが男女共に同一である。又、アフリカのリニークノール族では、男も女も、等しく局

部に文身して、互に異性の目を惹くようにして居る。或いは又、種々の鮮かな色彩を施した布片等を、腰部に纏うて、文身の代りとする者もある。嘗てマーテンスという英國の旅行家が、リニークノール族の或る者に、何故に斯かることを為すかと問うたところが、それは歐洲人が、美しき衣服を着るのと同じ意味で、異性の目を惹く為であると、答えたということである。

尙、文身には、生殖器崇拜より来るものもある。これは異性の生殖器を、身体に文身し或いは彫り附けるものであつて、ポリネシア族に行われて居る。それは必ずしも局部に限つた訳でなく、其の附近、胸部若しくは手足等で、此の文身が、時としては愛人の亡くなつた後、其の忘れ形見として、施すこともある。

三

文身は蠻人のみならず、文化民族にも行われるものであつて、それは原始人の遺風であるが、茲に特殊の階級に行われる文身がある。同じ文化人であつて、特殊の階級というのはおかしいが、普通人と異なる生活状態にあるものを、差して謂うのである。

此の特殊の階級に属するものは、犯罪者、俠客、浮浪者及び売笑婦等であつて、我が国には此の外に、雲助などいうものがあつた。此れ等は特殊の文身を為して、誇りとなすが、概して云えば日本人に行われた文身は、特殊のものである。

それで文身は、種族的以外では、特殊の階級と關係があつて、そういう種の人によく行われてあつたことは、事實の証するところである。

昔の女盜には、文身したものが多くあつたようである。講談や小説にある女白浪、又は毒婦、淫婦と称せられるものなどには、背から二の腕にかけて、美しく文身したものが多くあつたということである。例えば人穴お糸うはほ、お巻、鬼押お松などで、人穴お糸の文身肌というのが、嘗て上野の婦人展覧会に出品されたことがある。

それから俠客だの、仕事師だの、又は雲助というようなものなども、好んで文身を施したもので、其の場所は背部、腹部を主とし、臀、股、腕等を纏りて、全身に渉るものが多い。其の模様は人物、鬼神、動物等の如き人の目に立つものを、極彩色に施すので、其の裸体になつたところを見ると、さながら一幅

の絵画を見るが如くなるものがある。

併し日本人の文身は、顔面と局部とを避ける傾きがある。これは如何なる理由かというに、日本人は顔に傷を附けることを嫌うこと甚だしく、陰部に対する羞恥の感情が強くして、最下級の者でも、甚だしきは売笑婦ですらも、陰部を秘密にして、之れを人に見られることを恥辱として居る。これが日本人をして、其の文身に顔と、局部とを避けしめた原因である。けれども彼等は、他の部に於ける文身をもつて、異性の目を惹くものと思つて居たらしい。

四

文身の中にて、性慾と密接の關係を現したものは、淫画又は猥褻なる文学を記したもので、これは売笑生活を営む女子に多く、卑褻ではあるけれども、売笑婦の特徴として、且つ又、性慾衝動の動機として、甚だ興味のあるものである。何となれば売笑生活と性慾との間には、一掃不二の關係があつて、彼等は自身を、一層性的に美化せんとしたからである。それ故彼等の中には、客の目を悦ばすために、わざと局部に文身して、色慾を唆る具となしたものもある。

イタリアの或る売笑婦は、腹部

から大腿にかけて、無数の陽物が朱門を窺うさまを文身し、一見するところにては、模様附きの袴衣を穿つた如くである。又或る売笑婦の文身は一の大なる龍頭が、左の大腿部から斜めに朱門を覗い、そして………と記せる文字

を彫せるものもある。其の外裸体にて右の手に花を持てる女や、又二つのハートを鎖にて連ね、而して其の下に………と記せるものなど、種々の文身を為せる者がある。

日本にても売笑生活を営む者には、性的の文身を為すものがある。これは遊客の注意を惹いて、之れを牽引する為めだともいふ、又一種のまじないだともいわれている。寛政の頃に或る湯女——隠売女と称するもので、今日の私娼——は、陰毛の間に十数匹の百足を丹念に一匹ずつ彫り込んであつたという。

又、或る売笑婦は、臍から垂下せる一匹の蜘蛛が足を拡げて、其の局部を攫まんとする状を文身してあつたというのを聞いて居る之れに類似した文身は、男にもあつて、同じ位置から下れる蜘蛛が陽龍に向つて足を拡げ



西洋の刺青

た文身であつた。

以上は性的文身として、最も卑猥なものであるが、尙、甚だしきは一步を進めて、全くの春画を文身せるものもある。

「守貞漫稿」に、文政の頃、江戸にお角といえる脅迫を事とする悪女があつて全身に種々のものを彫り、また河童が陰部に指さす形を彫つた。嘗て大丸屋に美服をあつらえ、それが製成された時、店頭にて裸体となり新衣に着更えたので、衆人がその文身を見て笑つたのを口実に金をゆすり取つたと云うことが書いてある。

(終り)

因果



④ 対話

「ね、ベバ、あたしもうすっかり酔っ払っちゃった……」

「ほう、今夜は馬鹿に、弱いじゃないか、お前らしくもない……さあ元氣を出してもつとやりなさい。何だ若い者が……」

「もうとても駄目。湯上りのすき腹が大分こたえたらしいの。それにベバにも大責任があるわ」

「わしに?……冗談じゃない」

「本当よ。一週間も来てくれないんだもの、薄情な人! あたし、今夜ベバの顔を見た時からすっかり昂奮してるのよ。酔いが早く廻ったのもその為だわ」

「口だけは相変らずうまいね」

「ひどいわ。口だけじゃない、本当に寂しかったのよ。ベバが恋しくて恋しくて……」

「本当にそうなら嬉しいねーか」

「真面目に聞いて下さらないのね……あたし怒るわよ」

「まあ、そう目に角を立てないで、もう一杯ぐつとやりなさい——お話はそれから」

「もう本当に駄目。ベバには分らないの、あたしの体がこんなに燃えてるのが? あゝ苦しい……」

「そんなに苦しいかい?」

「だからしつかり抱いて頂戴——いやそれより胸の中へ手を入れて、ベバの冷たい手のひらでおっぱいをきつく握って頂戴」

「……」

「あゝいゝ気持……ね、ベバ?……」

「何だね?」

「奥さんにも毎晩こうしてあげるんでしよう? 口惜しいわ……」

「馬鹿な事……」

「奥さんとあたしのどちらが好き?」

「愚問だよ」

「奥さんは何も知らないの?」

「うん……」

「こんな所を見つかれば殺されて了うわね?」

「……何よ、奥さんなんか、……殺したければ殺して見るがいゝ……あゝ、ベバ、あたしとても昂奮して来たわ……早く……早く接吻して……」

⑤ 妻の独白

あゝ何と云う因果、何と云う恐ろしい事だろう。之は人間の世界ではない。本能のまゝに行動する野獸の世界だ。しかも私は何等なす所もなく只手をつかねて見ているより外仕方がない。私は今、過去に犯した罪の償いをしてるのに相異なる。しかも其の償いは何と残酷を極めたものである事か。

私は夫の近頃の行為を細大もらさず知り尽している。三十も年の違ふ女と、自分の社会的地位も省みず、如何に狂態をつくして夜な夜なを過しているか。その若い女に如何に莫大な金を注ぎ込んでいるか。そしてその女に如何に年甲斐もなく思ひの儘に振り廻されているか。

しかし私は夫を責める事は出来ない。何故なら、夫を責める前に先ず自分自身を責めなければならぬからだ。

二十年後の現在も、私ははつきりと思ひ出す。その蒸暑い夏の宵が如何に神秘に充ちていたか。二十の若い胸が逞しい青年の腕の中で如何に歓喜に慄えたか。青年の唇は如何に甘かつたか。そしてその数ヶ月後に体如何なる変調を覚えたか。更に又、翌年の青葉の頃如何なる羞恥の念を以て一個の生物を世に送り出したか。

私はそうした過去を嚴重に秘めて現在の夫と結婚した。私生児を生んだ女としてではなく、純真無垢な処女として。

夫の現在の狂態を責める事は、必然的に私自身のこういう過去を夫に曝し出して見せる事になるのだ。何故なら今夫が打込んでゐる若い女こそ、あゝ、私が二十年前生むと同時に

に惜し気もなく他人に、まるで邪魔な荷物なんでしょうに呉れてやつたあの娘なのだ！

事実を知つた時、私は、運命の皮肉に驚いた。同じ男を血のつながつた母と娘が奪ひ合う——世にこれ程の悲劇があるうか。神と云うものが真実存在するとすれば、世に神ほど残酷なものはない。私は私の犯した罪の重大さを知つてゐる。しかしこれほど残酷な罰を受けねばならぬ程の重大なものとは思われない愚痴を止めよう。

悲劇は私自身で沢山だ。罪のない二人に事態の深刻な真実を伝えてはならない。それは同時に私自身の為でもあるのだ。

幸いに夫も娘も真相には気付いていないらしい。

私は沈黙を守り事態を静観しよう。それが私の取るべき最良の道であらう……。

◎ 若い女の独白

愉快だわ。男を征服する事がこれ程愉快な事だとは知らなかつた。しかし考えて見よう金のない若い男を誘惑しても矢張りこれと同じ愉快さを感じるか知ら？

いや、そうじゃないわ。あたしの場合特殊な場合だわ。多分に心理的な要素が加つて

いる。

海千山千の男を征服した場合には、うぶな青臭い男を征服した場合よりも、ずっと勝利感が強い筈だわ。殊にあのババと来たち相当な代物らしいから、一層そうした感じを覚えるのかもしれない。

次にババはお金を沢山持つてゐる。甘い口さえきけば幾らでも遠慮なくくれる。これは素晴らしい事だわ。お金とはつまり美しい着物であり食物であり家なんだから。金のない若い男と不自由なしみつたれた恋愛をするのと比べると、どれ丈気がきいてゐるか分らない。

しかしそんな事は大した事じゃない。もう一人の女からババを横取りした嬉しさに比べれば、平凡なものだわ。しかもその女がババと連添つてもう二十年にもなり、妻としての確固たる地位を築いてゐたのだから余計愉快だわ。

けれど、たゞこれだけの理由で、あたしは現在の様に愉快な気分になれたかしら？

NOだわ。断じてNOだわ。

こんな理由の三つや四つでこれほど宇頂天にはなれない筈だわ。そうよ、こんな事は何でも無い。つまらない事だわ。

あたしの喜びは——嗚呼、生みの母の手から其の愛人を見失つた所にある！
あたしは未だ生れてから此の様な激しい歓喜を覚えた事がない。あゝ、破れ去つたあたしの恋敵が生みの母とは！

あたしは母を憎んで来た。あたしの生れの暗さ故、あたしは如何に世間の輕蔑と嘲笑を堪え忍ばねばならなかつたか。その癖あたしには何の罪もなかつたのだ。あたしは母に棄てられ乍らも母の罪を負つて生きなければならなかつた。そしてその母は何の苦勞もなく幸福な生活を楽しんでいたのだ。

あたしは成長するにつれ、何時の日か、そんな母に復讐を誓つた。そして——遂に成功した。しかも其の憐れな女は、自分の秘密のもれる事を恐れて、何等なす所を知らない。彼女は怒りと怖れと恥辱と浅間しさに身を慄かせ乍ら何も云う事は出来ないのだ。

何たる痛快さ！

母はあたしがまだ何も知らぬと思つていらしい。實際、血のつながる娘が母に對しこんな残忍な隠謀を企てていると世間の誰が想像するだろう？

それにしてもババに丈は真相を知らせてはならない。事態は余りに深刻だ、恐らく母は

口を割るまい。あたしさえ沈黙すれば復讐は永久に続くだろう……

① 夫の独白

娘は相変わらず快活だ。そして若さに溢れた肉体で此の上なくわしをたんのうさせてくれる。そう云えば近頃あいつの腰は、めつきり肉附が好くなつた様だ。お蔭でスタイルは一寸悪くなつたが。乳房は確かに丸味を増した胸は豊満その物といえる。毎夜その上に顔を伏せ、わしは如何に歓喜にひたる事か。

家へ帰れば貞淑な妻が待つてゐる。彼女は不平一つもらさない。わしの命令通り黙々と動く。わしは時々、十九世紀に生きているかと錯覚を起す。

家庭は平和だ。波一つ立たぬ。

しかし、わしは知つてゐる。沈黙した妻の顔が如何に度々苦痛に歪む事か。快活な娘の顔を如何に度々残忍な表情が通りすぎる事かわしは知つてゐるのだ。何も彼も。

知つてゐるからこそ、二人を手離さぬのだ率直に云おう。

わしの喜びは、単に娘の肉体にのみあるのではない、成程彼女の肉体は素晴らしい。しかしそれ丈では退屈すぎる。

わしの喜びは、彼女達の心理的な葛藤にある。わしと云う一人の男を中心にして、二人の女が如何に戦うか。如何に苦しむか。殊にその二人の女が母と娘と云う異常な關係にある場合、わしの興味は深々としてつきない。

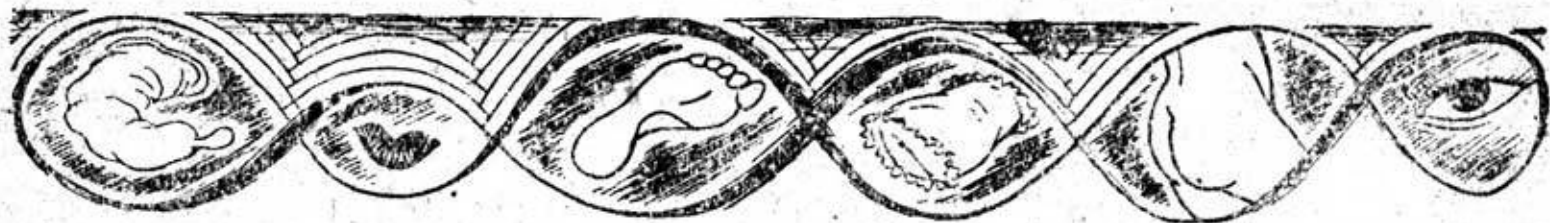
肉親だけに、他人同志である場合とは比較にならぬ程、彼女達は苦しみ傷つき血みどろになり悶える。

わしにはそれが面白いのだ。いや、その事だけが面白いのだ。

母が傷つこうが娘が傷つこうが、そんな事は問題ではない。わしの願う事は、たゞその傷が少しでも大きくあれかし、と云うばかりだ。

云わばわしと云う人間は、他人の苦悩を見る事によつてしか喜びを味わえぬサディストなのだ。

(終)



アブニストの記

☆ 續 ☆ へぼきうり

鬼山 絢 策

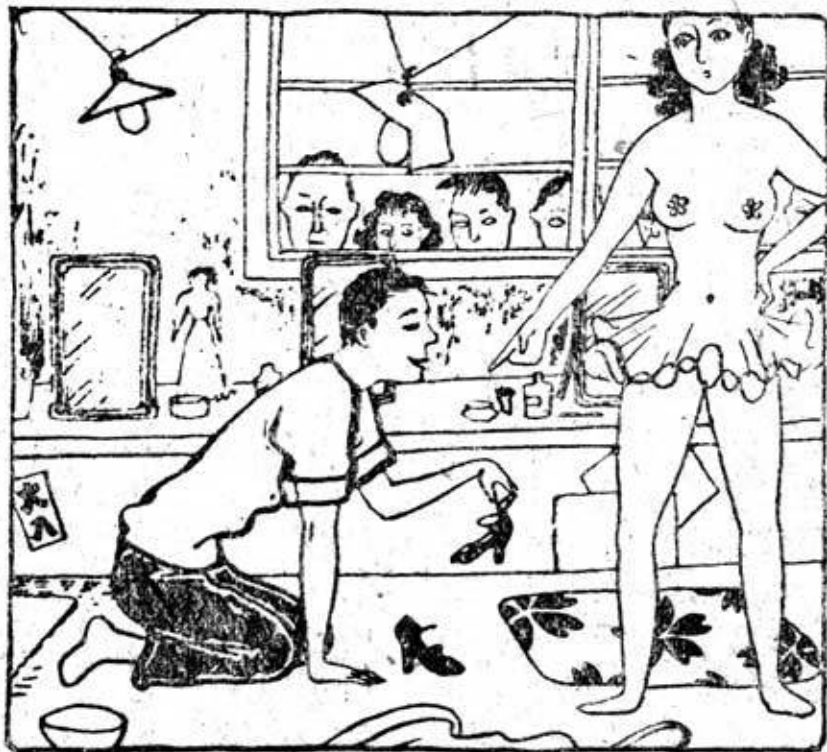
アブノーマルの耽美の世界に遊泳して泥沼に溺れぬ爲には奥行きを深めずに間口を擴げることである。

私はアブノーマルな性向に興味を持つ 私自身、此のアブノーマルの泥沼に 歳で肺結核で死んだ。その死因は病死 一つ金と暇にあかせて二十六年間も全 胸迄入り、首迄浸り、更に頤から、口 と自殺の境をゆくものであつた。前号 国を放浪して得た収獲は、たつた六人 から鼻迄潜り込んだ事もあつた。もう に掲載した彼の幼年時代の出来事や心 の男女の仲間だけだつた。 その六人 少しで溺れ死んでしまうとところだつた 理に引續いて、本号では彼の青年時代 の性友も今では、三人は死に、一人は が辛うじて首だけ出す事を得た。溺れ の行方不明、現在交際しているのは二人 もせず、浮び上りもせず遊弋状態であ 記によつて紹介してゆこう。

きりになつてしまつた。然かもその六 人の中二人は私が馴育して成長せしめ かと自ら甘んじている。

たアブニストなのである。

扱て、私の性友の一人、彼は二十二





私が三好静二と始めて会ったのは浅草の金龍館の客席で
だった。

当時金龍館はレヴェューをのせて居て、フランス人のダン
サー夫婦が特別出演して居た。

私の隣の席に腰掛けて観て居た蒼白い顔の頬骨の出張つ
た十八九の少年が、金髪の青い眼をした女のスナリとし
た長い脚と豊かな腰部の動きを、喰入るように見上げて居
た。

——やつてゐるな——

私は一眼で少年が膝の上にのせた雑誌と股にはさんだコ
ーモリ傘の下にうごめく彼の右手の意味を見抜いた。

幕になつて、表へ出ると、雨がピシヨ／＼降り出して居
た。傘を持つて来なかつた私は、隣席に居た少年がコーモ
リをひろげて出ようとするのを見たので入れて貰つた。

帰る方向が同じ品川で私の家の近所に彼も住んで居たの
で、それがきっかけとなつてこの少年を知るようになり、
当時私は新宿のムーランルージュの文芸部に入つて居たの
で、ムーランの楽屋を見せに連れて行つたりするうちに、
ガリ版の手伝いなどするようになって、いつしか文芸部の
給仕代りにおくことになつてしまった。

彼は十八九にしか見えない小柄な男だったが、もうその
時二十一だった。

当時のムーランの踊り子は粒が揃つて居た。

日劇や松竹のダンシングチームでは直ぐ舞台に立てない
が、此処は短かい練習で直ぐ舞台を踏めるので、踊りの好

きな良家の子女が多く入つて来た。

朝香蘭子も相当大きな料理屋の娘だったが、ダンスが好
きで飛び込んで来たのだった。

眼のバツチリとした丸顔の、くびれた頃の可愛らしい娘
だったが、眼が一寸きつくてケンがあつた。

十九だと言つて居たが、大柄で肉体は胸や腰がムツチリ
と盛り上り、脚が長くて、踊りも熱心だったから忽ちダン
シングチームで眼立つようになった。

だがこの小屋には小屋主の娘の明日待子だの、後に大映
に入つた姫宮接子だのと言う大ものがスターとして頑張つ
て居たから、顔が奇麗で身体がよくて、踊りがうまくても
スターには中々なれなかつた。自尊心の強い蘭子には現在
の人氣は当然として、スターになれない事を不満に思つて
居た。

蘭子はチューインガムが大好きでいつも口を動かして居
た。

彼女が噛み捨てたチューインガムを三好が拾つて喰うと
言う噂が立つた、だから三好は蘭子に首つたけなんだと、
他の踊り子達が蔭で笑いながら話し合つて居た。

私は楽屋で蘭子にこの事を聞いて見た。

「ほんとよ、証拠見せたげましょうか」

恰度三好のやつてくるのを見た蘭子は、噛んで居たガム
を板敷の床へ吐き出すと、履いて居たダンス靴でギューツ
と踏み潰した。三好は私達の傍を通り抜けて向うへ行つて
しまった。蘭子は私の手を引張つて物蔭へかくれて見て居



ると、三好が引返して来て、あたりを見廻すと、彼女の靴で踏みつけられたガムを床板から引剥してポイと口へ投り込んでしまった。

——ネー——

蘭子は私の顔を見てニツと笑った。

ムーランは夏になると毎年一ヶ月位休んで旅廻りに出る習慣があつた。二組に分れて出るのだが、蘭子の組に私もついて行く事になった。

「三好さんも連れてつたらいゝじやないの」

明日待子も姫宮接子も居ない此方の組はいわゞBクラスだつたが、踊り子の中では蘭子がスター格だつた。その蘭子の一言で三好も始めての旅にのる事になった。

三好は旅へ出ても珍しくはしやいで愉快そうだつた。がこの旅行中に彼女と彼の関係が結ばれてしまったのだつた。関係したと言つても普通の肉体関係は一度もなかつた。二人の肉体関係は彼が死ぬ迄なかつたのだから、それは非常に異様な内的交渉が行われたのだつた。それは彼の手記に生々しく綴られて居る。以下は彼の手記に従がおう。

(文中僕とあるは三好静二の事である)

——遂に僕は蘭子と一緒に旅行する事が出来た。移行行く街の辻々に大きなポスターが眼についた。

「新宿ムーランルージュの豪華レビュー団来る！」

一座は各地で大歓迎された。朝香蘭子の名はポスターにも大きく書かれた。彼女は一座の踊り子の中でもズバ抜けて美しい。彼女は群舞で踊つてもソロで踊つても断然光つ

て居た。彼女の人気は大したものだ。

僕はこの美しい女王様のために、毎日ダンス靴を磨いてやつた、僕は彼女の微笑を胸に描き、奇麗に磨き上げた靴の爪先に接吻したり、その靴を両手で持上げて、頭の上のせて見たりした。僕も舞台で彼女と一緒に踊つて見たいと思つてダンスの練習もしたし芝居の稽古もしたが、氣の小さい僕には、せりふはつかえるし、踊りも下手で舞台へ出るのは諦めた。やつぱり現在の雑用に甘んじて従いて行こうと決心した。

静岡の初日のことだつた。前の晩、例に依つて磨いておいた彼女の靴を、僕はウツカリ他の用を足して居る間に、棚の上にあげたまゝ忘れてしまった。

第一回の開幕近くになつて彼女の靴がないと言つて大騒ぎになつた。僕は彼女に知られぬようにいつもコソソリと磨いて居たから彼女は知らなかつたのだ。

他の用を足して居て、ふと思ひ出して、僕は慌てて彼女の赤い靴を持つて彼女の前にオゾ／＼と出した。

「あんたがかくしたの！」

蘭子の眼は怒りに燃えて居た。

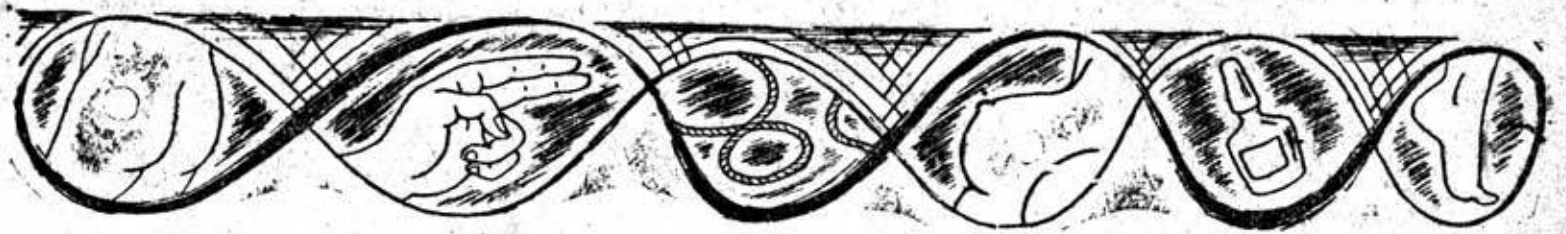
「い、いえ、かくしたんぢやないんです。つい忘れてしまつて。磨いておいて忘れちやつたんです」

「誰もあんたに磨いてくれなんて頼んだ覚えはないわよ」

「済みません」

僕は靴をとつて彼女に履かそうとした。

「いゝわよ一人ではくから」



蘭子は私の手から靴を引つたくり、椅子に腰かけてはいた。私が残りの靴をとりあげると

「余計な事しないでよ」

蘭子は腰かけたまま、裸の脚を上げて僕の肩を蹴った。私は床の上に蹴倒された時、限らない昂奮が勃然と起きて彼女が丸い尻を振つて立去つて行く後姿を見ながら射精してしまつた。

その日は大入り満員で、ラストが終つてから土地の有志の招待で殆んど皆が料理屋へ招かれて行つたが僕は留守番を仰せつかつた。

一時近くなつて皆酔つぱらつて帰つて来た。蘭子も仲好しの伏見愛子や二葉みえ子等と一緒に帰つて来たが、いくら酒を飲んで来たようだった。

「三好さん——」

蘭子は三人の真ん中に立つて僕を呼んだ。

「あんた毎日妾の靴を磨いてくれたんですつてね。ちつとも知らなかつたわ。風間は御免なさいね」

蘭子は愛子やみえ子から聞かされたと見えてやさしい言葉をかけてくれた。

「あんた妾が好きなの？」

僕はハツとして蘭子を見たがその眼はいたずらっぽく笑つて居た。

「好きなんですよ。でも困つたわ、妾あんたが嫌いぢやないけど恋人になんか出来ないわ」

「いえ、いゝんです。僕はあなたのお傍にさえおいて下さ

れば……」

「フ、妾の傍に居るだけでいゝの？」

「えゝ、そして何でも用を言いつけて下さい。僕どんな事でもします。僕はそれでいゝんです」

「ハ、ハ、ハ」

蘭子は他の二人と顔を見合せて男のような声を立て、笑つた。

「じゃ妾の召使いになるつて言うの」

「えゝ、それで結構なんです」

「じゃあ、これからドン／＼用を言いつけるわよ。あんた妾の下着類洗つてくれる？」

「えゝ洗います」

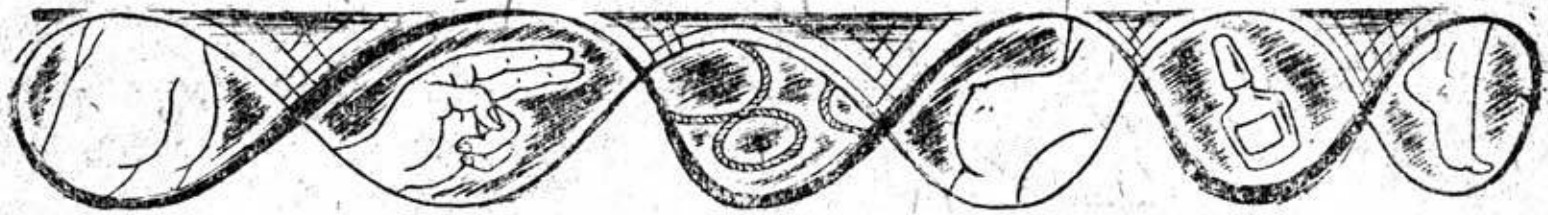
「ズロースもよ」

と言つて三人は疍高く笑つた。僕は羞恥で顔がボツ／＼とほてるのが分つた。

それから僕は彼女のシュミーズや靴下や、ズロース迄も洗濯した。

蘭子は非常な汗かきで、シュミーズでもズロースでも四五枚持つて居て毎日取替えた。それを僕に全部渡して、必要に応じて僕に取替えてよこした。

僕は彼女の下着類を寝床に持つて帰つて、彼女の移り香の泌みこんだ、下着類を愛撫した。蒲団を頭からかぶつてシュミーズを抱きしめ、ズロースをひつかぶつて、その移り香を楽しんだ。



浜松の公演の時だった。朝、蘭子に洗い立てのズロースを渡しておいたのに、開幕間近かになつて、彼女は僕を呼びつけて新しいズロースを出せと言つた。生憎残りの三枚はまだ洗つてなかつた。

「今朝のは洗つたばかりだったんですけど——」

「何でもいゝから出して頂戴よ」

「まだ洗つてないんです」

「三枚も渡してあるのに一枚も洗つてないの」

「済みません」

「他の人も洗つてんの？あんた」

「いゝえ貴女のだけです」

「どうして直ぐ洗わないの。そんな役に立たない洗濯の仕方ならもう頼まないわ。自分で洗うからいゝわよ」

「済みません。今度は直ぐ洗つときます」

「いゝから皆出して頂戴」

僕は仕方なく残りの三枚を持つて来た。蘭子はそれを一枚々々拵げて見て居たが、

「どれもこれもこんなに汚れてちやはやしなないわ。ほんとに役に立たないのねあんたは。あんたなんかもう帰つちやいなさい。一座に居なくてもいゝわよ」

彼女はヒステリックに叫んで、三枚のズロースを一枚々々僕に打つてくれた、そのうちの二枚は僕の顔に当り、彼女の体臭が襲いかゝつて、彼女が体当りをして来たような錯覚を感じた。

その晩僕は念入りに洗濯し、アイロン迄かけた三枚のズ

ロースを持つて彼女の部屋を訪れた。

蘭子は部屋で仰向けに寝転んで本を讀んで居た。

「あんたほんとに妾が好きなの」

僕は黙つてうつむいて居たが顔が熱くなつて来た。

「そんなら何故妾に恥をかゝせるのさ」

「そう言う訳じゃないんです。たゞ僕は——直ぐ洗つてしまふのが惜しかつたんです」

「まあ呆れた。じゃああんた妾のズロースで何をしてたの」

僕は彼女の寝転んでいる脚もとに坐つていた、蘭子が片膝を立てて、スカートが膝の上迄捲れて、太股の奥の方まで覗けて見えるのが、ズロースをしてないようで氣になつた。

「あんたつて人は、よく／＼の変態なの。それとも妾に死ぬ程惚れてんの」

「両方です」

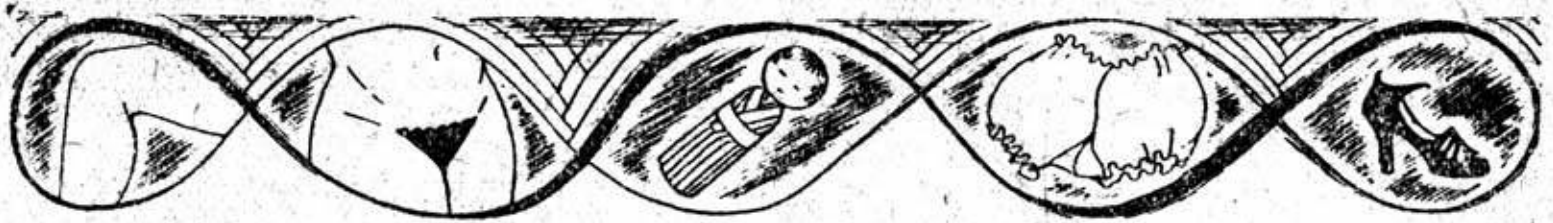
「ハ、ハ、ハ。妾に惚れたつて、妾はあんたに鼻もひっかけてやらないわよ。あんたを奴隷にして虐めてやるわ」

「それでいゝんです、僕みたいなものが貴女に愛されようとは思つて居ません。奴隷で僕は満足なんです」

「よし、試して見てやるわ」

彼女は仰向けに寝たまゝで、片脚をスル／＼とのぼして僕の首へからみつけて来た。そして僕を横倒しに畳へ転がすと、太腿の間に首をはさんでしめつけた。

「今日一日妾をノオズロにさせた罰をあたえてやるわよ」



彼女の軟かな太股の触感に僕に幼き日の母の肉体を想い出させた。私は昂奮の絶頂に達して、彼女のフツクラとした肉体に唇をつけた。

この夜初めて、斯うして、私と彼女の肉体とはつながりを結んだ。それは私にとつては常人の肉体の交りと何等変らぬ昂奮と快感を充分味つた。

三好静二の手記はまだめん／＼と続いて居る。然しそれは此処に発表出来ないような場面もあるし、同じ事が重複して居るので省略する。

だが一座が巡業を終つて帰る頃には彼は胸を患つていて大分進行して居た。

一方楽しかつた旅の思い出もこれでお終いかと思うと、又あの狭くらしいムーランの楽屋へ帰るのが私には厭はしくなつた。

朝香蘭子是一座の二枚目の三木健児と恋愛に陥つて居たそんな状態の時、浅草のKと言う興行師から、朝香を中心として一座を組織し、千葉から茨木の方を一廻りして見ないかと相談を持ちかけられた。

私の持つて生れた放浪癖と蘭子のムーランに対する不満とが結びついて、三木だの二葉だのを抱き込んでKの話に乗る事にした。三好も行を共にしたいと私に言つて来た。

「君と一緒に来てくれると何かと助かるんだが、少し身体具合が悪いうだね、暫らく静養してからどうかね。」彼の病勢はもう二期も相当進んで三期に近い様相を呈し

て居たので、私は自重をすゝめた。

「いえ大丈夫です。」

其の語気には「余計な事を言うな」と言うような反撥的なものが私の二の句を封じた。だが彼の旅先での役目は、重いトランクを運んだり、舞台へ小道具を運んだりする相当な重労働なのだ。

私は蘭子に彼を連れて行く事は無理だから家に返すように言つてくれと頼んだ。彼女は黙つてうなずいた。が、結果はその逆の効果を生じてしまつた。

以下は三好の手記に明らかなである。

「どうしても帰らないと言うんなら帰らなくともいゝわ、帰られないように縛つてやる」

僕は上半身を裸にされ、後手にバンドで縛られた。蘭子は僕を仰向けに倒して腹の上へ足をのせてからグーツと踏みつけた。

「痛いでしょ」

自分の体重と蘭子の足に踏まれて、僕の両手はしびれる程に痛かつたが、それが加わる程快感を増した。僕は強いて笑顔を作つて蘭子を見上げた。

蘭子はチエーインガムをクチャ／＼と噛みながらズロースを脱ぎ、僕の顔へ跨がつた。

「サ、奴隷の接吻をおし！」

僕の顔は三方を彼女の弾力のある内股に包まれて息も出なかつた。

「あんな妾と一緒に居ると、妾に殺されちゃうわよ。斯う



して、ホラ、斯うして！……」

蘭子は上からグン／＼と体重をおしつけてくる。僕は縛られて居る手が使いたかつたが、使えないで、自分の両腿を擦り合わせて右手の代用にした。

「このまゝ殺されてもいい？ 妾に……」

蘭子は勝誇つたように上から僕の眼を覗きこんだ。

「チューインガム食わせてあげようか」

僕は口をふさがれて返事が出来なかつたから眼に喜びの色を現した。蘭子は口の中からガムを摘み出すと、尻を押し上げ僕の眼の前でそれを体内にかくした、そしてそのまゝ僕の唇をふさいだ。

僕は息の詰る苦しさも忘れて、夢中で舌を動かし、ガムをほじくり出して舌の先へまるめとつた。

あゝその時のガムの味！僕はこのまま彼女に締め殺されてもよいと思つた。

「妾の恐い女だと言う事が分つたでしょ。だからあんたは妾から離れるのよ。分つて？」

「いえ、僕は離れません。死んでも貴女の傍から離れません」

「ばか！。お前はばかだよ、いくらお前が惚れたつて、妾はちつともお前なんか好きじゃないんだよ。何だいこの面！へぼきうりみたいな面しやがつて。だからこうして畜生扱かいしてやるんだよ」

「いゝです。それでいゝんです。畜生扱かいにしてくれるのが僕には一番有難いんです」

「ばか！もう帰れ！」

蘭子は脚をあげて、僕の額を思いきり蹴つた。だが僕は今夜程嬉しい夜はなかつた。全身の官能に歓喜と昂奮に震えて居るのだ。

三好静二の手記は当夜の事をこのように書き記してある。蘭子は愛想ずかしのつもりで、彼に辛くあたつたのが、全く逆の効果を示してしまつた。

それからの旅の幾日は彼にとつて相当以上の重労働であつた。彼は日に／＼憔悴し、喀血もひどくなつて行つた。

蘭子は私に何気なく聞いた。

「結核つて、接吻からでも伝染するのかしら」

「そりやうつるさ」

「でも、唇と唇とキッスするんぢやないのよ、皮膚へキッスさせたような場合よ」

（ハムアー……）

私は三好との事を心配してるんだな、とピンと来た。

「やつぱりうつるだろうね」

「でも後でよく消毒しとけば大した事ないわね」

「どうだかね。僕は医者じゃないからよく分らない」

蘭子の口振りでは三好とのクリンニグスを当分止めないな、と私は思つた。

彼は蘭子を始め皆に「へぼきうり」と仇名されて、面と向つて「おい、へぼきうり」とか「おい、きうり」とか呼ばれて居た。彼の顔がしやくれて居たのがへぼきうりに似



て居たし、にきびの後がブツ／＼になつて居たのが、きうりのイボに想像されたし、身体全体の恰好も「へぼきうり」に何となく似て居る感じだつた。蘭子がつけた仇名が今では楽屋の通り名になつて居た。

三好の頬はゲツソリと瘦せこけ、頬骨は益々とんがり、始終充血した眼がをちつきなくギョ／＼と異妖に光つて居た。時々部屋の間で、両膝を抱えてうづくまり、頭を膝の上にうつ伏せにして居る彼の姿は、疲れ切つた破れ草履のように、私には不潔と不快と憐憫とがゴツチャになつて、彼を家に帰さないと、面倒な事が起きると思つた。

「おい、あんまりきうりを虐めるなよ。奴もう倒れるぜ」「だつて向うの方からやつて来るんだもん、仕様がなぢやないの」

私が蘭子に忠告しても蘭子は素つ呆けたような顔をして唇をとんがらせて、私にウインクしてごまかしてしまふのだつた。

水戸で初日をあけた晩、遂に三好は倒れた。相当熱が上り、呼吸も脈も早かつた。

医者はかなり重態であり、絶対安静を要すると言ひ。既に結核も第三期の末期である事を告げた。

旅先ではあり、祿な看護も出来なかつたが、二三日休ませて、いくらか治まつた時、附添をつけて、品川の彼の父の家へ送り帰した。彼は死んでも家に帰りたくない、駄々をこねたが、なだめすかして漸く汽車に乗せることが出

来た。

水戸を打上げて大洗へ向う時、私は氣になつたので彼を見舞つて来ようと思つた。

「妾も行くわ」

蘭子が同行を求めた。

「君は行かん方がいゝだろう」

「でも妾にも責任がありますもの」

今になつて責任だのと言ひ出すのはおかしいと思つたが一面三好も蘭子に会いたがつて居るだらうし、会わせるのは身体にはよくないが、所詮助からないものなら、会わせてやるのもいゝと思ひ、蘭子を連れて行く事にした。

品川の三好の家は父親との二人暮して階下を人に貸して二階の一間に二人で暮して居た。

父親は会社に出て居なかつたが、看護に當つて居る階下のお婆さんが、

「この頃ちつとも薬を飲もうとしないんですよ、御飯もろく／＼食べませんしねえ。困つてしまつてるんですよ」と心配して言つた。

ギシ／＼鳴る梯子段を上つて三好の部屋に入ると、何の調度もないガラシとした日当りの悪い薄暗い部屋に、ジメ

／＼した畳へ薄汚れた蒲団を一枚敷いて、衰弱しきつた三好は、水戸で居た時より、又弱つて見えた。一見して

「永い事はないな」と思われた。

それでも私の顔を見、後に続いた蘭子の姿を見ると、彼の眼には妖しい光が漂つた。蘭子の派手なワンピースは、



はき溜めに鶴が下りたようだった。

「ほんとに御迷惑かけて、済みません」

「薬を飲まないって言うじやないか。どうして飲まないの一生懸命養生して早く快くならなきゃだめだよ」

「僕もうだめです。薬なんか飲んだって無駄ですよ。もう永い事ありませんよ。ハムム」

自嘲的に力なく笑った彼が、その時永年かゝって響き溜めた彼の手記を手渡したのだった。

「蘭子さんよく来てくれましたね」

「早く快くなつて頂戴よ」

「えゝでももういけないんです」

私はムーランへ用もあつたので、見舞の品をおくと、帰ろうと思つた。

「僕蘭子さんに一寸お話があるんですけど」

と言うので、又帰りに寄るとして、私だけ座を立つた。

三時間ばかりして再び三好の部屋に戻つて来ると、蘭子が蒼白な顔をして、三好の顔をのぞきこんで居た。

「どうしたの」

「一寸おかしいのよ。まだ息はあるようだけど。ネ、一寸見て頂戴よ」

私が彼の脈を見るために、近寄ると、彼の口辺からほのかにチューインガムの匂が立上つて居た。彼はまだ生きては居たが、意識は不明だった。

私は蘭子を見た。髪は稍乱れ、スカートのクシャ／＼になつて居た。部屋の隅に蘭子がウンピースの上にしめて居

たレザーのバンドが蛇のようにくねつて居た。

やつたな！

私は蘭子の顔を凝視した。蘭子は視線を外したが、「大丈夫のようね、ぢや帰りましょう」

と一時も早く此の場から立去りたいもののように腰を浮かした。

私は階下のおばさんに三好の状態を告げて、暇を告げた二日おいて私は三好の死を知つた。亡くなつたのはあの日の晩だった。蘭子に知らせると、

「そうお、やつぱりね」

とアツサリしたものだったが、一抹の哀愁と良心の呵責に似たものが、サツと眉の間をよぎつたのを私は見逃がさなかつた。

あの日蘭子が瀕死の三好に対してどんな事をしたか？それは私も見て居なかつたし、手記にも書いてないから分らない。然し三好静二は、半ばは自殺し、半ばは蘭子のために殺されたのだとも言えると私は思つて居る。

(KK通信) 第二号出来！

本誌愛読者の連絡機関として発足しましたKK通信は熱狂的な読者の支持の中に只今育まれていきます。

喜多玲子氏の(責めと私)利根勇氏の(秘本紹介、泣き叫ぶ青春)の二つの連載の外読者通信、代理部案内等を満載しております。本誌月極読者に無料贈呈致して居ります。

【一】

心内に動けば、外其形にあらわると云つて喜怒哀楽の情の動く時に、顔面筋の収縮に依つて色が変わつたり手足の筋肉の収縮に依つて姿勢の変わるのは、表情運動である。喉頭筋を伸縮して声帯の位置及緊張度を加減し、声門を通る気流の為に、声帯の種々なる振動を起して、音声を発したり、咽頭及口腔壁の筋肉の収縮に依つて此の部分に種々なる形状を与え、此中にある空氣に固有の振動を起さしめ、此の振動と、声帯の振動とに依つて起つた音



羞 恥 と 潮 紅

波 多 野

新



のも腺の作用が増した為である。

精神感動の影響は、身体の諸方面に、如実に現れるものである。呼吸や心動の変化は、何人も分るが、胃腸や内生殖器の筋も之が為に弛張する。手の舞い足の踏む所を知らずと云うのは、随意筋に及ぼした影響である。旨き物を見て口に唾のたまるのは吾人の熟知する所であるが、胃液も同じく分泌を催進する

【二】

如何なる場合に羞しいと云う感情が発するかと云うに、礼儀に協わぬ事や、風儀に反した事をした時、又は罪を犯した時に、起るのであるが、今一つ其成立に必要な条件がある。即ち他人が此等の事を知つて、已れを輕侮するであらうと思ふ事である。

それ故他人と同席し、他人が自分の行為に注目して居ると思ふことが必要である。他人から云われたならば、大いに羞入る程の事でも、善意同情の疑なき、母から聞くときは何と

之に反して怒る時は、之を減する。

実験に依ると、平時の九分一しか出ぬと云う事である。心配のある時に消化の悪い理由が明かである。

右は精神の肉体に及ぼす影響の一部を述べたのであるが、之より進んで羞恥について述べよう。

声とが共働して、言語を構成し、之に依つて意思を通ずるのも、表情運動である。恐れて鳥肌となるのは、皮膚の筋の収縮に由り、怒つて髪冠をつくのは起毛筋の収縮に因る。怒つて青くなり、恥じて赤くなるのは、血管壁の平滑筋の縮張に由り、皮膚を流るゝ血液の量が、増減した為である。

哀しんで涙がこぼれるのも恥て冷汗の出る

もない。又独り居る時は放屁しても羞しくは思わぬ。吾人が最も他見を憚るのは、性交である。随て陰部を見らるゝ事も大いに恥るものである。尤も羞恥の感情は文化の度合に由り国々の習慣に由り、甚しき差異のあるもので未開人種の中には、他人の面前に性交を為して、少しも恥る色なく、親子兄弟の間に性交の行わるゝ事、動物と異なる事なく、貞慾

の觀念の如きは、少しも弁えない者もある。何故に性交を秘すかという、他の妨害を避け安心して之を行ふのである。先づ其類例を挙げて見よう。

食色は性なりと云つて、生物が永く此世に生存するには、二つの要件がある。一は一身の保存の為に身体を養ひ一は種族の存続の為に生殖を営む事である。身体が完成すると生殖が始まり、独立生存し得る子が出来ると死ぬのである。

人生の目的等と云うと喧しい問題の様であるが、其実は食つて成長して、子を作つて死するに過ぎない。それ故に食色の二慾は生物に取つて、最も必要なものであり、又兩者の間に似通つた關係がある。食事をする所を他から見らるゝのは、何となく心地悪きもので大抵の人は羞しく思う。他人の前で食事するのは失礼である云うが、恥すべき行為であるからであらう。總て礼儀と云う事は数百年の経験に徴して、斯く為す方が相互の利益であると云う所から定まつた事である。

西洋人が人に逢うて脱帽するのは、兜を脱いで降参した形であり吾人が低頭平身するのも同一である。何れも敵意の無き事の表出である。

西洋人が握手するのは手の届くまで接近しても、危険はないと云う符号である。

他人が旨き物を食するのを見ると自分も喰たくなる。奪つて食う様な事は大人には稀である、子供は往々する。大人でも未開国の立食等の時には随分激烈な競争がある。動物には遠慮がないから直ぐ奪合を始める。雌雄の間には稀であるが、同性間には必ずある。犬等も食事の際は視、聴、触に注意するものと見えて平素感応のない程の刺激にも反応する。此の様な理由であるから、食事は成丈け他人の見ない所とするのが利益である。現に動物は斯く為すのである。目下生存する人類の中には、主人が家族に食物を分与すると、銘々後向きになつて食事を為し、向い合つて食するのは、失礼となつて居るのがある。

【三】

性交も是と同一であつて此の目的を果さんが為には身命を擲つ事もある程であるから、隠して為す方が利益である。殊に此際敵の襲来に對する防備が不完全であるから、隠す事は益々必要である。

陰部と肛門を羞恥部と稱して人に見られる事を嫌ひ、其名さえ公言するのを恥る理由の

一は前に述べたが、肛門は惡臭ある物質を排出する所であり、尿は新鮮の時は芳香であるが、時を経ると惡臭を放つから、之を洩す陰部は嫌われる筈である。性交の際に分泌される粘稠液も一種の臭氣を有するから是亦此部の忌まるゝ一原因であらう。唾液、鼻汁の如き粘稠液が臭氣なきに拘らず厭惡せられて涙汗の如き稀薄液が忌まれぬ理由は不明である或は陰部の粘稠液との連想に基づくかと云うに、性交の何事たるを知らざる兒女が唾、鼻汁を嫌うを見て、其否を悟る可きである。唾、鼻汁、尿、尿が体内にある間は不潔の感想を起さず、排出せらるゝに及んで、不快に感ぜらるゝのは直接感覺器を刺激する為である。

次に羞恥部を隠蔽する風俗はどうかと云うに最下級の野蠻人は今尙真裸体である。それのみならず生殖器を人類の基として之を尊び之を模造して神と崇むる者あり。吾国及び支那の道祖神は野蠻時代の殘物である。アダムのイブは裸体であつたが、「予の余れる肉を以て汝の足らざる所を補はん」と云われた神代は恐らく全裸体であつたと思われる。

羞恥心の少しく発生した人類は木の葉の類を以て陰部を覆うが、僅かに前面よりする視

線を避けるに過ぎぬ。更に進んだ人類は布片等を以て全く腰部を覆い文明人は、頭部と手先を除き全身を覆うのである。之れに由て考へるに衣服は体温調節の目的に用うる前より恥部を覆わんが為に使用せられたものである。

羞恥の感情は小児には全くなく、成長するに随つて漸次完成する事は、恰も人類の文化と共に発達せる如くである。而して女性には此感情が男性より強く若者には老人よりも甚しい。

西洋の夫婦や婚約者は人の前で抱擁したり接吻をする事を、少しも恥じないが、肌身を露す事は、非常に恥とする。日本人は其反対である。

【四】

前にも述べた通り顔色の変るのは脈管の縮張に由るのである。脈管運動神経に収張の二種類があり、其中枢は両者とも延髄の中にある。此中枢と精神の府である大脳の皮質とは親密の連絡があつて、情緒の動き方の異なるに従い或いは開張し或は収縮するのである。例えば快感の際は脳や外部の血管の開張するのは神経中枢や感覚神経末梢部の興奮性が高

めて快楽を増進せしめ、其際腹部内臓の血管の収縮するのは、多量の血液を脳や皮膚に賦与して、此目的を助けるのである。不快感の時は其反対である。

之より進んで潮紅の話に移る。恥じて潮紅するのは、何れの人種も、同様である。

黒人の赤面するのは、勿論見えないが、黒色の鮮明となる事や温度の増すので分る。時としてアルビノと云うて、黒色素のない黒人が出来る事があつて、赤面するのが見える。赤面する時は、往々顔をそむけたり、之を隠したり、眼瞼を下げたり、横目をしたり、



両眼を閉じたり頭を下げたりする。之等は、隠したいと云う、希望から起る事である。此時は、精神にも異常があると見えて、往々辻褄の合わない事を語つたり、音調も変つて居る始めて演説する時大抵の人は、此状態を呈するが、他人の批評を恐れるので、矢張り羞じた結果である。

恥て赤くなるのが常であるが稀には青くなる人がある。同じ酒を飲んでも稀には青くなる人があるのと同じである。併し其理由は不明である。

羞られて赤面する人があるが、是は謙遜な人に多い。恐らく自分では左程に思わぬのに人が誉め過ぎるから、自身に足らぬ所があると思つて、羞しくなるのであらう。自惚の強い人には無い事であらう。

総て気の弱い、気の小さい臆病な人は、赤面し易い。是は他人が自分の行為や外観等を彼は非難しないかと思ふからである。それ故知人の中では、格別の事はなくても、他人の前に出ると、始まるのである。

夫から他人に対する同情から、赤面する場合がある。語を替えて云うと、自分が其人の位置に立つたら、羞しいであらうと思ふのである。他人の放屁を聞いて、赤面する婦人は

少くない。

潮紅する部分は主として顔面であるが、往々頸まで赤くなる人があり、稀には胸腹や、極めて稀に、全身が赤くなる人がある。

何故顔が赤くなるかと云うに、顔面に注意するからである。何故顔に注意するかと云うに、情緒の表示は、主に顔面であり、音声も此処から出るから、他人は全身の中で、専ら此処に注目するし、自分も其事を知つて居て自然顔面に注意するのである。

注意した部分に、変化を生ずる例は幾らもある。嘔気や、笑や、啼泣の伝播するのは、注意の爲である。癩癩持が、他人の発作を見たり、或は発作の状態を考えて、遂に自分が発作するのも、同じである。又場所に注意すると、其部の疼痛が増進する。實際小児は氣を他にそらすと直に泣き止める。注意の爲平地に風波の起る場合がある。其試験は次の如くである。

目前へ光つた物を近接されるのは、不快のものである。依つて先ず針を近づけて其心地を伺い次に鋭利の刃物を隠し、之で試みたらば不快の度も一層深からんと暗示した後、眼を閉さしめ、内々刀を鞘に納めて、さて其感覺の度合を問うと、大抵の人は、針の時より

一層不快だと答える。ソコで眼を開かすると刀物のないのを見て、大いに驚くのが常である。

【五】

次に潮紅の理由如何と問うに不明である。おかしくて笑い、哀しくて泣くが、何故其反対でないのかと問われて、答の出来ぬと同様である。強いて説を立てれば連想の結果と云う可きであらう。

人類の交接する時は、男女共陰部に充血するが、此処ばかりでなく発情した時は、顔面は必らず潮紅する。其の他の部分も多少赤くなる。

特に女子に甚しい。愈々快美を覚ゆる時には、処として真紅ならざるはなしである。

之に由て考えると、總て羞しき行いをなし又は其事が他人に知られたと思う時は、必ず血管の開展（稀に収縮）するものであり、行為の類と、時の異なるに従つて、潮紅の部を異にするものと思われる。

元來精神の一定の状態にては、或る感覺や希望を、軽くし、或は之を満足させるのに、戒る種の複雑なる行為が、直接又は間接に有益である。それ故斯る状態が完備するか、又

は其一部分が成長する時は、たとえ此行為が役に立たぬ時でも、起るのである。所謂習性となつたのである。

犬が横臥する前に其場所を何遍も通り、最後に真中を、足で搔くのは不用の挙動であるが、昔犬の祖先が、山野に於て、草木の間に眠つた時には、必要であつたからである。

犬が尿尿を洩らした後に後肢で土をかける真似をするのは、祖先が跡を暗ます為に、之を土中に埋めた習慣があつたからであらう。馬は自身の背を噛む事は出来ぬ。それ故痒い時は友に場所を知らせて、噛んでもらい、其返礼に、相手の好む処を、噛んでやる。然るに人が背を撫てやると、齒をむき出して、恰も相手方を噛む様な状を呈する。

犬の横腹を撫てやると、後肢で搔く真似をする。就中小犬に於て然りである。猫も同じである。犬の尾の際を指頭で叩き、同時に他手を口の前に出すと嘗めたり噛んだりする。

犬猫は哺乳の時に二本の前肢で乳腺を圧搾する。猫が肩掛の上に座つて両手を動かして、稀には其房を吸う事があり、乳に浸した指先を小犬に嘗めさす時、前肢で空手を押える様な運動をするのは、心地よき感覺の爲に、誘起されたのである。

猫は犬と違い尿尿を土中に埋める物であるが、或る時匙に水の満たのを見て、之に灰をかけた事がある。

猫は足の湿れるのを忌むものである。是は其祖先がアフリカの乾燥地に住んだからである。或る時小猫が盃に水を注ぐ音を聞て、足を振つたのは、前の場合と同じ様に思い違えて、習慣性を現したのである。

馬は外出を望む時は足で地を踏みならす習慣がある。隣房の馬に食餌を与えるときも同じ拳動をするのは希望を表示したものである。人が困つた時に頭を掻くのは痒い時と同じで、不快を軽くする事が、出来ると思つたのである。困る時咳嗽をしたり、眼を摩する等も同一理であらう。

人の説を排する時に眼を閉じたり、又は他を顧みたりするのは、忌避の意味であらう。即ち聴かぬ為に見ぬのである。記憶を喚起せんとして、天井等を見廻す等は、搜索の意味であらう。

私は耳が遠いから注意して聴かんとする時は必ず手で、耳の後部を覆うのであるが、或る時注意して視んが為に、同様の拳動を為して人に笑われた事がある。全く注意の時の習慣が現れたのである。

【六】

始めは故意に為した事も後には不随意に出来る様になる。立つこと、歩むこと、始めは覚えるのに、大分骨の折れた事であるが、後には全く反射的に出来る。言語を覚えるのも文字を書くのも、始めは非常に、難儀した事であるが、大人になると、考えさえすれば、自ずと文字が紙上に現われる様になる。是は後天性であつて遺伝せぬが、斯様な事が数代反覆すると、終には其物に固着して、先天性となる。鼻腔や喉頭に異物の入つた時、嘔、咳嗽するのも、始めは随意的であつたが、終

に先天性の反射となつた。

哺乳の運動は、生存に必要な反射運動であるが、是は世界に哺乳獸が現われてからの事で、或る人の説に幼児が一定度に發育するまで腹囊に入れ居る動物があつて（袋鼠の類）恐らく幼児が皮膚をなめ廻した為に、皮脂腺が刺戟されて乳腺となり、之と同時に哺乳が反射的に出来る様になつたのであらうというが、或はそうであらう。

吾人が承知々々と顔を豎に振り、否々と横に動かす理由は一見不明であるが、広く動物界を見渡すと似寄つた事があつて、矢張り動物から人類に伝つた事と思われる。

【読者通信】

鹿沢 宏様

奇譚クラブ七月号一三五頁の読者通信の欄にてお言葉を拝見しました。実は私の妹はマゾヒストにて御言葉を讀み甚しく興味を感じています。直接妹よりお便りすべきですが、まだ二十一才にて流石に何か気がひけるらしく、小生にお話を伺つてくれとの事です。代筆致します。卒直に申し上げれば、妹はマゾ的孤獨に苦しんでいます

彼女は夫を亡くして只今未亡人なのですが生前、彼女の夫は夫婦の営みのたびに麻縄で彼女を縛り必ず口に布片をつめて猿ぐつわをし竹や革やゴムの鞭で乱打してから目的を達していたそうです。

鴨居から吊り下げられたり足蹴りにされたり最初の苦痛は次第に快樂にかわり、今ではそれなくしては、どうにもならないようになっています。貴方はどこに住んで居られるのか、わかりませんが、貴方の方の御希望、女性をどのようにお扱いになりました

犬が知らぬ犬や人に敵意を含んで近寄る時は頭部と胴は同じ高さとなり、尾は立て、動かさず、耳も立て、眼は敵を凝視し、背と頸部の毛は逆立し、足を堅く延してノソノソと歩み寄るが、若し敵と思つたのは間違で知己であるか、又は主人なる時は、顔貌姿勢共に急変して、全身は下に沈み、尾は下げて左右に振り、耳も下り、眼も円かつたのが長くなり毛は臥し、唇も弛緩して喜びの状を現出する。猫が犬に向つて戦を開かんとする時と、主人が外出先から帰宅した時に其足元に近寄つた時の姿勢の差や、雄鶏が餌を見て雌を呼ぶ時と、戦斗準備の時の容貌の差は、何人も知つて居る。

即ち精神状態の変化につれて顔貌姿勢が全く反対になるのである。敵意を表する時には成るだけ大きく、恐ろしく見せるのが利益であり、好意を示す時には其反対が一番適當である。

「オイデ〜」と手を豎にふるのは吾が欲するものを吾に近付けんと希望を現し、「イケヌ〜」と手を横に動かすのは其反対である。

パチンコをする時奇態な運動をやる人があつてよく見ると、玉の此方に寄れかし、彼方

いか、或は貴方の御理想をお知らせ下さい。私からお取次いたします。妹は現在、自由の身で子もなく、只今は当方に居りますが間もなく東京で独り住むことになります。何卒御文通下さい。最初は前述のような次第で私宛御返事下さい。妹としてはそのような性向故に正常な関係の結婚は諦めていす。今迄どのような苦痛も体験済みで彼女としては是非とも猿轡だけは其の際にめて欲しいそうです。

猿轡を息も出来ぬように、又呻めき声も洩らせぬようにはめられないとオルガスム

に行けかしとの希望が不注意に現出されたのである。丁度子供に口を開かせんとする時己れ先ず口を開くと変りはない。

【七】

一見不明の事もよく〜穿さくすると其理由が判然となる事がある。葬式から帰つた人を門口に待たせておいて塩をふり掛けたり、切火を蒙らせたりする理由は一見不明であるが、昔は葬式の帰途不浄を去る為に海水に浴したものであるが、後には略して海辺を歩して帰宅する事となり一層略して海の産物なる

スに達しないそうです。鞭打は好ましく、又緊縛のどのようなポーズでも御注文に応じられるそうです。——中略——

右のような次第ですので、お近くならば事情によつてどこかでお会い致したく、遠くならば御文通を賜りたいとのことです。封筒の裏の住所氏名は仮のものです。お手紙は最初は編集部気付でいただきました存じます。

ではお返事をお待ちします。

(大野日出男)

塩をふり掛ける様になつたのである。切火は其の昔不浄物を焼却した習慣の残物である。以上連想の為に種々の行為の起る例を掲げたのは、羞恥の際の潮紅を、同じく連想に帰せしめんが為である。

性交は恥すべき行為であり、此際陰部や皮膚に潮紅する事を連想して他の恥しき場合にも同じく潮紅すると云うのである。

× × ×

悪魔と口紅

桂 牧次郎



娘の與えた絶縁状より

Adieu そうです。これが本当のお別れです。私にはとてもあなたについていく力がありません。この平和な秋の終りの日をせめて私たちの恋の終りの日とすることができるのが慰めというものです。今日あなたの鍵のかゝった二重底の抽斗から、悪魔の私生児であるアルバムと日記は永遠にそのみにくい姿を消すのです。お留守居にお邪魔致しましてすみません。覚えていらつしやいましょうが、始めてあなたにお手紙さし上げた折、不用意に

もAdieuとかいた時の事を。あなたはそつとやさしくアデューの意味を説明して私をたしなめられました。単にさようならという日本語位に思っていましたのに、フランス語の立場から啓蒙して下さいましたのです。私たちの長い恋のピリオッドを、あの出発点にあったこの小ちやなフランス語が一九五二年よ、さようなら〃というように永遠のお別れを意味するあなたのお説通り役目を果たしてくれるのは、何と皮肉なことでありましょう。

私は勇を鼓してあなたとお別れしなければならぬのです。あゝ、あなたは何というお方でしたろうか。「一体どうしたんだ」と、妙に開き直つて神妙な顔をなさつたり、「ふん、あいつも馬鹿な女さ」などと鼻の先でお笑いになる様な卑劣なことだけは止して下さいな。そんなあなたを想像するだけでも、あなたの為に耐えられませんか。

去年の春でした。あなたと始めて山中湖畔でお逢いしたのは。あなたはリラダンの未知の女、フアンタスチックなつんぼの女をさがしに小説を書きに来ているのだといつて、パイロン・ハイネの熱なきもと唄い、小石を拾つて湖水にお投げになつていました。あたしの胸は喜びと希望に新たな火がチロ／＼ともえていました。いえ、事実はその前日にあるのでした。お友達が誤つて岸に繋留してあったボートを流した時でした。あの時私は同じ汀でお米をといでいたのです。あれ／＼という間に流れ行くボートをめがけ、さつと紺ガサリの着物をぬぎすて、早春の湖水に拔手を切つて、無事岸にひつばつてきた色の白い男性。それがあなたでした。あなたはよろ／＼と汀に立ちぶる／＼と武者振いをされると、私たちの方をみてにこりとされました。

私たちは始めて男性の裸体をまのあたりみて胸さわぎがしました。その時から私はあなたが好きだったのです。それから東京に帰ってからよくお逢いしました。映画、音楽会、歌舞伎、そして人知れぬ神宮外苑の逢曳き。どれもこれも楽しい夢。ほのじろい閃光のよな青春の花火でしたわね。なのに、これはどうしたというのでしょうか。あなたは恐ろしい悪魔であつたのです。いえ、恐ろしいというのが悪ければ悲しむべき悪魔と申しましたよう。私は今、はつきりあなたの正体が分つたような気がします。私は、悲しく、又、恐ろしいのです。いつだったか何か肌寒い夜でした。あなたは「ジュリエット」という小説の話をしてくれ、その悪徳万歳という点で一寸議論しましたね。ミュッセの「歡樂の二夜」というのも論争の焦点になつたように記憶しています。あなたは議論になると何かむつかしい言葉を機関銃かなにかのようにポンポンはじき出し、私を面喰わせ常に妖しい雲のような論をはくのでした。例えば「道徳については現代人は進化したかどうか疑問である——これはウイッテルスの言だが——」といい出しサイオロジイ用語をしきりにおつしやいました。ずいぶんとエキセントリックな

論をおつしやる方だと思つていましたが、只もうあなたの学識に気圧されて黙つて聞き役になるより他ありませんでした。そのくせあなたは私と行動する時は少しも変な様子はなく、充分私のロマンチックな夢を満たして下さいました。インテリィ振りでした。前提はこの位にしておきましょう。私が、あなたを何故病的な悪魔と判定してこのような手記を書かねばならなくなつたかの過程について申しましょう。私は今、あなたの不思議な行為の仮面をはぐことが出来（それは時としてぬつと鎌首をもたげてきたもののようにでしたが）それらを順次並べ立て、大糸ずけることができるのです。私が始めてあなたと一緒に浅草六区街を歩いた時でした。突然あなたが立上り黙つてしまつたのです。その時のあなたの眼の色は何か血走つていたようでした。「どうかなさつたの」ううん、別に「私の視線を弱々しくはずすと、又歩きだしました。私は臍に落ちずキョロ／＼雑沓をみまわしましたが何のこともないのです。二人は公園に出て、だまつてベンチに腰を下ろしました。「気分すぐれないのね」「もう帰ろう」「何か、お気にさわりましたの」

「いや、風の音がいやなんだ」
そんな詩人めいたこと云つて、私をつれて後返りをしてあの場所をゆつくり（そうR座の前です）通つて田原町の方へ出ました。そして、そそくさと地下鉄の入口でお別れしたあの日の謎です。それが今解けました。あゝR座の絵看板に魅せられて立止つたのです。そこには若い女がむごたらしく縛られ、吊されて、責めさいなまれている絵がかゝれていたのですね。私はうかつでした。あなたは私と別れると、その足で友人の約束があつたといひ乍ら、R座の観覧にいかれたのでした。あゝ、あなたは何という人だったのでしょうか。いつか歌舞伎座でみた白古屋お熊の責場に異様な視線を送つていた意味も分りました。「まア悲惨なことをするのね」というと、「うん、デイモイズム文学の古典的ジャンルなんだよ」など嘯いていたあなたでした。又いつかの日曜日、私がお庭を通つてあなたが下宿しているはなれをお訪ねした時びつくりなさいましたね。机の脚に細引が結びつけてあつたりして。「これ、何んのためなの」「うん別に——」「変ねえ」「何も変なわけじゃないんだ。困るんでね。ここの子供が、時々こんなわけのわからんいたずらするのでね」

「まアそうなの、何のまじないかしら」今思
うと、あなたはどこかの娘さんを縛りつけて
いじめていたに相異なるのです。私かもし押
込の戸をあけていたら、それこそ気絶したこ
とでございましょう。何故なら、手足をくく
り上げられ、猿ぐつわをかまされた白古屋お
熊同様の若い女性がころがり出た筈ですから
その方が三春さんで、或はあつたのかも知れ



ません。「まアお茶でも——」とあなたは
い乍ら細引をときはなして丸めて隅へ投げや
ると、「今ね、卒論の仕事かいてるんでね」
「じゃ、忙しいのね」「まアいいさ、今一段
落ついた所だから——」と煙草の煙をベツバ
ツバと天井にふきつけるようにして、
「僕の卒論ね、何と思う」
「さア。ジイドじやない？」

「ハハ、僕は国文科ですよ」
「そうそう。そうだったわね。じゃ志賀が横
光あたりね。きつと」
「そう思うが大ちがいですよ」
「芥川？」
「南北ですよ」
「え、ナンボク」
「うん、四世鶴屋南北」
「その人、何んな方」
「歌舞伎脚本家さ。偉大な日本の、しかも怪
談のね——」
「そーお、黙阿彌もくあみではなかったの」
「これは驚いた」と大仰にジェスチャーを用
いて又奇妙なサワリのある論法で私をさんざ
んとつちめグウの首もださなくさせてしま
いました。そして「独道中ひとりみち五十三つぎ駅」とかい
う脚本の中で、江戸兵衛という非人がお松とい
う女を戸板にかすがい止めにし腹をさく場
を、声色まじりにお話してくれました。
「悲惨ね。お松の亡霊がでるの必然よ」
「まアねー」
「そんな陰惨なもの研究するの感心できない
わ、あたし」
「ナニ、何事も修業のため、真理の探究で
す。どうもこの時代の社会を裏づけする資料

が少なくてね」

なんて、いい乍ら「珍本です」といつて二三の本をみせてくれましたが、その中に刑罰大祕録の写しがありましたね。「こわいわ、こんな本」というと、あなたはさりげなく本を本棚に戻しながら、最近のイタリア映画か何かの批評めいた方へ話題をかえてしまいました。あなたは実に巧みな話術者であり、お芝居の上手な方でした。ところが私は昨日女学校時代の友人、由岐三春さんに偶然お逢いして参つたのです。銀座の街角でした。何年ぶりだつたでしょうか。その三春さんはあなたが世にもいまわしい鬨りものにした女性です。彼女とあなたは幼な馴染だつたと申しますから、運命のいたずらでしょうか。

私と彼女は喫茶店で久闊を叙し日比谷公園の方に肩を並べて歩き、色々な近況を話し合う中に、ふとあなたの事に二人の話が一致したのです。そして、三春さんが話すあなたの像はあまりにも汚くみにくい悪魔の顔でした。以下その話の内容を書いておきましょう。

あなたが未だ田舎の中学生だつた頃、彼女は同じ町の小学校の六年生。おかつば頭のかわいい少女でした。あなたは、市議員のお坊ちゃんとかで、彼女も尊敬していたのです

近所に住んでいた彼女はよく宿題をもつてあなたの家を伺つたらしうございますね。あなたは可憐な少女を少年の悪戯を越した乱暴さで、この前教えたばかりののといつて、ひどく虐め、ベットに縛りつけて打擲なさつたり、髪の毛を持つて引きずり廻したりして——そしてお父さまの転勤にともない彼女が上京し、私たちの女学校の四年生になつた時あなたも大学に学ぶために笈を負うて上京なさつたつてことでした。そして彼女とあなたが演じた青春悲劇は全く淋巴線がはれるようなエログロナンセンスなのでございましたね。あゝ。聞いている私まで胸がおぞけ立ちました。彼女が演劇部員であるのを幸い、あなたの描く芝居で、劣情のいけにえに供していたのでございますね。想像もできないことでもございました。鈴木泉三郎の名作「火あぶり」のお国を好んでやらせたり、芥川の「地獄変」を脚色してやらせたり、そしてアクシヨンをつけるのだといつて、縛り上げた彼女を責めさいなみ、カメラにまでおさめたということでありました。彼女もいつしかそんなマゾヒスティックなものに同化されたらしく非常にあなたを恋したうようになつたのですね。其頃、あなたは、此のいまわしい憎むべ

き、女性を軽蔑した秘密の「悪魔日記」と「貴の金字塔」なるアルバムをふと彼女にみせておしまいになつたのです。私は今の今迄そんなあなたを知りませんでした。私は彼女にたのまれてその秘密の品を盗んでくることを約束してしまつたのです。幸いあなたは図書館にお出のよう夕方でないとお帰りにならぬとのこと故、大した時間もかゝらずおき忘られた鍵を利用してこの品をみつけたことができました。私が他人のお部屋を無断で探し廻るような悪徳行為をするのは生れて十九年はじめてでございます。それよりもこの日記とアルバムを発見し盗見した時の私の驚きを御想像下さいませ。あゝ。何と恐ろしい悪魔の所産でありましょう。貴の金字塔」と題するアルバムは大小様々の型の写真でうずまつていました。どれも皆、無残にも縛り上げられたポーズの女性のものでした。そしてそれらのモデルの変る度に、月日と、気取つたイニシャルと、モデルと思われる女性の唇からうつし取つた口紅の跡が、指紋をみるように、毒々しく、又生々しく記念スタンプのように押されているのをみたこの私を、あなたは、どんなロジカルな言葉で、いや、どんなマジックにかけてたますお心算でしょうか

×月×日。M・Y十七才。そしてその上にはまぎれもない由岐三春さんが後手に縛られ身をのぞけられ太股もあらわに崩れ伏した写真でした。その裏には芸妓らしい若い娘が長襦袢一枚のまゝ高手小手に縛り上げられており、島田まげがくずれかけて、びんのほつれが痛々しく、その小さな瞼のような唇は、恐らく無理矢理口紅の跡をうつし取られたでありましょう後に、鳴海絞りの手拭で猿轡をほれているので分りませんが、澄んだ可愛いひとみが憂いげに眉をひそめて、伏目がちに俯いている風情は何と残酷な悲惨なしかも痛々しい可憐さでありましょう。下に×月×日、十六才N子。そしてうす桃色の口紅の烙印が押されてあるのです。其他、十人にあまる女性か或は柱に、或は松の木に、縛られ、吊され、又いよいよもない恥かしい姿勢をとらされたまゝ、凡ゆる角度からこれをうつし取つてあるのです。何という悪趣味でしょうね。病的です。変態マニヤだったのです。あなたは——。正視に忍びず急いで閉じた私は次の悪魔日記をみるに及んで、驚きが恐怖とさえ変つて参りました。此の世に、このような日記をつけるものはサタンでなくて何でしょう。恐ろしくも破廉恥な日記。悪魔の日記——。

「この日記を盗見した奴は恐らく百八つの悪魔を招来する。そして終生呪われてくたばるのだ」——除夜の鐘を聞きつゝ——と序文がついているのでした。ページをくろうとした私の指先がワナ／＼とふるえました。背筋がぞつと致しました。でも好奇心も手伝つて致してその禁を犯してしまつたことを告白しておくことも大切であるかも知れませぬ。

×月×日。夜。K子ト肉体ノ門ノ実演ヲヤツタ。K子ノ体ハ弾力ガアツテトセ縛リヨイ体ダ。本当ニ、カミソリデソツテヤツタラシクシクト泣キダシタ。イイ気味ナリ。



×月×日。鈴木ノ「火アブリ」三春トヤツタ。彼女モ大キクナツタ。デモ未ダ子供デアル。手ヲ後ニ廻セト云ウト、オトナシク廻シタ。スナオナ奴ダ。彼女ガオ国。俺ガ有年。オ国ノ役ハ、ヤハリ未亡人深川テナイトイケヌ。癪ダカラソノママ裸ニシテ部屋ヲヒキツ

リワマシタ。最後ニ味見ヲセントスレバ、
カンニンシテ、ソレダケハ女ツテ奴ノセリ
フハ皆同ジ。興ナシ。次回ハサシヅメ鏡花先
生ノ「乱菊」トキメタ。明日「乱菊」ヲヤル
ト約束。

×月×日。Y子トN子。姉妹。姉ハ十八、
妹ハ十六。オアツラエ向ナリ。同ジク鏡花先
生ノ「活人形」ヲ未亡人深川宅ニテ行フ。
狂ホシイ程、コーフンセリ。俺ハ何ト誰ガイ
ツテモ、鏡花先生ヲシテ、サデイストデアッ
タト断ジル。観念小説モヘチマモアルカ。

×月×日。未亡人深川ハ鏡花ガスキダ。殊
ニ責場ヲ好ム。サレド罪ハ俺ニモアル。「冠
彌左衛門」ヲ借シタカラダ。アレ以来、オ浪
ノ役ヲシタクツテウヅシテイル。Y子ガ
小萩ヲツトメタ。小萩ヲ天井カラ吊スト妹ノ
N子ガ泣キ叫ブノデ中止。未亡人深川ハ流石
ダ。オ浪ハ適役トイウベシ。最後ニ腰巻一ツ
ニテ床柱ニ縛メルト、子供ノ前ジヤアネ
ト「デモコレガ鏡花芸術ノ真髓カモシレマセ
ンワネ」トウチ笑イ、
ク縛ツテト艶然タリ。サンザン磨メサセ、
揚句ノ果ニ、俺ガ地藏ノカワリニ碁盤ヲヨコ
ニシテ膝ノ上ニノセルト、「オ浪ハネヤノサ
ビシサニ、石ノ地藏ヲダキマシタ」ト云イテ

悶絶コト切レル所作事。名演技ナリ。我、不
覚ニモ〇〇セリ。ウム

×月×日。女ハ縛ツテ犯スニ限ル。今日三
春トコンナ問答ヲシタ。

「オ前ハ縛ラレルトキドンナ気持ダ」

「ハイ。別ニ何モ——」

「感じヌコトハアルマイ。言エ。」

「ハイ只、何カ不安ナ気持ニハナリマス。」

「何故ダ。」

「ハイ、身ノ自由ガ奪ワレルノガ何カ恐ロシ
イノデス。女性ノ本能的直観デシヨウカ。」

「何デモヨイ、女ハ縛ラレルト、ソコニ美ガ
誕生スルノダ。」

「ソウデシヨウカ」

俺ハ始メテ三春ヲ犯ス氣ニナツタ。シカモ
強姦ノ形デ。モロイ女ダツタ。断続的ナ悲鳴
ニ似タ声デ泣ク。ヒイヒイト形容スルノカ。
モダエル女体ニハトモカク神秘ナ魔可不思議
ナ味イガアル。俺ハ幸福ヲ甘食セリ。モウ一
度書ク。女ハ後手ニ縛リアゲテ犯スニ限ル。
あゝ、私はもうこれ以上拔書を続ける勇氣が
ありません。氣が遠くなりそうです。あなた
はジェキエルとハイドです。世にも陰惨なサ
タンでした。病的な歪められた魂の所有者で
ございます。学生 of 仮面をかぶった色魔なの

です。それはあまりに恐ろしい事実です。私
には未だ疑問の点がないことはありませんが
もうあなたのお顔をみるのも恐ろしい気がし
ます。たゞ私の願いは、あなたの幻影のみを
恋して生きてきた女性として、思い出だけ
も美しく美しく終らせたいのでございます。
どうかあたしの幻影をぶちこわさないで下さ
い。たゞ黙つて、此の秘密の品をもつて、あ
なたの許を再びおとづれないことをお許し下
さい。

私は我儘なのでしょうか。どこかの遠い国
の小説の主人公が恋人の別れの便りを読み了
えて深い歎息と共に「愛してないつて、冗談
じゃない、それなら別れの手紙がこんなにも
長い筈はない。」と云つたと云つたというお
話を時には思い出していただきたいのでござ
います。あなたが、この便りをお読みになる
頃は、私はこの日記と呪われたアルバムを燃
やす煙にむせて悪魔昇天の敬虔なお祈りか捧
げていることでしょう。これが最後でござい
ます。もう何もおつしやいますな。そして私
は勿論由岐三春さんも、それよりもこの灰燼
と帰したコレクシオンをどうぞお探しになら
ないで下さいませ。――

現代風俗手帳

男色倶楽部

鷺見東一

現在欧米では男色はかなり組織的に行われているものが多いドイツ、フランスには男色の倶楽部とか乃至は秘密結社ともいふべき団体がある。それが、さながら社交機関をなしている。

一方では大仕掛に少年の供給に当る不良誘拐団が国際的に活躍している。概して男色を漁る変態性のものは、その対象の供給の乏しいために、進んで誘拐と掠奪を敢行して、団員を満足させると共に他に転売している公園、駅前等に出没して少年を誘惑する。一度目をつけた少年は如何なる防禦を潜つても手に入れ、温順にゆかなければ、その四肢の自由を奪つて目的を達する。手に入れた少年は一定の訓練を与えてのち、会員に分配される。時には数名の輪姦に



発狂文学者の研究

杉山清詩

私は奇譚クラブを読んでいるとアブノーマルな妖酒に、骨の髄まで、どつぶり泥酔してしまふ事がある。いや、強烈な宿酔に悩んだり、或は耽美の桃線郷に、羽化登仙の夢を結んだり、暁には異常な副作用に、神経中枢を痺麻させられたりする事すらある。

とにかく、谷崎文学と、晴雨趣味と、それに戦後派肉体思潮とが渾然一体となつて、独特の妖気を噴火させる、そういう感覚と印象をいつも感じる。翠帳紅閨の夢もあれば、阿鼻叫喚のグロもある

或は激甚な嗜虐倒錯に辟易する事もある。

そうした妖異な雰囲気、震源地というのが、それらの作家自体なのだ、その異常文学者達を、少し解剖してみたいと思う。但し実存の著名作家諸公は、なるべく敬遠する事にした。

大体作家という連中は、何処となく異常な所が多い。その異常さ特異さというものが、その人自身の真生命なのかも知れないが、奇行家、変質者、或は狂的人物が多いのも、そういう所に起因し、天

才は氣狂いと紙一重である。などと言われる根拠も、その辺にあるらしい。

ロンブローゾの天才論によると「天才の生理学と狂人の病理学は互に符合する個所が沢山存在している」そうである。パスカルは「極端な智力は極端な狂異と兄弟である」と言っている。だから世の特異作家たちは、皆天才だと自画自讃して、大いに発狂すべしであろう。

この文学者の天才性、或は変質的傾向とでもいふべきものにも、

あつて××××に激しい苦痛を蒙つて死に瀕することさえある。尙、此の外にカフェーに出没する男娼的男子の存在がある。妖艶なる女性に姿を変え、一定の知人以外には全く女性として生活しているのである。

腋臭の誘惑

いくらい匂だと、ひとりぎめしても、他人にはよくないのがある。殊に匂いの趣味というか、嗜好というか、香りに対しての好悪はかなり人によつて違ふ。香りと匂いに至つては、先ず主観的に大分違ふようである。官能的なものだけに、一理一様にはきめ難い。

男の好む香りは概して女は好かないと云える。欧米の女の腋臭は日本人にとつては鼻もちなしな臭いである。然しこの腋臭がかえつて男に対して露出症的な挑発的な魅惑をつくる。腋臭と匂いで男をひきつける技

多種多様の形態があつて、ちよいと陳列してみただけでも、次のような大壮観を呈する。

性的早熟者、晩熟者、偏執狂、詩的衝動、放浪癖、乱酒癖、二重人格、異常感覚、神経質、性的異常、誇大妄想、幻想癡虚言症、懷疑性、昂奮性、楽天性、悲観性、精神錯乱等々々々。

従つて道德的には、情的感覚の異常、倫理的観念の亡失、特殊能力の異常発達、精神的不均衡、過度の沈黙又は多弁、病的虚栄心、飛躍的独自性、神秘傾向耽美癖、象徵癖などが起り、生理的にも異常者が多い。

このうちの一つ以上が、自分にぴつたりするから、天才になれるだろうと早合点してはいけませんよ。

では、効能書の方はこれくらいにしておいて、次に少し実例を登場させてみよう。

戦後文壇に現れた人達の中でも有名な御連中が健在だが、特異風

串の織田作之助は、重症結核の床上で、筆を執り続けたし、反対に太宰治は、絶倫の精力をもて余して、肉体的精神自虐から、とうとう多摩川上水を塩つ辛くしてしまつた。田中英光は癡狂したし、坂口安吾もヘンな流言蜚語が飛んだ。

探偵作家クラブからは、三輪謙吉（作家ではなかつたが）という被害妄想狂の大人物が輩出した。

本誌の喜多玲子さんも大分メートルが上つてゐるし、二俣志津子、三村幾夫氏あたり、天才候補ぢやありませんかな？これは失礼、所が海外の文学者連中には、相当な大人物級のお顔が見える。

例えば、フランスの悪魔主義者

ボードレールは、少年の頃早熟で神経質で、その上誇大妄想狂の好典型で、彼の靈魂と肉体とは、常に一元的な存在だつた。ユーゴー以来の珍奇な地獄詩人として賞讃された。彼の傑作「悪の華」は発禁になり、削除して出版したもの。でさえ、保守的な道学者たちは、

「悪の聖書」として非難したものである。（岩波文庫の「悪の華」は後者のもの）そして彼は四十六才の時に、癡狂性麻痺という光榮ある病名で、瘋癲病院でその薄幸の生涯を閉じた。

米国の探偵小説創始者、エドガ・アランポーも、乱酔と遊蕩にドス黒く彩られた代表変質天才で、おまけにかなりの早熟で、十三才にして、既に二十も年長の夫人に恋した事件は有名である。早熟組には横綱級の人物も多いが、ダンテは七才にして、ベアトリチエに恋の詩を贈つてゐるし、アル・ハンブラは八才にして恋愛小説（？）を書いた。

極端な耽美主義者はオスカー・ワイルドで、あの怪異なロマンは既に狂人の世界であり、代表作「サロメ」は耽美的享樂狂の記録ともいふべく「ドリアン・グレイの肖像」はサジスムスの描破である。サジスムスとマソヒズムの大御所は、日本にもその例が見られ、

巧を加えればかえつて一種の性的魅力となつてくるのだ。

腋と香水、その上にほんのりと腋下の縮れ毛なぞをのぞかせる技巧は短いスカートに裾のうす汚れたズロースをのぞかせるなんてよりもつと効果的である腋臭と縮れ毛、これは男にとつては夏の眼と鼻のまさに窃視的享樂の交響樂である。

女からの抱擁

抱擁でも接吻でも、それが男と女との間に申訳的であつては性的遊戯の一種だ。

性交は男から女にしかけるものだ。接吻は女から男への秘戯だ。女からの抱擁は悦しさの余り男にかじりつくか、とびつつかの瞬間的な行動と表情とが多分に現れていなければ効果的でない。両腕ふかく拡げて、胸も丸出しにして乳房のあたり波うつ鼓動と腰のリズムに慄かなくてはならない。

その時は女は決して皓齒をち

江戸川乱歩は戦時中その筆を軍部より封じられ、遂に自ら現実界を去つて、幻影の城主となつた程だし、谷崎潤一郎、田中貢太郎等は

その重鎮、又奇觀畫だが、大杉栄の自叙伝もその代表的なもの。

また、深刻な凄味を以て、露骨な官能描写を恣にした巨匠に、仏のギイ・ド・モーパッサンがある。その代表作は「女の一生」であり変態心理的な作品としては「ル・ホルラ」「ロンドリー姉妹」が優れている。そして又彼も狂人であり、その深刻な精神的理由としては、余りに正確な自然主義と、余りに惨めな現実生活との幻想に対する、恐ろしい争闘の結果だとも言えよう。文豪モーパッサンも亦最後は精神病院の一隅で、純然たる狂人として、果てゝいつたのである。

彼は「あゝ、狂人のみが幸福である。何となれば、彼らは現実の感情を、喪失してしまつてゐるからだ」と言つたが、彼も亦その

「狂える者の幸福」の裡に、その生命を閉じたのだ。

ついでに、奇畫漁獵家の為に、巨星連中の変態心理的代表作を列べておくと、エミール・ゾラの「ナナ」トルストイの「アンナ・カレーニナ」フロベールの「マダム・ボヴァリ」ツルゲネーフの「煙」の「初恋」ウエデキンズの「春のめざめ」ゲーテの「ウィルヘルム・マイステル」等があり、いづれも蒸せ返るような官能描写を以て恋愛の人生的意義を極めようとしている。

又愛慾描写のみの強烈なものには、前述の「マダムボヴァリ」ポカチオの「デカメロン」ローレンスの「虹」「チャタレイ夫人の恋人」ポール・モーランの「夜ひらく」米飯主義者には中国の「遊仙窟」為永春水の「梅曆」などアブノーマルの代表作品に属するモーパッサンは最下層級の凄惨さも、よく筆にしているが、この方はゴッロキの「多の宿」「ど

ん底」等の方が徹底している。

更に狂的文学者の名作を歴訪してみると、ガルミンの「赤い花」チエホフの「六号室」などは狂気そのものを取扱つて有名で、ガルジンは自ら癡狂して自殺し、憂鬱性チエホフは肺病で死んだ。

名高いロデアの癲癇病者ドストエフスキは、彼自らが一個の変態心理病者で、それらの精神病理学的な事件を取扱つたものに、「青年」「悪魔」「カラマゾフの兄弟」「罪と罰」などがあり、癡狂を取材にしたものには、名作「白痴」がある。

もう一人、人間嫌いの狂人作家を紹介しておくと、「地獄」「痴人の告白」などを書いた、オーガスト・ストリンドベルヒである。彼は貧乏と労作と悲惨な生活の末、とうとう狂人になつてしまつたのだが、彼の見た人生は、遂に悲哀と苦悩と醜惡の逆境にあり、靈魂の牢獄であり、そして永遠の刑罰場でしかなかつたのだ。

らりと見せてはいけない。白い歯のちらつく抱擁はすでに女の敗退だ。皓齒は接吻のその時に見せるに限る。

現代の恋愛は男と女が自然から与えられた男性力の結果ではない。男と女の性愛技巧がもたらす享樂の延長に過ぎない。抱擁も接吻も勢い遊戯的享樂や性愛的秘戯としての効果が考えられる。従つて接吻一つでも味よく男に与えられるならば女は既に勝利者だ。

日本人は男でも女でも余りにも唾液が口唇にあり過ぎる。

舌を動かし過ぎると、接吻技巧の洗練さを誇る欧米の女がいう男は女の舌と唇とを微かに捕獲するの用意が必要だ。それは瞬間的な衝動からか、理解ある恋愛の一過程か、想像と幻想への誘惑からか、接吻につくある關係を予期するものか、等々接吻に際して直ぐと掴んでの接吻技巧でなければならぬ。

こう、まともでない人間ばかり陳列すると、此方までヘンな気がするが、バイロンは誇大妄想狂だつたし、イブセンは偏執狂だ。

エリオットはヒステリーだつた。ゴーゴリは失恋の結果盛に自瀆をやつて、とうとう背癱病に罹つてしまつたという——どなたか御用心アレ。

これを要するに、天才には狂人が多い。という事を言つたまでの話である。

更に累を日本の大家に及すと、又アクビを五六回も放つて頂かねばならないので、名前だけで筆を止めておくが——

古い所では紫式部、赤染衛門、伊勢大輔あたりが、発狂一步手前だつたし、江戸時代の異常変質作家や、病的心理を敢てした連中は非常に多く、中でも山東京伝、井原西鶴、柳亭種彦、恋川春汀など是有名だし、怪異グロ作家には、近路行者、都の錦(尖戸鉄舟)「雨月物語」の上田秋成などがあ

りいづれも変態性慾的なものを書いている。

大正年間邦枝完二氏が改筆した「忍草」は、淫樂的兇殺が取扱われ「雨月物語」は食人症を描いているが、同じ怪談ものでも、江戸末期の鶴屋南北が書いた「四谷怪談」や「累」の幽霊などとは、その本質を異にしている。

又、明治文壇唯一の変態心理小説家広津柳浪は、病的な愛慾を書いた惨酷小説で「変目伝」「青大将」「今戸心中」「畜生腹」などの代表作がある。

「金色夜叉」の尾崎紅葉は偏執狂で悪食のために命を失つたし、石川啄木は変質者で肺病であり、名作「地上」の作者島田清次郎は妄想狂で、早発性痴呆だつた。

そして、こうした異常作家たちの末路は、殆んど全部が全部、悲惨で不幸だつたと言つてもよい。

これは、本当に真実を求める、天才的な文学者の、一つの運命なのかも知れない。それは、何故な

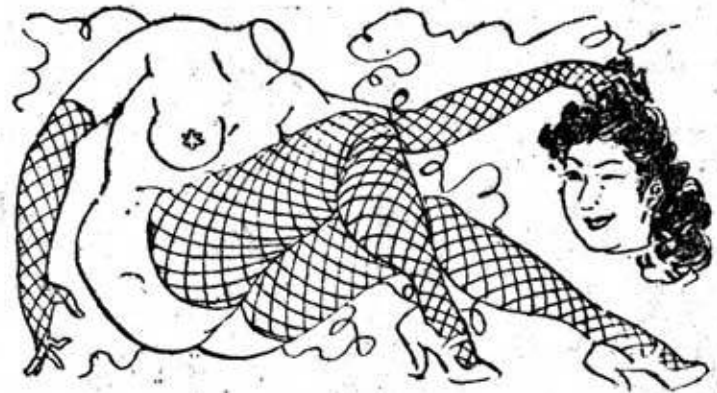
らば、彼らが己れの肉体的榮華などを求めずして、常に魂の光榮を求めようとするからである。

若しある文学者にして、単なる世俗的名利のみに言い、その為のみ筆を弄するならば、その人は偽者で、真の文芸の大目的を解し芸術の使徒たり得る資格のない人である。——ということとは、筆を以て立つ事を志している私達には、よく分りすぎる程分つてゐるんですがねえ、三文文士で終つてもいゝから、氣違ひにだけはなりたくない。

いや、有名作家になりたい。として発狂もしたくない。しかも芸術の真髓を汚さず、自分の名利もある程度満足したい。一体そうなるには、どうしたらいいでしょうえ？勝手にしやがれッて？正に御名答。

いやいや、こんな筆を執つてゐる私こそ、既に狂的潜在意識が、抬頭しているのかも知れない。お互に頭だけは大切に使いましょう

ストリップ 變態記



朝見速夫

戦後には随分ひどいストリップショウも出現したが、私が一座して居た「ベシフィックショウ」なども、その方では横綱格だったろう。

一座と言うのはストリップパーが五人、男の喜劇俳優が二人、楽士が四人、それに私と言った十二人の一座である。

私は恵まれた生活をして居たし、ストリップパーの中には相当貯め込んだのも居た。

地方の興行は長くて一週間、短かければ三日（売れないのは一日なんてのもあるが私の一座は一日なんてのは殆んどなかった）で一所を終つて次に移るのだつた。

私の仕事は「先乗り」と言つて今興行して居る内に、次の興行先を決めて、小屋主と日取りや歩合だの交渉を進めなければならぬ

関東から東北、北海道を股にかけてのドサ廻り、私の役所は一座のマネージャー、兼プロデューサー、兼舞台監督、兼庶務係兼振付師兼と数え立てればきりかないがまあそう言つた事をやつて居た、勿論金主は別にあつて、楽器や衣裳を揃えてくれたのだが、これには金利の配当を送ればよいし、幸で御難を喰つた事なんか一度もないから、ドサ廻りの割に

これが重要な仕事のひとつだった、ところが地方ではお祭りの時などはその土地へ我もく、と他のドサ廻りの一座が乗込んで来て、いゝ日取りを取らうとする、この日取りの争奪戦が、私の腕の振り所だった、少しでも、劇場へ、一座の者が遊ばないようにスムーズな日取りをとるためには小屋主を条件でウンと言わせなければならぬ。

それで次の興行地の小屋主を今興行している小屋へ連れて来て、「入り」の具合や演し物の受ける様子を見せてやるのだつた。

この日が我々一座の一番特別に馬力をかける日なのだ。

五人のストリップパーは自慢ではないが皆相当美人で型の違つた魅力を振つて居たし、肉体も貧弱なのは一人も居なかつた、殊にスターのルイズ花井は豊艶な肢体と妖しく美しい容貌と、他のストリップパーの真似られないエケティッシュなゼスチュアを持つて居た。

然も彼女は露出症でサチストと言う変態な女だった、ストリップパーなんてものは皆露出症だが、ルイズのは殊にひどかつた。

私がつき合つたストリップパーに小夜れい子と言う蛇と心中した女が居たが、この女なんかは客席でマスターベーションをして居る観

客を見つけると、その男が目的を果す迄、「これでもか／＼」とエロチックなポーズをして見せ、果はバタフライ迄脱つてしまつて、その観客に向つて専心にエロの攻撃を浴せ、客が目的を遂げる迄は「公然ワイセツ物展覧罪」を行つて、サツに引張られた事も始終だつたが、うちのルイズもそうした所のある女だつた。

彼女大いにエロつてくれるのは良いがサツへ引張られたんじや商売にならない。そこで私は彼女に要領を教えたのだ。

ストリップバーが客席へ下りて行くようになったのはいつ頃からだつたか、はつきりした事は忘れたが、私は時々手があくと、東京のストリップの小屋を一巡して見て、新手を支入れて来てうちのショウにも用いた。

去年は一時下火になつたストリップも今年の春から又人氣が沸いて来たが、人氣のある内は我々はそう苦勞しなくてもいいのだが去年は色々と苦心していろんな手を用いた。

私も去年の春から（このまゝで行つたら観客から飽きられてしまう。何か新手を……）

と考へて居たのだが、それには演技にもう少し変態味を加えたらどうかと思つた。

幸い変態の方ならヒケを取らない女が二人

居る。サジの方はルイズ谷、マゾの方はリリイ宮地とこの二人を使えばよい、もとより前から多少の変態味は出して居たのだが、これをもつと薬を強くしようと言うのだ。

ルイズに相談すると一も二もなくOKだつた。彼女は亭主持ちで、それは一座のトロンベツトを吹いてる男だつた。彼女はよく人前でこの男をひつぱたいたり蹴とばしたりしたが、ふとした事から私が彼女の肉体を知つてからは、ルイズは私には平気で彼等夫婦の「前戯」とも称すべき変体的な痴態を見せて憚らぬようになった。

ストリップバーは恥毛を極端に剃り落してしまふ。殆んどバイパンに近く剃るなり、クレームで落すなりしてしまふのだつた。

ルイズは毛深い方だつたが、腋の下の毛もあすこも皆亭主の剃刀で剃らせて居た。

私が据付けの相談に彼女の部屋に入つて行くと、ルイズは椅子に腰かけし、夫の藤尾に今や「ヒゲ剃り」をやらせているまつ最中だつた。

「オヤオヤ床屋さんやつてんのか。じゃ後で来ようか。」

「いゝのよ。何あに？何か用？」

彼女のひらいた膝の間には藤尾が立て膝し

て器用な手つきで剃刀を使つて居た。ルイズは、片脚をデンと前尾の肩へかけて股をひらいて上から藤尾の頭を見下して居たが、出直そうとする私に首だけ向けて平然と呼びとめた。藤尾の方は流石に一寸赤い顔をした。

「ウン今度の踊りの振り付けの事なんだがね」

「何か新しいのと変えるの？」

「あゝ、もう少しあの方の味を濃くして見ようと見ようと思うんだ。」

「フ、ン」

ルイズは私の顔を見てニヤツと笑つた。

「又マルだしやれて言うの？」

「そうじやないんだよ。君は、肉体の門が何故あれ程当つたか知つて居るだろう。あれには強烈なサジとマゾが含まれ居るからなんだよ」

「何んだその方の味か。……痛いよ、もつと濡らさなきゃだめよ。」

藤尾は立つて石鹸とブラシを持つて来た。「フ、。何さそんなもの持つて来て。今更お体裁つくろわなくなつていゝわよ、舐めてお剃りよ」

いつも石鹸なんか使わない事は私も知つて居た。私が居なければ、そんなものは使わな

かつたのだし、現に使わずに途中迄剃つて来て居るんだから、今更持出すのは確かにヘンだった。

「でどんな事すりやいゝのさ」

「まあ君にサジの方を受持つて貰つて、マゾの方は宮地にやつて貰うさ」

「斯うでもすりやいゝの」

ルイズは藤尾の首を太股でグイと締めた。

「まあ暖かな顔だこと。フ、フ、フ。この人、柄になくテレてるのよ。ハ、ハ、ハ、」

ルイズは身体を揺つて笑つた。

「でもこんな事したら、又サツがやかましいんじゃないの」

「そりお、そこまで行かなくなつていゝんだよ。此の間大阪で観て来た・アポロシヨウ・じやヒロミ、原が、太股や内股へ男にキツスさす所をやつてゐるんだがね。それが受けてゐるんだ。」

「そんな事訳ないじゃないのさ」

ルイズは脚を下して立ち上つた。藤尾は手の甲に並べた毛をおとしに洗面所へ立つた。

ルイズはグイと腕をのばして、私の首に巻きつけて、接吻した。

「ネエ、剃り立てにキスして見ない」

ルイズは私の眼の中を覗き込むようにして

ニツと笑つた。

二

二人しか居ない男の俳優の内、寺田はリリイ宮地の夫だつたので、この二人に男のサディズムを扱つたシヨウを見せ、ルイズ、谷と藤尾に女のサディズムのシヨウをやる事に決めた。

一座は北海道を打つて廻つて、函館から又内地へ渡り、青森で三日の興行を済ませ、それから弘前、秋田、奥羽本線を巡業する予定になつて居た。

恰度五月の始めで、弘前は年に一度の花見時にぶつかつて居て、一つしかない興行物専門の劇場へ三つ位地方廻りの一座が目かけて居た。私は弘前の小屋主を青森の初日を見せに、引張る事に成功した。

「青森の初日は・スペシャルで頼むぜ」

私はルイズとリリイにかねての新しいシヨウを全ストでやらせるべく命令した。

リリイと寺田の夫婦の方は芝居に仕組んで姦通した女房を嫉妬に狂つた夫が殺す場面をヤマにして見せた。

寺田はリリイの着物を一枚一枚剥いで行き真赤な長襦袢一枚にして、髪の毛を掴んで、

舞合中を引きづり廻して。身悶えしながら寺田の足許にからみつくリリイの赤い腰巻が捲れて、チラリ！と一瞬であつたが、白い太股を、持上げた時、カブリツキに案内していた弘前的小屋主の山内と私の眼に、肉の柱の終点が見えて見えた。

(どうです！)

と言わんばかりに私は無言で山内の顔を見た。山内も私を見て、ニヤリと笑つた。

寺田は、乳房も露わになつたリリイの両手を縄で縛つて、吊しあげて、最後の見せ場で匕首をリリイの胸にグザ！と刺した。匕首を持つた手の中に、脱脂綿に赤インクを浸ませたのを、その瞬間に、キユツと絞つて、寺田は手際よく、リリイの豊かな胸に、乳房を真赤に染めて見せた。

これも最近では方々のシヨウでやつてゐる手だが、当時としては新しいアイデアだつた。苦悶に脚をバタ／＼させるリリイ、寺田はその腰巻の端を握つてバツと捲つた。きわどく露出した内股を見せての幕切れは、相当刺戟に富んだ効果をあげた。

お次はルイズ・谷と藤尾の番だつた。

これはシヨウの間に二人を踊らせる事にし、た。もと／＼器用な寺田は、楽器もいじれば

舞台で一通りの踊り位は踊れる素養があつた。私は今迄舞台を勤めていたもう一人の木島がいくらかトランペットが吹けるので、藤尾と入替えた。

ルイズと藤尾にはアバツシユダンスを踊らせた。アバツシユダンスと言うのは、本来、男が女を虐待する踊りなのだが、私はこれを逆にした踊りをやらせたのだ。

先ずルイズ谷がソロでコケティッシュなタングを踊り、小さなバタフライをスカートからチラ／＼見せて踊つた。

寺田が酔つぱらつた紳士になつて、彼女にもつれて踊る、ルイズは、この紳士を誘惑して引込むと、入違いに赤いネツカチーフを捲いたお定まりのアバツシユに扮した藤尾が出て来て、短刀で紳士を脅迫して金を奪う。紳士の寺田が引込むと、衣裳を変えたルイズが黒の裾子に紅の裏のついたロングスカートの横が腿の辺迄裂けたのをつけて出て来る。彼女が藤尾の奪つた金を出せと藤尾に迫る、それからアバツシユダンスが始まるのだがルイズは藤尾のポケットの金を盗もうと、時々手をのばすが、その度に藤尾が払いのけるそして踊りが段々狂暴にテンポが早くなり終には二人で取組合つて、上になり下になり舞台中

をころげまわる。

その時に、彼女の白いお尻がスカートから来るだしになる事もあつた。彼女はこの衣裳に着替えて来る時にバタフライを脱して来て居るのだつた。

ルイズがそれを奪い取つて逃げようとする藤尾がスカートを掴んで短刀を出して脅かす。

(斬るんならお斬り！)

乳房を露わしたルイズが、自信たつぷりで身体を藤尾にすり寄せる。

彼女の肉体の魅力に負けた藤尾が、短刀を投げ出して、彼女の捲られたスカートの脚元へひざまずいて、彼女の腰を抱え、露出された豊満な太腿の両方へ接吻の雨を浴せる。

(さまあ見やがれ！)

と言う風に下を見下してせゝら笑うルイズは、心持ち脚をひらくと、藤尾は内股に唇をおしつけて強く吸つた。

脚を持上げたルイズが靴のまゝ、彼の肩を蹴つた。蹴倒されても、又起きて彼女の脚へすがりつく。それを又蹴倒す。

「山内さん、舞台の袖へ行きましょう」

私は山内を誘つて、楽屋へ連れて行つた。

楽屋から、舞台の袖にかくれて、二人は真横から、ルイズと藤尾の踊りを見た。

ルイズは夜叉のように荒れ狂つて、藤尾を舞台の端迄蹴転がした。そして起上る藤尾の頬へバシーン！とほんもののピンタが飛んだ。藤尾の痛さをこらえる苦痛の顔！

それを尻眼にかけて、悠々と立ち去ろうとするルイズに、藤尾は背後からしがみついた。ごうを煮やしたと言う恰好で、乱暴に身体を振つて、藤尾を振り落とすと、俯向けに押し倒し、ルイズは舞台に背を向けて、彼の顔の上に馬のりに跨がつた。

ルイズはチラと此方を向いて、私と山内を認めると、掩つて居たスカートをバツとはねのけた。

あッ！

山内は小声で叫び声をあげた。ルイズの両股をひらいた辺りが臍の辺までムキ出しにされたからだつた。然もその股の下に藤尾が顔の下半分を押し潰されたようにしてうめいて居た。ルイズは両股で顔をモリ／＼と締めあげ顔を三方から包んで、上からグイツ／＼と尻に反動をつけて押しつけた。

私は山内を横眼でぬすみ見た。

流石に場馴れた山内さえ、眼を瞠つて、昂奮の色を包みきれず、彼女の下半身を凝視して居た。

ルイズは大きく尻を一揺りして、悠りと腰をもちあげた。藤尾の頬の両脇へ足を踏んばって仁王立ちに顔を跨いで、上から藤尾を見下した。藤尾は気を失ったように眼をつぶって動かなかつた。

これで一座の弘前乗込みはまんまと成功し、青森三日の興行も上乘だった。

青森での二日目、三日目はこれをやらなかつたが、弘前の初日ではもつとあくどくして

やつた。

藤尾には臨時手当として青森で二千円、弘前で三千円くれてやつたら麻雀のもとと手が出来たとホク／＼して居た。

ルイズ、谷はこのショウをやると非常に昂奮して、藤尾が麻雀に行くとき、その後で必ず私の部屋へ忍んできた。私もルイズの肉体の味が忘れられず、それから暫らく一座に留つて居たが、

そのうちルイズが新しく加つたトロンベツ

ト吹きと関係した事を知つたので、それを潮時に身を退いたが、公衆の舞合で、あそこまで実演させたのは、私位のものだろう。大して自慢になる事でもないが……

(後記) その後池袋駅前に見世物小屋のようなテントを立てて、全ストを公開してあげられたストリップパーの中にルイズ・花井のおちぶれ、荒んだ姿を発見したのは、半年後の事だった。

奇譚クラブ最近号 主要目次

○ 六月号 戦争と性慾特集 ○

口絵 戦争と性慾画集、ハレムの美妃

「責められる女の美」写真集

好色秘本バルカン戦争

貞操特攻隊の悲劇……………杉山 清詩

モスコウの妖花……………藤田 盛治

ナポレオンの兵隊……………松谷 茂

成吉思汗の性慾戦術……………中沢 公平

テルマ病院の点描……………花本 史郎

人間便所の妄想狂……………二宮 忠一

男子同性愛雑考……………浅倉 文朗

陸軍特設第七天国……………真鍋 吟吾

戦争とエロ

特選小説

魔性私刑……………街 啓介

小説・京マチ子……………夏目 千代

淫蕩歌舞伎図絵……………緑 猛比古

男子同性愛者からの書信……………南里 文彦

女性陰毛の生理……………田中 芳生

女体哨戒線突破……………浪速 三郎

○ 七月号 女天下時代特集 ○

口絵 縛られた裸女十態……………喜多 玲子

緊縛裸婦写真集「美しき苦悶」 女天下時代(マゾの男達画集)

女の奴隷、マゾヒスト群像……………高取 辰治

女体の下に蠢めく男たち……………阿久津 猛

淫乱婦女伝……………花木 実

疾患の鶏……………藤安 節子

或る変態夫婦の死……………藤崎 洋美

お座敷ストリップ色勇伝……………鬼山 絢策

策女剣劇王健在なり……………富士 芳孝

国際文通好色噺……………二俣志津子

上海の売笑婦 野鷲族……………野中 愛三

変態艶書……………岡田 咲子

少年好色奇譚……………野溝 草兵

維新志士漁色競べ……………松谷 茂

花山 剣作

性愛の研究

性交なき遂情行為……………鳥上 源一
 性愛と残酷……………仁比山 等
 恥毛と腋毛……………田中 芳生
 女の足の蠱惑……………赤坂 剛

小説

夢性の美少年……………三村 幾夫
 張形の謎……………緑 猛比古
 倫落の岐路……………壬生すみ子

性愛談義

都々逸に現われた性愛感情……………安部 雨紅
 獸類にも恋愛はあるか……………絹島 増夫
 張型を用いた性愛の技巧……………白川朝子

○ 八月号 責めと男色特大号 ○

口絵 浴場と浴室のエロチシズム

惨虐の芸術(合巻に現れた殺し)

男色天国繁昌記画集

女体相撲艶色史……………増田 志郎
 変態コレクトマニヤ……………庄司 浩平
 男の天国・女工情史……………早崎 稲穂
 ソドミーとレスボスの愛……………染田 玄

夢性の美少年……………三村 幾夫
 【変態心理】自虐淫楽……………三富 浩生
 日本性見世物変遷史……………潮 マリ
 乳房を失った女……………竹谷 十三
 男色殺人事件……………井口 正憲
 男性的女子の記……………藤安 節子

特選 変化中条流……………緑 猛比古
 青い濁流……………竹内 節夫

MとS……………岡田 咲子
 温泉ホテルの母娘……………矢代 文世
 不貞の倫理……………貴崎 郷子
 姦淫私刑考……………丹波 太郎

悦虐の記録……………喜多 玲子
 指反つた素足の美……………的場 通
 王朝好色本 音なし草紙……………宮内早次郎
 ◎喜多玲子習作集「縛られたる女の十五態」
 ◎折込口絵写真「緊縛美の断片」

神戸暗黒街探訪記……………久木田 堅
 光源氏の性的生活……………畑村 連治

○ 九月号 特集 倒錯の告白 ○

口絵 倒錯の告白画集……………竹中英二郎
 玲子習作二十態……………喜多 玲子
 縛られた女の写真集……………美の 緊縛

狂い咲くカンナ……………羽村 京子
 白い腋窩の幻想……………三富 浩生
 僕という男……………中野安太郎
 妖しい花びら……………寺尾 修治
 弱者の醍醐味……………村井 健司
 憂鬱症の転機……………蘭 守
 サディストの悲哀……………天野 一郎
 足部憧憬の悲願……………山本 貞輔
 銷夏怪異漫語……………嵯峨あきら
 変態心理を衝く……………波多野 新
 彫刻と性について……………池 長世
 記 録 係……………岡田 咲子
 中国艶話 夜譚随録……………皆田 仁
 邪恋の恋……………松井 籟子
 サド候爵と殺生関白秀次……………高取 辰治
 処女性の神秘……………的場 通
 洋パンを囲む座談会……………辻村 隆
 加虐淫虐症の種々相……………仁比山 等
 吉原の淫虐魔……………緑 猛比古

陸軍御用達千一夜……………松本 公恵
 ケンプエル江戸参府紀行……………伊吹慶太郎
 平城夜話 俠盗犬磨……………庄司 浩平
 桜姫全伝 曙草紙……………山東 京伝

○ 十月号 特集切支丹迫害 ○

口絵 責め場面挿絵集……………喜多玲子・構成
 切支丹迫害史画集……………五井野弘・画
 縛られた女写真集……………辻村隆・構成

切支丹迫害史……………漆島 迫平
 永責めの断罪……………赤城 芳年
 遊女花菱の受難……………花山 剣作
 江戸の刺青模様……………潮 マリ
 マリヤ・マグダレナ……………桂牧 次郎
 性慾の昇華……………赤坂 剛
 或る医師の告白……………龜岡 恭二
 大衆文学に現れた「女の責め場」……………高月 大三
 愛と苦痛の交錯……………島上 源一
 恋の烙印……………松井 籟子
 少女の像……………栗村 由美
 呻される夢……………波多野 新
 男色の海……………井口 正憲
 あらたま村の奥にて……………二俣志津子
 アブニストの記 へばきうり……………鬼山 絢策
 夫婦愛と緊縛の考察……………辻村 隆
 サイニン……………戸森 正人
 宿命に哭く……………浅田 咲子
 悪女……………岡田 咲子
 江戸時代の墮胎医……………福森 耕司
 縛られた妻……………早川新二郎
 遺 書……………小峰登美子
 猿轡五態……………喜多玲子・画



續

變態艶書

岡田 咲子

喜多玲子さま

咲子さまはお姉さまにお手紙を書こうとしています。許して——お別れする時、あんなえらそうなことを言つて逃げる様にしてそのままお別れしてしまつた私なのに。

玲子お姉さま、でも私は矢張り駄目でした。もう再度、お姉さまには会わない決心をして居た私なのに、たつた三カ月でお姉さまの顔を見ずにはいられなくなつてしまつたの。

どうか咲子を許して下さい。

玲子姉さまのお家で暮した一週間の生活が終つた日、お姉さまは玄關で靴をはく私を見下ろして最後にこうおつしやつたわ。

「そんなにお帰りにになりたいんならお帰りなさい。でも貴女はまた必ず私を想い出すわ。この一週間の出来ごとをなつかしく思い始めるに決つてゐる。いい駄目駄目、今はそうでも必ずそうなるに違いないんですもの。きつとお便りして下さい。私にはちゃんと判つてゐる。」

その言葉通りになつてしまいました。恥ずかしいけれども、あの一週間の生活の想い出に耐え切れなくなつてしまつた咲子です。考へまい。忘れようと必死になればなるほど、目に見えないものが私の胸をギリギリしめつけ巻きついて振りはらえば、はらう程次第に私を強くしめつけながら、お姉さまの足下へひざまづかせ様とするのです。

とうとう私はお姉さまなしでは生きられない女になつてしまいましたわ。

玲子お姉さま

7月号8月号の習作を拝見して、あの縛られた裸婦が私であることも、あの縛られた裸婦のポーズが、すべてあの一週間にお姉さまが私に要求したポーズであることも判りました。私はあの習作の裸婦を見ると、あの絵からお姉さまの美しい顔、細い指、なまめかしい素足をはつきり思い出すの。そしてお姉さまの肌のにはいが私の体全体を包んで行くのを覚えるのです。私の体を隅から隅までお姉さ

まの想い出が支配してしまつたことが私自身良く判りながら如何うすることも出来ない。何故だか判らないけれど、こうなることが私の持つて生まれた運命だとも信じられる様にもなりました。そう信じずには居られなくなつてしまつたのです。

玲子お姉さま

お笑いになつて。咲子はまた夜が更けると起上り三面鏡の前に座る日が毎晩の日課でもあるかの様に続きます。高鳴る胸をおさえ、人の足音におびえる猫の様に、足音をしのばせ周囲に気を配りながらカーテンを引くと私はバジヤマを脱ぎ抽出しから細引きの一束を取り出して、ぐるぐる足首から胸まで、グルグル細引きに巻きつけると、そのまま床の上で、またソファアの上で狂人の様に目を閉じ顔にお姉さまの姿を想い浮べて、もがき、呻きながら全身に細引きが巻きついた肌にくい込む縄の感覚に酔い、次第に全ての力が体からぬけてグツタリしてしまふまで私の日課は続きます。丁度お姉さまの手で無理矢理に手足を縛られた私の体から全ての力がぬけてしまつたのと同じ様に――。

玲子お姉さま

三カ月前のあの日、あの駅で待つて居て下さつた始めて見たお姉さまの姿を今もはつきり想い出す。落着いた和服姿のお姉さま。私は自分の想像よりも若く美しいお姉さまだったので、お家の玄関へ通されるまでは本当のそこはボンヤリしてしまつて、何を話したの



か、どの位歩いたのか、全然覚えていないのです。嘘じやありませんか、お会いする前の恐怖なんか少しもおこらなかつたわ。逆に私なんのためにお姉さまのお家へ行くのかさえ忘れてしまつていたのです。

でも玲子お姉さま

私は門を入り玄関が開かれたのと同時に内部から出迎えた女中さん二人に、両手を持たれ素早く家の中へ引ずり込まれ、ハツとした時には私の口は女中さんの掌でピツタリふたをされて居たのです。私はそこで始めてお姉さまの家に着いたんだと、はつきり知つたのです。

それと同時にお姉さまのスケジュールがすでに進行して居るのだと、はつきり現実に目覚めた私でした。でもそのスケジュールも私だつてお手紙の内容が、まるつきり人騒がせな噂だとは思つて居なかつたし、お姉さまに会う以上、と相当のかくごもして居た積りでした。で、両腕をうしろへまわされ細い革バンドで手首をギツシリ縛られたまま、応接間のソファアに座らされた時には、もうだいぶ私も落着きを取戻して居りました。そしてお姉さまと向い合つた私の胸には、自分が今、未知の世界に直面している。そしてそれがこれからの私の現実になろうとしている。

予告されて居たとは言え、応接間で話されている私は両腕を固く縛り上げられている。妖しげなアブノーマルな第一印象から、第二

第三と始まるであろうお姉さまのスケジュールに、私は私なりにスリルと楽しさを感じてはおりましたの。

だからお姉さまが笑いながら私に

「お判りになつて——、今日から一週間は毎日起きて居る時も、ねている間も私のそばから咲子さんを離さない。そして今からは咲子さんは私の命令通りに従つていただかなければならないのよ。

如何が？ 恐い？ まあにくらしい、笑つてらつしやるのね。でもその可愛い微笑も明日まで続くか知ら？。」

と言つて私の顔を見守るお姉さまの態度にでも、その場の雰囲気、酔つていた私には、お姉さまの言葉から何んの不安も感じては居りませんでした。

ですから、あの晩食事になつても両腕のいましめが解いてもらえず、女中さんにまるで赤ん坊の様に御馳走を口へはこんでもらつても、御不浄へ行く時にも入浴する時にもそのままの姿で、器用に全ての用をたしてくれる女中さんに呆れもし感心もしたけれど、なれない私の恥しさと多少の気味悪さ以外には不安を感じて居ませんでした。ここまでは全部、お姉さまのお手紙のスケジュールにも書いて有つたことで最初から知つていたため恐怖心がわかなかつたのでしよう。

玲子お姉さま

咲子はアトリエの中でのお姉さまが、スケッチブックを持つて私



の裸体を穴のあくほど見つめて次のポーズを考えておいでになる時のお姉さまの目の輝やきを忘れられません。なんと言う美しいあでやかな鋭さとも言うのでしようか。咲子はただ、あの目で見つめられると、お姉さまにどんなに強く私の肌がさける程に縛られようと、どんな苦しいポーズをつけられても、反撥する気持がなくなつてしまうのです。

そうこんなことが有りましたわ。お姉さまは一つのポーズを画き終り、女中さんに私の縄を解かせて居りました。女中さんはほつき終つても、私が逃げ出すのをおそれでもするかのように何時の場合でも、両手をしつかりつかまえてお姉さまの次の命令を待つていました。今思うと、その時は余程面白いポーズが浮かばなかつたらしくお姉さまは、美しい鋭い目にイライラした色を見せて

「何故、面白いポーズが出来ないんだらう。ねえ、鎖で縛つて見ようか知ら？」

私の体はアトリエの太い柱の前でひざまずかされ両手首両足首を太い鎖で結ばれ、私の体は柱を背に弓なりにうしろへのけぞつたポーズをとらされたことが有りしました。

お姉さまの鋭い目がますます鋭さをますと、私のうしろへ来て手足の鎖の縛り具合を見て女中さんに

「こんなじやあ、良いポーズが出来ないの当り前だわ。一寸咲子さんがもがけばすぐほどけてしまふじやあないの。良い？ こう

やるのよ。」

私を縛った鎖は再度、お姉さまに強く骨まで痛む位にしめ上げられ、私はがまん出来ない痛さ苦しさに、悲鳴を上げて

「痛い、そ、そんなひどいこと——嫌——は、ほどういて……息、息がつまりそう——」

上半身をのけぞりもがく私の姿に、お姉さまは一瞬険しい微笑を浮かべて

「矢張り咲子さんも本当に苦しめないの良いポーズにならないわ。

本式に縛って責めないで駄目なのね。ねえそうなんですよ？ ま

あこんなに顔が充血して、苦しい？でも素晴らしい姿よ。」

玲子お姉さま

そのうしろへたれ下った私の顔を見下ろしていたお姉さま。私は苦しい息の下でお姉さまを見上げたその時、その瞬間私は何かドキリとした言うに言えない不安を始めて感じたの。でも、まだそれは恐怖心までは感じていませんでした。

それから、私は毎日毎晩、一日も欠かすことなくアトリエで、またはお部屋で、ある時は薄暗い地下室や、物置小屋で休むひまもなく裸体で縛られて、ポーズをつけられた私。夜が来るとお姉さまのベットと並んだもう一つのベットの鉄具へ両手両足を細い鎖で結えつけられたまま私はねむらなければならぬ夜が続きましたわ。

こんなにもでしなくても逃げやあしないのにと、いくら言つても

お姉さんは笑って首を振って居るだけで、その鎖をほどういてはくれません。でも二、三日は私もまだ好奇心が先に立ち、苦しいポーズで呻いても、悲鳴を上げる口へ固く息も出来ない程に猿ぐつわをはめられて、内心はそうされることを嫌とは思わず、むしろ喜んで居たと言う方が本当でした。このままであつたのなら私は一週間は

おろか二週間三週間と甘えて泊りを続けていたでしょう。しかし私はお姉さまの態度や目つきが次第に変つて来たのを知りました。と言つてどうとは言えなかつたのですけれど、例えば私の縛られたポーズをつけている時も、今まで私の裸体を見守るお姉さまの絵を描く顔には、何処かに芸術家だけが知る真面目さが、ただよつていたのに、だんだんお姉さまの態度は絵を画いて居ると言うより、私を責めて居ることだけに面白さ楽しさを感じて居ると言うことが私にも判り始めて来たのです。

縛られた女を画く喜びより、縛られた女を苦しめる喜びのためだけに、私を裸にし縛り上げて居るんだと言うお姉さまの態度を知ると、私はだんだん本当に怖くなり始めたのです。縛られる興味をあじあうよりも前に、責められる恐怖心が先に立ち始めてしまったのでした。

玲子お姉さま

御免なさい。私と言う女はこの恐怖心を心ひそかに期待して行つたのは事実なのに、それなのに、こんな失礼なことを言つたりして





本当に申訳ないのです。申訳ないと良くわかつて居ながら、こんなことを書いている私の気持も、本当はもう一度、お姉さまのお家へ行きたいためです。お姉さまの責めさいなむ美しい白い指が忘れられなくなつてしまつたこと以外のなにものでもない、私の本心を打明けてお姉さまに許していただきたいためなのです。

お姉さま、お判りになつていただけるか知ら、咲子の気持――。

きつと判つていただけると信じて最後まで書くことにしました。そしてこの私の本当の気持をお姉さまに知つていただける方法を、私は思ひついたので。その方法と言うのは、私の日記、お姉さまのお家から帰つて私が経験した生れてはじめての出来ごとをそのまま永久の思い出となる様に、日記に書いて置いたのです。

私はウソ偽りのない日記を読んでもいただくこと以外、お伝えする私の気持を知つていただくことは出来ないと思います。

ではお姉さま、あの時の気持のままに書き綴つた日記の一字一句をそのままに写しましたので良く判らない所も有るでしょうが、その点は恥も外分も忘れて、ただ一筋にお姉さまに私の本心をお知らせしたい咲子の心根をくんで、なにとぞお許し下さいますように。

○ 日 ○ 日

私が想像して居たよりも、ずっと若く美しかった玲子さんにおどろいて居る間に玲子さんの家へ着く。玄関に入るや否や私は女中さ

ん二人に両腕を持たれて細い革紐でうしろ手に縛られ、そのまま応接間に通された。最初の出来ごとに一寸びつくりしたが、次に来るものに楽しみを感じる。

だが食事の時も入浴の時も御不浄の時も両腕を縛る細紐をほどいてももらえないのにはいささか弱つた。けれど大した苦痛でもなく自分が恥しいのをがまんさえすれば良いのだから――。

玲子さんも親切な人だ。始めてアトリエに通され、洋服を脱がされ下着から最後にはパンツを脱がされた時は矢張り予期していたが目を閉じてしまつた。

私は横座りになり麻縄で両足を縛られた単純なポーズで玲子さんは私を画いて行く。今日はそれで終る。

夜は玲子さんの隣にならべられたベットにねると玲子さんは、細紐をほどき両掌に鎖を巻きつけベットの金具に結えてしまつた。

「今夜はきゆうくつだろうけれど明日になればなれることよ。最初は何のモデルでもおとなしいのよ。でも二日三日とすぎる間に両足も鎖で縛らないと不安なほど、あばれたり、ねる時も口へ猿ぐつわをしておかなければいけないほど泣きわめく様になるの。貴女もそうなるわきつと、ならないと思つていてもそうさせずには置かない私なのよ、またそうなつてももらわないと本当に良い絵は画けないの。まあ今夜はいじめないからゆつくりお休みなさい」微笑して私の額に接吻して呉れた玲子さんの体臭に酔つた様にぼ

とする。

○ 月 ○ 日

午前中は、食事が終わると部屋で洋服を脱がされてガウンを着ると、アトリエへ行く。

玲子さんは

「さあそのガウンをお脱ぎなさい。今日からだんだん本式に縛るわ。少々痛くてもがまんしてよ。咲子さん、貴女は私が思っていた咲子さんよりずっと素晴らしい。私が理想にしている全ての条件を貴女の美しい裸体は持っているのよ。」

讀められてくすぐったい様な気持だつた。今日も麻縄を乳房の上からかけられ両腕を柱へ結わえられ、両足もそろえて縛られる。乳房の縄がうしろでむすばれた時は乳房にギューとくい込んだ縄の痛さに、一寸悲鳴を上げる。

終つた時には私の乳房には縄のあとが赤くはつきりついていた。午後は両腕を太いロープで縛られ、天井へ吊り上げられて居るポーズ。

玲子さんはロープを引く女中を見て、一寸きつい声で

「なぜロープを引張るのを止めるの？そんなにロープがゆるんでいいんじゃないの。もつとピンと張るまで引張るのよ。」

私の吊り上げられた両腕が、次の瞬間強い力で引き上げられた。

両腕がもげそうに痛む。それでも女中は張り切つたロープに、なほ一層力を入れて引張る。

遂に私は両足の拇指が辛うじて床板についている所へまで引張り上げられてしまった。両腕、胸、胴がちぎれてしまうのかと思うほど痛む。私は本当に悲鳴を上げた。首を振りもがいた。

苦しむ私の姿に会心の微笑を浮べた玲子さんは、そのまま私の姿を画いて行く。そしてデッサンを終つた玲子さんが近づいて来た時には、私は痛みを通りこして、全身がしびれて居た。玲子さんは私の乳房をさすりながら

「痛かつた？ 苦しかつた？ あら、泣いたの？ 悪かつたわね。でもね咲子さん、私、今はつきり貴女の体を私のものに出来る自信が出来た。さあロープをゆるめて上げて。しばらくじーと私に抱かれていればすぐ痛さは治るわ。ねえ咲子さん明日からは今まで誰も、どのモデルも知らない私と咲子さんと二人だけのパラダイスへ行けそうよ。そして咲子さんは私と暮したパラダイスの思い出を生徒忘れることがないように貴女のこのムツチリした弾力のある体の全部の所へ私が記念のマークを画いて上げるわ。ねえ判つた？」

玲子さんは抱いた私の身体をもう一度抱きしめると、私の口へ玲子さんはピッタリと口を吸いつけて、私の体を床の上へおし倒してしまった。





私はこの時、はじめて大変なことになったと思つた。私の胸の中にはじめて恐怖の影がおおい始める。何故か玲子さんの目から今までかがやいて居た、私たち芸術の道を進む者だけが知る光の外に、別のちがつたものがあることを私は見た。

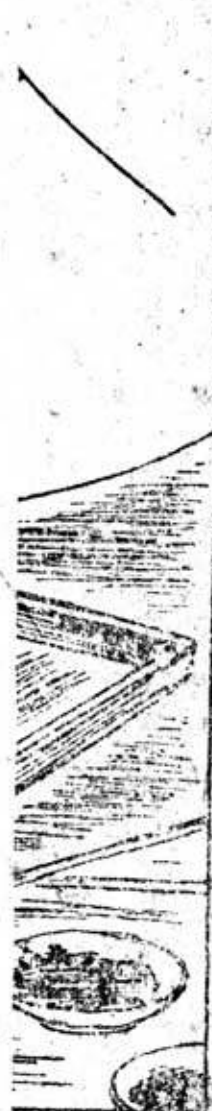
○ 月 ○ 日

窓の外は雨。閉め切つたこの部屋。日本間で八畳、立派な家具。でも普段使用ないらしく畳はシツ氣くさく、はじめとしていて陰気な部屋は、玲子さんの香水と体臭と、私のむせかえる様な汗のにはいで充滿している。私は今朝から、この部屋の中で色々なポーズをつけられている。

床柱へ縛りつけられ、次に大きな机の上へねかされそのまま体中を所かまわずにグルグル巻に結えつけられた私の体を見る玲子さんは朝から不快らしい顔に、ますます不快さを強めると、突然画用紙と鉛筆をなげ出すと

「駄目よ。どうしたの？ まるで体に生氣が無いわ。私の言うポーズが嫌なの？ それともしないの？。出来ないんなら出来るように、しないんならするようにさすまでなのよ。さあ一度変つたポーズをつけて上げましょう。」

玲子さんは部屋の隅へ立つて行き呼びリンを押す。私はしないのでも嫌なのでもない。もう出来ないほどつかれていた。今日に限つ



て風食もまだすんでいない。鎖へつながら、荒縄で巻かれ、バンドでしめ上げられ、悲鳴を上げる程、なおも無理なポーズをつけられて全身は水をあびた様に汗でぬれ畳の上へボタリボタリしたたる汗の音にも構わず色々なポーズをさされた私は、机の上へねかされた時は、もう体を動かすのも口をきくのも嫌だつた。私はだまつて目を閉じて居た。

しばらくして女中が来ると、玲子さんはなにかを命じる。私の体は机から解かれて両方から女中につかまれ畳の上へ座らされると子さんは布片を持つて来て私のそばへ来ると

「今までは猿ぐつわも本当にはしなかつたけれど今からは本式よ。何故つて今まではまだそれ程声を立てなければならぬ様なこととはしていませんもの。でもこれからは咲子さんが今までに一度も味つたことがないバラダイスの味を教えて上げましょうね。その味はいくら咲子さんが、がまんしても声を上げずにはいられない味なのよ。小説家の咲子さんだつて、咲子さんの小説『吸血女流画家』だつて知らない味なのよ。だから、こうやつて布をおし込んでその上を、苦しいけれどこの布片でふたして置くさあどう？ 叫んでごらんさい？ 駄目でしょ。」

いくら首を振つたつてとれるものですか。まあそんなにあわて振らないでも、すぐ振らなければならなくなるのに、お馬鹿さんね。さあ今言つたポーズにして上げてちょうだい。太いのよ

り細い縄、そう、その方が良くきくわ。」

私の首にはその細い麻縄が輪になつて、引つけられ前へたれ下る。うしろで両腕をおさえる女中が私の体を抱き上げ中腰にする。

片方の女中が私の首から前へたれ下っている細縄を持つて、私の中腰にされている両股の間へ細縄を突込むと尻部へ出た縄をグウーと力一杯うしろでたぐる。私は股の間にくい込む縄の痛さにもがくのも構わず、両手首を固く縛り上げてしまうと、その余つた縄は天井のカモイへ引つけて縛つてしまった。

だから私が少しでも動けば、天井からの縄で両腕がうごく。両腕がうごけば、両股にくい込みその痛さに身をよじれば首がしまる。私はだから中腰で一寸も動けないわけ。玲子さんはその私の姿を見て

「さあ出来た。みんな良いから階下へ行つておいで。どう咲子さん面白いポーズでしょ。下手にもがくと、ここがさけてしまうかも知れないわ。さあ何時まで中腰でいられるか知ら？でも私そんな気の長いのは御免だわ。ねえ咲子さんこれなんだか知ってる？そうよ鳥の羽根よ。今ねこれで面白いことが始まるのよ。咲子さん貴女足の裏、くすぐられたことある？こうやつて——。」

うしろへ廻つた玲子さんはその羽根で私の足裏をこする。私は全身に電気でもかけられた様な、たまらない感覚に無意識に体をよじる。足を羽根から逃がれようとものがく、もがけば、股がやける様に

痛む。首が強くしまり始める。私は猿ぐつわの下で悲鳴を上げる。でも玲子さんの手の羽根は止まらず私のよじる足の裏を生きものの様に踊り狂う。

足の裏のくすぐつたさは両股の間で痛みになり、痛みは首の縄をしめて息苦しく、頭は割れ鐘を叩くような痛さを感じ呻きもだえる私を見て玲子さんはやつと羽根を止めて

「まあ汗ぐつしよりね。どう悲鳴を上げたでしょ。咲子さん素敵そのグツタリもがきつかれたポーズ。今の咲さんの姿が、本当は一番美しい咲子さんなのよ。女は苦しみもがく時が一番美しい時のよ。ここ痛む。こんなに赤くはれて——でも大丈夫よ。この薬をぬつておけばすぐ良くなるわ。良くなりすぎるかな」

私はベットへはこぼれて、黄色い油薬をベツタリ股の間へすり込まれてねかされた。次の朝になるまでに痛みは忘れたかの様になくなつて居た。

○ 月 ○ 日

第四日目になつた。

今朝おきると、急に玲子さんは庭へ出ると言い出した。もちろん私を連れてだが——。

私をおこした女中は日課のようにうしろ手に縛り御不浄へ連れて行き私の用を子供の様に抱いてすますと、すぐ庭へ連れ出した。裏



庭は山に囲まれた、広いけれど荒れたまゝであつた。

繁つた雑草の間の細道を通りすぎると、四囲の山の間にとんよりと静かだが無気味な程に物音一つせぬジメ／＼とした湿地に出た。濡れた落葉の上に置かれて、その冷たさをじかに私の肌を感じとると、どうしてか言うに言われない恐ろしさが私の胸に拡がった。私はこの時始めてなにか黒い影が私の体へ迫りつつ有ることを知つた。私は深入りしすぎた。本当に殺されてしまふのではないか知らず？

両手は固く縛られたままだ。手首を動かして見たが、ほどけないことは判り切つたことだ。私は玲子さんに泣いて帰して呉れとたのむ。許して呉れとたのむ。子さんは

「怖いのか？ まあ咲子さんふるえたりして。後悔したでしよ私の家へ来たの。でももう咲さんがいくら泣いてもわめいても、駄目よ。約束の一週間にはまだ三日間も有る。その間は貴女は私のものよ。さあ、此所は私と咲子さん以外には、だれも居ない二人だけの樂園なのよ」

玲子さんは私を抱え上げると、嫌がるのをひきずる様にして叢をかき分けて行く。そして竹林と雑木林に囲まれた凹地の草の上に私を座らせると、私のうしろ手の紐をほどいてくれた。

「さあ裸体になるのよ。嫌でも裸体になるのよ。さあなにをモジモジして居るの。早くなさらないと無理にでも裸体にするわよ」



私は必死に玲子さんの迫る手を逃れようとしたが雑草に足をとられ、つる草に体の自由を奪われて倒れた私は玲子さんの手で次々に脱がされて靴下と靴だけの姿で竹林の中へ引ずり込まれると用意して居たらしい麻縄で倒れたまま両手首を大の字に開らかされて竹の根にそれぞれ縛られてしまった。

玲子さんの手は靴下にかかる、私の太腿からずり下げて

「靴を脱いだ靴下だけの女つて魅力の有るものね。でも片方だけ素足なのも変つたポーズよ。まあ咲子さんの素足つて、なんて美しいんでしよう。外の光線で見ると毛穴の一つ一つがはつきり浮きぼりになつて。さあこの両足も動かないように、こうして別々に竹に縛つて——、さあこれで用意完了。そうそう、声はいくら出してても良いけれど舌をかまれたりしたら大変だから、この両手を縛つていた革紐を口へくわえてね。なあに、そんなに恐がらなくつても痛い目さす訳じゃなく。口を割らないと痛いわよ。ほらほら、しつかりかみしめてるのよ。さあ、では今日の主題を言つて上げる。女の裸体を責めるのに痛い目ばかりさすポーズでは誰でも出来るけれど、こうやつて責められ苦しむ表情なんて誰れにも画けないのよ。それはねー」

私は迫る玲子さんの責めにふるえる胸を上下させて待つ。しばらくして玲子さんの手の木片を私に近づけて

「これなんだか知つてる？ この長いのがミミズ、こつちがヒル」

私は不自由な口から悲鳴を上げて呻き、もがいた。突如、私の太腿のつけ根近くぬるりとした冷たい感触が私の体をちじみ上げさせた。そのぬるツとしたものはベタベタ私の太腿をはい上つて来た。私は腰をひねり胴をくねらせ、それを振りおとそうともがく。一匹おちればまた一匹と私の悲鳴は次第にうめき声に変わり出した頃、目を閉じた私の耳に

「もつと苦しむのよ。もつともつと——」

うわづつた玲子さんの声と同時に私は両方の乳房にチクリとした痛みを感じると、私はひるだ！ 思つた瞬間、目の前は真暗になると深い穴へ引ずり込まれるように気を失つて行つた。でも深い穴へ引ずり込まれながら、やつと楽になれたと言う安心感をいだきつつ——。

○ 月 ○ 日

私が目を覚めた時が何時間後なのか何日たつた後なのか知らなかつた。私はベルの音をきいて意識を取戻した。私の目に浮んだのは電燈の輝きであつた。そして次の間から玲子さんと別の女の声が聞えて来た。

「四日目に気を失つたまゝ今日までスヤスヤお休みなのよ」

「そりやあ先生が余り可愛がりになりすぎるからだわ。どんな方？ 先生、紹介して下さいな」

私はこんな姿を未知の人間、それも同性にみせなければならぬ恥しき嫌さで胸をちぎられる想いであつた。この時ほど私は玲子さんをにくく、うらめしく思つた時はない。口惜しさに私は気も狂いそうであつた。あの時一層殺されてしまつて居たらどんなにうれしかつたことかと思う。

そしてその知らない女が、モデルでありユリさんと言うこと。そしてその昔、この人もまた私と同様に責められながら幾度か気を失つてゐる間に、玲子さんなしではまづたく生きられない女になつてしまつた人だと言うことが判つた。

玲子お姉さまもう駄目、これ以上私には私の日記をうつす勇氣も元氣もありません。その日から七日目まで、モデルのユリさんと一緒に暮している間に、少しずつ私はユリさんに感化され始めていることに気がついていたのです。

それはあの時なの。私は裸体でアトリエの柱に麻縄やロープで額から首、胸、胴、腰、腿、脛、足首とグルグル巻きつけられるとお姉さまは

「これから面白いものを見せて上げますから目をつぶつちやあ駄目よ」

と言うと私の顔の上へ、パンソウこうをはり上脛が下りないように額から吊ると、下脛も同様に上へ行かぬように、頬から固くパン



ソウこうで吊り下げられ、私は目を閉じることも、まばたきすることとも出来ぬ姿で見せられたものは――

剥き玉子のようにされたユリさんの白い肉体が、まるで白いゴム風船の様に、折り曲げられ、おさえつけられ、お姉さまの素足で、顔も胸も下腹と所きらわずふみつけられ、叩かれ、そして乳房を腰を内股を足の裏へと、お姉さまの白い手がまるでリズムに乗って躍動するピアノリストの指の様に上下するのを嫌だなく見せられて私の胸に嫉妬とまでは行かないでも、それに似た感情がわき上つて来るのを、おさえることが出来なかつた自分を知つたのです。

玲子お姉さま。

忘れもしない七日目の夜明け、その前の晩から徹夜で、私もユリさんも責められたことを想い出します。

私の体にもユリさんの体にも全身に女中さんの手でワセリンをベツトリぬられたまま抱合つたような姿で縛られ私の両腕はユリさんの背中中、ユリさんの両腕は同じく私の背中中と結ばれると、立つたまままで背の高さも大体同じ位のユリさんの腰と私の腰はピッタリくつつけたまま胴から太腿までの間を、ガンヂガラメに縛り上げられ別のロープで中吊りにされた時でした。

私とユリさんのうしろに、女中さんが細い竹のムチを持つて立つと

「今日は最後の日ね。もうお別れまで数時間よ。今日の特別サービスに二人で充分楽しめば良いわ。そして、今して上げる猿ぐつわは――」

お姉さまが笑つて出したのは私のズロースとお姉さまのズロースそれを見せるとまずユリさんの口へ私のズロースを無難作におし込

んで上からタオルでふたし終ると、私の目の前にお姉さまのを出して両手でひろげて、

「咲子さん、私を忘れないように私の臭いをうんと味わって上げましょうね。この辺が丁度咲子さんの鼻口をふさぐように、こうして。どう私の体臭は？」

お姉さま、私の鼻と口へにはつた甘ずっぱいお姉さまの体臭は今いくら忘れようとしても忘れられない私なのです。

それから抱合つた私とユリさんの体は天井へ倒れない程度に引張り上げられると、女中さんが交互に二人のお尻をビシビシ叩くその度に、ワセリンをぬりこめられた二人の体は、もがく毎にすれ合い、のけぞる毎に胴から太腿までを縛つた縄の中でヌルヌルもみ合つて居た時、最初はお尻を叩く所のムチの痛さばかりを感じていた私はだんだんもがいて居る間に、私の乳房にすれ合うユリさんの豊満な乳房を知り、ユリさんの腰が叩かれる度にくねり曲り私の下腹にヌメヌメうごめくユリさんの丸い肥つた肌を感じると叩かれるムチの痛さを次第に忘れてしまつたのです。

私の頬に感じるユリさんの荒い鼻息と、私の口をふさぐお姉さまの体臭に私は酔つぱらつた様にブランブランゆれ動きながら、はじめて味わされた責められる楽しさ喜びを心の底まで思い知つたのでした。

玲子お姉さま。

こうして咲子は、お姉さまのお言葉通りに再度お便りしなければ居られなくなつた自分に、もういささかの後悔も致してはおりません。ただもう一度会つて上げると約束して下さる日を心から待つております。玲子お姉さま、御返事下さいます様に――

(終)



美少年の性夢

——一色慾異常青年の告白——

(第三部)

完結編

三村幾夫

〔前書〕

本誌七、八月号に掲載された僕の体験記を読んで下さった方々から多数のお手紙を頂きました。再びペンを執つて下手な文章を綴ろうとしたのであります。そしてその方々からのお手紙の中には「君は可哀そうな人だ。私はあの一部を読んで本当の事を云うとじれつたかった。何故君は積極的に幸福を掴みとろうとしなかったのか、私は君に似た経験を通じて持っている。だから総て私は友を得て幸福感を味っているが現在も或る意中の人物が近所に住んでいて

殆んど彼との交渉で満足を得ている。君も積極的な行動をとつて人生をもつと有意義に暮して下さい」とか、又或る方からは「早く幸福になる貴方の体験の続きが読んでみたい、是非書いてくれ」とのお便りを頂きました。そして此処に拙い文章乍ら第一部第二部に引続いて第三部を書いてみる勇氣を与えられたのでした。

僕はどうかして真実の友を得たい、そうして自分の本当の心の中を打ち明け、共に慰め合い励ましあいたい何時も願わぬ日とはなかつたのです。勿論僕にも友人はありますが僕の思っている様な意中の人物には中々出合いませんでした。そして仕事をしても寝ても起きてても淋しくて、殊に夕暮の陽が将に落ちようとする時等は胸がしめつけられるような淋しさが襲つてきてどうにも仕方がありませんでした。此の居ても立つてもいられないような淋しさは一体どこに原因しているのでしょうか、僕にもさつぱりわかりませんでした。しかし次第に気持がくすんでしまふ様になつてきたのは事実でした。

一度だけ、たつた一度だけでよいから結婚する迄に理想に描く美少年と一緒に同食して愛しあふ事が出来れば——という熱望は四六時中僕の頭から消え去ることはありませんでした。

或る日曜日の夕方、僕が外出をした留守中に数人の友達が次の休みには何処かへ遊びに行こうという相談にやつてきたのです。その友人達は此の春、演芸会で一緒に芝居をやつたことのある仲間で二人の女の子も混つていました。みんな僕よりか年下でしたので、僕の処へ相談にやつてきたらしいのです。八時半頃に帰つてきたところその中の一人が呼びに来たので一緒に出かけました。月夜の晩でした。浜辺の白砂の上では仲間の青年達が車座になつて賑やかに話の花を咲かせていました。

月の光が海面にきら／＼と反射してとても綺麗でした。結局数日後の二日続きの休みには六甲山へハイキングに行くことにきまりました。船の上に腰かけた一人がアコデオンで流行歌を弾きはじめましたので一同は声をはり上げて合唱し出しました。僕は皆と離れて松林の方へ足を進めますと、聞き慣れない東北なまりのする話し声が

がしました。松の樹の根本に腰を下しているのは見知つている少年でした。その少年は故郷で両親を亡くして高校を卒業するなり叔母の嫁ぎ先へ厄介になつてゐる清潔な感じの少し瘦せ気味できゆつと胸のくびれた胸の厚い健康的な美少年でした。

昨年の夏の晩、この海岸で彼と一緒に泳いでその裸体を見てから、大変魅力を感じてずっと親しくしてゐるのです。素直でなんでもよく話す気持のよい少年なのです。その少年が松の樹のかげで誰か年上の青年と囁きあつてゐるので、こちらから眺めるとまるで恋人同志のようです。

僕の顔に思わず血の気が上つてかつとしました。それは羞しさの為か、或は嫉妬のためであつたかは自分にもわかりませんでした。思わず「博ちゃん！」と呼んで彼等の前に飛び出しました。

相手の男は遠くから出稼ぎに来てゐる青年だつたのです。僕が出てゆくとその青年は、「じゃ、又ね」と言い残して、さつさうと松の間を抜けて下宿してゐる自分の家へ歸つてゆきました。

僕は彼の後姿を見送つてから博ちゃんの傍に相添つて腰を下しました。僕はその晩

冗舌になつて自分の過去のことを色々と話しました。彼は始終ニコ／＼と僕のことを聞いてくれました。そして自分の現在厄介になつてゐる叔母の家のことなどをしんみりとし乍ら語りました。さすがに両親を失つてゐることとて淋しそうです。僕は何度も自分の意中を告白したい衝動にかられましたが、清純は彼の眸にあうと、そういつた野心も氷のように溶け去つてしまふのです。強い心残りを惜しみつゝ、彼の孤独を慰めて別れました。

それから数日後、仲間と約束の休みの日がきましたが、その日は夜から朝にかけて激しい雨で、とても止みそうにもありませんでしたのでハイキングも自然中止になつてしまいました。僕は別にこれといった予定もなかつたので、風食を済ましてから映画でも見ようかと思つてぶらりと外へ出ました。此の日が僕の一生に始めて大きな変動を与えるきつかけになつた日であるということを神ならぬ身の知る由もありませんでした。

町へ出る迄に小学校時代の友人の家があるのに気がつき立ち寄りしました。彼は小さい時から何となく女性的な匂のする大人しい

青年でした。仲のよい友達といった者もなく滅多に僕達とも話し合ったり、遊びに行ったりするようなことはなかつたのです。

幸い彼は二階で一人で寝ころんで講談本を読んでいた。僕が言葉をかけると、洋傘を逆さに玄関の隅へおいて手をとらなばかりにして迎えてくれました。僕が足が汚れているのだが、と言うと、自分で雑巾を持ってきて拭いてくれました。僕は彼ととり立てゝ親しいという仲でもないのに、何んだが擦つたい気持でしたが悪い気持でもありませんでした。

彼は母親の生家である村の子供達と遊ぶのが楽しみだと語りました。その点僕も叔父の家のある村の少年達とよく遊んだ事があるのに、その事を打明けようかと思いましたが、いざとなればその勇気が湧いてきませんでした。現在の彼の心境や気性はどんなであらうかと、それとなく話をしながら観察してみました。小さい時から女性的な言葉遣いは直つていませんでしたが体格は男性的に肩幅も広く筋骨も逞しく発達しておりました。結局要領を得た話は何にもせず彼の家を辞しました。

映画を見終つて映画館を出ようとする

僕の隣に今迄坐つていた十五六位の瘦せ方のきりつとした眉に奥深そうな黒い瞳の少年も僕に先立つて表へ出ました。外はすっかり雨が上つて濡れた舗道の上にキラ／＼と電燈の灯が映えていました。外の明るさの中で見ると、子供／＼とした無邪気な浅黒い顔にはニキビがぶつぶつと数える程出ています。僕は彼の瘦形の少年にすつかり魅力を感じて、彼の後をつけて思わずついて歩き出してしまいました。表通りの明るい道を暫くゆくと、すいと横丁の暗がりの中へ姿を消してしまいましたので、見失つたと思つて小走りに追いかけて横丁の角まで行くと、彼は薄暗い片側町の中程を歩いていてるところでした。露路の奥を半丁程行つて彼は自分の家らしいシモタ屋の格子戸を開けました。

彼は入りしなに、チラリと顧りました。その時殆んど彼の背中に触れる迄近づいていた僕との視線が街燈の灯りの中で火花を散らして一瞬からみあいました。僕は狼狽して視線をそらすと、そ／＼と何気なく彼の家の前を立ち過ぎました。その露路の曲り角で立ち止つて横目で見ると彼はジツと僕の立ち去る後姿を見ていました。

僕は思わず太い溜息が出ました。こんな少年と仲良くなれたらどんなに嬉しいだろう。と思いましたが、とても後へ戻る勇氣などありませんでした。後髪を引かれる氣持をふりきつて露路の角を曲つてしまつたのです。あとで、余り慌てたための彼の家の表札を見ないで来たのに氣づいて大変惜しいことをしたと後悔しました。

横丁をぐるりと一周りして元の表通りへ出て書店の前で立ち止まりました。螢光燈の下に煙草の店を出してそこにおバアさんが一人店番しているきりの小さな本屋なのですが、のそくと、一人の眼鏡をかけた青年（といつても僕と比べると大分年輩のようでした）が奇譚クラブの七月号を手にとっているのです。僕はドキリとしました。僕は何気なく雑誌を物色している風をしてその青年の隣りに立ち寄りました。彼は代金を払うとその雑誌を小腋に抱えて外へ出ました。

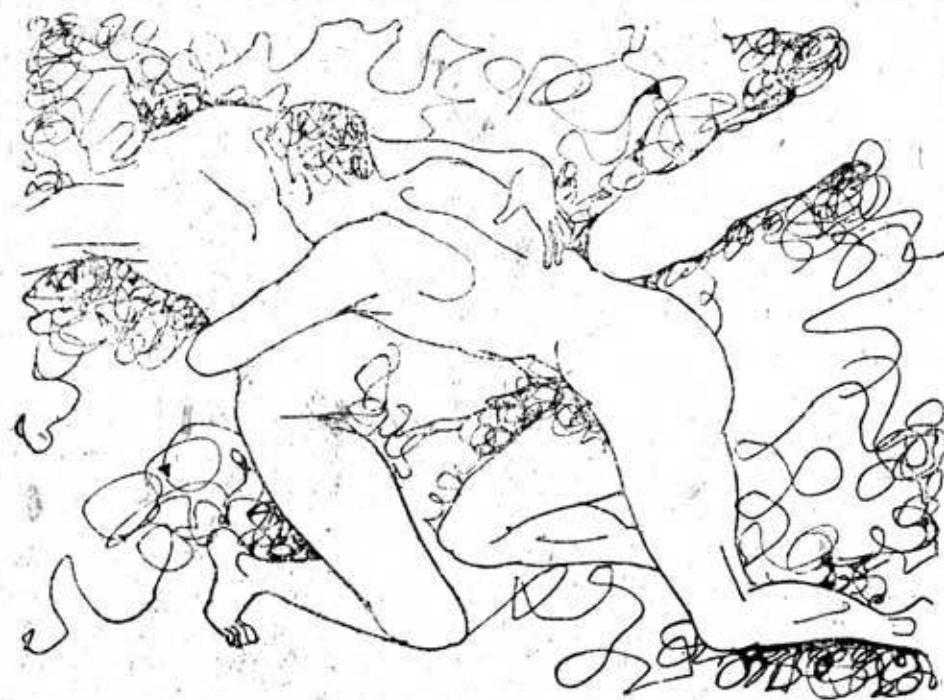
僕は何んだか、その青年が見知らぬ者の様に思えず後をつけてその書店を出ました。十分ばかり歩いてその青年は省線の神戸駅の待合室に入つて雑誌を読み始めました。背が高く優れそうな顔立ちでした。僕は

隣へ腰を下しました。肩越しにのぞくと、僕の書いた「夢性の美少年」を読んでいるのです。もう午後十時を過ぎていましたので、あたりにはマバタに人が腰をかけているばかりです。僕は思わずその青年に声を掛けてしまいました。

「僕もその雑誌をよく読んでますけど、実は僕が書いたんです。その雑誌にある最後の体験記……。」

余り不意だったので彼はびっくりして顔を見上げました。「え、ッ？」と目を丸くして「あんたが、三村さん？」

「え、そうです——」
「いやあ、そうですか自分も実は友人から一寸此の雑誌を借りておその名前を見て驚いちゃったんですよ。三村君という大変仲のよかつた友人が居てね、可哀そうに戦死したらしいんですが、その人も



此の文章に出てくる人物と全く同一の気性の人だったから……若しやと思つて、編集部へ早速手紙を出してあなたの所へ転送して貰うよう御願いしたのです。もう一度よく読み返してみたくて、今この雑誌を買ってきたところなんです」

「そ、そうですか、……僕、僕ね、じゃああんたも僕のような経験を——」

「そう、持つて居ります。よく似通つた経験を過去において。でも自分はもつと進展した交渉を続けてきました」

僕は思わず彼の顔をジツと見つめたきり、声が出ませんでした。あ、とうとうめぐり合つた同じ心の方に、……僕は何んだか胸がドキ／＼してきました此の時、高架を揺るがせて電車が入つてきました。彼は立ち上るとホームを電車の方へ近づきました。

「又、お便りします。ではさようなら、あのう、一度尋ねて来てくれませんか。自分は此処なんです」

彼は上り電車の扉から身体を半分出すと僕の手一枚の名刺を握らしてそのまゝ電車の轟音と共に去つてゆきました。電車が見えなくなつてから、僕は思い出したように名刺を見ました。住所は吹田市で多井満夫と書いてありました。眼が細くて肌のすべ／＼した顔、落ち着いた物の言い方、小柄なのは彼を年よりは若く見せているのですが、やはり僕よりは年上です。いくつ位かな？と僕は帰り途、そんな事ばかりを考えていました。

翌朝、彼からの手紙が転送されて私の手元へ入りました。化粧品店を経営している方だという事がわかりました。早速、昨夜の感激も混えて返事を書きました。それから毎日のように彼からは是非遊びに来いという熱心な速達の手紙が届きました。僕は彼と始めて逢つてから十日程経つた頃、決心して御伺いすることにしました。

そしてその夜が僕にとつて忘れる事の出来ない日になつてしまつたのです。前もつて連絡してあつたので多井さんは駅迄迎え

に来ていてくれました。今日は店の方は少し早仕舞にして迎えに来たのだとの事でした。

彼は果物やお菓子を出して歓待してくれました。僕は早い目に夕食をすましてから来たのですが、彼は僕に食べさすのだといつて握り寿司をとつてくれました。逢う迄はあれも話そう、これも尋ねようと思ひながら、いざ二人きりで向いあつてみると何から話していいやら、さてとなると一言も自分の方から言い出せないのです。多井さんはゆつくりとした口調で自分の過去を語り出しました。僕は二人きりでいるのが何となく気ずまりなので、黙り勝ちで聞き役に廻つていました。

食べ散らかした果物の皮や飲物の容器を片づけると彼は押入れから蒲団を出して敷きました。

「あんたも中へ入つて一緒に寝ましょう」

と言ひ乍ら裸になつてその中へもぐり込みました。僕は最初からお話だけして帰ろうと思つていたので家には泊るとは言つて来てないので、そう言いますと、

「別に泊らなくなつて、一緒に寝てもいいでしょう？」

と誘いました。僕にしても実はそれは口実であつて、本当は相手が自分よりも年輩であるのが何となく怖かつたのです。若し平常から夢に描く理想の美少年であれば、決してそんな気持も起らず、もつと愉しい気持が湧いたかも知れません。然し理想の少年でなくとも矢張り同性の裸体に対しては興味を持つて居りますので、多井さんの誘惑に対してはあながち不愉快でもなかつたのです。只何んとかなく恥しかつたのかも知れません。

それに相手から自分の裸体を見せてやろうという好意を受けたのは今が始めてなのですから——。僕は勇気を出してパンツ一枚になつて彼のもぐつてゐる蒲団をめくりました。色の白い彼に対して僕の方は少し浅黒いようでした。

「よい身体をしているね」

「でも、此の頃一寸やせまして……」

多井さんの生温い肌が僕の胸や太股に触れました。不安と羞恥で眼を閉じていました。多井さんは抱きしめて唇を持つてきました。僕は少しも口を開かず、ついと横を向いてしまいました。何だか、くちびるなんて嫌でしたから……。

「今夜はあんたに任せますよ。ハ、ハ、ハ、」
多井さんは静かに空ろな笑いを洩しました。……それから……どの位の時間が経つたでしょうか。僕はハツとして現実に返えろと一遍にイヤな気持になつてしまいました。彼はいろ／＼と僕を慰めてくれるのですが、冷えてゆく僕の身体は只淋しくなつてゆくばかりでした。

「僕は身体よりも、相手と始めは言葉を交し接吻をして抱きしめて今のようにするのが一番興奮を感じるのです」

彼はそういつて僕の身体を離しました。その夜は一睡もせず、翌朝ぼうとした頭をして帰途につきました。帰宅したのは昼食前でした。生れて初めての経験——それが強烈だつただけに、それから数日間には頭にその事がこびりついて離れませんでした。

あゝ、とう／＼僕は永年憧れていた望みを達することが出来たのです。しかし、幸福であるべき僕がむしろその行いを悔いてゐるのはどうした事でしょうか。それはやはり、僕の理想の友とする美少年の体ではなかつたからです。一度だけでいい、たつた一度だけでも理想の美少年の潔いのない

肉体を抱きしめたい。と思うと、現実の自分が淋しくなつて仕方がないのです。そして自然に涙が頬を濡らしてくるのです。多井さんがあの夜、話してくれた事を思い出しましたが、それを実行する勇氣はとも僕にはありません。只心の奥底にしまつておくより仕方がなかつたのです。

「三村さん、もつと積極的に行動しなさいそれはね、自分にも経験のある事です、必ず意中の人物は居りますよ。そして快く受入れてくれるでしょう。その子の親に知れればとても苦しくて、その罪のつぐないをどうする事も出来ませんとあなたは云われますが、そんな事は決して親に打明けること等しないで、自分だけの秘密にしておくものです。思春期の少年達の大部分が経験する人生の関門ではないでしょうか。やがて年頃になると異性にひかれ平凡な人生を送るようになるのです。現在自分の意中の相手だつた少年達も成人してちやんと一人前の男として結婚生活に入つていきます。氣を落さず相手を探してもつと愉快に、いや不自然なだけに尙更快速に幸な道を選んで下さい。必ず見つかります。理想の友は……。」

僕は彼のその言葉を今更の様に思い返えしていました。やがてその事も楽しく又やるせない思い出となつて月日は過ぎてゆきました。

或る日、僕の机の上にこんな手紙が転送されて来ていました。

——拝啓、突然お便りを差し上げる失礼をおゆるし下さい。小生貴下の体験記興味深く感銘をもつて拝読させて頂いたものと申せば、お察し願える事と思います。小生も過去において余りにも似通つたる貴下との経験に一驚し他人事とも想えずお便りいたしました。同じ悩みを持つ我々の様な方が如何に多い事か、僕もその悲しい一人なのです。互いに慰め合う機会を得ますれば此の上ない幸せと存じまして勇を得てペンを取りました(中略)どうか折返しし御返信頂けますならば幸甚に存じます。

宇津木雅彦

同じ道をゆく文の友

三村幾夫様

非常に美しい文字は流れるメロデイのように、そつと僕の氣持をぐみとつて、思はず溜息をつかせました。そのまゝ机に向つて返事のペンを走らせました。折返しし

その返事として彼の身の上が細々と書かれた手紙が訪れました。

——私は大阪の某百貨店に勤務する二十五歳の独身青年です。あなたの御書信、どんなに嬉しく読み返えました事か想像してみして下さいませ、月夜淋しく味気ない人生を宿命をのろつて暮して居りました僕、ようやく友を得まして文を交して行けると思ふと、とても嬉しいのです。それにつけても思い出すのは、僕のたつた一度だけの思い出、一生忘れることの出来ないあの日、生れて始めての幸福を味つた日が思い出されるのです。僕にもたつた一人の愛する友がいたのです。でも遠く離れた東京に住む友なのです。その美しい友とネオン輝く銀座を手をとりあい、愛の言葉を囁やき乍ら……ごめんなさい、こんな事を書いてしまつて、——。僕の写真を御送りします。

宇津木雅彦

静かにほゝえむ

三村幾夫様

彼の手紙は僕の心に暖かい慰めの触手をのべてくれました。彼は「禁色」の主人公悠一が大変好きで自分を悠一にあてはめて



誌 上 雑 感

小 田 利 美

「奇譚クラブ」が小型になつてから、良くなつたと云うのは一般の定評であり、読者通信の記事にもそれが如実に現われている。

実際読者の声は正直なものだし、読者の希望なり、興論も無視しては、そのなかから決して優秀な雑誌が生れるものではない。特に風俗雑誌にとつてそれが深く要求される。

「奇譚クラブ」が号を追つて良くなつてゆくのは、読者の要望を無視しない編集部の誠意と研究心の賜物だと思う。私に云わせれば、小型になつてから急に良くなつたのではなくて月毎に大きく進歩して来ているのである。此の雑誌を毎月愛読されている人なら私の此の言葉に頷かれることだと信じている。

現在、いわゆる風俗雑誌として、毎月出されている雑誌を一覧するに、単的に云つて、個性がなく、特徴が出ていない。それどころか或る一種の風俗雑誌が一寸売れはじめると

後に続いて我も我もと、其れの模倣雑誌が出現する。然しよくしたもので、そんな腑脱雑誌はたいいてい半年も経過しないうちに店頭から姿を消している。

「奇譚クラブ」は読者諸君の愛情と、編集スタッフの努力により、個性ある風俗雑誌の旗頭として躍進しつゝあることは嬉しい。

元来、性風俗の表現は、文章にしる、絵画にしる、下手をやると淫猥卑俗にのみ終始して、果ては嫌悪すら覚えるものだし、雑誌の場合は一層むつかしくなる。それを上手にマスターし優秀な風俗雑誌に育てゝ来ているのは、一に編集部の手腕に他ならない。

風俗雑誌にはしい内容の要点は、古典エロティクと近代エロティク記事の分量の平均にあるようだ。

本誌は此の点も先づ成功していると思う。小説、実話、文庫、告白記録等々、掲載上の

組合せに気になる程の無駄がないのは、読んでいて煩わしくない。

紙数の関係上、個々の作品について、言及することは避けるが、印象に残るもののみ、感ずるまゝを書いてみたい。

七、八月号の二回に載つた「夢性の美少年」は、文章の若さを真実の体験でカバーし作者以外に誰も書けない妖しく読者の心を魅了せずにはおかぬ特質を持つていて、近來の収穫であつた。

八月号の「不貞の倫理」文章が上手な水彩画を眺める様にさらりとしていて、しかも要領よくしつかり書けていると思つた。良人以外の男との性愛に対する妻の精神的苦しみと焦慮が完全に描かれている。

九月号の「曙草紙」桜姫伝記を若い読者は終りまで読まれただろうか？此の物語りはスリルと変化が多く、歌舞伎などにも度々上演される有名な長篇読物に無い古典の味を充分に備えていて興味深い。

最近の特集では九月号の「倒錯の告白」は面白い。人はたいいてい、此の告白集にある何れかに似た想い出や経験を持つてゐるものだから、身近に感じるわけだ。文章と共に竹中英二郎氏の口絵画集は傑作である。通俗的絵

画表現から離れた特異な画風は、怪奇感を持つており、かえつてニルティックで効果百パーセントだと思ふ。

古い雑誌フアンの中には、御存知の人が有るだろうか？もう二十幾年も前、と云えば昭和初年頃のことだが、特異な挿画を描いて人氣のあつた竹中英太郎氏のことを。姓名、画風、ともに余り似ているので私は先日編集部へ問合せおいた。氏の挿画は如何ようにフアンを虜にしたか、次の一例に依つても想像がつくことだろう。

私の中学生時代、同級生にTという男がいた。彼は遊廊の一人息子で、学校へ様々な男女性交写真を持参して、クラス中を持ち歩き観せては喜こんでいた。男女の陰部をことさらにはつきり写した、アクトイものだが、またそれだけに珍らしく、性に興味を抱きはじめた中学生を刺戟した。Tは家の商売柄、早くから男女愛慾の場面などはよく知つていたし、中学一年坊主の頃、もう年上の女郎と交つて童貞ではなかつた。その彼が、エロ写真などでは決して性的に興奮しないのに、竹中英太郎氏の挿画や口絵の女体責め場にひどく興奮して、それらの画を眺めながら、自瀆行為に耽溺していることを私に告白した。

「奇譚クラブ」の竹中英二朗氏描く口絵を觀て私はあの当時のことを想い出した。

雑誌の頁を開いた時、最初に目につくのは挿画であろう。そのことから考へて挿画はおろそかにしてはならない。力作の挿画が雑誌にたくさん載つていると、一層面白さが倍加する。本誌口絵は、大型の時と違つて、小型になつてから一色になつたが、私個人の意見として、此れは二色位にした方が読者の眼をたのしませる。口絵が挿画の延長の様な感じだと、風俗雑誌としての艶が薄れると同時に変化が尠なくなる。

毎号誌上で活躍してられる喜多玲子氏の画は、発表される枚数も多いだけに目立つので注意して觀てゐるが、女体の曲線に独特の味を持つていて發展性が觀られるのは嬉しい。画の感覚も柔軟だし、「奇譚クラブ」に良くマッチした画家だと思ふ。八月号に載つた同氏の半世記とも云うべき「悦虐の記録」は興味深く讀んだ。夫君の中絶した画業を、夫の死後妻の手で続けて行く、此れは平凡な女性では実行に移してゆけるものではない。「悦虐の記録」に流れている一連の心情を私は全面的に理解できる様な気がする。と云うのは、私の妻もまた玲子氏と同じ画家であり

形のうえで似通つた環境にあるためか。

性風俗画で大切なことは、画に品格ある色気がなくてはならない事だと思ふ。画家がその私生活で、性的に不自由、偏曲な立場であつたりすると、描き上げる作品に、技術は別として、色気が無い。風俗雑誌の挿画に色気を除外する事は、花の咲かない草木を觀賞している様なものでお話にならない。

今後、喜多玲子氏に望みたいことは、余計な愚言かも知れないが、現在と變つた性的刺戟を發見されることである。画に文章に誌上で散見する玲子氏のアブノーマルな嗜好を否定するわけではない。刺戟の方向をかえることに依つて、今よりもつと色気に満ちた傑作が生れると信ずるが故にである。

理窟めいて来たから、このへんで止める。一般読者と同じく私は「奇譚クラブ」を愛しているし、その成長を楽しく見守つて一人である。期待通り本誌は新時代の風俗雑誌として飛躍一路、次第に頭角をあらわして来ていることは嬉しい。

今回は画家の立場として、主に画に就て書いたが、近き機会に誌上でまたお目にかゝるのをたのしみにしている。(了)

(筆者出版美術家連盟會員)

少年矯正院体験記

一 収 嶽

私は当年二十六才の男子ですが、私が十八才の時、勿論その時は戦時中でしたが、今から考えますと想像もつかない軍閥の跋扈していた時代で、私は無実の罪によつて凄惨な仕置を彼等の手先達によつてやられた事がありますので誌上をかりてその当時の模様を発表させて頂きたいと思ひます。

然しこれは彼等に対する怨みをはらしたいとか、目下警察予備隊や海上保安隊が逆コースによつて再軍備の母胎になろうとしている事について反対しようと思つて書くものでもありません。只私の過去に経験しましたことをありのまゝ読んで頂いて読者の方々の御判断にまかせたいと思ひまん。

当時私は或る植民地の工業学校の生徒でした。丁度その時、雑貨商を営んでいた父が商売の不振から店を閉じて、住んでいた町から十里ばかり離れた製材工場へ勤めることになったので私も前に通つていた工業学校より新しい学校へ転校しました。御承知のようにその頃は徴用令が盛んに出ていて十七八才の少年迄も一人残らず徴用されて工場へ送られていましたが、とにかく五体の揃つた健康な者が遊んでいるという事は許されない時代でした。

私が転校して新しい学校へ通つている時、私にも徴用令が来てしまつたのです。それは前の学校の書類提出の手違いから、私が遊んでいるような恰好になつていた為でした。その時、直ぐ手続きをすればよかつたのですが現に新しい学校の生徒として勉強しているのだから差支えないだらうと思つて、ついで放つておいてしまつたのです。というのも深い事情も知らず何かの間違いだらうという軽い気持と、丁度父も新しい職業についたばかりで何かと忙しく私の身上についても十分考へる余猶がなかつたからです。

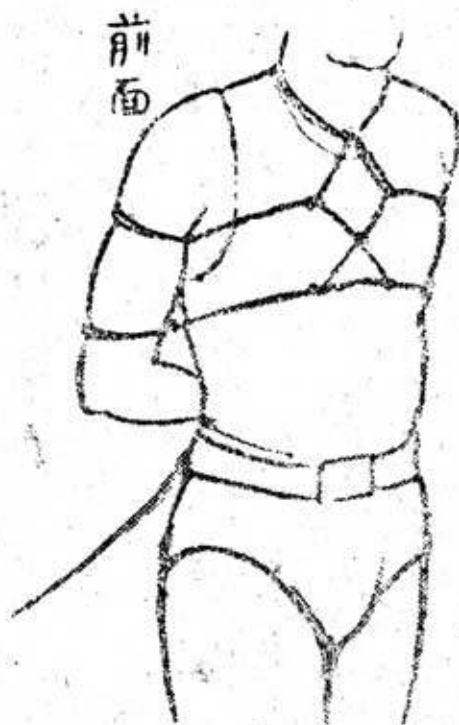
六月の中頃、学校から帰つた所、憲兵隊から呼出しの葉書が来ているというので何事だろうと思つて出頭して見ますと（迂闊な話ですがその時は徴用令の事等は忘れてしまつていました）、徴用令を拒否した事で、国家総動員法違反という罪名のもとにそのまゝ留置場へ放り込まれてしまいました。何が何んだかわかりませんでした。生れて始めて、しかも、学校から帰つてきて何の気なしに参考人位かというつもりで出頭してきて、そのまゝ突然留置場へ入れられてしまつたものから、その晩は食事も咽喉へ通らず、一眠りも出来ませんでした。

その翌日、両親も心配して駆けつけてくれましたが、どうすることも出来ず、三日目に少年審判所へ送られました。こゝ迄は憲兵上等兵が付き添っているだけで別に何もされなかつたのですが、送つて来られた審判所では同じ罪名のもとに十数名の少年が既に集められていました。やがて私の順番がきて呼出されたので、その係官の

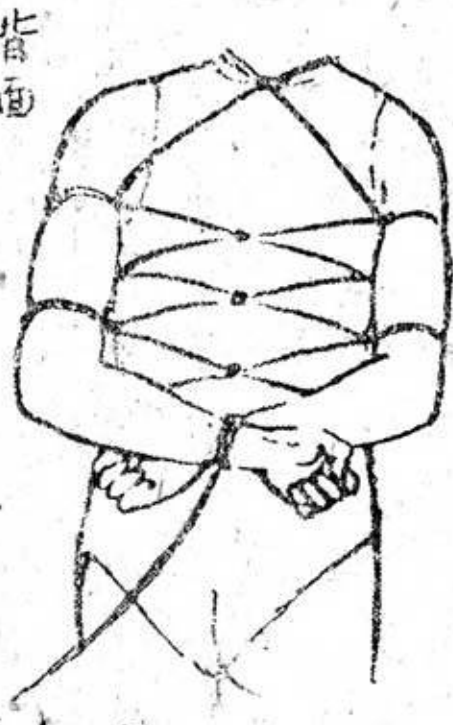
前に極力辨解しましたが如何に頼んでも訊き入れられず、精神を叩き直してやると矯正院行きを申し渡されました。矯正院とは少年刑務所と同じですが、当時は総動員法違反の少年のみを収容していたようで刑期は不定なものでした。

矯正院へ護送されるため早速一室へ連れて行かれました。そこには私を入れて十名、同じ運命の少年が恐れ慄きながら佇んでい

た。そこで一同全裸体になることを命ぜられた。今迄着ていた衣類は全部とられてしまひました。一応形式的な医師の診断の後、赤土色のランニングシャツとパンツを着せられました。赤土色というのは囚衣の色なのです。そして一列に並ばせられ前の者から次々と捕縄をかけられました。他の少年達が捕縄をかけ



前面



背面

られるのを、出来るだけ見ない風をしておりましたが、無理に眼に映じてきたその光景に私は軽い脳貧血を起してフラフラと倒れそうになりました。他の少年も一様に蒼白顔色をしているのです。遂に私の番がきました。後手にされ右手首を下に左首を上重ねて、上から捕縄で縛られ、そしてその縄尻を首へ釣られ、二の腕を縛りつけられた時は泣いて泣いて仕方がありませんでした。全くな

さけない浅ましい姿です。

やがて二列に数珠つなぎにされ、十名共全部深編笠をかぶせられ、矯正院へ護送されました。途中列車にも乗つたのですが、異様な姿の我々をじろく／＼とみんなが見るので、顔を下げてうつむいていました。恥しさのため着ている赤土色の囚衣よりも赤い顔になつていました。矯正院に到着すると、全部一緒に入浴させられ、身体中の毛という毛は、すつかり剃つたように刈り取られ、受刑番号を胸部と背部につけられ、院長の説教の後、独房へ入れられました。これでいよいよ囚人になつたのです。独房はすべてコンクリート造りで一間半の広さでした。手の届かない高さには小さな窓があり、その小さな窓には鉄格子が縦横にはめられて、入口は鉄製の扉で重々しく閉ざされていました。隅には便器が一個あるつきりで他には薬切れ一つありませんでした。そしてその翌日から恐ろしい日課に入つたのです。

その矯正院のあつた植民地は戦争が激しくなると共に衣類は益々不足して、日本内地から船がめつたに來ませんので、氣候が一年は夏のように暑いせいもあつて、囚人の服装で土赤色のランニングシャツとパンツが普通中

作業の時は赤土色の六尺褌だけのまゝでした。日課は一人々々に一日分の作業を割当て、それをその日の夜八時迄にやり終えなければ減食の罰を受けるのです。一週間を通じて予定の作業量に達しない時には、減食、答刑、屏禁という罰を与えられるのです。作業量も未発育の少年としては非常に多く、主として土木作業で一寸でも休もうものなら、先に金具のついた藤の笥で叩かれ、結局減食とするのですから、全く生地獄の奴隷でした。

答刑は一週間の作業成績が悪く、看守の受けが悪ければ、五十、百、百五十の三段階に分けて各々その軽重に応じて行われました。その方法は受刑者を禪一つにして大の字にうつぶせに図のように台上に縛りつけ、竹刀で背骨以外の肉体を叩くのです。私がこれを受けた時は主として尻をなぐられました。

屏禁というのは、作業を拒んだり、又逃走を企てたりした者に与えるもので最も重い罰です。禪一つで後手に縛り上げ暗室に放り込んでおくのです。最大は一週間ですが、三日もすれば縛られた手が腫れ上り、その苦しさは言語に絶したものなのです。然し屏禁といつても二通りあつて、重いものは真暗ですが軽いものは薄明りがさす程度で捕縄も申訳程

度でした。

矯正院へ入れられてからは、私も最初は恐怖の余り一カ月位は夢中、一生懸命に働きましたが、落着いて考えてみると、こゝへ入れられた理由が余りにも馬鹿々々しくて、つい仕事を怠るようになりました。そして、とうとう私も最初の答刑を受けることになってしまいました。土曜日の作業後の成績発表の際何号と何号は答刑と申し渡されるのですが、その時は前もつて看守が背後に来ていてその場で直ぐ縛り上げてしまします。そして一列に並ばせられ、他の受刑者の前で台上に縛りつけられ看守が一つ二つと数を数えながらなぐりつけるのです。前の者がなぐられている時は一番嫌で、答が肉体を打つ音と、受刑者の呻めき声を聞くと気も遠くなるようです。



赤土色はシャツ
白で受刑番号がぬいてある

いよいよ私の番になると、後手が解かれて台上に大の字に縛りつけられます。この時は身体中の力も抜けきつてぐつたりとなり、心はぼろと宙をういているようです。やがてピシツという音と共に尻に焼火箸を当てられたような痛みを感じると同時に、身体がびくつと飛び上るような気がします。十一二十位迄

はとても痛く腋の下あたりから脂汗がにじみ出ますが、それから先は痺れてしまつて、反射的に呻めき声が出るだけで、外から見ているとその惨酷さは目を掩うのですが、本人にとつては何が何んだかわかりません。しかし必ず小便は洩らすようです。そして次第に目の前が真暗になつて百を数える声を聞いた時は気を失つていました。

一週間位は身体中がとても痛く、一二日は

大変苦しいですが、それでも作業にはほとんどんざりたてられます。それが鈍痛に変わってくるようになります、身体を動かす時に感ずる痛さが却つて快く感ずる時もあります。最初答刑を愛けた時は、もう二度と看守に逆らつたり作業を怠けたりはすまいと思うのですが、十日も経てば忘れてしまつて、看守に喰つてかゝつたりするようになります。答刑を受けて二十日ばかりして、私が作業中に釘を拾つて持つていたのを発見され、逃走の計画、準備をしたというので屏禁を命ぜられました。禪一本だけの姿を両手を後手に縛り上げられ暗室の中へ入れられました。

二日目の事です。何か大量の屏禁刑があつたとかで今一人の受刑者が私の房へ入れられてきました。彼は私より罪が軽く二日の刑期で捕縄も申訳的だつたのですぐ取つてしまひ二日の間いろ／＼と私の世話をしてくれたのです。それはよかつたのですが、私がかんじがらめに高手小手で自由がきかないのをよいことにして小便をさせてくれた時、私のペニスを弄んだのです。この時にエレクトの状態に入つてしまつたのですが、不思議に今迄腕や首等に喰い込んでいた捕縄が実に快く、天にも昇るような心持だつたのです。勿論それ

が終つてしまうと、前より捕縄の痛さが苦しく感じましたが。――

これ以来、彼がいる間は度々自分より頼んで貰いましたが、彼が出ていつてからは（私は五日間の屏禁でした）あとの二日間は一人でうつぶせに寝て快感をむさぼるようになりました。

それから、捕縄をかけられると興奮状態になるようになってしまひ、又苦でなぐられると今迄痛いばかりだつたのが、痛いながらも何んとも云えない快さが伴うようになり、自分から進んで答を受けたこともあります。

このようにして此の矯正院に三カ月居りましたが、どうやら両親や学校当局が奔走して下さつた結果、出して貰えるようになりました。再び学校へ通うようになりましたが、体操の時ランニングシャツを着ると興奮状態になり困りました。その後も捕縄をかけられる味が忘れられずお恥しい、弟ですが一月の中で数度は自分で自分の身体を縛つて Onanie をするようになりました。一時はそれが昂じ平常の生活にも支障する位になり、自分でもこれはいけないと大変悩みましたが最近では一月の中二度ばかりは、捕縄の味を再現常していますが、その他の日は平の生活とし

ております。

こんな文章を書いたというのも広い世の中には私と同じような境遇の人もおられることだろうと思つて御交際願ひたい為認めた次第です。

◎読者の便り◎

十月号の辻村隆氏の夫婦愛と緊縛の考察を感銘深く読みました。小生の妻も又陰陽の差はありますが小生と同じ心理の持主なので小生は本年三十才、妻十八才、体重は何れも十三貫五百両、身長之差は二寸、小生の場合縛り方は次の数種に限つてゐるのです。①両手を背中合せて綿繩を手首から掛けて乳の上へ一廻り下へ二廻りして後手で縛る。②後手を低く腰背部に廻し胴のくびれに繩を巻く、尙姿態は全裸、赤又は桃色の腰巻の儘或は長襦袢の儘、猿轡はかませる時もあります。脚は縛りますが尋常の縛り方ではありません。――中略――器具は、木馬、椅子特に籐張りで真中を切り裂く井桁の三種で小道具としては灌腸器、大筆、豆ランプ、糊、クリム、微温湯等です。妻の肉体を害わず夫婦共に楽しむ方法は現在の処満足してゐますが、私達夫婦の生活に参考となる事がありましたら御指導下さい。

（堺市 T・N 生）

桃色の地獄



身体のうち、とくに衣服で被い覆された部分を眺めて快感をかんじる傾向を、精神病学者は瞠視慾 (Schautrieb) と呼んでおります。この心理は、精神病患者だけがもっているのではなく、異常者は云うに及ばず、一般人がひ

としく心のうちに秘めているのです。ただ異常者や、精神病患者とちがうところは、精神の操作によつて適当にこれを処理しているの、社会良識の枠を破ることがないという点にあるのです。処理というのは、禁圧ではありません。社会的に害毒を流さぬ仕方で発散させることを意味します。

—

からだのうち、とくに衣服で被い覆された部分を眺めて快感を感じる傾向は私の極く幼いときからありました

京都の近郊にある小さな城下町で、代々酒屋を営んでいる私の家には奉公人が多く、下男下女専用の便所は、べつに二つも三つもありませんでした。この便所は、廊下ずたいにあるのではなく、下駄ばきでいく裏便所で、大便所にだけ、かたちばかりの杉の板戸がついていました。

私たち家族が使用する廁かわやは、疊敷きの、ちよつとした床の間もついているという、武家屋敷の名ごりをとどめたなかなか趣向の凝つたものですが、この下男下女専用の便所は、ずいぶん粗末な建つけで、杉の板戸には、至るところに節穴や隙間があつて下女が用便している、と、丁稚がよく覗いたものでした。

しかし、それよりもこの杉の板戸は、踏台より少し上についていましたので、そのあいだに、一寸ほどの隙間が出来ていました。便所の前にしやがむと、床と戸の隙間から、用便中の露出された部分が眺められるのでした。私の子供の頃、便所の中に誰か入つておりさえすれば、その前にしやがんで、床と戸のあいだから、覗くのがたいへん好きでした。それは、日頃衣服で被い覆された部分が、眺められるからでした。私は誰にも気づかれぬよう内緒で覗きながら、子供である私が想像

も出来ないような、大人の世界の秘密にも接しました。私をはじめ、経血というものを見たのもそうだし、下女のおふみどんが、番頭か手代の誰かに孕まされて、罪の子を流産したときのおびたしい血液を見たのもそのときでした。

あの無邪気な年ごろの私が、どうして便所のぞきなどという下品なまねをしたかと云えば、それは丁稚や誰かが覗いているのを見たからでもあります。私が生れると間もなく母と死別し、父は店のことや、妾宅通いで忙しく祖母はありましたけれど、何しろ私たちがきょうだいは一ダースもあつて、とても手が届きかねるので、万事女中まかせになつていたのでした。

この下女たちの雰囲気は非常に猥褻で、私はいろいろ悪い遊びを教えられ、下男の誰彼と暗い酒倉の中へ入つて、いたずらもされていました。私はもうその年ごろから、あの方面のことに非常な興味をもつようになつていたのでした。私の監視慾は、すでにこの時分からはじまつているのです。

便所が使用中であるかどうかは、便所の前に脱ぎ捨てた下駄を見れば、いま誰が用便中であるかはすぐわかりますし、それに私の遊

び場所は、ほとんども便所の前に限定されてしまつたので、下女のひとりが大便所に入るのを見ると、私は足音をしのばせ、そつと、その前にしゃがむのが常でした。

私は風呂場のぞきをしたこともあり、下女のよく太つた真白いからだや、盛りあがつた見事な乳房大きな尻と、風呂場の戸板から垣間覗いて胸をワクワクさせたことがあります。が、いまこの戸のあいだから窺う世界には、あのひらかれた肉体が、白い巨大な尻と、彼女たちの生理の深さを思わせる。黒く房々とした濃密な毛の部分のみが見えるのでした。丁稚がするように節穴から覗くのでは、局部がこんなによく見えないので私はいつもしゃがんで覗きました。大便や小便が出るときのありさまが如実に窺えるのでした。

私は下女ばかりでなく、男衆が用便するときも、しゃがんで覗きました。男の肉体は、女のように内部にあるのではなく、外に出ていて、ダラリと垂れさがり、そこには陰翳も神秘もありませんでしたけれど、私はそれを見るのがとても好きだつたのです。

旧家であり、もつとも封建的な老舗である私の家は、奉公人を酷使することがひどく、殊に祖母は口やかましく、母が生きていた頃

から、万事家政のきりもりをしていました。祖母は口汚なく奉公人をののしりながら、牛馬のようにコキ使うのでした。

そんなわけか、下女が便所へ入るのは長くあながち、用便のためばかりではないことを覗き見る私はよく知っていました。用を足し終えても、容易に腰をあげようとはせず、ゆつくりひと休みして、ついには遊んでいくのでした。息気に満ちている便所に、ながいことうずくまつて自らたわむれているのを、私は幾度も隙間から覗きました。それは下女のおしなどんも、おふみどんも、おハマどんもいかなる生理的要求からか、そこで長いこと、不思議な指の愛撫がつけられるのでした。

二

便所覗きも度重なるうちに、遂に祖母に発見されるところとなり、私は厳格な祖母からまるで乳くりでもしたかのように、コッピドク叱咤され、一日中土蔵の中へ閉じこめられてしまいました。それがよほど身にこたえたと見え、便所覗きだけはふつゝり止めましたけれど、私の監視慾は、べつな方面へ興味を持つようになつたのです。

衣服で被い覆された部分を見ることをかたく禁じられた私は、せめていちばん下につける肌着類を見たい欲望に馳られ、下女が入浴の際、台所の隅に脱ぎ捨てていく衣類から、汚れた腰巻を見ることが興味をもつようになったのです。どの下女も汚ない腰巻で汗や肉体の深部からくる匂いでムツとし、排泄物のシミでもついているのを見ると、私は喚声をあげるのです。しかし、下女が入浴するのはしまい湯ですし、夜もおそく、私が腰巻を見たのは、ホシの二三度でした。肌着類を見たい欲望に駆られながらも、その機会は容易にありませんでした。

そのうちに、私は小学校へ入り、読み書きがひととおり出来、上級にすゝむにつれて、他人の日記とか、手紙類をはじめ、他人の持ち物をこつそり見ることに非常な興味を持ちはじめました。

私はきょうだいが一ダースもあり、長兄と末子の私とは、二十いくつも年令がちがつていました。このとき、私には性に眼醒めはじめた兄や姉をはじめ、長兄は熱烈な恋愛結婚をしていました。二階の一室が、兄夫婦の居室になっていました。

恋愛結婚だけに、兄夫婦の仲は睦まじく、

ふたりで一緒に入浴したりして、何かにつけて私の好奇心をそよめるのでした。ふたりはよく一緒に外出します。私はその隙をねらつて二階の兄夫婦の居室にしのびこむのでした。この部屋はもと客間で、私の家ではいちばん上等の部屋ですが、嫂の鏡台や、衣紋竿に掛けた派手なきものや、赤い座ぶとんでへんになまめき、私はタンスや机や鏡台の引き出しをこつそり開きながら、この部屋で夜営まれる秘密の手ざわりを嗅ぎつけようとしていました。

或る日、ふたりが外出したあと、私は例のように、二階にしのびこみ、あちこち物色していました。嫂はどちらかと云えば、だらしないほうで、部屋はいつも取り散らかし、無雑作にしていました。留守中私がしのびこんで、少々物の置き場所が変つていても気付かれる憂いはまづないようでした。

押入れの隅には、不精な嫂が、自分の洗濯物をかなり溜めているのでした。そこには何枚ものズロースがつゝこまれており、私はその汚れのひどいを見て、ビツクリしたりオカシくなつたり、安心したりするものでした。と云うのは、私もかなりズロースを汚すからです。私の洗濯は女中がしてくれますがたま

りヒドイので小言が出るくらいでした。私はそうして、一枚一枚ズロースの中を覗いたり、タンスや机の引き出しの底まで覗いているうち、この部屋で夜、いとなまれる秘密にも幾分触れることが出来ました。

私は不用意にも、タンスの底から枕絵を見つけたのでした。それはたぶん、嫂が嫁入道具として、こつそりタンスの中へ入れて持ってきたのだらうと思われまゝ。これをタンスへ入れて嫁に行くと、着物がふえるとか、可愛いがつてもらえるとかいう迷信があつて、この地方にはそういう昔の風習が残っているのです。

しかし、枕絵は他の場所からも難なく見つけることが出来ました。それはもつと強調された露骨なもので、うすい和紙とか、何やらえたいのしれぬゴム製品のようなもので、納得のいかぬまゝ、私は手にとつて眺め。大急ぎでもとどおりしまつておくのでした。

春画や春本の類は、兄夫婦の部屋だけではなく、ニキビの出来はじめた兄達の部屋から見つけることが出来ました。その頃、私は中学生の兄や、年ごろの姉が三人もあつて彼らの外出の際をうかがつて、こつそり部屋の中にしのびこみ、日記や手紙を見るのが無

上のたのしみとなっていました。

この兄は、いわゆる文学青年でして日記を
実にこくめいにつけており、思春期の性の苦
悩がおくめんもなく綴られていました。それ
は手淫と同性愛の、赤裸々な告白でした。私
はこの兄の部屋から、春画とともに、汚れた
サルマタも見ました。サルマタの中をのぞく
と、兄の性の苦悩を思わせる跡がいつばいつ
いていました。

女学生の姉にはよく手紙が来ていて、私は
その手紙をこつそり読むのが好きでした。女
学生好みの桃色の封筒で、女名前になつてい
ましたが、中は歴然たる男からのものでした
この秘密を知っているのは、私だけだったと
思います。その上、私はこの手紙によつて、
女学生の姉が、娘にとつていちばん大切なも
のを喪つてゐることを知つたのです。男の手
紙には、はじめて姉の肉体を得たよろこびが
深い感動をもつて綴られていました。

私たちきようだいは、皆、孤独癖がつよく
一部屋づつ占領して、そうした手紙や日記類
をはじめ、金とか菓子とかいうものまで、実
に巧妙に匿していました。そして、いつたい
に几帳面な性格でしたから、部屋はきれいに
整理されています。私がそうした隠匿物を盗

み見するとき、誰か来やすまいかと全身を
耳にして、胸をドキドキさせながら、秘密を
見る快感に浸るのでした。

この性癖は、私が小学校を卒えて、京都の
女学校の寄宿舎に入つたとき、十分に発揮し
ました。城下町には無論女学校はありませんが
たつた一つの官立学校をスべると、あとは技
芸学校ばかりで、止むなく私は京都の私立女
学校へ入つたのでした。

三

そのD女学院は、金持の子弟ばかり行くミ
ツシヨンスクールで、この女学校が全国的に
有名なのは、スポーツがさかんであることと
共に、自由で、とびきりハイカラで、不良学
生が多く、何か新聞種になるような事件を起
すのは、この女学校に限られているのでした
そんなわけで寄宿舎も当時としては、むつ
かしい規律に縛られることもなく、自由で、
外泊さえしなければ、たいていの事は許され
ていました。私が同性の肉体に興味をもつよ
うになつたのもこの寄宿舎生活からでした。

寄宿舎は一部屋に六人で、偶然室長の関屋
さんをはじめ、他の者も皆、運動部員でした
バスケットやバレーやテニスの選手で放課後

や日曜日、必ず練習がありました。

私はと云えば学課も嫌いな上に、身体が弱
いせいか、運動も好みませんでした。学校が
終つたあと、同室の者が練習に余念がないと
き、私はひとりポツネンと部屋のなかにいる
のでした。もともと私は孤独を好む上に、他
人の持ち物を見ることに無上の悦楽をかんじ
るといふ性癖の持ち主ですから、土曜日の午
後や、日曜日、皆が外出するときも、私はい
つもひとり寄宿舎に残っていました。

私の同室者は皆、運動の選手ですから、練
習や遊ぶことに忙しく、それにお金持のお嬢
さんときていますから、洗濯なぞしたことは
なく押し入れには洗濯物をいつばい溜めてい
るのでした。それらの汚れ物は、休暇ごとに
持つて飯つたり、ストックのない都合で、小
包にして家に送つたりするのでした。

日曜日は皆、映画や買い物やハイキングへ
と、外出します。しかしたのしかるべき少女
の日を、寄宿舎にひとり残つてゐる私にもべ
つな愉快があつたのです。私は皆が外出する
のを待つていました。

私は同室者の持ち物を、それは身の廻り品
や手紙や日記、それからおびたしい洗濯物
のなかからあのブローズのなかを覗くことが

孤独な寄宿舎生活の唯一のたのしみだったのです。私は人さえないなければ、他人の持ち物に触れることはヒンバンだったのですが、ついぞ発覚されたためしはなく、卒業するまで誰にも知られずにすんだのは、私が見るだけで決して盗まなかったからだだと思えます

或るとき、私は同室の友人の月謝と教科書と寄宿舎費の、かなり多額な費用の為替を、机の引き出しの底から見付けたことがあります。すが、決して盗みませんでしたし、またいろいろ他人の持ち物を秘密で眺めるうち、欲しいと思うこともしばしばでしたが、盗んだことはいちどもなく、私が見たことがわからぬように、そつと元通りにしておくのでした。

そのころ、思春期の私は、たゆることなき空想で綴りあげた性慾に苦しんでおりました。当時の女学校の寄宿舎の常として、同性愛が流行し、室長の関屋さんと野口さんが熱烈な同性愛だったのです。ふたりは一緒に寝るのでした。

消燈後皆が寝静まると、私の隣で寝ている野口さんのふとんのなかへ関屋さんがしのびこんでくるのを私は暗闇のなかで眼をいつぱいみひらき、耳を貼りつけていました。ふたりは肉体関係があることだけはたしかで、暗

闇のなかで眼と耳を貼りつけている私は、掛ぶとんのうごきと、ふたりの呼吸の荒くなつていくさまを知るのでした。私はいつか関屋さんのトランクのなかを開けたとき、ウキンナ・ソオセーヂを発見したことがあります。何故こんなところにウキンナ・ソオセーヂがまぎれこんでいるのか、そのトランクの中は運動選手で男性的な体軀の関屋さんの汚れ物でいっぱい詰っており、私は不審でならなかつたのですが、ふたりの前技がはげしくなつていくにつれて、或る夜、私は遂に理解することが出来たのです。

四

女学校を卒えると、私はすぐ親の決めた結婚をしました。相

手は氣心のわかつた従兄で私とは子供の頃から許嫁の間柄でした。私は従兄とは兄弟のように親しくしていましたが、べつに好きというわけではなく、ただ私

は性の解放を求めて結婚したのでした。しかし、この結婚は非常に不幸でした。みづから性の解放を求めて結婚したにもかゝらず何ということでしょう。これほど氣心のわかつた相手でありながら、良人は性的不能者だったのです。良人の肉体は柔く萎びて、



が出来なかつたのです。いわば私は処女のまま離婚したのでした。

封建的な私の実家は、いったん他家に嫁した娘を家に入れることを許さず、またこの小さな城下町は、隣近所が煩さく、それに私の家はすでに兄の代になつておりましたので、何かと気まづいことが多く、私は家人のすゝめで叔母の家に身を寄せたのです。

叔母は京都の祇園で小待合を営んでおりました。傷心の私は叔母の家の台所なぞ手伝つておりましたが、そのうちに気が晴れるだろうからとの叔母のすゝめで、客とも応待するようになりました。

私のすることは、ただあのことだけが目的でやつて来る客に、酒肴を運んだあと、蒲団を敷いた部屋へ通すことでした。その部屋でどんなことが行われるか、私は強い好奇心をもっていました。

二階の座敷は、梅の間と、松の間があり、そのあいだが蒲団部屋になっていました。私は叔母の隙をみては、足音をしのばせ、そつと蒲団部屋にしのびこんでは、襖のあいだから隣室をうかがうのでした。不能者であつた良人との暗い結婚生活から、ついに知ることの出来なかつた肉体の秘蔵を。

私が襖の隙から垣間見た世界には、電燈を赦々と点した寢床の上に、すつ裸の女が……

また或るときこの待合の常連である呉服屋の主人がどこから手に入れて来たのか、姪とおぼしき小娘と登樓したことがあります。私が隣室をうかがつたとき、小娘はまだ青い果実を思わせる自分の乳房を両手で押えたまま、寢床の上にしやがみこんでいました。ふと見ると洗濯したばかりの真白いシャツが血で汚されていました。

またあるときは、正常な交接ばかりではなく、加虐、被虐のアブノーマルな世界を、私は思わず呼吸を荒くしながら、襖越しに監視したのですが、遂にあの「祇園のパンパン殺し」の猟奇的殺人事件の現場を、この眼でつぶさに眺めるに到つたのです。

事件後、私はこの待合のお主将である叔母とともに、有力な証人として、警察の方からいろいろ尋問を受けましたが、殺害の現場に自分が立ち合つていたこと、犯人の面相について、もつとくわしい事実を知りながら、必要以上のことについては何も語りませんでした。このことが事件を長びかせていたのですが、私は云うまでもないことですが、自分のアブノーマルな監視慾を世間に曝したくあ

りませんでしたし、またこんな事件にかゝわりたくなかつたのです。

この「祇園のパンパン殺し」は、稀に見る残酷な猟奇的殺人事件として、都下の新聞がいつせいに報道し、事件もすでに解決しておりますし、くわしいことは申上げませんが、ただ私が隣室からうかがつた殺害現場と、死体に加えたかすかずの残忍な変態行為に就いてのみ申上げましょう。

五

昭和××年×年×日、二十四時頃、五十がらみの商人風の男と、一見パンパンとおぼしき女が登樓しました。座敷へ案内したのはお主将ですが、私は客の依頼で、あとからルーデサツクをお盆にのせて持つて上りました。

私が隣室の蒲団部屋にこつそりしのびこんだのは、何かととりこみがあつてお主婦が寝静つてからのことで、そのときにはもう何もかも終つていました。襖の隙から覗きこんだとき、赦々と点された電燈の下に女は素つ裸のままころがつており、頸には日本手拭が巻きつけられていました。しかし、私は女が死んでいるものとは思つていませんでした。私

は今まで、こうした加虐的変態行為をたびたび覗いているからです。

私が見ている前で、男はさらに手拭を締めつけました。しかし、女はひくい呻き声も洩らさず、ぐったりなっています。けれども、このときも尙私は女を死んだものと考えませんでした。私は随分ひどい加虐、被虐の世界を見ているからです。襖のわずかな隙間と、電燈の明暗の加減もあつて、ただ遊んでいるふうに思われました。

私がこれは大変なことだと、われにかえつたのは、男が女の両足をおもいきりひろげて下腹部に火箸を突つ込んで、真白いシャツがみるみる血でけがされていつてからです。私はそのむごたらしさに、思わず顔をそむけました。これはすぐ警察へ知らさねばと思つたのですが、強い好奇心と、かかる嗜虐的なものに対する本能的な執着、私の生れながらの睚眦慾が遂に最後まで叫び声一つたてず、現場の模様を逐一見終るに到つたのです。

私は呼吸をつめ、襖の隙間に眼を貼りつけていました。自分の心臓の鼓動が高鳴るようでした。

この殺人が計画的なものか、それとも偶発的に起つたものかはわかりませんが、男は持

戦塵懺悔録

田村義信

昭和十七年一月二日、比島の首都マニラが陥落するや、我が部隊は勇躍、遁走した米比軍を求めてコレヒドール及びバタン半島さして怒濤の進撃を続けた。我が部隊が完全にバタンを攻略したのは四月九日であつた。

忘れもしない四月十二日、硝煙まだおさまらぬ第一線から私は後続部隊への連絡係として部下二名と共に隊を離れた。生死の境を彷徨してきた私達にとつて、戦火に塗れながら尙生きていたというほつとする、氣持と、長い禁欲生活から来る堪え難い渴えが燃えさかつて、久方ぶりの自由の天地がうれしかった。こういう時が私達兵隊にとつて命の洗濯となるのである。

私達三人は本隊を離れると、心の中の喜びを声高な雑談に表し乍ら樹蔭の道を歩いて行つた。他の二人の兵隊は平常おとなしいむしろ氣がきかぬ位の男であつたが、私が「お前達二人、先に行け、俺は少し休ん

で行くから」と小川の傍で小休止した時、そう言うとき、氣をきかして貰つたとも思つたのか、「有難うございます」と礼を言つて二人の兵隊の姿は密林の樹の間にかくれてしまつた。

どうせ前に進撃してきた一本道だから途中で出会うだろう位に考えている中に、ついうと／＼としかけた時、人の氣配らしい物音に、兵隊でも帰つてきたのかと頭を上げてみると、一人の若い現地人の女が、大きな荷物を抱えて跣足でやつてくるのだ。戦火をさけて避難していたのが、戦争が終つたと思つて出てきたらしい。

唇が厚くて色は小豆色で、それが汗でヌ／＼と光っている。然し禁欲生活を続けてきたというのは恐ろしいもので、こんな真黒の土人に対しても、只若い女だといふだけで大それた野心を起したのだから驚く。今やならなければ、何時又こんな機会が来るかも知れぬ。いや、もう女の肌に触れる

参の兇器で女の下腹部を解剖したのです。私は生れてはじめて、熟れた小さな巴旦杏のような卵巣や、子宮の海綿様の組織や、フアロビ管や、膜でおおわれている内臓を見たのでした。

おびただしい血が、シーツを真紅で染め、畳の上や、男の寝床に飛び散っていました。それはまったく悪夢のような凄惨さでしたが私はわりあい冷静に、足音をしのばせ、すーと蒲団部屋を抜け出たのでした。

それから二時間ほどして、汽車に乗らねばならぬからと云つて、件の男はあたふたと帰つていきました。ああ、それはやはり悪夢ではなかつたと私は一瞬、この殺人犯人の顔を凝視しましたが、すぐ何喰わぬ顔で軽い冗談なぞ云いながら見送つたのです。いつまでたつても女が起きて来ないので、私が叔母であるお主将をうながして、現場に駆けつけたのは、もう一度あの凄惨な場面を見たかつたらでした。

此れは私の経験した中で最も鮮烈な印象を頭の奥底に残像させるものだったのです。

ことなしに明日にでも敵弾が命中してもがき死ななければならぬかも知れぬ。――

そういつた利那的な気持がまだ一隅に残つていた良心を麻痺させてしまつて、栗鼠のような素早やさで私の身体を路傍の木陰にかくさせた。女は丁度大きな荷物に邪魔されて私の行動には気がつかなかつた。私が彼女をやり過しておいて、後からぐつと抱きしめ右手を女の首に巻き、もがくのをずる／＼と引きずつて小川の傍の木陰へ運んでくるまでは――。

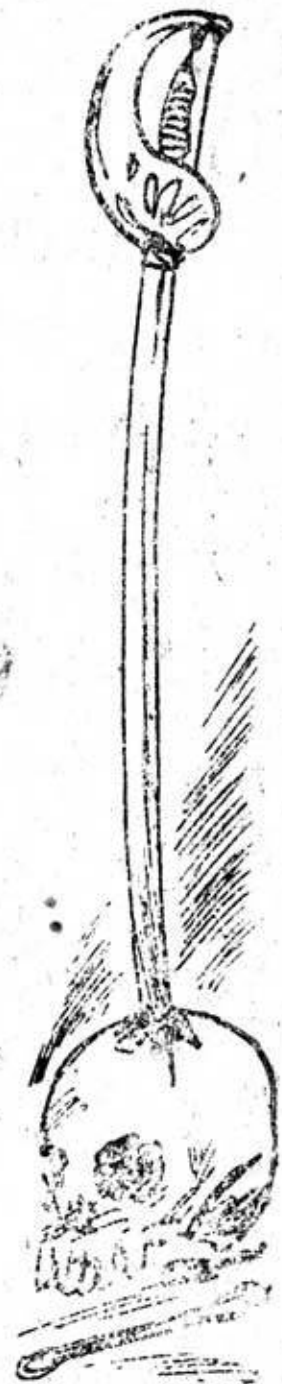
それから情欲の鬼となつた私……が二回……三回……四回……と、

女は驚いて泣いている。私もつい衝動にかられて悪いことをしてしまつたと後悔し何か金目の物でもやろうと、ズボンのポケットをまさぐつてみると、女は矢庭に立ち上るが早いか脱兎のように逃げてしまつた私は只ぼんやりと次第に小さくなつてゆく女の後姿を見送るばかりであつた。

それから一週間位して、私は自分の一物が激しい病毒に冒された事に気がついた。然し時すでに晩く、手の施しようもなく私は病兵として内地還送となり久留米陸軍病

院に入院させられた。私の尿道は一大手術が施され、繃帯をとつた時の私の驚き、まるで奇形児の鬼頭のようなのを見たときは手術の痕は大きな百足がはつたように赤く膨れ上つている。初めの中はまだ十分治りきらぬのだらうと慰めていたが、やがて退院、終戦となつても元の形にはならないとわかつた時の暗い気持――。

私は先ず花柳界の女に試みて見ました。ところがどうでしょう。その女の言う事には金は返えすから早く帰つてくれ、なので、私の気持はもう真暗となつてしまいました。如何に悪徳の報いとはいえ、これでは余りにも救われません。それからというもの、手の届く限りありとあらゆる女に試みてみましたけれど、誰一人として私を満足させて呉れる女はありませんでした。それで私はいつの頃からともなくクリニクスを染しむ悲しい男となつてしまつたのです。遂には女の×液を吸わない事には満足出来なくなつてしまいました。しかし今迄接した女の中で八割は私の此の行為を喜んで迎えてくれるのです。それがせめて私の私の慰めとなつています。



反戦論者の辯

三 富 浩 生

「国連軍の兵士が日本の女性に暴行したとかしないとか、新聞で騒ぎ立てた頃の事である。欧州での遊学から帰った許りのK君を、私は訪ねた。四方山話の末に、話題が戦争に触れた時、K君は彼方で知り合った友人の身の上話を、私に聞かせてくれた」

Qという其の青年は、未だ三十になるかならぬかであつた。Kとは、年齢的にも、又絵画の上でも話が合つたので、お互に質素なアパートのアトリエを訪ね合つた。画家の卵が棲んでいる其の街の、河の岸辺で写生中に、KとQと知り合つたのだ。

日本の再軍備を廻る動きが、絵だけに専念しているように見えたQの関心事の一つだつた。

——戦争は罪悪だよ。

Qは言うのだつた。

——戦争は人間を墮落させる。文明の破壊などは、その副産物だ。まず人間の墮落から始まる。そして人間の墮落に終る。

何時の間にか昂奮したQの瞳が恐ろしい程深く碧く澄んでいた。彼の顔には異様な苦痛が表現されているのだつた。Kは黙つてQの言葉を待った。

——僕の国は侵略者だつた。と言われている。然し僕達は、祖国の光輝の為に銃を執らねばならないのだつた。それは批判ではなく絶対だつたのだ。その為に僕達は生れて来たのだ。と錯覚する程の絶対なのだつた。僕は高等学校を了えた許りの、二十才。激しい訓練に耐え抜いた末、占領地の駐屯軍に配属された。

此の国の秋空は飽くまで明るく、野は豊熟に満ちていた。僕達は選ばれた民族の自覚と自負を持つていたし、祖国はそれを裏書きするように連戦連勝、破竹の進撃を続けていた。半年程経つてからだ。動揺が起り始めたのは……。要領の良い連中は巧く点を稼いで帰休を取る。帰れば青年団の娘達が彼を待つてゐる。優秀な肉体と、祖国に忠実な精神とを兼ね備えた男女が一同組出来上る。

彫りの深いQの顔に、暗く冷たい笑いが浮かんで直ぐ消えた。

——彼らは特別列車で温泉へ行き、そして祖国の為に子供を作るべく努力する。まるで種馬なのだね。それが祖国への奉仕のみとも言い切れないのは、あの短い然し

若い男女を酔わせてしまふ快楽を伴うからだ。若い僕は彼らを羨ましく思う時があつた。

南部の空に太陽が烈しい光線を放射し始めた頃には、僕は何時も苛立つて、寧ろ激烈な戦闘を空想し、希みさえするようになった。

僕が、夜の街角に女を探し求めなかつたのは、一に許婚のケティへの愛情と、忌むしい病気に罹つた時の不名誉を恐れる心とからだつたろう。

間もなく南部の或る港に、擾乱が起つた時僕は運命の配属地へ転属したのだ。

常夏の行楽地で富豪の別荘地帯だつた。

行つて三日目の朝だ。ぎら／＼と激しい日光の下を、僕は五人連れで歩いてゐた。

例によつて、此の国の女と、僕達の国の女との優劣を、僕は他愛無く喋つてゐた。

同年兵許りの気安さなのだ。知的というよりも理性的な冷艶さ、それが僕らの女達のものだとすれば、温かい、柔軟な豊かさが此の国の女達のものなのだ。それが色気というものだ。体だつて、ふつくらと肉が付き、しかもびち／＼と弾力がある。そんな

事を話し合つた。

「あゝあ、早く夜になればいいなあ」

一人が呻くように言つた。

あの、小柄で未だ贅も膨らみ切らないようなケティの体しか抱いた事のない僕も、何だか下腹の底で、何か／＼ごめいてゐるような気分だつた。

その時だ、坂路の角を曲つた僕達の眼の前に、なだらかな芝生のスロープが映つたそのスロープに一人の女が立つてゐたのだ。

白いブラウス、白いズボン、バラ色の頬

それらが一時に、眼に突き刺さるようだつた。

「うむ、悪くないなあ」

誰か／＼言つた時、一人がもう其の邸宅の内へと足を向けてゐた。

女は家の方へ向いて、我々からは斜めに見えた。日光を避けて手を額にかざしてゐるので、豊かな胸の盛り上がり、余りにも生々しい。それよりも其のズボンだ。ぴつちりとウエストを締め付けてゐるので、下腹の形が円く浮き出している。その円みが消え去る所に奥深い玄妙の谷間があり、

そして素直な二本の肢が分れてゐる……と
思うと、僕は激しい渴きに似た感情を覚えた。

女は最初、不思議そうな瞳を此方へ向けた。二十を余り出てはいまい若妻なのだ。母のように鮮かで、ぼつちやりした唇が旨そうだ。大輪の花のような頬が俄かに恐怖で引きつれる。女は家の方へ逃げ跳び出して来た男の腕に縋つた。

「止れ」

と叫びながら僕は、肩から下した自動小銃の狙いを、二人の胸に付ける真似をした。

僕が眼顔で皆に合図してから男に近付いた。男は女を抱いてゐた手を離して、のろのろと上げた。僕の他にもう一人残ると、あとの三人が女の腕を捉えた。はかない抵抗の為に女の体が扉に打つかり、その鈍い音が充満した女の肉体を感じさせる。あの音だ、音、と僕は心の中で呟いた。盛上つた乳房が、激しく揺れてゐるのが僕の視野に残つた。

Qは言葉を切つて

——主よ、我が罪を許し給え。

と呟いた後あとを続けた。

引ずるようにして、女は連れ去られた。

僕の脳裏には、応接室の長椅子か何かの上で仰向けに寝かされ、次第に着衣を剥ぎ取られて行く女の身悶えが、映画の一場面のような鮮かさで映った。「ひいゝ」という悲鳴。「あなた……助けて……」凄絶な人間の咽喉から出る声、というよりも、女の体の奥深くから絞り出したような叫びだった。

その時、男のまるで意識を失つたように虚ろな表情に何か閃いた。然し次の瞬間いきなり走り出そうとした男の背中へ、同僚の小銃が火を噴いた。男は前にのめり、芝生に蛙のような足掻きを見せた。その背に見る見る赤い渦紋が拡がつて行き、もう動かなかつた。「エチエンヌ……」と云つたのが男の最期の呻きだった。

僕達二人は、男が死んでいる事を確かめてから家の中へ入った。

「ひいッ」

何かを耐えるような呻きが其の室の扉から洩れ、銃声に驚いて遠のいていた女の意

識が、又戻らされたものらしかつた。

「やつたのか？」

一人が僕の顔を見た。僕は黙つて背き、無言で扉を見つめた。やつた当人は横を向いて知らぬ振りであつた。

室内の軽い呻きが未だ切れ切れに続いている中に一人の兵隊が眼をぎらりと光らせて出て来た。間の悪そうな然し満ち足りた顔である。代りが入つて行つた。そして又すゝり泣きの唇が押し塞がれ、軽い呻き……やがて順番が廻つて来た時、僕は生唾を呑み下して扉の把手を握りしめた。

長椅子の上に、女は一条も身に付けてはいなかつた。というより一条残らず剥ぎ取られていた。ブラウスが引き裂かれて落ちズボンの釦は飛び散っている。パンテースは裏返しになつて丸められている。女は僕の方を振り向きもせず、長椅子の上で横わつていた。肉付きの良い裸体だった。

みずくしい唇は吸い続けられた為に、やや腫れぼつたく見え、眼の縁にはほんの一瞬間足らずの間に、暗い隈が入つていた下腹から太腿の付け根へかけて一部分が無惨に血に滲んでいる。乳房には青い或いは

紫色のあざが幾つもあつた。

僕は、皆に負けてはならぬような奇妙な競争心を感じた。夢中でズボンのベルトを外すと、いきなり女のなだらかな脇腹へ打ち付けた。びしッと冴えた音がして手にびくんと肉の弾みが返つて来た。忽ち女は体を反らして苦しむ。此の音だ。此の音、と心の中で呟きながら僕は又ベルトを振つた。女は無言で体を反らす。暗赤色の乳頭を持つた乳房が張切つてつんと突出る。うねる女体の線が此の上もなく僕を刺激し昂奮させた。身悶える度に、股の間の谷間が見え隠れする。僕は耐えようが無くなり、クリーム色の肌に幾筋か赤紫の条痕が走つた時、……女の唇は熱ばんでいた。

僕が立上つた時、女の腹の真中で、臍だけが奇妙な程無表情だった。その無表情が僕の満足感を傷つける。銃が手許にあつたら、僕はそこへ弾を射ち込んでいたかも知れない程苛々していた。然し銃は同僚に預けてある。何故か、僕は卓上に有つた花瓶から一本の赤い花を抜き取ると、その花片をむしつて、身動き一つせず眼を閉じている女の滑らかな腹の上に撒いたそれは血

のように赤く、五人の男の汗で濡れた腹の皮にべつたりと粘りついていていた。

日盛りの街を歩いて行く時、下腹の疼きはもう消え去っていたが、心は妙に暗く重く沈んで行つた。何故あの女を射ち殺さなかつたろう。それを僕は意味も無く繰返し考えていたのだつた。

Qがそこで話を切つた時、その淡々とした話ぶりが、その精密さの故に逆効果となつて、Kは背筋の冷えるのを覚えた。

——主よ、愚かなる者を憐れに給え。

Qは又低く呟き言葉を継いだ。

——僕は間も無く片足を失つた。此の国



のテロ団の為だ。僕は手榴弾の破片に足を

吹き千切られる痛みの中で、昏倒する最中に、あの女の体に残したベルトの跡をはつきり思出していた。除隊して間もなく祖国は荒廢し去り、ケティは銃器工場で爆死していた。僕は一枚の絵を一生かけて描く為に此の街へやつて来た。親父が何とか旨くやつてゐるからね。僕は死ぬ迄かゝつて描くんだ。虐殺と強姦の図をね。神々の見捨てるありとあらゆる罪惡の結晶をね。「神は見給う」いゝ題だと思わないかね。その絵が出来上がる時戦争は地上から無くなるんだ。

Qの腫が遠い所を睥めていた。Qは突然

頭髮を掻き廻した。

——だが未だ駄目だ。あの女と同じ国の女がモデルに必要なのに、僕はモデルを雇うたびに、又ベルトを振りたくなくなるんだ。あの滑らかな、青みを帯びたクリーム色の脇腹に、赤紫の縞目を幻想するんだ。それが止まる迄、僕は絵を描く。

Qは更に戦争の本質をKに論じた。然しKは、此の温和で親しみ深く真面目な青年のQでさえ、思わしい暴虐を簡単にやつて退け得た戦場心理の恐ろしさに、たゞ打たれるばかりであつた。

Kは話終えたあとで私に言つた。

「君は此の話を何う思うかね」と。

私は答えた。

「どうも思わない。それが人間なんだ。人間が生きる限り、戦争が、従つて暴虐がある」

そして読者の判断に任せるべく、此の話を此処に発表する事にしたのである。

Qの祖国も、此の悲劇の舞台も、私には判つてはいるが、Kが明白に告げなかつたので、僕も態と言かないでおく。



男

色

魔

の

虜

井

口

正

憲

一、メリケン波止場

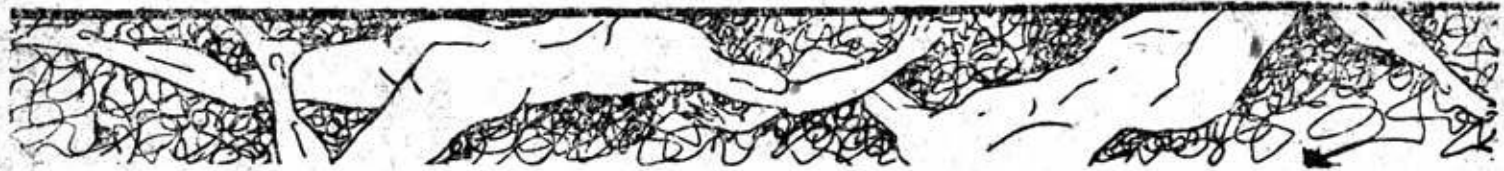
今になつて考えて見ると何と云う馬鹿らしい事をしたの
 だらうか、だが、まだほんのお坊ちやんでしかなかった私
 は少しも気付かなかつた。初夏にふさわしい青い背広に、
 コータバルの靴。赤い博多の一本織の高価なネクタイをダ
 イヤのピンで止めて、指には金台にサファイヤの指輪。成
 金族の若様のような私を誰も使つて見ようと云う物好きな
 氣持を起すはずはなかつたのだ。

五日もしない間に私は乏しい金の大部分を使い果してし
 まつたが、商運丸の船長に作つて貰つた背広服や身の廻り
 品を売ろうとは思ひなかつた。その金で十日や一ヶ月を過
 して見た処で、再び又も無一文の日が廻つて来る事は火を
 見るより明らかだし、後足で砂をかけるようにして飛び出
 してきた古里へは二度とは帰る氣持にはならなかつた。
 // 又船に乗ろう // こう考えて横浜へやつて来たが、阪神の

港と異つて横浜には機帆船の数が少くて私に向く仕事がな
 かつた。本船の下級船員の見習としてならいくらでもと云
 うほどではないが、どうにか職がありそうだった、やは
 り免状らしい形の物を持つていながら下級船員はいやだつ
 た。

不慣れた横浜の街を船会社から船会社へと歩き廻つて、
 ヘトヘトに疲れきつてしまつた私はメリケン波止場へ日暮
 近くなつてトボトボとやつて来た。波止場には郵船会社の
 一万七千屯級の客船が一隻停泊していたが、その船の沖の
 方の波止場の突端近い海側にハンカチを置いて私は腰を下
 して港内を見廻した。

日本船、外国船、沢山の貨物船が港内一杯にブイに着い
 ていて、その間を通船がボン／＼と機関の音を響かせなが
 ら縫つてゆく。無心にただボン／＼とそれを眺めているう
 ちに次第に日は暮れてしまつていた。



スーツケースに半身をもたせて、丸窓に灯が燈つた巨船の群れが、水に映えて更に美しくなつて来た港を、自分自身の今の境涯も忘れてウツとりと眺めていた私の傍から、「夜の港は美しいですね。とくに日本の空は澄んでいながら何とも云いようのない景色に見えます。ごらんさい星が波に当つた」こういう若やいだ声にハッと現実に戻つて声の方を見ると長身の青年が私と世んで同じように岸壁に腰を下して、海上に下つた足をフラ／＼と振つてゐるのだつた。

「僕は外国は知りませんが、でもこの港は美しいと思います」私がそう答えると

「横浜は始めてでいられるんですか」

「ハア、小さな船でしたので内海ばかりで——今、仕事を探しに来たのですけど」

「何かお有りになりましたか」力なく首を横に振ると

「どんな船を御希望なんですか？」

「希望と云つてはないんですけど、下級船員じゃ嫌だと、そう思つていただけなんです、もう金はなし、仕方がないですから今夜はこうして明して、明日にでもなつたらどんな仕事にでも付いて喰わして貰おう、こう考えていた処です」

知人同志の仲よりも路傍や公園あたりで偶然に話始めた赤の他人の方が、どんな事でも気易く語る事の出来るもので、そうした経験がどなたにもおありだろうと思うのですが、その時の私もそうした気持になつていたが、それも私

の話相手の青年が何か親しめる者に思えたからだつた。「こんな処で一晩明されては警官に変に思われますよ。それに仕事の方の心当りも僕にあります。まだ御夕食前でしょう。ホテルへ着いてゆつくりお話し致しましょう」そう言いながら立上つた彼は私のスーツケースを持つと私の返事も待たずに歩き出した。

二、情炎の夜

何と云つても当時の私は田舎出そのままだつた。その私が横浜一流、いや日本でも一流のトップであるニューグランドホテルへ連れ込まれたのだから、見る物触れる物、ただもう目を見張つたり丸くしたりするばかりだつたが、部屋へ運ばした洋食のフォークとナイフの使い方だけは自信があつた。

食前の甘い洋酒だけでも慣れない精分のアルコールにボツと紅くなつていた私は、食後の強い飲物にウツトリとなるような心地好い酔に、ほんのさつきまで飢えに追れて身も心も締付るような絶望感の中に居た事など思い出しもなくなつていたのだつた。

「洋式ですけど、この部屋は日本人向に作られていて、日本式のバスですが、一緒に入浴しましょうか」

喰つたりのんだりしている間に私達は十年の知己のような親愛感を覚え、言葉も何時の間にかその気持にふさわしい物になつていた。

「ええ」うなづいて私が椅子を立つと、彼も立つてソファ



の上に服を脱ぎ出したので、私は洋服ダンスの前で裸になり始めたが、パンツを脱ごうとしてその紐に手をとった時に、何の気なしに振り返つてハッとした。青年の焼付くような強い視線が私の背にそそがれていたが、その視線と正面から会つてしまったのだ。青年はもう全裸になつていたが、まぶしそうに私の視線を外すと

「失礼、あまり美しい肌をしていられるので」

そういう彼こそ全く逞しい肉体だつた。私が後にナポリの国立博物館で見たアポロの青銅像に、血色を吹き込んだような均勢のとれた体に、中高の顔がマッチして、今度は私がほれ／＼として彼の裸体に見惚れてしまった。

純白のタイル浴槽に長々と浸ると、日中の暑さにだけた体がやつと自分の物になつたような気持になつて来るのだつた。酔はさらに全身に廻つて来て私は夢見心地で目を閉じてしまつたが、その私の素肌の上にそつと始めは遠慮深く彼の肌が触れていたが、胸に片手がまかれて堅く締つた肉体がしつかりと私を抱いてしまつていた。そして唇が重ねられて、私の唇の間から挿入れられた舌を、私は恍惚とした気持で、幼児が母の乳房を吸うように無心で吸つていた。

ザツと湯の音を立てて私を抱いたままで、浴槽を出た彼は裸のしたたる体をそのまま浴室を出ると、Wベットの純白のシーツの上に私の体をほうり込むように投げた。柔らかいスプリングに軽くはずんだ私の体の上に、、、、、、、、、。無我夢

中で私も彼に依じていたが、被鷄姦中に鷄姦者の手が使用されなくても射精すると云う事を始めて私は体験した。それまで多くの年上の同性の玩具となつた私だつたが……。「いけない事をしてしまつた。僕がこれが目的で貴方をホテルに連れて来たように、折角の親切が何にもならなくなつてしまつて、悪く思わないで下さい」

熱情が冷えると同時にアルコールの力も抜けて、白々とした面持になつて云う彼に、

「僕は／＼は何も悪くなど思つて居りません。貴方がお酒の上の一時のことでなかつたら、何時まででも可愛がつて頂けたらと、、、、、、」

私の言葉は最後まで続かなかつた。再び熱情に燃え上つた彼が私を抱きしめると、唇に唇を重ねてしまつたからだつた。

彼の烈しい愛撫がそれに続いて、商運丸の船長に仕方なしに身を任していた頃と異つて、楽しい情炎の一夜をニューヨークランドホテルの一室で明した私は、翌朝彼に連れられて彼の、原岡式等機関士の乗組んでいる船、ギリシャ船R号に向つた。

三、女を愛せない男

「僕は二等機関士であると同時に、柔道五段、剣道三段の用心棒なんだよ。だから僕の云う事なら船長は決して嫌とは云われないし、どうせ三等機関士が欠員なんだから」
通船の中で彼がそう云つたが、船長は、「ハムサムボー



「イ」と一言云つて私の肩に大きな掌を置いて承知して呉れた。

R号は士官は各国の人種の寄合世帯で、下級船員は甲板部はインドネシア人、機関部と司厨部は支那人で、七ツの海を目当もなく荷を追つて航くフランテン船で、八千屯の巨体はその頃の貨物船としては珍しい遅い速力だつた。

肉体の關係が原岡と私をたつた一夜ですつかり十年二十年の親しさにして、彼は言葉も兄のような調子になつていた。

「井口、吾も柔道初段だと云つてあるんだ。脅かして置かないと、誰も彼もが美少年には目のない奴ばかりだから僕の目が離れた時に危いんだ」

原岡が云つて聞かせなくても、三日ほどの間に、船長は甲板の見習士官を、機関長は給仕を、誰は誰と、男と男との結び付きが士官のみでなくて、下級船員までそうであるのを知つて、私は驚いてしまつていた。

原岡が私を柔道初段と云つたが、私も中学時代に柔道に自信があつた。そしてその事を証明する出来事が十日ばかりもせぬ内に起き上つたが、それが私の世にも奇怪な体験になつたものであつたとは、神ならぬ身原岡も私も全然気付いていなかった。

香港の対岸の九龍の岸壁にR号は横付になつて、横浜で積んだ雑貨を荷上げしていたが、午後から香港を原岡に案内されて見物して帰つた私は、夜食後のまだ日の暮れ切らない九龍を一人で三十分ほど歩き廻つて船に帰つて来よう

としたが、何か背後を尾行して来る者があるような氣持がして足を急がせた。

もう船がそこに見え出したので安心して歩調をゆるめた私の背後から組付いて来た者があつた。身を沈めて背負投げボチャリと海中へ落ちた音。だが、私を追つて来た足音は一人二人ではないらしい様子だつた。私は船へ向つて走り出した。積荷を大半陸揚げして船足の高くなつたR号の傍まで来たが、とうとう追つて来た苦力のような五人ほどの男達に私は囲まれてしまつた。二人三人海中へ放り込むと二米ほどの高さの荷役指揮台の上に私は飛上つて彼等を睨み下ろしたその時に、

「ワンダフル」「ブラーボー」ワーツと云う讚嘆の聲がR号のデッキから上つた。私の襲われている事を岸壁を散歩していた船員の一人が知つて、船へ知らせに帰つたので、驚いてタラップの上へ集つた船員達が、デッキからその光景を目に留めたのだつた。多くの乗組達が出て来た事に恐れをなして、私を取囲んだ乱暴者はバラバラと散つてしまつた。

灼熱のカイロ、夢のような水の都ヴェニス、オレンジ香るナポリ。霧立こめるロンドン。ニューヨークの雑沓を原岡の手をしつかり握つて、椰子に夕日の落ちるホワイトホテルを眺める真珠湾の上の小舟で、原岡の胸に抱かれて、世界を一週した私は、懐しの日本は扇港神戸、日本の香をしみくと味つて天津へ。それから上海へ廻るはずだつたR号は、出帆間際になつてから荷物の送先が變つて、仏印



西貢へ向つたが、西貢運河を逆航して入港したのは、私がR号へ乗り組んでから一年三ヶ月が夢のように過ぎた翌年の九月だつた。R号の生活こそ私の一生で最も楽しい時代だつた。忘れようとしても忘れ得ない原岡、彼との生活にピリオドが西貢で打たれようとは、、、。

虫が知らずと云う言葉があるが、その夜の原岡がそうだったらしい。小ベリーと云われる西貢の街で、光々とした白い月がマロニーの葉から洩れるキヤバレーの、舗道に並べられた卓で、生ビールの泡を吹きながら、

「井口君、君との生活も一年三ヶ月にもなるね。僕は今日云おう、明日話そうと思ひながらも、とうとう今夜まで話す機会がなかつたが、今夜こそ君に聞いて貰いたい話があるんだが……」

眸は月を仰ぎながら原岡がボツリと云つた。重大な話らしい口ぶりに、

「どんなお話かお伺いしましょう」

私が答えると

「そんなむずかしい話じゃないんだよ。君も気付いているだろうが、誰も彼もR号の乗組達は少年を玩具にしているが、入港すると女の処へやつて行く、彼等はただ航海中の湧き上つた性慾の吐け口に少年を求めているのだと云う事を。だが、僕はそうじゃない、女の味と云うものを来年は三十才になるこの年まで一度も知らないんだ。僕の今の言葉を君は信じてくれるだろう」

「ええ、僕は心からそう信じています」

「僕が何故女体を抱く事が出来ないか、その原因は父母にあるんだ。僕の母は僕が三つの年に情夫を作つて、父の許に僕を残して家出してしまつたんだ。それから後の父は男手一つで僕を育ててくれたが、僕が物心付いてからはもちろん、まだはつきりと記憶もない小さい時から、女は恐ろしい、女は魔物だ。女に近付くな。一日に何回でも僕に云い聞かせたんだ。そして幼い女の児でも、腰の曲つた老婆でも、女と云う者には近付けない、物の云えない僕に育て上げてしまつたんだ」

「ああ」私は息をのんで彼の顔を見直したが、彼はやはりじつと月を見上げていた。青白い月光に彼の目に泪が宿つて銀色に光っていた。

「そうした僕にもやはり人並に性慾の起る年頃が来たが、女との付合のない仕事と思つて希望した商船学校で、男同志の肉体関係と云う物を見た。そして、いつしか年下の男性に性慾の吐け口を求めようとするようになった。それも日本船では公然とは出来ないが外国船では公然だ。そう聞いて外国船に乗ると、その行為はこうしたボロカーゴポートでは日常茶飯事だつた。だが、井口君、今迄僕は日本人、支那人。イタリヤやフランス。数多い少年達をこの腕に抱いた。でも、本当に心から愛する事が出来たのは君一人なのだ。頼むから僕から離れないでくれ。僕と一生居ると誓つてくれ」

カチリとデョツキを卓上に置いて差出された原岡の大きな掌を、無言で私は両手でしつかりと握つた。



女を愛せない男。商運丸の船長は肉体の快楽から、この原岡は父の教育から、どうした処でそれは通常ではない。だが、それだからと云つて彼等を罰する事も、あざける事も誰もが出来ようか？。それは彼等の罪ではないのだ。

四、私の後を追つて

「すっかりセンチになつてしまつた。場所を変えて呑み直そうや」

原岡が笑いながら云つて卓を離れて歩き出したので、私もその後へ続いたが二間と行かない私達の傍の車道に、音もなく止つた乗用車から大急ぎで出て来た男に呼び止られた。

「ハロー、サー、エンジンアーズ」支那服の男は、

「おお、黄」私は驚きの声を洩した。私より一ヶ月ほど後でコロンボで乗組んで来て、三ヶ月ほど前にハワイで下船した支那人油差の黄だつたが、高価な支那服に包まれた彼は見異えるような男振りで、脂切つたでつぷりと太つた体にそれが良く似合つて、押しも押されぬ大人だつた。

「お元氣ありましたか、エンジンアーズ」

流調な日本語で云いながら彼は私に近付いて来た。三等機関士の補助油差として一年近くをよく働いてくれた彼だつた。懐しさに私は油断してゐたし、原岡と云えど黄が突然にそうした行動に出ようとは予想もしていなかつただろう。

横腹にヒヤリとした物を感じた時には黄の左手に持った

ピストルが、私の体に押付けられていたし、右手のピストルが原岡に向けられていた。

「原岡エンジンア、一足でも動くあると貴方の大切な井口エンジンア、命がありませんよ。井口エンジンア自動車に乗る」

氣を吞れてしまつてゐた私は押されるまゝに自動車に入つてしまつたが、黄が私にピストルを押付けたまゝ自動車に入ると、自動車は急激なスピードで走り出した。振り返つた私の目に、何か叫びながら自動車を追つて来る原岡の姿が見えたが、急カーブで自動車が街角を曲つたのですぐに見えなくなつてしまつた。

支那街の大きな飯店の三階の一室へ私を連れ込んだ、黄は支那車を挟んで椅子に腰を下すと、

「サー、驚いたありますか、私はサーを得る為にはどんな事でもするありましたよ」

こう前置きして語り出した。黄は上海の現童、相公とも云うが、日本で云うカゲマ茶屋の主人だつた。商売柄やはり美少年を愛する癖が身に付いて居たが、二十才前には船で機関部をしていた事もあつた。

香港に美少年が居ると云うので出て来たが、そこで偶然に原岡に案内されて街を見物としてゐる私を見て、彼に云わせれば一生一度の恋を覚えた。そこで風来坊を雇つて私を襲つたが、目的を達する事が出来ずにコロンボへR号の後を追つて来て、油差となつて乗組んで私や原岡の油断を狙つたが、寸時も離れない二人である事を知つて、上海で



必らず私を手に入れようとハワイで下船して先に帰つていたが、天津からR号は西貢^{サイゴン}へ向つてしまつたので、飛行便を利用して追つて来て今夜の手段に出たと云うのだつた。

「サー、黄のこの強い愛情を入れて下さい」

目に涙さえ浮かべて云う黄だつたが、

「いやだ。僕は帰る」

首を振つて私が椅子を立つと、彼は仕方がないと云う顔付になつて、

「サー、嫌だ」云う少年を無理に自由にする。その方が私もうんと面白いある。私は何時も店に出す少年自分で教え込む、皆初めはいやだ」云う、それを私が男に抱かれる味教えるある。サーでなかつたらすぐ抱かれる少年好かないな。サーを私心から好きある。好きあるから乱暴しない。そう思つていたあるが、乱暴してから抱く、とても」好いあるな」

云い終るとニタリといやらしい笑いを浮べるのだつた。

「馬鹿。貴様になぞ僕の肉体を自由にさせてたまるか。死を覚悟していればピストルが何が恐いものか。射て、さあ射つて見ろ」

私は胸を突き出して黄に近付いて行つたが、彼の武器はピストルのみと思つてあまりにもそれを目当にし過ぎていた。黄はあらゆる場合を予定していたらしい。ジリ／＼と支那絨毯の張られた壁の方に退つて行く彼に私が一步近付いた時に、バサリと音がし「天井から降つて来た網に、ぶざまにも私はスツポリ包まれてしまつたのだつた。何とか

して逃れようとあばれて見たが、網が黄の壁ぎわから引く繩にたぐられて、私は身動きも出来なくなつてしまつた。その私に近付いて来た黄は網の間から注射器の針を入れると、もかく私の腕にブスリと針を突き入れた。

だん／＼薄れて行く意識の中で網から出された私は洋服を脱がされ、手足にロツプが結ばれるのを感じていたが、催眠薬はほんの一時的の効果しかないものだつたらしく、網の落ちて来た天井へ後手に結ばれたロツプで釣下げられた時には、もう意識は通常に返つてしまつていた。私の爪先はほんの少し床に付いていて、後手に釣られた腕も爪先が床にある事でそう烈しく痛くはなかつた。

「どんなにした処で音は上げないぞ。僕は日本人だ」

私が叫ぶと、

「サー、私は沢山／＼少年をこうして来たある。直ぐに私の体がよくて／＼、サーが力一杯抱き付くあるよ」

再びニヤリと笑つた黄は部屋のほど中央にある赤い緞帳に包れた寝台から、乗馬用の革鞭を握つて私に近付いて来た。ピシリ、まさか、打たれようと思つて居なかつた、私はウウムと烈しい苦痛に呻き声を出したが、物も云わずに黄は鞭を振り上げると背後から私を打続けた。

五、鞭、愛撫、快樂。

あれだけの広言の手前もないほどあつけなく、二分か三分ほどで私は失神してしまつていたが、夢うつつの中で体を何と云いようもない快感が走るのにうつすりと氣付き、



そして、その快感が次第に烈しくなると共に再び正気に返った。私の身体からはもうロップは外されて、寝台の中に寝せられて、黄の身体の一部はもうすでに………と送り込れていた。重い脂にねつとりとさえ感じられる黄の胸。そして太つて猪のように強靱な四肢――。

その快感はもちろん体内に送り込れたものに原因するのではあつたが、さつき鞭打たれた跡に黄の肌が触れる事が又とても心地好いのだつた。今迄の怒りも何も忘れて私は黄の体に腕を巻くと、全身のリズムが夢幻の旋律となつて不随意筋化していった。

何と云う高いエクスタシーだつたらう。被鷄姦中に射精する事を原岡によつて始めて知つた私だつたが………。

ほんのとりとと睡つたが、一時間ほどだつたらう、もう黄ははつきり目も覚めない私の側に寄り添つていた。もう夜明けに近かつた。ぐつたりとなつた私にナイト・ガウンを着せて黄が寝台の外へ抱き出したが、私は歩く元氣もなかつた。支那卓にセムシの男が、朝食の用意を並べていた。脂分の多い支那料理、それがどんなに美味だつたか、昨夜の荒淫がそうさせたものだつたらう。食事が終るとソファへ黄が抱き移して、スリーキャツスルに火を付けて口へ、紫の煙を眺めながら何時しか私は睡つていたが、体の不安定に目覚めた時には、すでに手足はロップに結ばれて天井へ釣られていた。鞭、失神。黄の愛撫。それが終つた時に正午のサイレンが聞えた。

中食、午後はやつと私は寝台に一人で寝せて貰う事が出

来たが、夕食が終ると待つていた物はロップと鞭だつた。睡つてもいず、失神もしていない私だつたが、黄がロップを出すと私はナイトガウンを自分から脱いで、黄の前に足を出し手を背後に廻した。鞭打たれるのは痛い、だが、その後の快感。それが原岡の事も、自由の社会をも私にすっかり忘れさせていた。

夕食後の鞭、失神、愛撫。一時間ほどの休息。二度目の長い――愛撫。朝食。鞭、失神、愛撫。中食。睡眠。学生の日課のような日々が繰り返されて、十日もせぬうちに私はすっかり衰弱してしまつた。性神経衰弱で一日二度か三度の遺精があつても、相当に体が参るらしいが、烈しい快感の上で、一日に十何回も射精するのだから、全く以つて若い元氣な身体でも弱つてしまふのが当然だつた。

黄は心配して食事にも氣を付け、支那薬などを持つて来て飲ませるのだが、毎日の日課は少くも変更しようとしななのだつた。そうしているうちに若い力とは偉大なもので二十日ほどでどうかその生活に慣れると、少しずつ私は元氣を回復して来て、一ヶ月半ほどで元に復り、二ヶ月目には食物の影響もあつてか黄に負けない元氣さになつて、私の体から離れようとする黄の身体を抱きしめて離さず、黄が愛撫を三度続けなくてはならないようになった。

三ヶ月目に入つた頃から私が元氣になるのに反比例として黄の疲れが目立つて来て、私を抱きしめる腕にも見えて、力が弱つて来ていたが、それが男色魔の魅力の魔から私が逃れる日が近付いて来る前兆であつたのだつた。



だ たい しゅつさん ふうぞく
墮胎と出産風俗

阿久津 猛



どの国でも昔からひんぱんに祝福されざる子の処理として各種各様の墮胎が行われていた事は言うまでもないのだが、最近に於ては医学の進歩によりほゞ一定した科学的な掻把手術の方法がとられ、又避妊薬によつて間接的な墮胎が行われている。これは今更述べるはずのものではないのであるが、それでは此の様な進歩を見る以前即ち我が国にとつては江戸時代、若しくはそれ以前の時代についての各国の墮胎とそれに連繋を持つて出産の風俗は如何なるものであつたか考究して行くのも、興味あり又性文化史上見逃し得ない風俗と思うので今回スペースの許るす限り特に珍奇な物を述べて行こうと思う。

先ず墮胎風俗より先に筆を進めるならば、墮胎するにはそれなりの理由があるのであつて結婚以前に妊娠し世間をはばかり、又妊娠はしたが急に相手の心が變つてしまつた場合子供を養育するだけの経済的理由にめぐまれていない場合、とにかく古今を問はず不義と経済的理由からもつぱら行われた様である。我国では江戸時代においては「不義はお家の御法度」とかたく禁じられていたため、因果の種を宿した女性は、如何なる方法を持つてもひそかに墮胎をしなければならぬ、そこに

墮胎を業とする中条流の発達と盛んに下層階級においてはその手段として（間引が行われたのである。間引というのは嬰兒殺害の事で下層階級には中条流の処置を受けるだけの金銭的余裕がなかつた。そして教養乏しく無智なるが故に別に罪悪感といった様なものは持たずに簡単に生まれてくる子を殺害したのである）

我が国で最も盛んに墮胎が行われたのは宝暦、門和、安永、文化、天保の時代であつて誠に非科学的な強引な墮胎法であつたのである。非常に多く使われたものは辛子であつてこれを産口より子宮内に無理矢理すりこみ一週間も続けると、その苦しみは言い様のないものであつたが不思議に流産したのである、この外血を荒すものとして黒鯛が盛んに使用された。中条流の墮胎薬としては「朔日丸」といつた一種の通経剤があり専ら子おろしに用いられたのである。この外「毎月丸」「子おろし丸」等かういつた不安な方法が行われていたから、墮胎のために生命を失う者が非常に多く王朝時代には公然と墮胎が許るされていたものが、天保十三年に至つて墮胎に對して刑罰を行う様になつたわけである。だがこの裏面には今迄以上に子おろしと間引

は盛んになつて行つたのである。それと共に次第に墮胎薬も辛子筆から薬草や劇薬と言つた発達したものに進んで行つたのである。そして刺戟物を食べ過激な労働、水にひたつたり、腹をもみ下したりして種々の墮胎法を考え出したわけである。地方では専ら中条流の「朔日丸」などにはたよらずホーヅキの根、笹の新芽、ツバ、トウカツラなどを盛んに使つて墮胎を行つていた様である。それが証據に各地方には数限りない墮胎の呼び名が生れたわけである。江戸では子おろし、津軽地方では「タタリモケ」これは墮胎された胎児が後の世まで崇ると云つた意味から出たものである、岩手地方では「ザシキワラシ」これもタタリモケと同じく胎児の幽霊が夜中に座敷を駆け歩く意味である、この外墮胎の方言として盛岡地方では「モドス」栃木足地方では「ハンサン」群馬では「オトス」鹿児島地方では「ヘシゴ」といつて如何に猛烈に墮胎が行われたかは、これをみてもうかがい知れるのである。

さてこの墮胎の実態を外国に見てみると、実に驚く外がなく、性生活、その生存生活にあまりには深刻すぎた事がはつきりと知る事が出来るのである、特に珍奇なものを述べて

行くならば、ニュー、カレドニアの女達はその墮胎薬として煮た熱いバナナを呑む事を習慣とし、バリ島の女は中国製のオピオートを、バフォト人の女は赤い胡椒を食べたのである。そして各国では（勿論日本の一地方でも行われたと思われる）次の様な墮胎法が行われたのである。

妊婦を仰向けに寝させて、腹の上に横に板を乗せ、その上に女達が二三人もあがつて妊婦の胎内の児を死に至らしめ死産或は流産させたのである。

もつとひどいになると金属性の伸べ棒を子宮内に差し込み突つつき廻して完全に胎児を殺してしまふ法。木片や鞭で妊婦の腹部をたゞき締めし、圧してそれを一日に何度となくくりかえす。

地面に抗をうつて、その上端から地上二呎ばかりに妊婦をつりさげ胎児が死んで墮りるまで、腹をめたうちになく、これなどは全く想像出来ぬ程残酷なものである。

この外胎子包被をつき裂く方法があつて、これは特に南国で行われた様で、海象や海豹の肋骨をうすく削つて、一端を刀状にするどくし、一方をまるめた道具を使う。尖つた方の端には、海豹のなめし皮で作つた円筒状の

鞘があり、鞘は両端にひらいていて、長さが丁度、双の部分だけある。鞘の上下両端に、約十五時ないし十八時の馴鹿の腸でつくつた紐がつけられている、この探針が腔内を通るときには、双のところを皮の鞘で覆われている。子宮内に届いたと思われる頃に、施行者は鞘の下端にしっかりと結ばれている、紐の方へやわらかい鞘を引張る、それで自然双状のところ露出し、探針を上下左右にかき廻すのである、こうして胎児が破壊されたのち、その道具を抜くのであるが、そのまゝに上端につけた紐で、双に鞘をかぶせて、胎内を傷つけない様にする。この胎子包被をつき裂く方法が一番科学的であり現在の墮胎手術に近いものであつたわけである。

大体墮胎の医学的進学を見ない中は以上の様な方法と原始的な薬によつて強引に墮胎が行われていたのである。

さてそれでは話を進めてその頃各国の女達は如何なるどんな姿態と衛生のもとに出産を行つていたかを述べてみよう。（我が国の場合は別に取立てゝ述べるまでもなく現在と殆んど同じである故除外する）

先ずフィリッピン群島の黒人の妊婦は、自分から下腹部に竹筒をあてそれを強くおしつ

けて力んでお産をし、子供を熱い灰のなかに寝させ母親はその傍に臥し臍の緒をきるのである。それがすむと妊婦と赤ん坊は河の中に入り又友達は歌をうたいながら大声で叫びながらこれも河の中に入る、胎盤は、その行列の先頭に立って踊っている女が持ち、川の中から出来るだけ遠くの方になげすてるのである。

これら土人達は殆んどが安産であるからこういう事が出来るのであつて、お産の場所等も殆んどどこであつてもかまわず犬の様に簡単にお産してしまふのである、いつもと変らず平気で家を出て砂地に行つて十五分もたない中に赤子を抱えて帰るといつた事が普通とされているのであるから驚く外はない。

これに比べてカムチャツカの女は、産気づいて来ると家でなくわざ／＼道端に行つてかゝみ、衆人看視の中に祝福されて、誰れにもそのお産の姿態をみせて出産するのが習慣となつてゐる。これなどは全く日本等に於ては信じられぬ出産法である。

マオツの女もこれと全く同じで、自分の氣のむいた所に出かけて行き、人目も憚らず、むしろ誇らしげに臍の紐を切つて分娩するのである。

コンゴ、ネグロの妊娠は、二株の立木の間に女が立つて手の届く位の所へ、横に棒を結びつける。そして女は陣痛の起らないうちにゆつくり其処此処を散歩し、陣痛が始ると早速棒につかまつて股をひろげ力みかゝるのである、手助けの女が前にしやがんで子供が地面に落ちぬ様に注意し分娩するのである。この木の間に渡された棒は永久的のものであつてお産のあるごとに使われるのである。面白い習慣である。

カラヤ土人の妊婦は両手を杭につかまつてしやがみ、夫が横手から強く腹を両手でしめつけ助産するのである。この助産者にもいろ

いろあつて、夫自身のほかに他の男の助産者が手助けする。ハツイやバリー等の土地もありエダー族では母が手伝いマラバル沿岸では姑がその手伝いをするダイヤツク人は経験の深い女がこれに當つてゐる。またマサノールおよびスアヘリでは報酬をもらつて手伝う。アソチやフィジイではもつと進歩していて、正規に分娩の方法が当事者には昔から口伝へに教いられてゐるのである。

アンダマン島のミンコヒーや、ムンダ人などは又以外なお産をするのであつて人々にそのお産の姿をよくのぞかせ、特に子供などに

現代陰間茶屋談義

染田 玄

女装の美青年芳ちゃん今年二十一才になる所謂おカマなのであるが、生活に困つて此の環境に落ち込んだというのではないので小柄で瘦せ方なところは齡よりも若くしやなり／＼とデパートへ通う際などはどこ

の令嬢かと見違ふばかりである。さて僕が彼と一晩を明かしたことがあつてから、僕の姿を見る度に執拗に言い寄つてくるので、いゝ加減にあしらつてゐると

「私でお氣に召さないなら、いゝお姉さん」と言うので何か参考になることでもあるだろうと思つて彼のあとからついて行つた。芳ちゃんは自分の家へ僕を案内しておいて、そゝくさと出て行つた。

昼の上に寝ころび乍らピースをくゆらし、見るとともなしに部屋の様子を眺めた何にしろ喰わんが為にやつてゐる商売ではないだけに、壁際には六球スーパールの電着

は好んで覗かせて、簡単な手助けを強いるのである。それだからと言って風紀上決して悪くなるという事はないのだそうである。

ケリー族の女達は道路に立つたままで出産するのであつて、この場合腰をかゝめ、夫が地面にたてかけてくれる杖にすがっている。一方友人がうしろから妊婦の着物をひろげ生れて来る胎児を尻から引きだすのである。まわりにはぐるりと輪になつて親や隣人の者がのぞきこみ、かたずをのんでいる。

ホツテントットの女は独りでお産をすましまるで何事もなかつた様にすぐ仕事に出かけ男まさりの力仕事をするのだというから驚く。ナマ、ホツテニトットの女も非常に強い女で産気づくと、人手をまつたくかりず家に残り、牛小屋の牛を引きだして、そのくぼんだ暖い所へ横になつて平気で産をするのである。そしてその晩は家族と一緒に座つて語り合い、笑いころげ煙草をすつて立膝でいる全く平気なのである。

娘などはさすがにはずかしいか牛に乗つて遠くの野原に出かけていき、間もなくして赤子をだいてにこ／＼笑いころげながら帰つて来るといふのである、本当に驚く外はない珍奇な風俗なのである。

(終)

がでんと坐つてゐる、レコードケースの上には金魚鉢にらんちゆうが三四匹と泳いでゐる。洋簾簾といふ和簾簾といふ中々凝つた扱い金のかゝつたものである。

表から涼しい風が吹き込んでくるので僕は思わず知らず、ついうと／＼と転寝してしまつてゐた。どの位経つたろうか、「あなた、あなた起きなさいよ。」という艶めかしい声にゆすぶられて夢路からさめると眼の前に芳ちゃんと言つて和服姿の一寸粹な年増の芸者といつた恰好の女が坐つてゐた。

「この方、どう？お氣に召して、とても御上手なお姉さんなのよ——」

芳ちゃんはそういつて僕の顔をのぞき込んだ。はああん、此れが彼の先輩に当る道具屋の息子か、それにしても女ばなれのした水々しい美しさだなあ、確か彼より五つ六つは上かと聞いていたが、——と僕は内心、いささか驚いた。芳ちゃんの何かあどけないといつた点と違つて、小股のきれ上つた色街女のような美しさである。これなら一晩位ならつき合える——と早速食指を動かして、いや、銀首を持ち上げて起き上つた。

「お氣に入つたんなら、御ゆつくり遊んでいつて、あたし一寸出かけてくるから——」芳ちゃんは僕の顔を見ると、氣をきかして階段を下りかけた。

「じゃ姉さんお願いします」芳ちゃんのおどけない顔が消えると、「君は中々別嬪じやない」僕が彼の手をとると、「そうかしら？」と一寸とはにかむように袂で顔をかくした。中々色氣満点、商売にやつてゐる連中では、とてもこういつた初々しい色氣は出て来ないものだ。「なんて言うの？」芳ちゃんから名前は聞いていたが、いつもこの癖でこゝろが飛び出してしまう。

「キヨ子と言います」立派な男子でありながら女装して女名前でもしかと言葉で少しも不自然に感じない。僕も既にそういつた世界の中に住んで何らの抵抗を感じない男になつてしまつてゐるのだ。いや、それどころか、今眼の前に坐つてゐる女装の男に対して、女に抱く以上の激しい興味以上の興味を持つてゐるのを、どうすることも出来ない。若しキヨ子が正真正銘の男であつたら僕はわざ／＼此の家迄足を運んで来なかつただらう。

(未完)



鮮紅色の血をみると
感極まつて泣き出す男
がある。

人の血をゴクリと飲
んでみて猛獸の征服慾
を感じながらニコリと
微笑する女がある。

血！血！血！

血ほどに人間の心を
単一に激揚させるもの

が外にあるであろうか、血を全身に浴びせられなければ一人前の男にはなれないという奇習に富む部族が今尚オーストリアの奥地に住んでいる。現在の日本では血を売る人達が血液銀行の門前に列をなしている。
さて人間と血のつながりの神祕は果して如何なるものであろうか。

一、好血の処女神

血

の

神

秘



鳥 上 源 一

女神というものは、平和の無電を打つたり白い鳩をとばしたりするのが仕事なんだ、と思つてばかりはいられない。あられもない素裸体で、血腫い坦の上にあぐらをかき、浴びた血で黒光りしながら、コリヤ喉が乾いたぞよ、血をもつて参れ、など託宣遊ばされるに至つては、凄まじい限りである。が、三角関係の一人を片付けたいが、決斗するのは有難くない、なんて場合にはそうした願いを聞き届ける筈の女神としたら、頼もしい限りで

カーリーはこの派に崇められ、彼女を祀るためには血を捧げて慰めるのが唯一の方法だったのである。

カーリーはシバ神の威烈破壊の方面を表した死の女神で、黒面鬼体、髪をふり乱して口を開き、手には剣をもつて殺戮し、その喉は血にうるおい、頸には骨の環をかけている。この女神は、如何なる時にも渴しており、血を求めてやまないものである。「虎の血はカーリーの百年の満足を買い、人の血は千年の満

ある。前置きはそれ位にして、

インド中世から完成した印度教の主神シバの妻はカーリーで好血神の中での最も尖鋭分子だ。シバを拝する教派の一で、一名を肉慾放恣教と云われたものに「女神崇拝派」がある

足を買う。「女神崇拝派の法典タントラに於ける最も聖なる掟がそれ。

カーリーを祀るために、虎を殺して生血を器に盛るのは普通に行われた。而し、ある疫病の流行や天災などがあれば、人を殺して血を捧げねばならなかった。それでもなお災厄の去らぬ時は、王族或は婆羅門族の者を犠牲にして、災厄の去る日までカーリー神の像に血をそそいで、乾くひまのない様にしたのである。

カーリーの侍女ダキニも同じ性質があり、「大日経疏第七」ではダキニを「飲血鬼」と称している。ダキニは、花も羞らう二八の頃から、人の心臓を生で喰い、生血を吸ることが身のたしなみと考えて、うら若い乙女心に節制なく暴飲暴食にふけり、仏陀につかまつてしまった。然しだ、何しろ血の中毒はニコチン中毒などよりひどい。血なしには生きてる甲斐がありません。美しい顔に涙の溜つ顔、仏陀も心を動かされて、では次後は死人の血と心臓をとれ、と情意酌量の判決を下した。

ダキニは控訴した。その云分では、死人の血と生血では提灯に釣鐘程の味の相違がございます。と云うのだ。そこで仏陀は又一步譲歩して、では人の死ぬ四十日前にその血をと

れと定めた。

女神崇拝派の肉慾曼陀羅の有様はお話にならない。で、話し甲斐がある訳なのだが、なかでも「聖環」という儀式などは、内容から云えば「聖女輪〇式」で仏教の紋である卍字は、この式を象徴したと云われている。

肉慾と血の二方面のうち、前者はこの所詳述するのを憚つて置く。この派では人を呪い疾病を退け、盲聾を癒やすことなどを祈願するために、六呪法を行つた。是は、三角から五角形の紙、石、木片などに今では意味の解らぬそれらの呪文を書いたものであるがその呪文はカーリーに供えた虎血か人血かを用いて書いた。

法典には、「虎血の呪文は十年の験あり、人血の呪文は百年の験あり」とある。又自分の体内にカーリーの魔力が留ることを求めて指に血をつけて、身体各部を圧する方法もあつたのである。

ずっと古代のアリヤン族は、斯かる風習は持たなかつたが、それ以前からインドに蟠居していた黒人種ドラヴェダ族は、毒蛇の害を逃れるために、蛇を崇拝して血を捧げたと云われる。

同様に好血神としてはチベットの大黒天と

ダキニ天とがある。大黒天もシベ神の破壊力の表象で、大時というのが本意、時が万物の破壊者であるに通じさせた死の神なのだ。

チベットの黒天は、婦人の産婦の下着が産婦の褌衣に描かれる。その姿は、一身九面裸形で黒色、二十四臂十六足というのだ。

大黒天を祀るためには、この本尊に向つて裸体となり、頭髪を乱し、鬚髯をもつて冠とし、人気のないところで人肉を焼いて香とし人骨の珠数で祈禱し、一日に三度人血を煉つて香を作り、それを焼いて供養するのである。

前記のカーリーの侍女ダキニがチベットに於ける姿を「陀羅尼経集」からぬくと「顔を右に向け、脚を上げて青色の人間と赤色の人間を踏み、左手に鬚髯杯をもつて人血を飲む額に第三眼あり。鬚髯の華鬘をかぶり、鬚髯の要路を腰にまとい、人頭の幢を肩にせる赤色像」とある。

これら大黒天もダキニ天も、日本へ渡つてからは好血神の性質を全く失つてはいるが元をたゞせばいづれも人血を好んだ仲間だ。血に依つて神に仕えることが神意にかなう最善の方法と考えられたことは、亦バイブルに例がある。カインとその弟の牧羊者アベル

が互に供物をして神意をうかぐうのだ。カインは果実と麦、アベルは血を齧いだ羊を供えた。

「爾(神)もし血を好まば、牧羊者の机はわが右手に燐りつゝあり。これ爾に仕えんがために、羊の初生を屠りてその血をそぐしものにして云々」と云うのはカインだ。

鮮血なき祭壇と、血に塗れた祭壇との争いとなり、結局、後者が神の召すところとなる「汝の神は血を好めり」半狂したカインはアベルを殺してしまふ。「さらば汝の血を神へ持ちゆけ。神は血を好めるなり」

これはバイロンの「カイン」の第三幕で、作者の反抗的精神がカインを通じて叫んでいるのであるが、エジプト、アラビヤの祭式には、羊、牛、山羊、等を犠牲にした事は、こ

と新しくいうまでもない。未開人の祭祀には、犠牲の血をとつて偶像に供え、もしくは偶像の頭からそぐかけたことは通性であつた様に思われる。人血を用いたのはその祭式の価値を高くするためで、反面から見れば人血の価が最も高かつたわけだ。

およそ畏敬されたものは驚異と恐怖をあたえたものである。その点で、血の色と匂、死

と密接に関わつてゐる奇怪な性質などが、血をたゞ物ならず考えさせ、聖物として崇められる様になつたのは当然といわねばならぬ。

日本の古代では血の祭壇は見当らない。血に就いての最古の記事は伊邪那岐の命が火神を斬られた件だ。火神は伊邪那美の命から産れる時に、この母神の富登を焼き、ために伊邪那美の命は冥途へ行かれる。最愛の妻を失つた伊邪那岐の命は、怒りに任せて火神の頸を斬ると、その御刀のさきに附着していた血が湯津岩村に走りついてそこから多くの神々がお生れになつた。建御雷神もその時に出来た神の一人である。

二、血の呪咀・血のエロ

さして珍らしくない事だが、血判、吸血の盟、血文、血の呪咀、なども、血の聖物観にからまつて生れた風習だ。是等はそれぞれに確かな文献をたどつて、新に稿を起す価値がある筈だ。

血判の事実は、徳川期に入つてからのものらしく、それも武士階級に行われた。それ以前の前名には、花押を用い、元祿頃から印判の方法が発達してゐるらしいので、恐らく血判の例は非常に少ないのであろう。血判では

指頭を突くか、舌を噛み破るかして、署名の下に押した。

武士階級の血判に対し、平民生活——と云つても遊星を中心にしたエロ風俗に生れたのが血文、いわゆる二世も三世もかわるまいの血起誓だ。これは血判の方法を深めたもので、単に血判する方法と、全文を血で書いたものとがある。

吸血はいわゆる遊俠渡世、今では主に不良団の常法で、互の二の腕から血を絞つて、一つの盃へ盛り、等分に吸ひ合つた。傷痕が三日月型に遺つてゐるのが正しいとされている様である。

血の呪咀は魔神を祈禱する仕掛に多く、一般化されたものをあまり聞かないが、以上の他に楽器に血を注いで音をよくするとか、新鑄の鐘に牛血をそぐとかなども、この系統に属するものと思う。

三、血のエロチック・タブー

動物の血は薬料としてゐる／＼に伝えられている。三才図絵によれば、「凡そ犬を食するに血を去る可からず、血を去れば則ち力少く人に益あらずとか、鶴の血は甘くして香氣あり凡そ諸禽の血は生類にして吸る能わず、

鶴血は温酒に入れて暖るに最も良しとか、啄木鳥の血は庚の日に西に向つて熱飲すれば、人の面目を朱の如くし、光彩人を射る」とかそんな風な説明が見えている。

日本で知られているのは、すつぽんの血で、息切れの妙薬としてある。

それで思い出すのは、十八世紀末頃までの輸血法だ。十七世紀に出たイギリスの生理学

者ハーペーの説などが土台になつて行われ始めたのであるが、今考

えると随分無茶で、貧血を救うために、山羊

や犬の血を注入したのだ。この名案たるや、

悲惨な結果ばかりを惹き起していた。縁の遠

い生物の血と人間の血が和合するものではなく、互に破壊作用を起すことを、神ならぬ身の露知らなかつたのだ。

そこで、動物の血を飲めば、一時的に何か変つた現象を起す事はあつても、先ず薬としては当てにも出来まい。

人血ならどうか。今の進歩した輸血は論法外として、人血の魔力も迷信的に信ぜられて



いたのだ。手近いところ、浄瑠璃にはその例を人情の機微に当て嵌めたものが二三ある。

「妹背山婦女庭訓」では、忠臣の鎌足と思いがけぬ契りを結んだ女お三輪を、その生血をとる為に鎌足の忠臣金輪五郎が刺し殺す。

「ホ、その訳かたらんヨツク聞け。彼が父たる蘇我の蝦夷、齡かたむく頃までも一子なきを憂え、時の博士に占わせ、白き女鹿の生血

を取り、女に与えしそのしるし、健やかなる男子出生、鹿の生血胎内に入るを以て入鹿となづく。去るによつて

彼奴が心をとろかすには、爪黒の鹿の血潮と疑膚の相ある女の生血

コレを混じて此笛にそゝぎかけ、調ぶる時は実に秋しかの妻恋う如く、自然と鹿の性質あらわれ、色音を感じて正体なし」。そこを計つて入鹿から宝剣

を奪い返そうと云うのである。

「朝顔日記」では、別れた恋人の駒沢治郎左衛門を慕つて旅に出た深雪が、泣いた余りに盲目となる。果ては朝顔と名を代えて、島田

の宿の乞食芸者になつてゐる所へ、今は宮城

阿曾次郎と名乗る治郎左衛門が公用で通りかゝつて、朝顔の唄が手がかりになり朝顔を招ぶ。が、わざと本名を知らせず、翌朝出立の

時に、宿屋の亭主へ金と薬包みを依託して、「其業は大明国秘法の目薬甲子の年に出生せし男子の生血を取つて服すれば、如何なる眼病も即座に平癒」と云い、朝顔の言いた目が

開く段取りになる。

「合邦辻」のは合邦の娘のお辻は玉の輿に乗つて高安の室となる。ところが高安の庶子の

次郎丸は弟の俊徳丸に家督を奪られるのを怖れ、家臣の壺井平馬と密謀して俊徳丸を殺そうとする。お辻の玉手御前はそれを立聞したが、次郎丸も俊徳丸も同じ自分の継子である

どちらとも無事な様にせねば先妻への義理が立たず、俊徳丸が家督さえつがねば次郎丸の悪

心も失せようと、俊徳丸へ毒をすゝめて癪病にしてみよう。そして自ら俊徳丸へ横恋慕をしかけ、俊徳丸が家出したのを追つて自分

も郎を出してしまう。

此の劇のクライマックスは合邦の宅である俊徳丸と玉手御前は此処で会う。合邦は不倫

な娘の玉手の乱行を見かねて刺し殺すと、はじめて玉手が本心を明かすのだ。

「コリヤ娘、その心でなぜに又、俊徳さまの

跡追うて家出したか合点がゆかぬ」と云われ、
「何処までも行衛を尋ねあなたのお目にか
らねば、いたわしやあの癩病は御本腹はご
さんせぬ—さればのこと、典藥法眼に様子を
打ち明け、毒酒の調合頼む折から、本腹の治
法たづねしに、胎内より受けたる癩病ならず
毒にて発する病なれば、寅の年寅の月寅の日
寅の刻生れたる、女の胆の生血をとり、毒酒
を盛つたる器にて病人に与うる時は即座に本
腹疑いなしと、聞いた時のその嬉しさ」玉手
がその寅の刻に生れ合せていたのだ。継母の
悲しい犠牲で俊徳丸の癩病が本腹してゆく経
路は、観客を泣かせるシーンである。

それらの例の甲子とか寅の因縁は、根拠あ
りとすれば、いづれ支那からの占曆か伝説に
據るものと思うが、多分は戯作者の創作では
なからうか。

「好色盛衰記」巻二には「かく詐りて、人の
命を奪る難病の薬に我を要るか」と云々とあ
るのも、生血を奪られる恐怖だ。

さて、血は不吉のシンボル、恐怖の的で、
経期の女をタブーしたりした反面では、当然
として血の魔力を信仰したであろう。薬料と
しての一方では、魔法にも夥しい例がある理
由だ。

法経華嘉祥大師の疏には、守宮の血をとり
女の臂に塗れば、その女淫事を犯せば洗えど
もおちず、とある。インドの秘法としては、
猿の血を女衣類に注げば、その女は他へ心を
移すことなしと云い、中世の婆羅門ダーヤナ
が教えた隠身術には「猫鼬鼠の血に、長瓢簞
の糞と大蛇の眼とを煙の洩れぬ様に焼き、其
灰を基にして同量の水を混じ、此調剤を目に
塗れば其姿は見えずなる可し」などがある。
花柳界で客寄せのマジナイに、経血を客の
衣類へ密かにかけるといふ事も聞いた事があ
る。魔力のある花と云われる紅蓮は、シバ神
の血が染まつたためだ。

南欧に伝えられるネツソの話もこの部類へ
入れて宜い。エルコレがその妻ディアニイラ
を伴つて河を渡る時に、ネツソは先ずエルコ
レを渡し、自分はディアニイラを奪つて逃げ
ようとした。エルコレはネツソを射殺したが
死に臨んでネツソはディアニイラに向い、わ
が血の染みし此の衣には、男の心を離れしめ
ざる力あり、と云う。エルコレは後に他の女
を愛したため、妻が此の衣を着せると、エル
コレは悶死してしまうのだ。

血を薬料とした反対に毒物としたのは余り
ない様だ。強いて求めれば「原痘論」に「小

児初生の時、口に胎血を含み、咽下して腎に
至つて痘を發す」とあり、天然痘の因と考え
られたなどそれであろう。

四、吸血鬼と血の池

血の恐怖に深く係わつたものには、吉田御
殿の千姫風なのでなく、正真の吸血鬼がある
吸血鬼に就いては二種の説がある。一は夜間
に限り出沒する魔精で、亡霊恐怖から想像さ
れたものであり、墓の中から出て来て人血を
嘍ると云うのである。一は人血嗜好の妖術者
で、その姿を自由に変え得る者というのだ。

当時は肺病の様に、宿命的に血に関連する
ものは、吸血鬼に取り憑かれたものとして恐
れられ、東南部欧州では、屍体を埋めるに先
立ち、杭で刺して吸血鬼となつて出て来ぬ様
にとする風俗もあつた。吸血鬼は無論迷信で
あるが、現代の医学の中で吸血虫に関する部
分は重要な一分科である。

支那美人の本場であり、月落ち鳥鳴く寒山
寺のあるという所、上海に近い蘇州が吸血虫
の猛烈な分布地であるのもユーモラスな話だ
地獄の名所として血の池血の河を作つたのは
東西同じことで、血の恐怖からである。

神曲に依れば「すべて暴き力を用いて他を

害いし者、その中に煮らる」と云う。沸々とたぎり立つ熱血の中に殺人者の群が叫喚すると云つても、現代人へはピンと来ないのも止むを得ない。

五、血と犯罪

イギリスの「毒殺五人男」の一人、毒殺者の中のプリンスと云うパーマーは「僕は医者だが血を見るのは嫌いだ」と、法官の前でうそぶいたそうである。家族、友人、下婢まで殺した男の口から、そう云われた検事のその時の顔は、どう想像して宜いか見当がつかないが、毒殺心理をうがった言葉の一つではある。

人間はどの程度まで血の酷さに耐えられるか。好い例は名作「罪と罰」だ。

主人公のラスコーリニコフは貧しい大学生である。彼は正しい殺人を考える。将来ある有為な青年が金の無い為に、人間生活へ貢献が出来ない。それを蛆虫同然の無駄な存在の奴が金をうんと持つている。そんな奴を殺して其金を有意義に使用すると云うのだ。

彼は、どう見ても生きてる価値のない金貸の老婆を殺害したが、運悪くそこへ戻つて来たお人好しの妹まで殺す破目になつてしまふ

血塗れの薪割を洗つて物置へ投げ込み、屋根裏の部屋で横になると、もう血の囁言を云うのだ。強奪して来た時計や指輪や貨幣の血を拭き、恐怖でそれらを離れた空地へ埋める。殆ど発狂して、遂には「人の死を何とも思わぬナポレオンなどは血の通つてゐる人間ではない。銅か鉄で出来てゐるのだ」と叫ぶようになる。

そのナポレオンが、流血の惨に耐えられなかつた話がある。アイラウの戦役でロシア軍を破つた時、彼は味方の将士の純白な服装が鮮血に塗れた妻さにたろろいで、それ以後フランス軍の服装を改めた。

血は人を征服する。犯罪心理学に教えられ、るまでもなく、血を流すのが好きな犯人は、生来的犯罪者に違いないのだ。

洗練された現代人は、流した現代人は、流した血の多いほど拍手したがる。最後に血と犯罪の文学で、描写の迫つてゐるのは、近松の「女殺油地獄」の殺し場であらう。

河内屋与兵衛は放蕩無頼で勘当される。金に詰つたあげく、兼ねて悪意の同じ油屋である天満屋へ金を借りにゆく。五月の節句の宵である。内では美しい妻女のお吉が子供達の髪を結つてやり、寝かしつけて一息する所へ

ヌツと、入つたのは与兵衛だ。金が駄目と知ると、では店の売物の油を代りに貸して呉れという。夫は留守なり、何か恐怖で慄えながらお吉が薄暗い売場で、油を計る後から、与兵衛はかくし持つた氷の刃を突き刺すのである。むつと血の匂がする様な場面だ。

「お吉を迎えの冥途の夜嵐はためく門ののぼりの音、あふりに売場の燈も消えて、庭も心もくら闇に、打ちまく油流るゝ血、踏みめらかしふみすべり、身内は血潮の赤づら赤鬼邪慥の角をふり立てゝ、お吉が身を裂く剣の山、目前油の地獄の苦しみ」で、金を盗んで逃げた彼は、血染の証文が動かぬ証據となり挙げられてしまふ。その時に人殺しはした盗み騙りは一度もしないと威張つて見せる。与兵衛はラスコーリニコフの様な殺人不能力者ではなかつたのである。

◎特選責めの写真◎

只今代理部に於て分譲中の写真は、愛好者より大好評を得ておりますが、今回特に吊り責めの作品を完成致しましたので、特に従来御愛顧を賜りました方々にのみ、実費分譲致したいと思つております。

(代理部)

穴

競馬の穴は色々の場合とびだしてくる。此処にA馬があるが、運悪く二着ばかりかσειでいる。B馬は三着に入ったり着外を走ったりしている。又C馬は四着を二度ばかり接戦している。そしていよいよ最終日の負馬レースとなり、A馬、B馬C馬、皆出てきた。A馬は当然本命となり今日こそ勝上るだろうと云う事になった。七頭立て二着迄の配当であるレースとなった。A馬はよく跳んで最後の障碍もトップだった。所が追込線に入つて俄かにB馬とC馬が強襲してきた。A馬は果命に逃げたが捉らえられてB馬がゴールを切つたとして又C馬にもA馬は投げられた。B馬とC馬は穴となったが、このレースには随分馬券師が突込んでいて、大穴ではない。こんな仕組まれたレースは幾らでも出てくる、しかし、こいつが競馬十年の苦勞した眼でないとなか／＼気づかんだ一番とりやすい穴はこんなのだ。負馬の

競馬二題



ラブ系駈歩レース。関東よりの遠征馬で二流の上級とこのM馬が売れてない。皆関西馬を買っている。十五六頭の多出走でM馬なぞ目につかんだ。M馬は牝馬だが、足が軽く非常に好調だ。今日が最終、まさか東京へ全然カラを背負わしても帰らずまい。何せ多出走で相当大阪の強剛がいるのでまづ単は危ないうまくいけば復穴だ。事実三着して大穴だ。又、新聞にその日の出走馬の批評が出ているこれなどよく注意吟味して見ていると穴の靈感がひらいてくるものだ。例えば今日の第六レースに往年の名馬K馬出走するが永らくの故障で休養していたもの故突然のレースは充分の期待を待てぬと書いてある。ファンにとつて此の新聞予想は神命のようなもので、皆ろくにK馬を見ずに他馬を買つてしまう。よく見ると、K馬はすばらしい好調で目も生

き／＼している。自信あればこそ馬主も厩舎も出してきたのだと考える。買う。無事跳んで大穴。故障上りとときくと誰しもレースが障碍だけに嫌つたり、二の足を踏んだりするもんだ。途中で落馬しないか？足を折らないかなどとね。ハツハツハツそんな気の小さい事では競馬はよした方が賢明である。

馬券師

馬券師と云つても矢張り一流二流三流と区別されるが、一流はともかく、二三流あたりの顔がおぼえられるようになるとしめたものだ。一流の連中には子分があるし、子分が多く使走りするから、子分の顔をおぼえるにしくはない。淀で話だが、しめり馬場で、東京のNO.1A馬、大阪の中堅B馬闘将C馬他二頭と云うレースがあつた。

A馬は流石、均整のとれた軽快な馬で、バシ／＼馬場ならわけなく勝てる筈なのだが生憎不得手のしめり馬場で、厩舎側では弱つていた。

A馬のこうした素質を知らなファンが大半だから、A馬は日頃の成績面から当然人気馬に祭りあげられた。新聞予想もチャンとA馬を本命と推してある。

競馬記者なんてもんは無責任なもので、こんなしめりて今日のA馬は難物だぞとわかつていても、一応本命馬にあげて人気をあふるのだ。A馬はドン／＼売れる。対抗馬はB馬とC馬なのだが、C馬はしめり馬場に強く頑健な吐馬で、B馬は馬格の悪い見栄えのせぬ老牝馬で、B馬如き馬を見ただけでは誰しもソツポを向くようなブーアな馬だが成績は中堅級を上廻つて大物を食つてゐる。さあ、こゝんとこだ。雨はシト／＼時雨れてきて益々A馬に都合わるく、B馬C馬に都合よくなつてきた。記憶のある人ならB馬がしめり馬場に強く、そんな際穴を出しているのをおぼえているだろう。

A馬は東京の花形Y騎手、C馬には俊敏T騎手、所が意外、B馬にはM厩舎の御大で名手の噂高いM騎手が騎乗した事だ。少しでも



赤野夢比古

黒つばいファンなら、もうこれだけでハハアインとうなづける筈だ。

果たして馬券師のKがB馬へ突込む。レースは駈歩二二〇〇米突。チャンピオンレースだ。しめり馬場をよく駈けつて、三馬は追込線へ廻つて来た。B馬をまん中に、A馬は内枠を三馬必死に競り合つてゐる。

A馬よく此の雨中を嫌わず必死の奮斗だ。Y騎手の妙手がそこに光つてゐるのだ。C馬の大きい馬格に隠れて小さなB馬は見えない。いよ／＼ゴール前五十メートルあたり、出てきた。B馬の小さい頭、首、がするするとA馬とC馬の間を抜けてでてきて、M御大の追込む姿も覗けた。A馬は響を使う。C馬は拍車を入れる。だがB馬に完全半馬身以上抜かれて投げられた。A馬C馬はゴールへ同時突入したが、外枠だけにC馬のハナ勝とな

るさあ大変だ。観衆は湧いた。B馬はムロン大穴であつた。

二

これも淀での話である。下見場でふと馬券師のYが目の前にいるのに気がついた。八百長騎手と影口のあるK騎手がM馬に騎乗して出ていこうとする。それがヒョイとYの方へ振向いて帽子をかぶりなおした。オンヤ！と思つてYのあとをつけて行くと、果たしてM馬を買つてゐる。

レースとなると本命のG馬は対抗のF馬に追込まれてF馬の逃切りかと見られたが、最後の障碍を跳んでからのM馬の脚勢の凄さは忽ちゴール前 F馬を捕えて首の差で投げた勿論大穴である。

競馬と云うものはこうしたものだ只。新聞予想や馬だけをボカンと眺めていただけではなか／＼儲らないものである。





珍版

南國隨筆

井村幸男



タレド・ランテバウ

南方各地における風俗、習慣といった面には、それぞれの種族によつていろいろと奇異な事例があるが、そのうちでもセレベス島はジャワやニューギニア以上に秘められた奇習を数多くもっている。特に中央セレベスのトラジャ族は今もつて珍奇な風習の中にその日その日を明け暮れさせている。

これは戦前、私自身が三年間あまりこのトラジャ地方の首都ランテバウで居住していた時分、直接見聞したものであるが、まず陰茎の亀頭に穴をうがち栓をさしこむという、およそ常識では考えられない奇怪な習慣である。細長いこの栓は通常タレドといわれ、水牛の角製であるが、差しこむために亀頭部に穴をあける。これは春季発動期前後の若者がやるのだが、穴をうがつのに粗雑にやると往々にして重い疾病を伴うし、まれに死に至ることもあり、一時オランダ政府が禁止したことがあつたが



戦時中再びこの地をたずねたところ、依然としてその風習は残存していた。

ところで何故こんな栓を差しこむのだろうか？——このことについて種々酋長はじめ地元の有力量者に聞いてみたが、ただ単なる伝統的な風習であるとのみの解答で要を得なかつた。だがこの種族間では、栓を差しこんで手術していかないものは結婚まかりならんということになつており、これにからんでこんなナンセンスな話がある。

たしか昭和十八年の秋頃だつたが、このランテバウに貿易商で坪野洋行という支店があつて、その社員にA君という大阪の外語を出た若い男がいた。そのA君、土地の娘に手をだし止むを得なく結婚式をあげる段になり娘の親戚一同に手足をしばられ、強制的にこの大手術をせられ痛い目にあつたと語つていたことを覚えていたがA君とも半年ばかりのつき合いで私がジャワへ渡つて以来、全く音信を絶やしていた。

ところが、この夏に上阪した折、梅田の阪神ビル前で

ひよつくりこのA君に再会、附近の喫茶店で小一時間あまりアレコレと数限りない南国のなつかしい思出話に花を咲かせたが

「妻は結婚後一年してマラリヤで亡くなりましたがどうもあの手術がこたえて、日本では結婚出来ない引目を感じ、もう三十に近くなつてますが、お見かけの通りまだ独り者で……えらい災難ですワ」

と、無精ひげをいじくりながらしみじみ嘆いていた。

話はまずこんな他愛もないものだが、A君のさらに語るところでは、手術後、性力は著しく減退、最近では全然慾望が起らないとのことで、トラヂヤ族が年々衰退し滅亡してゆく原因がここにあることをはじめて私は知ることが出来たのだが、A君にとつてこのことは男性としての致命的な悲劇に相違なく、ナジセンスだなんて笑つてはおれまい。

つぎに婦女が妊娠した場合のいろいろの禁忌があるがそれらを簡単に紹介しよう。まず、これは南国のほとんどの地域で見聞きすることだが、妊婦の住んでいる家屋の床を通ることが出来ないというのがある。これは悪霊が妊婦に悪い作用を及ぼすためだといわれている。それから妊婦は戸の方向を背にしてはならないという厳則がある。戸の方を背にして坐ると流産するといふのである。また戸の近くに坐すことも、児が生れないといわれ禁じられている。さらに妊婦は腐魚腐卵を口にしてはならない筈になつてゐる。腐魚腐卵というのはチーズのよう



なものでトラヂヤ族唯一の嗜好物である。

お産はすべて坐位で親子共に死に至ることが多い。ヘソ帯は竹片で切るが、俗にロロナといわれる後産物は家の近傍に埋めることになつてゐる。

オラン・プアヤ

ワニの交接はその容ぼうに違わず、獠猛そのもので、雄にはイボ様の肉質の生殖器とおぼしき突起物があり、交尾期になるとこれが充血して堅い球状になる、そしてその求愛行為は極めて猛烈で、特殊な臭気を体全体から発散し興奮、しきりに怒号する……「南洋の動物」というオランダ人の書いてゐる書物にこんな一節があつたことをおぼえてゐるが、私自身、たしか昭和十四、五年のことで、太平洋戦争のぼつ発する前年であつたが、ニューギニアの山奥へ樹脂(ダマール、ゴーパー)の採取調査に出向いてゐた時、レニンという山地の沼で、ワニの交尾現場を目撃したことがある。

レニン部落の村長の家はその沼辺にあつて、一夜私はこの家に世話になることになつたが、或夜「ゴーゴー」というすさまじいうめきにも似た鳴声に目覚めると、村長があわただしく息せききつて部屋へかけこんで来「トアン! すごい見物が……」と説明するところを聞くと、あのうめきはワニの雄の鳴聞で、目下慾情しきり、今に雌をみつめてあげつない情景が見られる……といふのである。

早速室の窓をあけ放つと、二、三十メートル前方に沼からはいあがつて、ツシン、ツシンと尾で大地をゆるがせ、怒号している身長二メートルは優にあらうと思われる巨大な雄ワニが月下にすさまじ形相を呈しているのである。

五分、十分——しばしかたずをのんで見守っていると「あッ！雌だ、トアンいよいよですぞ」と、村長ニヤニヤと笑いながら軽く私の肩をたたくのである。見ると件の雄ワニの背後から丈一メートルばかりの雌ワニが沼からゾロゾロはいあがつてきているのだ。

その瞬間、いち早く背後の異性に感ずいた雄ワニは猛然後へ向をかえ、波天荒のスピードで雌ワニに躍りかかつていった。そして、雌ワニを砂上に仰向けに尾でたたき倒し、上に乗りかかると同時に例のイボ様の突起物を強引に雌の排泄口にそう入、一瞬のうちに射精した。まさに強姦的交尾と恐れ入った次第であるが、このワニのどう猛な点をとらえて、南方では色魔をオラン・ブアヤなどといっている。

オランとは人をさし、ブアヤとはワニの事だが、戦時中シンガポールで、星港のオラン・ブアヤといわれ、巷間の子女をおのかせたあるアラビヤ人があつたが、この男、夜毎、夜毎各国人種の密集するシンガポールの大歓楽街である「大世界」「新世界」などを根城に、手あたり次第に強姦し続け、昭和十九年のはじめ捕ばくされた。この男に、わずかの期間で被害をうけた在シンガポ



ール子女約百数十名、マレー、華僑、オランダ、イギリス、オーストラリア人をはじめその人種は二十数ヶ国に及んでいた。

「わしは両親のふしだらな行為を夜毎みせつけられ早熟、十才の頃から女に興味をおぼえはじめ、以来わしの手にかかった女は今日までを集計すると優に千名は越えるだろう。廿才の時、世界各国の女をものにする悲願をたて、記憶しているところでは、すでに約三十ヶ国の女をおかしている。が、かねてから宿望としていた日本の女の味を知らずして捕つたことは、かえすがえすも残念だ」

彼は何の憶面もなく、尋問に立会つた憲兵にこういうのであつた。当時私はこの取調べの通訳に立ち会つていたが、日本の小平義雄なんぞ足許へもよれない行状の数々を、さらにこの男から聞き、さすがにシンガポールのオラン・ブアヤと異名をとつただけの所似がうなずけた今思えば悪気のない、アラビヤ人に似ず色の白いい男だつたが、やはり目は色慾に輝いていた。この男も刑務所にはおりこまれ、間もなく精神的に極度に異状を来したが、忘れられない南の思出の一コマだ。

ブロンブアン・バンカ

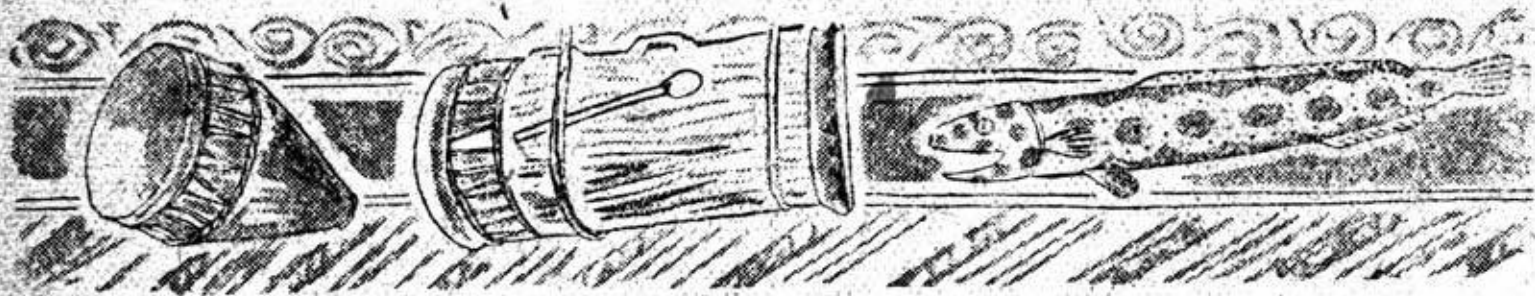
スマトラの東海岸に錫の産地として有名なバンカという島があるが、この島の首都パンカルビナンで私はとてもない目にあつたことがある。というのはたしか、昭

和十八年の末頃だつたと記憶しているが、このペンカルピナンに中学時代の旧友K君がいると聞いてジャワのスラバヤから旅行をかねて会いに行つた時だつた。

幸いその友人とは再会出来た。しかし「別れて五年になる、今晚は大いに飲み明さんか」ということになり、K君行きつけの華僑のあるバーに出かけ痛飲、つきない学生時代の思出話に花を咲かせたまではよかつたが、相当酔もまわつて「君もジャワからの旅で疲れたろう、宿舎へ帰つてくつろぎあらためて飲み直そう」ということになり、二人がふらふら千鳥足で表へ出たのはもう夜の十一時をまわつていた。

そのバーからK君の宿舎まで二丁あまりあつたが、ちやうど途中の十字路まで来た時、K君は思いだしたように立止り「そうだ君にスマトラ一の美人を紹介しなくちやあ」とその十字路を右にとつて小高い丘の上にあるアタツブぶきのとある原住民の家の前に私をつれてきたのである。

「ちよつと待つて呉れ給え、うちの社のタイプリストでネ、すごい美人なんだ、呼び出して一こん君のためにサービスさすヨ」とだいぶ酔もまわつていたが、酒の強いK君、たしかかな足どりで家の門戸を押し開き中へ入つて行つた。ところが、どうしたことかすぐ飛び出してきて君、とんでもないものを見ちやつた、玄關の横窓からまアのぞいて見給え」意味ありげな表情たつぷりで、こういつてしきりに私のシリを押し無理矢理に門をくぐらす



のである。

「何事ならん？」好奇の念にかられ、酔も手伝つて私がヌキ足サシ足窓辺により目を内部にやるとコワ如何に一人の妙麗の美人、といつても色の浅黒い、小柄の原住民であるが、顔面の整つたK君自慢の処女が、目前に全裸となり、寝台に腰かけてしきりに恥毛を小さいクリス（短剣）で剃っているのだ。

「南国の女性ほとんど恥毛がないとのことだが、さではこうやつて剃っているのか」

私は何か素晴らしいものでも発見したように悦にいらかたずをのんで見守っていると、背後で「どなたでしうか」と原住民の声、おどろいてふりかえると二人の老夫婦が不審そうな顔つきで私を見すえるのである。「イヤ、アノ別にソノ……」とつきの事で私はどう返事していいやら全くウロたえてしまった。が「どうも最近日本からやつてきたばかりで土地に慣れませんのでツイ家を間違えました……」とごまかしたが、その翌朝早く昨夜とがめられた老夫婦がうちそろつてひどく真剣な面持でやつてきて、私に重大要件があると面接を申入れてきたのである。

老夫婦——即ち娘の両親が外出先から帰つてくるのを認め素早くランサツプの木陰に身をかくしたK君には何のことはなかつたが、私は現行犯である。止むなく会つてみると、「昨夜あなたは窓からどんな情景をみられました？、娘は昨夜来から死ぬような思いをして悩んでい

ます。あのような場面を夫以外に見られることは女の一番大きな恥で、殊に処女にとつては死よりもまして辛いことなのです。われわれの種族のおきてとしてこれを盗み見たものは女の夫になつてもらうより方法がありません、サア今すぐ娘と結婚式をあげて下さい」と云うのである。

これにはどきもをぬかしたが、ジャワには仕事をかかえているし、内地には女房、子供のある身——困りあぐんだ結果、K君の奔走で、地元の酋長に仲に立つてもらつて「窓から何も見なかつた」ということにして話がついた。何だか今思えばウソのような話だが、このことを思い浮べる度に私はいつも一人苦笑する。

ダツチ・ワイフ

もう大分以前の井上友一郎の作品に「竹夫人」というのがあつた。たしかこれは昭和十八年頃の作品で日本評論か、文芸かに掲載されていたと記憶しているが、この「竹夫人」というのは辞典によれば夏季の暑さを避けるために抱いて寝る竹製の籠とある。氏もそのように書いていたが、氏はまたこれを女が抱けば「青奴」とでもいうべきだろうと解しやくしていたと思う。

これは現在には知らないが中国人が愛用しているものらしい。私は中国は知らないが、戦前、戦後を通じて十年余り南方といつても広範だが——主に旧蘭領地区にあつて、この「竹夫人」に類似した「ダツチ、ワイフ」なる



ものを夜毎抱いて寝たものである。

この「ダツチ、ワイフ」は「竹夫人」と異つて竹製でなく、防暑用のものでもなく、ただ寝やすいために抱いて寝る枕——とでもいおうか、年中暑い南国のことであるから、かぶつて寝る毛布も夜中にハネ除き、よく風邪をひくが、これを抱いて寝ると腹が冷えないからめつたに寝びえしない、寝やすいし、腹が冷えない一石二鳥の役割を果たしているわけなのである。

形は長いので一メートル程度の丸く長い枕様のものの中にカボック（綿）をつめた至極やわらかいもの、高級品になると、孔雀の羽根でその周囲を包んだものがあつたが、これなど抱いて半時間も寝ていると体温が伝わつて常に温度を程よく維持し、あたかも女体を抱擁して寝ている——といった誠にもつて艶情溢れる逸品である。

かつて暫くでも南国におられた人であれば、どこかのバツサン、グラハン（ホテル）でお目にかかり抱いて寝た夜があると思うが、私など引揚げてきた今なお綿をつめ、類似したものを自ら作製して愛用、現在ではなくてはならない寝具の一つで、これがなかつたらとうてい安眠出来ないほどの必需品になつている。

だから旅館で、旅行や出張で泊る時は大いに困るのである、まさか一メートルものでつかい枕を持つてあるくことも出来ず、ここ三ヶ月ばかり前社の連中五、六人で上京した時にこんなことがあつた。

新宿の安宿で五、六人がどこもかしこも旅館がふさが

つていたので止むなく泊つたことがあつたが、夜半、隣りに寝ていた同僚のA君を「ダッチ、ワイフ」と間違つて抱きつき、からみついたものだから、A君びつくり仰天、「人殺し！」などと、とんでもない狂声をはりあげ宿中を一さわがせした。

聞けばこのA君極度の恐妻家で、ちようどバラバラ事件の起つた当時のことだから夢に女房がのつかかつて首をしめつけようとした……と告白していたが、とんだナセンスとして今でも社内のお笑い草になつてゐる。

話は横道にそれたが、この「ダッチ、ワイフ」はオランダ人がインドネシア諸島を統治した当初、司政官が持ち来り、一般原住民間に普及したといわれている。

「ダッチ、ワイフ」という言葉は色街では娼婦をさしていわれる場合もあり、また女性が男性に恋情を訴える場合など「若し私がお嫌いなら、あなたのダッチ、ワイフでもいいから可愛がつて……」というふうに二号とか妾という意味にもとられている。

はじめに渡南しバツサン、グラハン（ホテル）に泊ると、寝台の上に横つてゐる長く大きい一見枕とおぼしきものに奇異の眼をたれしもが向けるが、寝様は無恰好にせよ、寝やすいことは事実であるし、医学上幼児の発育にもよいといわれ、赤子でもこれを抱いてスヤスヤ眠つてゐるほほえましい光景をみうける。在南華橋などは虎の皮で巻いたりし、なかなかこつたものを作り抱いて寝てゐるようである。

(終)



椰子の樹に囲れて遠く川を漕ぐ撓の音とペントンを唱う唄声に郷愁をそよる南国情緒の溢れるインドネシア群島の中には、以上の外にも色々の変つた習慣や行事があつて、エトランジェである我々の眼や耳を楽しませてくれる。回教徒であれば誰でも一度は受けなければならぬ神聖な行事としての割礼も、彼等の怪奇な行事の中の一つである。

アスタナ王宮やハジの豪華な邸宅には必ず割礼殿がある。イスラムの厳格な儀式によつて累代の信者は男子七才、女子五才の時に割礼が行われる。割礼を受ける少年は腰に新しいサロンをつけ、身体全部に黄色い粉で厚化粧をし、花冠、頸飾及び腕飾に白い香りの高い花を飾つて、一見花嫁の様な装いで僧侶に導かれて、四方壁のない家の前面の腰掛に坐らせられ、大衆の面前で割礼の式を受ける。

割礼（スナット）というのは宗教的な儀式の一つとして幼児の包皮を切断する風習であつて、太古には石製の小刀を以つて切断したが、次第に硝子製又は鉄製の器具を用いるようになった。

割礼の原因については包皮を除去すれば、龜頭の知覚が鈍感のなるため、性交の時間を延長して相手に多くの快感を与えるために此れを行うとか或は人身犠牲の遺習として包皮を切断しこれを神に捧げるのであるとか、色々の説がある。

(終)

★羞恥心の発達★

赤坂 剛

羞恥心の効果

「人類の恋愛生活が他の動物たちのそれから明らかに区別されて全く独特のものとなるに至つたのは、とりも直さず人類に羞恥の感情が発達した結果であり、また高等人類の恋愛生活は、そのすべてがこの羞恥感情によつて支配せられている」と。ウイルヘルム・ボエルシェは言っているが、吾等の恋愛生活に於て羞恥感情が重大な役目をしている事実に就ては最早議論の余地はない。また吾々の恋愛が他の動物達のそれと区別せられるに至つた事実の中にこれの絶大な働きが与つて力あつたということも信じられる。ただその全部がすべてこれの賜物であるとしてしまうことは誤りとしなければならぬであろうが、それ

の発展の過程——即ち人類進化の過程に於ての重大な一つの要素動因をこれに見出すことは容易である。ここに吾等がせん明したく思うことは、それが如何なる順序を経て発達して来たか、そして現在の吾々の生活中ではどんな作用をなしているか。また我等はそれに対して何を知るべきであるか——これらの重要な諸問題に就いてである。幸い今日では吾等の此の要求に添わんがための多くの研究が発表せられている。

今日、本問題に関する研究は種々なる方面から試みられているが、其の中最も肯綮に価すると思われるものは著名なる人類学者、人種学者の批判的研究の結果である。就中、彼の権威あるハヴロック・エリス氏によつてなされたものは、その代表的とせられているの

である。
氏は浩かなる資料の検窮によつて得たる一つの結論として、此の感情に動物的要素と社会的要素との二つがあることをせん明している。

動物的要素とは、性の本質的特有物であつて、羞恥心の簡單なる形であり、また其の最も原始的要素である。これは疑いもなく男性よりも女性によつてより強く発達して来たと思はれるもので、其の原型は、女性が好ましからざる男性の接近に対して生殖器官の保護に努力せんとする心意の表現によつて見られるところのものである。而して其の根本は女性の性的周期性と頗る密接な関係をもっている。即ち此の時期以外に於ける男性の接近に対しては極力これを防衛せんとする一つの有



機的事実として見られるものだからである。而も此の有機的事実は、また他の一面に於てはリビドー——即ち將に生殖操作の行わんとするに際して、其の相手たる男性の性慾を亢奮せしめ、一層その効果を大ならしむる上に与つて力あるものとなるのである。

これらの事実に就いての觀察は、最も手近な自然界からもそれを得ることが出来る。例えば我等が飼養している牝犬に就いて其の交尾が如何にして行われるかを觀察することによつても理解出来る。即ち彼は彼自身の発情を自覚しない以上如何に其の吐によつて迫られようとも、決してこれに應ずるものではない。逃げるか、噛みつくか、或は躊躇するかして廻くまでも防衛に努める。この意味に於て動物の尾は、予めかかることのなきよう其の生殖器の露出を防ぐための道具となることに目的の一つが見出されともいえるのである。

斯様に彼等は、彼自身の春情を自覚せざる以上は、廻くまでも異性の接近を防衛せんとするものであるが、更に起水期中に於てもこれに似た操作が行われる。

即ち彼等は、其の吐の接近を知れば必ず一旦はこれを拒絶するのみならず、時には彼自らが吐に対して挑発を試みながら吐の接近を知れば逸ち早く逃げ去るのである。しかしながらこの場合には、前の如く廻くまでも反抗の氣勢を示すようなことはない。かくて一旦は逃げ去つても、やがて再びデリケートな態度によつて其の相手たる吐を誘うのである。

次に社会的要素とは嫌厭の情によつて起されるところの恐怖で、例えば、原始人が生殖器部位よりも臀部の方を隠したのとは彼等にとつて最も嫌厭の対象となつたものが、糞尿であつたことから起つたもので、この嫌厭すべきもの乃至これと関連する部位を他人に見られることを恐れる心理がやがて羞恥感情となつたというのである。

更に羞恥心の発達に衣服の発達と密接な關係をもっているのはいうまでもない。しかし人類の羞恥心は衣服が先であつたか羞恥心の方が先であつたかということに就いては多少の議論がないでもない。例えば、エリス氏は「多くの心理学者は羞恥心をば単に人が衣服を纏うようになつた結果と見て来た。しかしこの見解は、十分に確めた次の事実によつて覆されるであらう。

という事実によつて」
 といつてゐるに反し、氏よりも遅れて、寧ろエリスの研究を更に補説したものだといわれているカルル・フォン・デン・シユタイネン氏は、彼自身の中央ブラジルのペカイリに於ける觀察に基いて次のような結論を下している。

「私は全裸体で生活している彼等インデアンは全く羞恥感情に欠けているということを實際に觀察してからは、最早羞恥感情の先天性などということは信じ難くなつた。而して遂にはこの羞恥感情とは、布片によつてその身体のある部分が蔽われた後に至つて初めて起つた感情であるということを経験せずにはいられなくなつた」と。

戀愛生活に於ける 羞恥感情の効果

次に、婦人の羞恥心が男子の情慾を起さしめる上に極めて重要な役目を勤めているのは明白な事実であるが、尙ここに、これに關する深き洞察と知識の証左を示してくれた二人の学者の説を引用しよう――

カサノバの記録

カサノバは、彼が嘗つてベルンにいた當時

その湯屋に赴き、土地の風習に従つて一団の湯女の中から一人の娘を選んで自分の女中としたことがあつたが、といつてその時の模様を次の如く述べている。

女は先づ男の着物を脱がし、次で自分も帯を解いて一緒に浴槽に入り、頭から足の爪先までを洗つてくれた。仕事中は其の態度が至極真面目で、一言も話をしなかつたが、やがてそれが終ると娘は何か自分に言い寄つて貰いたそうに待ち構えているのに気がついた。そこで自分は、斯うして洗つて貰つてゐる間は殆ど無関心の状態でいたといつて其の心持を説明したのだといつてゐる。そして尙彼はこれに付言して

「私は娘の体をみつめてはいなかつたけれどもそれでもまるで眼をそらしていたわけでもなかつた。……美しい面立。パツチリとした鈴のような眼、齒並の綺麗な愛くるしい口元健康そうな顔色、張り切つた胸、その他、何から何まで一点の非の打ちどころもないと思つた。そしてこんな荒い仕事をしていてどうしてこんなかと思われるほど掌の柔かだつたことまでも確かに感じていた。ところでこのスイス娘の年齢はといへば、まだやつと十八位、私ばとう／＼身体が冷え切つてしまふま

でもぐず／＼してしまつていた。この原因が何であつたか？それは確かに自分に聞いて見たい疑問である」と。

スタンダールの戀愛論より

スタンダールはいつてゐる。世には明かに三種の羞恥心が教えられている。恐らくこれは、幸福以外には何ものをも産み出すまいとする人類文化の唯一の法則によつて生れたものであるだろう。

猛禽類が水を飲まんとするときには先ずその身をかくす。これは頭部を水中に突込まねばならぬので、其の瞬間は全く無防衛となるからである。私はオタヒチ島でこの事実を目撃し、其の後これを羞恥心に關連して考究したのであるが、その後これ以外に羞恥心に対する他の自然的基礎と思われるものをまだ一つも見出してゐない。

実に恋は文明の奇蹟である。野蠻人や、きわめて惨忍な性質を持つた種族の間にも戀愛の行われているのは見るが、それはただ野卑な性質のものたるに過ぎない。

恋に想像の助けを与えるものは羞恥心である。かくてこそその恋には生命が与えられる。羞恥心は、少女らにとつては其の母によつ

て極く幼少の頃からそれが教えられる。また世間の眼が極端な嫉妬心で教えるものだといえる。

ともあれ、かくしてその少女は未來の恋人の幸福を前もつて守護することになるのである。

氣弱な、心優しき女にとつて顔の赭らむようなことを男の前で許すことほど辛い責苦は他にあるまい。若しこれが負けぬ氣の女であつたら寧ろ身を寸断にせられるとも許しはしないであらう。

恋する男の優しい心根から、僅かの我儘でも許されるならば、女は即座に飛び立つ喜びを感じるであらうが、男が女をたしなめるような氣配を見せたり、或は我を忘れて喜ばぬことでもあれば怖ろしい疑いの心が残るに相違ない。

はしたない女でない限り彼等は極めて内氣な物腰のうちに一切のものを獲るのである。羞恥心の善用に就いていへば、それは恋を生むところの母である。その心の作用を見るならば、これほど素朴至純なものが他にあるうか。その胸には願いが満てるにはあらで、羞しさの情が溢れるのだ。想う心が阻まれて想いが仕草に現われる。

心優しく気位の高い女——この二つの性質はそれが原因結果をなすものであるために自然に平行するのである——は、若し、ただならぬ心を覚ゆる男が猫をかぶつて慎ましく冷静な態度を装うならば直ちにこの男の常套手段に心を奪われてしまふに相違ない。

羞恥心の弊害に就いていえば、それは絶えず女を虚偽に導くことである。

女子の性衝動の拘束と男子のサド的快感

女子の羞恥的態度が男子の恋情に及ぼす影響、並に女子の恋情表現に於ける羞恥感情の作用に就いては、大略前の二氏の説明によつて明かにされたと思う。エリス氏は尙ここにアドラー氏の議論を引いているが、アドラー氏が、女子の性衝動は、常に打ち克たねばな



らぬ或る禁制によつて拘束されているといつてゐるも要するにこの女子の恋情表現に於ける羞恥感情の作用を指したに外ならない。

事與女子の恋には常に無口、臆病、氣苦勞などという薄いヴェールがかけられているのでこれがまた恋する男子にとつては其の御機嫌取りの一挙一動に於て恋の勝利、相手を征服して行く楽しみ——あらわに現わしていない寧ろ隠そうとする相手の氣持を観破しては其の正体を曝露せしめて行く楽しみ——（私はこれを男子の自惚的満足と一種のサド的快感との二つであると思う）が味つて行かれることにもなるのである。

元來、女性心理の中には多分にマゾ的傾向を有し、男性心理の中にはサド的な傾向を持つてゐるのであるが、女性側のそういう傾向の精神的、肉体的の表現は極めて複雑な幕の中に奥深く包含されているものであつて簡単にその全貌を語る事は危険である。

女性の羞恥感情がサド的傾向を有する男性にとつて極めて強烈な媚態となるという事實は、女性自身にとつては性衝動と羞恥感情の間に密接な相互關係を有するだろうことが想像される。征服する方の側に於ては、その対象が困難なる態度を示せば示す程、成功した暁の歡喜は大となるのである。此処に男性の感情に抱く謎がある。

女性の恋情表現の態度が、逡巡的であり羞恥的であるのに反して、男性のそれは猪突的であり猛進的である。羞恥心の発達が先天的に女性の側に濃厚であるという点も、女性の恋情表現の一手段であり、一つのテクニクであるとする時、男性のサド的快感を増進せしめる作用が自然とそこに馴致されたものであるかも知れない。

恋愛感情を有する所の異性に対して特に強烈な羞恥感情を燃え上らせる婦人の多い事實は意識するとならないに拘らず、恋情表現の一手段としての羞恥感情の発散といつて誤りないであらう。

【読者通信】

毎月下旬が近くなると「奇ク」入手の日が待ち遠しく毎日々々会社の帰り時刻がいらだたしくなりません。私は本が好きで大分購入もしましたが、月刊雑誌では「奇ク」程入手を待ち焦れることは少いことでした。特に六月号以降は編集に持ち味がでて参っていることに大いに期待しています。八月号で少し落胆しましたが九月号でまた希望を生んで来たのは、やはり「奇ク」の持つ大衆性の魅力。「性のアブノーマルの限界に悩む告白」の持ち味であり、こうした進み方に「奇ク」の特続性があるのだと思います。編集陣各位の御健闘を祈るや切。

（川崎市 旗 秀利）

○ 諸者通信をかりて私の悩みを打

ち明けたと思います。長い間満たされなかつた淋しさを慰めてくれる雑誌は奇譚クラブだけです。日夜身辺から離さず、繰り返えし読んでいます。誌上の読者通信を見る度に私と同じ悩みの方の多いのに驚きながらも、多数の兄弟を得た様に心強くも思います。

私は幼少の頃から男の子として育てられ、生活させられて来ましたが、物心のつく頃から女になりたいという気持があつて、それは生長するにつれて強くなるばかり何よりもこの気持が終生の悲願なのです。秘かに自分の部屋にとじこもつて女の着物を着て化粧して独り心を慰めています。冬の風の寒い夜更け、人通りの少い街を女学生の姿で歩いた事もあります。一度、男娼の仲間に入る決心で上野の年増の男娼の世話になりましたが、あの露骨ないまわしい娼婦的な行為を見せつけられて心が寒くなり、そこを飛び出しました。私は女の生活がしたいのが悲願で

す。けれども金銭で売淫することは好みません。只女として暮すことが出来れば本望です。もし同情して下さる男性の方がおありでしたら、同様したいと思います。人妻として家庭を営む覚悟を持っています。

現在の環境では女装の生活が許されませんので、平常は男性として暮しています。長い間の勤めでは相当の地位にまでなつていますが、周囲の人々には仮面をかぶり、出来るだけ自分の本当の姿をかくしていますが、女装の生活の出来ないその事が何よりも私の苦悩です。美しい男性を見ると心がひかれます。自分よりも美しい男性には羨しく軽い嫉妬心さえ起きます。男の美しさを知るようになつた此の頃、女よりも男の美しさは幾層倍も優れていることがわかつてきました。

私、美しい男性は女性以上に美しい服装をすべきだと思います。赤や緑や紫は女だけの専有すべき

ものではなく、美しい男性でも元祿時代の美少年達の華やかな服装のように髪飾りをして美しいドレスをつけた方がふさわしく、貧弱な女性よりもどれだけ優れていることでしょう。美しい男性や少年が女性と同じ様な美しい服装で街を歩くとすれば街はもつと美しくなり、人々の心も豊かになると思います。私の言うことが我儘でしょうか。私の考えに賛同して下さい。この欄を借りて御返事下さいませ。

同封で私の最近の女装の写真を送ります。私と同様の女装を望んでいられる方々と誌上を通じて写真の交換が出来、更に交情を通ずることが出来たら幸いです。

（山下 清）

× × ×

× × ×



都會の異態交響樂

中河津規男

人が寝静まつた深夜、ゴミくぐと家の建ち込んだ露地裏や横丁を歩き廻つて見給え、そこには人の知らない猟奇がエロとグロとスリルのカクテルが渦巻いているのだ。その家並の中には異常な好奇の対象となるべきストーリーがどれだけその生れ故郷たる闇から闇に舞い戻っているかわからない。

新聞や雑誌に報道されない事件が如何に多いことか、又たとえされてもうまくカムフラージュされて骨なしとなる場合が随分と多い新聞記者である僕がそう言うのであるから間違いないと思うが新聞ほど真実を報道するよ

うに見えていて嘘を報道するものはない。一般の人は活字になつたものは無条件に信用するくせがあるが、新聞を読む際は五分頭から割引して考えねばならない。

それはそれとして、毎日の新聞紙上に現れる猟奇のカクテルは実にその一破片の又一破片に過ぎない。僕が拾つた記事の中で、最も薄汚ないエピソードを二三こゝに挙げてみよう。

第一話 羊の化物

第一話の主人公は、山田一郎と呼ぶ十五才の少年である。彼は七才の時、既に五百才以上の美婦人達に恋を感じ、夜毎、彼女等を抱きすくめては、名状すべからざる遊びを続けた。

一郎の家は、町はずれの貧乏な魚屋である両親の外に幼い三人の弟妹と、五百何十才になるこれ等の美婦人が雑居していた。

常に蛇に腕を噛ましている美婦人と、うゝになつた眼をあけて狂氣した娘が、最も彼を喜ばした。これ等の絵紙は、いずれも彼が拾い集めたものばかりである。寢床に入つて

からの一時間の楽しみ——彼は毎夜それ等の美婦人の一人を噛み続け、食べ終らなければ寝られなかつた。彼の母は、ある時、それを見つけて、「羊の化物」と、彼を呼んだ。羊の化物は、色白で、眼涼しく、小柄で二十日鼠のように素早く、栗鼠のように逃げ廻つて、何時も両親をてこずらせたが、十三才の時、父母の命令で貯金局の給仕となつた。真面目によく働いて、小学校卒業以上の字も書けば、大人の機嫌をとる事も知っていたから、このまゝ

成人したら、或は立志伝中の一人になつたかも知れないのだが、因果な事には、彼の最も不満であり、アンニユイであり、情なかつたのは、毎日近所の女の子と遊べない事であつた。

ある夕ぐれ、彼はお菓子を買つて来て、自宅附近で遊んでいる四五人の女兒に分け与えた。いづれも彼より年下の五六才から八九才の薄汚れた貧家の娘達であつたから、彼は非常に喜び迎えたのも尤もである。

これに味を占めた彼は、毎日のようにお菓子を買つて来ては、それを一つづつ配り乍ら彼女達の汚らしい鼻の孔に指を入れたり、口をひつぱつたり、お尻をつねつたりしていたこの女の児の中に、七才になる友田ミチ子という色白で、大柄でむつちりと太つた子供がいた。特に可愛がつていたが、この子は妙に意地汚く、ある夕、お菓子の分配の事から、他の女の子と喧嘩をし出したので、一郎は彼女をなぐりつけた。

火のつくように泣く——鋭いきりでもむよな金切り声が、ジリジリと彼の鼓膜を刺戟した。一郎は、真青になつて突つ立つていた泣き声に驚いて蜘蛛の子を散らすように、他

の子供達が散つて行つたが、彼は唇をひきつらせ乍ら、又もや、ミチ子のその美しくふれた白い頬を力一杯なぐりつけた。

「わア！」と、思いもかけぬ第二の打撃に、今度は声を限りに泣き叫んだ。その時一種異様な快感でガタ／＼身を震わせた。あの何百才もの美婦人達を噛み続けた七才頃からの楽しみが、数十倍して彼の五官を刺戟したのである。

昨年×月×日以来、数回に亘つて幼女（七才乃至九才）が、ゴミ箱の中や縁の下や溝の中に、無惨に両手を縛られて、息も絶え絶えになつてぶち込まれていた事件が新聞を賑わした事がある。犯人捜査は、毎夜となく続けられたがどうしても解らない。この事件が発生して約一ヶ月ばかり経つて、一郎が真犯人として捕えられた。

一郎は、あの友田ミチ子の悲鳴を聞いて以来、その異様な悲鳴の持つリズムに、名状すべからざる快感を覚え、その性癖を満足させるために、可憐な幼女にエロチックな悪戯を試みた後、なぐりつけては、泣き叫ぶ女兒を見て喜んでいたが、だん／＼それだけでは満足しなくなつて、遂に手足を縛つて転々せしめ

死の恐怖に絶息せんとする悲鳴を聞いて楽しんでいたという。

彼の聴覚の異常さの外に、その嗅覚も鋭く発達していた証拠には、彼は毎晩寢床で近所のゴミ箱で拾い集めた汚点のついた紙を、ぐにや／＼噛み続け、果てはそれをのみ下していたのである。

第二話 ドンファン

昭和×年×月×日 某所で時計を盗んで、××署に捕えられた容貌醜怪を極めた一青年がある。

××署では、××強姦犯人かも知れないと云うので、嚴重に訊問を続けたところ、意外にもこの世にも醜い青年が、稀代のドン・ファンであり、驚嘆すべき色男中の色男たる事実が判明した。

彼が始めて捕まつた時は、××大学に籍を置く、当時二十二才の学生で、兵庫県武庫郡本山村山本富治の長男義一といふ、相当資産家の独り息子として何不自由なく、勉学を続けていたのである。若し色情狂というものが遺伝であるとするならば、彼はまさにそのエロマニアの正系であり、嬌嗣子であつたわけ

である。彼の祖父も父も、郷党漁色史の最も光輝ある桃色の部分を塗りつぶした選手達であつた。

彼の母も亦、亭主から亭主へと飛び石の如く渡り歩いた多淫極まる女性であり、実に彼の父は、その十何番目かの名譽ある亭主達の一人であつた。こうした両親の中に生れた義一が、先天的にその変態に恵まれ、遂にグロテスクな巡礼に一生を賭するようになったのも、宿世の業惡の報いであつたかも知れないとまれ、その堂々たる変態性慾史を詳細に述べようとしたら、恐らく巨大な一冊子が出来るに違いない。実に細心を極めた計画の下に、超人的努力をもつて、悠々としてエロ・オン・パレードのランナー中のランナーたり得ていたのである。

彼の変態性の目覚めたのは、割合に遅い。郷里の中学三年生の時、彼は三人の女中の一人にその童貞を捧げたが、それでもそれを非常に恐れて、少し足りない女中の露骨な挑戦を避けていた。その中、その女中が嫁入する為め、今までの事をケロリと忘れて帰つたので、悲観の末、一時は死をさえ決したというから、少年の純情的なところは持つていたも

のらしい。

彼をして勇敢なエロ・オン・パレードの選手たらしめたものは、畑の中に点綴するW・Cであつた。ある日、その天空に明け抜げられたムシロ張りのW・Cの中に、野良仕事に出ている百姓娘の姿が見えた。ニョッキリした白い大根が土の上に少し現れている。

あの艶々しい美しさとその奇妙な曲線に彼の心は異様に躍つた。

それ以来、彼は村のこうしたW・Cを一巡して来ないと妙に眠れなかつた。(B+D) = 2a + 2ad + D² とい

う簡単な代数さえ解りかねた。彼はシシという流れの音によつて老若男女何れのものであるかを聴きわけた。その流出の強弱の程度を、毎日々々丹念にその日記に書き続けた。

路上で遭う村の娘を見ると、直ぐ、×月×日×時頃、何処の畑の中に於いて、如何なる曲線を持ち、どんな強弱の音を示したかを思い浮べる事が出来た。そして同一人でも、時に



よつて、場所によつて、健康の状態によつて如何にそれが微妙な相違を示すかを識り得た彼のこの驚くべき科学的研究は、上京して大学の制服をつけ、否、彼が実に稀に見る天才の色魔として活躍した時代でさえ続いていたのである。彼はこの因果な、グロテスクな興奮を得るため、遂には悲惨な後半生を送らねばならなかつたのであるが。

それはさて——彼が父の許しを得て上京し

××大学の新生入生として、帝都の太陽を見る事になつた。流石にその当座は、帝都の圧倒的な雰囲気、眩惑されて、真面目な一学生として勉学を続けたが、勿論三ヶ月と続かなか

つた。

より以上の戦慄すべき誘惑は、忽ち彼の心を目覚ました。相変らずW・C覗きを専門とする傍ら、遊女買いを覚えたのである。金のあふるにまかせて、吉原を振り出しに、洲崎、品川、新宿、川崎という具合に、市内外の遊

び場に、彼らしいビッグ・ペレードを試みた。この遊びを殆んど毎日のように約一年間続け、ている中に、彼の云いようのない醜怪な変態性が発揮された。

彼は相手のプロステテュートから、そのいまわしいズロースを密かに窃取して、三つの大きな柳行李を一杯にした。戦勝記念品は、しかし、こればかりではない。相手の女が豚の如く寝込んでゐる時、彼は電光石火の早業でその女の恥毛を数本つつ捕獲した。そしてそれを丹念に、各々小よりの如くよつて、美しい輪をつくり、二十枚からなる半紙の一端に糊で貼りつけた。この二十枚の半紙には、彼独特の醜怪な筆によつて、その夜の女の、特徴が詳細に書き綴られた。実にこの小冊子は五百数十冊に達した。

しかし、こうした娼婦達の魅力は、長く彼を惹きつけなかつた。千篇一律のおぞましきコンピネーションに飽きた彼は、大学の二年の中頃から、俄然、素人の婦人に興味を持ち始めたのである。

彼が学資を余り使い過ぎる理由で、父からの送金がなくなり、時計泥棒を働くまでの約一年間が、この醜惡な男の最も輝かしい時代

である。

彼は自分の容貌については、少しもひげ眼を感じなかつたと云うから鉄のような心臓を持つていたと云つてよからう。

顔色飽くまで黒く、小さく三角型の眼、黒ん坊のように厚い唇、四角に張つた顎、太く低い鼻、その上いかつい真四角な肩、四六時中脂切つてゐる手足、どの一つだつて妙齡の女性の興味を惹くところを持つていない。恰も、あのドイツの偉大な画家グロッツスの描く醜怪極まる主人公に似ていた。

しかし、彼の女性に対する自信の強さには取調べの係官も呆れかえつて、馬鹿々々しくなつたと云う程だから、恐らくエロスの神でも乗り移つていたのであらう。醜惡な容貌も彼程になつたらかえつて稀世の美男子に比敵するイットを持つものかも知れない。

彼が、素人の娘に興味を持ち始めて、捕えらるゝ一年三ヶ月程の間に、三百三十余通りの恋文を書いている。勿論、その相手が誰であつたか、流石の彼も全部を陳述する事は出来なかつたが、その中反応があり、とにかく彼と交際をした女性は百二十余名に達している。相手は、バスの女車掌、助産婦、看護婦

女小使、百貨店のショップ・ガール、ダンス、魚屋の娘、女中、女給等々凡ゆる職業の女性があり、その中、女学生が十三名あつたというから、驚くの外はない。殊に魚屋の十九の娘の如きは、彼に血道をあげて家出し、女給になつてゐるし、二十六才で一度嫁入りした経験のある看護婦の如きは、彼に小使錢をみついでいた。

この百二十余名との接触のキツカケ、情交の日程、情事の種々相等は、彼の絶大な精力によつて、実に詳細にその日誌に書き続けられてゐる。係官は、誇大妄想的色情狂としててんで問題にしなかつたが、その中には多数の不良少女もあり、その反対に良家の子女も交つていたので、その中から十数人を呼んで調べるに及んで、始めて真実である事が判明し、啞然として二の句がつけなかつたと云う。勿論、この頃の彼は一日も登校してないが、不思議に授業料だけは納めていたというから、実に常人では判断する事が出来ぬ、一種異様な生活を続けていたものらしい。彼がどうしてかくも多数の女性を短時日の中に征服し、漁色家のレコード・ホルダーになり得たか、その手段方法は？詳述するをさけ、第

二話の結末を急ごう。

彼が三回目の窃盗罪を犯して捕まった時、片眼がつぶれて居り、もう一つの眼もつぶれかゝつていたという。実に勸善懲惡的結末であるのだが、やはり神はこうした驚嘆すべき変態男の生存を喜ばないのであろう。

郷里からの送金をたゞれ、宿を追われ、野

犬の如くなり下つた彼

は、その神通力を失つ

て素人の娘達は勿論、

遊女達の側へもよる事

が出来なくなり、コソ

泥をし乍ら、少年時代

から専門にしていたW

・C覗きを続けていた

が、ある日、共同便所

の片隅に腐つたウジの

如くうごめいていた時、

淋毒が眼に入つて眼

をつぶされ、世にも醜怪な

盲目の乞食として

その後半生を送らなければならなかつたのである。



三時過ぎの某女子高等学校の校庭は、授業を終つて帰る女学生の群で賑やかだ。無邪気な笑い声が此処彼処から起つて来る。その一群の中に、一際目立つて美しい三人連の女学生がいる。年齢の頃はいづれも十八、九才前後青春の輝きに笑み割れているべき容貌に、なんとしたか、一抹の暗い影がさしている。三人

人は立ち止まつて、さげすむような冷たい視線を、彼女等の教室の前でヒソ／＼囁き合っている二人の女学生に投げ与えた。

「今度は三浦さんを誘惑するつもりよ」

「だつてあの方、とてもアナウンサー（おし

やべり）よ。大変な事になるわ」

「困つたわねえ」

と、三人は異口同音に囁いた。

三人の美貌の女学生に噂されていた二人の女学生は、話が済んだのか、笑い乍らこちらへ歩み寄つた。

三浦と呼ばれた女学生は、少しおでこだが

眼の美しい如何にも健康そうな身体つきである。もう一人の女学生は、この第三話のヒロイン押川文子である。顔色はやゝ浅黒いが、細面で切れ長な眼、ひきしまつた口元など、年増の芸妓によく見るあのやゝ性に疲れたような、それでいて凄艶な美さを示している丁度あの容貌を持つている。小柄な三浦に比べると、長身で小股が切れ上り、とにかく眼につく容姿をしているのだが、その上衣の袖口はすりきり、濃紫色のスカートが薄赤くなっている。如何にもみじめな服装である。

三人の女学生の視線が、自分にそゝがれているのを知ると、はつと顔色を変えたが、ゆるしまじき風情で、大股に近ずいて行つた。彼女等は、急に恐怖に満ちた表情で、見る／＼真青になつたが、狼狽しきつて逃げるように校門を出た。

「意気地なし」

と、文子はつぶやかずにおられなかつたのである。

押川文子は、今、彼女だけで秘めやかに考へ続けている土曜日の放課後特有の楽しみに胸がワクワクしている。三浦との堅い約束を思うと、眼の前にあの怪しげな愉悅を、それ

第三話 或る女学生

美しく晴れ渡つた春である。土曜日の午後

からそれへと、蜘蛛の巣を辿るように複雑に考え始めた。しかし、胸に手をやつて見て、残り少ないガマ口の事を考えると再び憂鬱にならざるを得なかった。

一時間の後、文子は某百貨店の呉服物売場を歩いていた。さつきから彼女は既に十数回そこを廻り歩いていたのである。だん／＼婦人客が混んで来た頃、文子は恐ろしい顔つきで階段の方へ急いだ。その時「お嬢さん、一寸、お待ち下さい」と、云う店員の声を聞いた。

かくして、押川文子は、万引常習犯として△△署に拘引された。その時彼女が万引したものは、男物のお召しの反物二反であつた。彼女が陳述したところは、次の通りである。

彼女は、現在麻布区高樹町の叔母△△方に同居する某女子高等学校の三年生で、年齢十九才、郷里長野県埴科郡城町の中学校を優等の成績で卒業したが、実家が貧困のため殆んど苦学的に勉学を続けていた。級中でも成績は上の部であり、その上勤勉な学生として先生の信用もあつた。しかし、万引は十数回に亘つていたので、一時の出来心と認めらず保証人に通知する事になつた。

保官は、更に彼女の操行上の事に就き不審を抱き、きびしく訊問した結果、驚くべき事を自由させたのである。

彼女は異常な性格の持者で、幼少の頃から同性に対して異性の如き興味を持つていたがそれが十七才頃から猛烈となり、同級中の美貌の女性を伴つては、叔母の家で友愛を結んでいたが、最近では一層その度がはげしくなり、叔母の眼を避けるため、土曜日毎に友を戸外に連れ出していた。行く先は、主として大森の砂風呂である。被害者を調べて見ると下級生に二十六名、同級生に十三名あつた。

被害者の某嬢の談によると、文子は、性的に欠陥があり、その肉体など男子と変りがないという。乳房など殆んどなく、両脚には、男のような太い毛が生えていて、不断は如何にも静かにものをいう性質だが、そんな時には、全然性格が変つたようになり、宛然男子になりきつて了う。一度交際したが最後、文子の方で嫌にならぬ限りは、しつこくつきまゝとつて脅迫し、中には多額の金銭を奪われたものすらある。

又、菊岡美代子（十六）という可憐な少女は、裸体にされて濡れ手拭で鞭打たれ、父

兄が驚いてその理由をたづねたが、堅く口留めをされていたので、肋膜となつて入院した時、始めて真相が判明したが、不名誉を恥じて学校当局にも訴え出なかつたという事実もある。

更に某嬢に依ると、文子は、涙もろく、同情深く親切であつたという。

ある日曜日、大森の砂風呂で会つた時、文子が両親に早く死に別れ、小学校第代から多くの弟妹を背負つて勉学し続けた事、伯父夫婦に虐待されて生傷のたえなかつた事、歴史の参考書を買いたいので、一心に貯蓄した金を発見されて、伯父の長男に奪われた時の如何に口惜しかつたか、上京して勉学していても、心から自分を愛しているのは貴女ばかりであるなどと語つたが、これがみんな驚くべき作り事である事が後で判明した。

しかし、その時は本当にそう信じて同情すると、彼女は涙をこぼして喜ぶので、実に優しい涙もろい人だと思つたと云う。

しかし、その後で、自分は弱い女性だから「貴女のような男性」と話をしてこんな嬉しい事はないと語り、いろ／＼な嬌態を見せるので、某嬢は驚いて逃げ出した事が二度や三



度ではなかったと云う。

又某嬢の告白によると、文子自身体裸になつて、細引で縛つて呉れと云うので怖々ながら云う通りに手足を強く緊縛すると、手拭

で鞭打つてくれと強要され、ビチビチなぐり続けると、真赤な顔をして、歯をむき出し、獸のように転がつて喜んでいたという。

とにかく、文子の性格は、これを学術的に

見ても容易に判断する事が出来ない一種異様な変態性慾者と見なければなるまい。彼女は、勿論、学校を退学され郷里に帰つたが、その後の消息は杳として分明しない。

◆喜多玲子画帖豫約募集◆

蒐集家の要望に依えて玲子女史に腕をふるつて戴きました。同好のコレクトションの一つとして蒐集品の中に加えて戴きたい作品です。

此の機会を外しては入手出来ないものです。

△限定三百部、絶対市販は致しません。

△予約金支払順により限定番号捺印

△喜多玲子肉筆サイン入

△上質鳥の子紙美術コロタイプ印刷仕上の予定

△完成発送予定 九月下旬

△非売品予約頒価 一冊三百円十十六円

△予定数に達すれば申込を打ち切ります故早い目に御支

払込願います

△上図は内容の一部です

△申込所 大阪府堺区内菅原

通四丁目三〇曙書房代理部

振替大阪三四九五六番

内 容

- みの虫 (みの虫のみのを取られた丸裸……)
- 白裸の彼女はぐる／＼巻きにされて……
- 時 雨 (うしろ手の素肌になし涙雨……)
- しぶとい娘だね。これでもこたえないか……
- 流れ星 (素肌を星がながめるにくらしさ……)
- 柔肌に細引が喰い込む痛さに身を悶えて……
- 蚊 帳 (地獄と極楽蚊帳のうちそと……)
- ウツフツ。金もほしいがこの方もエヘヘ……
- 寝 酒 (そんな姿はウッフ……たまらないぜ)
- これが良人の病氣だと思いがらも……
- かきみ (責められる我身がうつる恥しさ……)
- あゝッ、もう、そ、そんな……ゆるして……
- 雪の庭 (降りしきる雪に裸形の型を押し……)
- 粉雪の舞う寒風の中に、一条もまとはず……
- 土 蔵 (荒縄の縄目の痛さ夜の寒さ……)
- 土蔵の中の懺り責め、助けを呼ぶにも……

江戸
奇習

縁えん

切ぎり

寺でら

畑 村 連 治

好き者放談

鷺見 東一

一

江戸時代の夫婦関係は忠臣は主君に仕えないというのと同じく、貞女は二夫に見えてはならないものとせられ、女大学に「女子には別に主君なし、夫を主人と思ひ、敬ひ慎みて事ふべし」とあるように夫婦関係を主従の関係に對比させていた。

何事も専制主義を重んじた江戸時代に於ては、この様な不合理な對比主従関係は義を主とし、夫婦関係は情を主とするのにも何等の批判もなく普通のことと思われていたのである。そして夫が如何に乱行を恣にし妻を虐待しても、妻には離婚を請求する権利もなく、一生涯夫の下に

忍従しなければならなかつた。夫の方では自分の意志のままに、所謂三下り半の離縁状で容易に妻を離別することが出来ても妻にはそれが絶対に許されなかつた。妻の方では夫から離縁状を貰わないことには離婚することが出来なかつたのである。

然し江戸時代でも二重結婚を嚴禁していたから、妻を離別する場合に、必ず離縁状を与えねばならない規定になつてゐた。寛保二年發布の令には、離縁状を遣わさずに後妻を娶つたものは所払いの刑に処せられまた離縁状を受取らずに他に嫁した女は髪を剃つて親元に帰し且つその親も、妻を迎えた男も過料に処せられた。

此のように夫より離縁状を受取らないことには離婚再婚することが出来なかつたから、無法横暴な男は妻を虐待して顧みず、いかにその妻が離縁を迫つても之に応ぜずに益々苦るしめるようなことがあるので、妻の中には之に堪えかねて自殺を図つたことも稀でなかつた。

此のような不幸不運の女性が最後に取りべき唯一の離婚手段としては所謂縁切寺に駆け込むより外に途がなかつたのである。

二

縁切寺とは世人の附けた尼寺の名前で、相模の鎌倉の松が岡にある東慶寺と上野の勢田郡新田庄にある満

日本人は生来小手先が器用である。スリの悉るべき天才は電光石火の早業で懐中物を奪い去るのみならず内ポケットの釦は勿論、財布の口までちゃんと閉めておくというから驚く。然しこの神業的な技術を以て婦女子の妙な所へ手を差入れる吾人だつて世の中にどれ位いるか一寸見当がつかない。これを称して「逆か碁を打つ」という。変な隠語であるが、知る人ぞ知る、立派に通用している言葉なのだ。つまり、碁は人差指を下にし中指を上にして摘むがあそこを摘む場合は指の位置が全く相反しているところかな起つた名称である。

徳寺とがそれであつた。

妻がその夫の乱行に堪えかね、幾度も離縁を願つても聞き入れない時には、この尼寺に駆けこんで救助を仰げば、その寺法によつて女の生命と権利とが保護され、こゝに駆けこんだ女は形式的に尼となつて二三年間勸行すると、完全に縁が切れて離縁状が無くとも事済みになつた。こゝう云う寺法は明治三年の頃まで行われていた。その中には姦通したがために夫より殺されんとした不貞腐れの女も寺に駆け込んで危険を免れ生命を全うしたようなこともあつた。鎌倉の松が岡にあつた東慶寺は、世俗に松が岡縁切寺と称せられていた。

「縁談は出雲、離縁は松が岡」

「松が岡女一人で行く所」

「覆では取れぬ去状を松で取り」

という川柳は、いずれも此の縁切寺のことを詠んだものである。

この寺は鎌倉時代の初、源頼朝の叔母が尼になつて住持することゝなつたのがその起りで、遙かに降て弘

安七年の頃に至り、北條時宗の未亡

人が剃髪して、この寺に入り覚山禪尼と称した。禪尼はその子の貞時に對し「自分は出家の身だが、女子のことゝて世を益すべき智徳もない。凡て女子は三從の道を立て、一度は夫に身を寄すべきものであるが、然るにその夫に邪慳非道の振舞をなすものが多いので、愛情も絶え果て、女心の狭さに身を過る者の往々あることを自分は聞き及んでゐる。奥に憐然の次第であるから、此様な不幸の女性のあつた時には入寺を致させ、三年の間仏事修業の名の下に邪惡なる夫との縁を切らすことをば寺法と定めて薄倅の女を救いたい」と懇願したので、貞時はその旨を朝廷に申出でて天意を伺つた処、禪尼の意に任すべき旨 許を賜つたので、右の寺法を立てることになつたのである。

それより第五世の用堂尊尼は後醍醐天皇の皇女で、当寺に入り薙髮された我方で、此の頃より鎌倉松が岡御所と唱え、ながく紫衣を賜ること

ゝなつた。そして縁切り入寺の期限を短縮して二十四ヶ月即ち一年となすことに寺法を改定した。

第二十世天秀禪尼は豊臣秀頼の息女徳川秀忠の孫女で、大阪の戦役後、天樹院の猶子となり、家康の命によつて元和元年当寺の住持となつた。

第二十一世永山禪尼の入寂以来は当寺の住持の跡が絶え、其後も適當の資格を具えた尼僧がないので、当寺内の蔭涼軒の住職が東慶寺のことを執行するようになった。

当寺の寺法は無法乱行の夫のため不幸不運の窮地に陥つた薄倅の女性を保護救済するにある故その救護を仰がんがために婦人が足一歩でも寺の境内に踏み込んだ以上は如何に執拗な夫が追跡して来ても、最早や施すべき詮もなく、若し寺内に乱入して女を奪い去るようなことがあれば男禁制の寺内に乱入したという罪で寺社奉行に告訴せられて嚴刑に処せられ、且つ否応なしにその妻を離別しなければならぬ規定になつていた入寺の婦人は食料自弁という制規

○

すつきりとした太肉のマダマとやらが、真白い襟あしを微風になぶらせて、たつた一人で手摺に凭れていたら、敢て好き者ならずとも多少心は動かされよう。詰まして湯氣濛々たる中に一人の女、一人の男が同じ浴槽内に、雪白と赤銅の皮膚を晒すに於ておや。

北国の或る温泉場で、東京の知名某氏が、芸妓風の同浴者に対してソロソロと手を差しのべたと思ひ給え小刻みにふるえる男の指先に反して彼女の腰部は石臼のように自若として揺がなかつた。かくて、男の思ひのまゝにさせた女は湯ぶねから上ると大声一番「こゝのお湯は女の不淨物まで流してくれるわよ！」と叫んだとか――

○

であつたが、若しそれが出来ない貧窮なものには職業を授けて衣食の料となさしめた。

大名の奥方や高貴の夫人の中にも往々入寺する者もあつたが、此等の身分のある婦人達は敢て剃髪すること無く、またこれと云う勤めもなく、唯だ説教を聴聞したり、書物を読んだりして居れば、それでよかつた。

さて年限の満ちた時は寺を出で、何処へ嫁することとも女の自由であつて、前夫より何等の故障を申込むことは出来なかつた。

三

上州新田庄の満徳寺の寺法も前者とは同様であつた。この寺は天正十九年に設立された尼寺で、その開山の浄院尼公というのは、新田義季の息女であつたから、此の寺の住持は新田家の血統なる徳川家の息女が累代相續することとなり、東慶寺の如くに縁切寺たるの特権を有し、此寺に駆け入った女は尼になつたもの

である。

徳川秀忠の息女で豊臣秀頼の夫人であつた千姫が大阪の戦役後此寺に入つて離縁の趣意を立て、本田家へ再嫁したので、その代りに刑部局が住持となり、中興開山俊澄上人と称した。

爾来引き続いて徳川家庇護の下に住職を相續し、寺法を維持したのでこゝに駆けこんだ女は三箇年間に住した上、頭髪を切つて夫の方へ贈り離縁状を受け取つた後は他に再嫁することが自由になつていた。

東慶寺の方では縁切り入寺の期限は二年であり、且つ別に剃髪せずとも満期に達したならば離婚の目的を達することが出来たが、満徳寺の方では三箇年の期限で一年多く、且つ髪を切つて夫へ贈り離縁状を請求せねばならぬ不便不自由があつた。それ故、縁切の目的を容易に達せんとするものは大概松が岡の東慶寺を選んだと見えて、江戸時代の川柳に縁切のことを詠んだものには主に松が岡や鎌倉の名が現われている。

東慶寺に駆け込んだものは、地理の關係上江戸の女が多かつた。「松が岡江戸のうちから聞いて行き」

「十三里独で行つて縁を切り」という川柳にもある通り、江戸と鎌倉の距離は十三里であつて比較的に里程の少いがため、東慶寺を指して駆けこんだことも、此寺に入つた女の多かつた原因の一である。

寺に女が駆けこむと、寺よりは「松が岡御所役所」と云ういかめしい名儀で、その女の親族或は媒酌人を召喚し、夫へ直接に掛け合して内洛に離縁話を取り纏めるように干涉することになる。

何といつても此寺は鎌倉時代以来格式のあり權威のある尼寺であるから、流石無法非道なる夫もその權威に恐れ入つて離縁状を書くのが普通になつていた。しかし、その中には飽迄も執念深く附纏つて離縁を承諾しない者もあるので、斯う云う場合には、その女は已むを得ず、形式的に尼となり、規定の年月間に住しな

まり医者という言葉もチヨイチヨイ耳にする、幼い頃は何かのことかきつぱりわからなかつた。

舌を出して、眼をあけて大きい息をして、サテそれから腹をまさぐるのが大抵の医者の診断の順序であるこの時に、相手が若くて美しい婦人の場合には、故意にか偶然にか、思わず知らず下に下りすぎる医者の事を下り医者というのだそうである。

手を下らされたことに淡い幸福を感じた或る大家の未亡人が「お手が汚れたからお湯を沢山持つておいで」と女中に命じたとか。

喫茶店の女給のエロサービスにはいろ／＼あるといふことだが、その中でも華々しいのになると、いきな

ければならない。

川柳には

「鎌倉の松に三年身をかくし」

「松風を有髪の尼で三歳聞き」

とあつて、三年間寺に在るものゝように詠んであるが、前述の如く入寺の期限は二十四ヶ月の寺法であるから、言葉の上では三年であつても事實は足かけ三年、正味は二年であつた。

此のよう東慶寺は武家時代に於ける薄倅不運の婦人を救護した唯一の社会的機関であつて、その恩恵を受けた婦人は、此寺の創立された鎌倉時代より明治三年に至るまで凡そ六百年間、幾許であつたか、殆ど数えきれない程多数に達したことを想われる。殊に男尊女卑の風の最も甚しく、極端に女性を圧迫した江戸時代に於て、この権威ある尼寺が不運不幸なる女性の擁護者救済者となつたことは、日本女権史上特筆すべき重要事実の一である。

此の如き次第だから江戸時代の横暴なる男子の中には東慶寺に反感を

抱いた者も可なり多かつたと見え

「松が岡男の意地を潰すこと」

と云うような川柳もある。また此寺に駆けこむ女をば我まゝ氣儘な勝

気の女のように解して

「情のこわそうなが追入る松が岡」

「鎌倉のさばきを受ける氣の強さ」

という川柳もある。

しかし、江戸から遠路をたどつて鎌倉の東慶寺に駆けこむような女性には意志の余程鞏固な者でなければならぬ。

江戸から鎌倉に往く途中には六郷川と云う難関の渡場があつて、それを女一人の身で無事に突破することは決して容易ではなかつた

「六郷でよう／＼嫁をとらまえる」

「其船此処へと云ううち追い手くる」

とある通りこの難関で追手に捉えられた者も多かつたらしい。それをうまく切り抜けて鎌倉さして行くには氣象の丈夫な女でなければ駄目である。

一利一害は数の免れざる処で薄倅

なる女性の唯一の救護機関であつた縁切等も、時には不貞の女に利用された形跡もある。それも川柳に徴して明かで、例えば、

「路考茶を着て飛びこむ松が岡」

といえる句の如きは、当時盛んに流行した女形俳優瀬川路考(菊之丞)

好みの茶色の着物を着るような淫奔不貞の女で亭主との縁を切りたさに東慶寺に駆けこんだ者のあつたことを暗示したものであり、また

「悔しくは尋ねきてみよ松が岡」

「鎌倉へござれ甘酒進上なり」

とあるのはいかにも寺に駆けこんだ女の不貞莫連さを暗示している。

そういった悪質の利用者が往々あつたにしても、現在では想像もつかぬ位、余りにもかけ離れた封建的圧制下に於て、縁切寺の存在が女権擁護の救済機関として一陣の涼風を注ぎ込んでいた事は動かすことが出来ないであらう。

(終)

り男の手を掴かんで御丁寧
に五本の指先を温めてくれ
るという。見方によつては
極めて簡単な労働であり、
見方によつては悲しいサー
ビスである。

○

或る男が友人の家を訪問
して応接に案内され、茶を
運んできた女中を見たら、
余り美しい肉付についフラ
フラとなり、早速奥の手を
出し得意の逆か碁の一手を
試みた。そこへ忽然と主人
が扉を押して入つてきたの
で、突嗟のことに二本の指
のやり場に困り、卓の上に
あつた煙草を夢中で掴んで
「どうして僕はこう脂手な
んだらうなア」はよかつた

x x
x x
x x
x x

世界艶笑文学紹介



ジャン・ベルネル夫人の狂楽

(一名愉快な寡婦の冒険)

シヤル・ロット

(作者)

「ジャン・ベルネル夫人の狂楽」の一篇は一九二四年六月、突如、フランス猟奇書界へ出現して、パリジャン・エ・ペリジェンヌのエロ・グロ・ダンディズムを風靡した傑作であるが、惜しいことに作者に就いて詳にすることが出来ない。

シヤルロット(水仙花)というフランスとドイツの混血児みたいな仮名の主が、一体、果して誰れであるかという問題は、未だに謎となつてゐるが、アンドレエ・ジイドあたりじやないかという人もあり、ジャン・コクトオだとも云い、マルセール・パニョールだとも云うが、一向にわかつていない。

しかし、相当な作家の筆であらうことは、この素晴らしい内容を一読すればわかるだろう。

(一)

ジャン・ベルネル夫人は、まるで肺臓を一時に吹き出してでしまひそうな深い溜息を吐きながら、こゝホテル・ベルセエの三階の部屋の窓から、いつも見あきたパリの横顔を見つめていた。

雑踏に黎明を迎えて騒音に暮れてゆくボア・ド・ブウ・ローニュー！鈴懸の並木、ダワ・エツフェル、セエヌ、橋、橋……。そのほかに何があるだろうか？彼女の二十七才の豊満な肉体と僅か半年以前に死別した夫に遺された五百万フランの富から発散される最も人間的な魅力を輝かせるためには、このオリヴァ色の窓わくに縁取られた一風景では物足らないに違いない。彼女は夫を死の際まで愛していた。唯神論者であつたところの彼女にしてみれば、それ以後に於いても亦亡夫を愛しつづけていと云つても、少しも不思議ではないだろう。しかし、実は、彼の死後二ヶ月と経たないうちに、そうした東洋的な考え方をサラリと棄ててしまつたのである。

世界艶笑文学紹介

死 人に口なし！この世を去つて 魂一とたび天外に飛び去つた者は、再び現世に還ることはない。さびしい人世である。としたところで、彼女と夫との間にとり交わされた「愛情の手形」を、幽冥の世界にまで書き替えてまで自分の現世的権利を殺す必要が有るだろうか？無いだろうか？ 兎に角、彼女は遺産五百万フランを受け取ると、子供のない身軽るさに帆を孕ませて、アミユニアンの片田舎を引払つて、ただ一人パリの十字街に聳えるこのホテル・ベルセエに、天涯孤独の——しかも美と富とを兼ね備えたところの愉快なる寡婦となつたのである。

それから、文字通り桃色のベールに包まれた彼女の夢の六ヶ月の流れに、彼女を乗せた黄金造りの小船は、どこかの岸を目指して走りつづけていたか？そんなことを詮索するのは野暮である。彼女は瞬く間にパリ社交界の女王となり、同時に、彼女の善美な姿はパリ歓楽境に一つのマスコットとして持て囃されるようになった。凡て社交界に名をつらねる程の伊達者なら、一人残らず彼女の前に男性としての尊大と虚栄とを棄て、ひれ伏した。彼女はお蔭で、男性に依つて与えられる女性としての最も秘密な歓楽に食傷した。

今では、彼女にとつて、世間並のランデヴーや恋愛技巧などは気の抜けたマヨネーズ・ソースよりも鼻について来たのである。彼女の欠伸の一日がつづいた。今日もその十何日目であるのだが、彼女は自分を最上の歓楽に酔わせてくれそうな事件に打つかりそうにもないのであつた。

(つまらない！人生なんて、深いようでも浅いもんだわ。人間

の肉体を中心として描いてみた歓楽なんて、ものゝ半年もつゞければ種切れになるんだから)

彼女は窓から見わたせる限りの空間にうごめいている人間層を眺めながら(あの人たちは一体何を目当に、あんなにもアクセクとして動いているのだろうか？ 結局は、私の幻滅を掴むのがオチなのに)——なんだか、気の毒なような、さびしいような氣持に充たされてゆくのだつたが、人間というものは、こうした静かな時間を持つた時に、ひよいと神来的な考えが頭にひらめいて、自分でも驚くことがあるものだ。

彼女はフイとつてもないことを考え出した。それは彼女の絶大な好奇心に、神さまの手をチョッピリと貸して貰うというプランである。彼女は兎に角元氣よくソファから身を起した。きつと成功するにちがいないこのプランに酔つてしまつた彼女は、もう人生に見切りをつけるほどに倦怠を感じていた一瞬間

の彼女ではなかつた。

彼女はまず自分の名刺をテーブルの上に載せた。

そして、これをナイフで折半して、右半分をポケットにしまうと、残りの半分の名刺の裏に、万年筆の走り書きで、次のような文字を書きしるした。

この名刺の片割れをお拾い下さつた紳士は、私にとつて、今宵の好きな私の夫です。私を信じて戴けますなら、すぐホテル・ベルセエ

M.me ジャン・ベルネル

ホテル・ベルセエ
NO.375室
PARIS

世界艶笑文学紹介

三七五号のドアをお叩き下さい。
もし拾った方が御婦人でも、敢えて当方では拒みませんやさしい姉として出来るだけのエンタテインメンをいたします

そして、彼女は窓際に立つて、暫く瞑目してこの素晴らしいプランが大成功になるように祈つて、次の瞬間、さつとその紙片を街に向つて投げた。名刺のその半分の紙は、彼女のマニキュアに磨き上げられた指から離れると、まるで、宛ら生きたものゝように、そして又彼女の好奇心をいやが上にも廻りでもするように、思わせぶりの態度で、風に吹かれてひら／＼と……遙かの街路をめぐり落ちてゆくのであつた。

(二)

彼女は待つた。いつまでも待つた。しかしなか／＼扉に人の気配はして来ない。いつもの彼女ならもうとつくにしびれを切らしているのに、今日ばかりは、むしろそんなにも永い時間を待たされゝば待たされるほど、最初の登場人物が大きく期待されてならないのだつた。

そして、とう／＼その日も空しく午後五時となつた。

(おや、おやま、折角のあの名刺も無駄に終つてしまつたのか!)
彼女はいさゝか落胆しているところへ窓然、トントンとドアをノックする音が聞えて来た。

「はい……………」

彼女の声は上ずつていた。彼女は瞬間に、ドアの外に立つて

いるであらうスマートな美青年を思い浮べた。
「御免下さい」ガルスンはドアを静かに開けて這入つて来た。
「あの、この方が奥様に是非お会いしたいと申して居られますが」

アンリ・クルペール

ガルスンは彼女に一葉の名刺をわたしました。
「御用向きを聞いて呉れましたか!」
「はい、それは、そのお名刺の裏に書いてあると仰有つて居られます」
「あら、そう?」
彼女は名刺をうら返した。

「じゃ、すぐこゝへお通しして下さい」

「は」

ガルスンは懇慫に腰をかゞめると部屋を出てゆこうとした。

「あの、ちよつと……………」

「はい、何か……………」

「どんな方?」

「さあ、男の方でございます」

「馬鹿ねえ、そんなことを聞いてるんじやな

年をとつた方?」

「若い方?」

「若い方でございます」

「そう」彼女はまず安堵した。

世界艶笑文学紹介



「で、幾つぐらい？ 綺麗な人？」

「さあ、二十五六でしようかな、はい」

「だから綺麗な人？」

「さあ」ガルソンは云いにくそうに顔をしかめた。

「正直に申し上げますと、非常に汚い、むさ苦しい……」

「えエッ！ そんな、醜惡な顔の人……」

「いゝえ、奥様！ 汚いのは服装で、顔立は下品な方ではありません」

「そう」彼女は胸をなでおろした。

「じゃ、丁寧にこちらへ」

ガルソンが廊下へ出てゆくのと入れ代りに一人の青年がドアの前に立つていた。

「どうぞ、こちらへ？」

「ごめん下さい」

青年は悪怯れもせずツカツカと彼女の傍へやつて来た。成る程、青年はそのむさ苦しい服装で、一と目の下級なサラリーマンであることがわかったが、機敏な目と、逞ましい体軀と、少しも飾り気のない態度とが彼女には珍らしく、むしろ好もしくさえ感じられた。

「よくいらつしやいましたこと！」

どうぞ、御自由におかけ下さいまし」

「ありがとう」彼は一つの椅子に腰を降ろしながら、

「へんなお近ずきで恐縮ですが、僕、アンリ・クルベールと申します。どうぞよろしく」

「私こそ。よろしく。ジャン・ベルネルと申しますの」

ところで、クルベールは彼女を出来るだけ観察しようとするような目なざしをして云つた「奥さん、丁度向うの街角でお名刺の半分を拾つたのですが、この結末は、一体どうなるのですか」

「さあ」彼女は朗らかに笑つた「御推察に任せますわ。私は自由な独身者ですよ」

「では、早速取引に移りますが、あの名刺に書かれた通り、僕は今宵はあなたの夫となつていゝわけですね」

「勿論」彼女は強くなづいた。「でも、あなた、お幾つ？」役女はこの大人びた若者を今更に見つめた。

「僕、二十三です」

「お商売は？」

「石油会社の社員です」

「では、今夜は、私の夫と決めました。しかし、その服装じや困りますわね」

「だつて、僕はこれしか持つていないのです」

「では、今夜は私の夫として、何もかも私の命令に服して戴きますわよ」

「結構です」クルベールは欣然として云つた「あなたのような

世界艶笑文学紹介

美しい婦人の命令なら、僕、どんなことでも……」

「では、兎に角、洋服屋に来て貰つて、一つあなたのタキシードを新調しましょう」

そこで、彼女はボカンとしているクルベールを尻目にかけて電話をバリ一流のラアシェ百貨店にかけて、夕方八時までに洋服を作るように注文した。

「一体僕にタキシードなんか着せて、どうなさるんです」

「まあ、黙つていらつしやい」彼女は彼を軽く睨んだ「あなたは、偶然、街で拾つたこの幸福が、どんなにも大きなものであるかを、だん／＼にわからせて上げますわよ」

クルベールは少し無気味な顔附をしたが、彼女はそんなことには一向頓着しなかつた。

「あなたは、結婚なさつたことがあつて？」

「どう致しまして」

「でも、夫というものは 妻に対してどう云う義務があるかに就いては、御存じでしょう」

「それは知っています」

「では、あなたは、今夜の八時にタキシードが出来上つて来るまで、その義務を私にしてくれなければならないことよ」

「と云いますと？」

「じれつたい！ 大きな坊ちやん！ 此方へいらつしやい」

ペルネル夫人は向うの寢室をゆびさして、クルベールの頬をつねつた。

三

「奥さん、もう僕は駄目です」

「意気地なしねエ。もつと強くベエゼして頂戴！」

「でも、僕は、少し……」

「いけませんよ！ 私がこんなにも妻としての義務を履行しているのに、夫のあなたが……駄目よ」

二人の悩ましい争いがベットの所で暫くつゞいた。



彼女はいつか真裸になつて、狂えるニソフのようにクルベールの逞しい裸身にまつわりついていた。クルベールはもう蛇のような情熱の答の下で、いくたびかの秘戯の疲れにぐつたりとなつて、少し心身を休ませなければ、とてもこれ以上続きそうにもなかつたからだ。しかし、この若く美しい寡婦はなかく許してくれなかつた。倦くことを知らない貪婪な情慾の焰をいやが上にも燃え立たせて、幾多の男性巡礼に依つて得た素晴らしいタクトの限りをつくして彼女はクルベールを悩ませてゆくのであつた。

「奥さん」青年はとうとう怒つてし

世界艶笑文学紹介

まつた。

「あなたは私に怨みでもあるのですか」

「あら、何故？」

「だつて、こんな、こんな……」

「私はあなたの妻よ。妻として義務をつくしている限り、私はあなたにどんなことでも要求する権利があるのよ」

「しかし、僕はもう」

「お黙りなさい！　じゃ、少しゆるして上げるかわりに、靴下をお貸しなさい」

彼女はソファの上に投げ出されたクルベールの衣類の中から靴下を一足とり上げた。そして呆ッ気にとられている彼の目の前で、彼女はその脂くさい彼の靴下をムシヤムシヤと喰べはじめた。

「とてもおいしいわ」

彼女はもう恥も外聞もなかつた。喰べ終わると、またクルベールの裸身に飛びついて云つた。

「あなた！　早く、私をしつかり抱いて！　息の絶えるほどアムブラッセエして」

「こうですか」

彼は彼女をしつかりと抱きしめた。ベルネル夫人は目をしつかりとつぶつて死んだようになっていた。

「うれしい」

軟い口で、彼の唇を力一杯噛みしめた。その時、次の間で電話のベルの音。

「いやねエ」彼女は舌打をした「あたしの気もしらないで、いけすかない電話！」彼女は仕方なくクルベールから離れて、桃色のシユミーズを素早く引つかけた上へ、パジャマを肩へかけると受話器を耳に当てた。

それはラアシエ百貨店からであつた。注文のクルベールのタキシードが今出来上つたという知らせである。

「じゃ、すぐ持つて来て頂戴な」

彼女は電話を切つた。

そして、再び寝室にかえつて来ると、また一層狂えるニンフ振りを発揮しだした。

「あなた、待つた？」

「いゝえ」

「じゃ、私にあなたの足を噛ませて下さつて？」

「そんな乱暴なこと」

「大丈夫よ。まさか喰べてしまうようなこともないんだから」

彼は仕方なく右足を彼女の前へ出した。

「本当に、乱暴なことはいしないで下さい」

「大丈夫よ。ほら、こんな風に」

彼女は彼の右足の拇指から人さし指へと順々に噛みはじめから、その熱湯のような唾液にぬれた唇を、徐々に下から上と舐め上げてゆくのだつた。

「奥さん、何をするんです」

彼は驚いて起き上ろうとしたので、彼女は狂気のようになつて押えつけた。

世界艶笑文学紹介

「いけない！ 動いちゃ！ 馬鹿！ 噛み切つてやるから！」

(四)

「とても素敵なこと！」

クルベールがタキシードを着てしまうと、彼女は手を拍つて彼を見上げた。

「さあ、これで、どこへゆこうと云うのですか？」

「知れたこと！ 私たちの秘密なナイト・クラブへ」

「僕はもう疲れているんですがね」

「いけません。今夜はあたしの夫なのよ。あなたは忘れっぽい方ねエ。これから私達はそこへ行つて、アフロデイシアクと怪奇なメルキンと、鞭と、ナイフと、エロテイクなプレイとであなたを一通り喜ばせて上げて見たいのよ。あなたは、こんな現世的な快楽を、こんな若さで拒むなんて男真利にかけるわよ。もつと勇敢におなりなさいな。もつと力強い男性におなりなさいな。私はあなたのような逞しい男性と親しくしたことに依つて、本当の女らしい情熱を久し振りによみがえらせることが出来ましたの。さあ、勇気を出してゆきましょう」

彼女は卓上電話を帳場につないだ。

「自動車の用意は出来て？」

それから、五分と経たないうちに、デムラアのロードスタアに、二人は腰をならべておろしていた。

「今夜は、私が運転手、いゝでしよう？」

自動車は動き出した。美しいパリの夜の街路を縫つて、彼等のロードスタアは竊進する。

クルベールはすっかり疲れが出ていつの間にかぐすり寝込んでしまった。

「まあ、暢気な方！」彼女は笑いながら揺り起した「ちよつとお起きなさいよ。もう着いたんですから」

彼はおどろいて目をさました。しかし、そこは人ツ子一人いない真の闇である。樹の影から真ツ白な月が出ているところを見ると、どうやら小森の中らしい。

「おや、こゝは一体どこです！」

「あはゝゝゝ、ちよつとあなたを担いで上げたばかりよ。まだ途中！こゝは郊外の林の中よ」

「だのに、こんなところで車を止めて、どうしたんです」

「考えが少しあつたからよ」

「何んです。それは？」

「私はまだ月の光の下で、男に愛されたことがないのよ。だから、ちよつと余興に、あなた、車を降りて、その草むらの中で暫らく語り明かしてゆきましょうよ」

「また、ですか？」クルベールは泣き顔をした。

「お降りなさい！そして、こゝの草の上にお坐りなさい」

彼は、その次に彼女から何を要求されるかをよく知つていたので、考えただけでもそろ／＼憂鬱になつて来た。愛するといふことも、激してくると苦しみである。

彼は彼女の愛慾の興行を考えると、居ても立つてもいられたかつた。一刻も早く彼女から逃れなければ、明日になるまでに命が保てるかどうか疑問であつた。そして、逃げるとすれば

世界艶笑文学紹介

今が絶好のチャンスであつた。

ナイトクラブに着いてしまつてはもうお終いである。彼はひそかに決心した。

「奥さん、あなたは、こんなにも素晴らしい妻の義務を心得ていらつしやるとは思いませんでしたよ」

「お世辞は沢山！ そのお心がけで、もつとこちらへいらつしやいな」

彼女はもう彼のタキシードの上衣に手をかけて脱がせにかゝつた。

「ペーゼ」

彼女は唇を尖らして彼の唇へ持つて来た。

彼は彼女のなすがまゝに任せていた。彼女は満足の笑みを漏らしながら云つた。

「あなたのような逞ましい男性は、ホテルの美しい部屋でよりか、こうした自然の樹影や草むらの上でする恋の方が、ずっと素晴らしい効果があるわね」

「僕は奥さんを愛していでしょようか」

「どうぞ、心から愛して頂戴ね」

彼女は何故こうも彼の態度が変つたかに気がつかないほど、上機嫌になつていた。

「こゝに私、五百フランばかりお小遣があるから、これ、みんなあなたに上げちまうわ。じゃ、遅くならないうちにクラブへ急ぎましよう」

彼女は立ち上つた。彼は渡された紙幣をもう一度強く握りし

めた。彼はしずかに立ち上ると、闇をすかして四辺の様子を見廻した。どうしても自動車を持つてゐる彼女の手を逃れるには草むらの中の林の中に飛び込んで逃げるより外に途はなかつた（よしッ！今だ！）

夫人が一と足先きに車にのりかけたところを、クルベールは脱兎の如くかけ出した。森の中を目がけて突進した。

「お待ちなさい！」

夫人の怒気を含んだ声が、うしろから全速力で追いかけて来るのを、クルベールは夢中になつてかけ出した。

とう／＼三尺ばかりの小川を飛び越えた頃、夫人の声が一つところに立ち止つた。

「あはゝゝゝ」ベルネル夫人は高らかに笑つた。

「クルベールさん！ 私の名刺は無尽蔵よ。明日にはまた新しい夫が私をよろこばせてくれるのだわ。あなたがもう十年も大人になつたらきつと、女としての私の素晴らしいさがわかるでしょうよ。その時は、私のことを思い出して、今日の饗応を感謝しなければいけませんわよ、じゃ、私の可愛い、案山子さん、さようなら！」

そして、それから数分の後には、彼女のロードスタアの爆音が遠くなつてゆき、月の光がさも皮肉そうにクルベールのタキシードをくつきりと照し出してゐた。

(完)

【読者通信】

読者及び編集部の皆様へ！

奇譚クラブ毎号面白く拝見して
います。一月毎にすばらしくなつ
て行くので、いつも新たな期待に
胸を躍らせているのですが、一度
も裏切られたことがありません。

「九月号の巻頭に私の拙ない「告白」がのつてゐるのを見た時には
思わずドキンとしてしまいました
た。本当に始めての、自信のない
ものでしたのに。ご感想はいかが
でした？ さぞかし、とんでもない、
呆れた女だと思ひになつた
ことでしようけれど。ただ、のせ
ていたゞいてから悠張つて勝手な
注文をつけるのは大変いけないこ
とですけど、本当を云うと、私の
大好きな喜多鈴子さんのすばらし
いさし画を沢山いたゞきたかつた
んです。

でも、これからは私も皆様のお
仲間入りをさせていただいて、う

んと書いて見ようと思つています
のよ。それも今度は告白じやなく
つて、恥ずかしいけど勇気を出し
て創作ものをね。今私の頭の中に
は、それこそ（私は女ですけど）
聖アントワヌにも負けないよう
な妄想が渦を巻いています。だか
ら私にでも少しは書けそうな気が
するのです。

温い南国に育つという、真赤な
美しい花、カンナ「狂い咲くカン
ナ」の代りに、暗黒の夜の闇に幻
想の黒い翼をはばたかせる、不吉
な鳥、こうもり、なんてのはどう
かしら。先輩のお姉さま方はじめ
皆様、どうか京子をよろしく願
ひいたします。（羽村京子）

二宮忠一氏へ

（本誌六月号に人間便所の妄
想狂なる一文を寄せられた）

小生は六月号に掲載された貴殿
の作品を拝見したのを機会に奇譚
クラブの愛読者となつた三十才の
妻帯会社員です。その後毎月貴殿
の続篇の掲載されていないことに

詰将棋が解けるまで

大橋 虚士

一	二	三	四	五
王	飛	角	金	銀

持駒 飛角香

本題を研究してみましよう。

簡明な構図乍ら詰手初步に御参
考になるものがあるうと思いま
す。三一角打ば絶対着手、一一
玉とかわされる。

次に一三香打（こゝ一四香打は
玉方一三步中合を強要され二手
延びる）同桂は三三角成で問題
ではないから一二歩合同香成同
玉次一三歩打として同桂とさせ
てから一一飛打の捨て駒が面白
いので（この処二二飛打では一

一	二	三	四	五
王	飛	角	金	銀

持駒 金銀

一玉で詰まない）同玉三三角成
で解決する。元へ戻つて一三成
香打の時一二桂合なれば同香成
金同玉二四桂打同桂三二飛打一
一玉二二飛成迄です。

さて本題三一角打から三三角成
迄に至る手順を再検討して本解
説を終わります。

一	二	三	四	五
王	飛	角	金	銀

持駒 飛香

即ち三一角打一玉の図、左図
を御参照下さい。一三香打は玉
の二一桂を一一へやる。三三に
利き筋を外す第一手段、だが玉
方一二歩の応手があつて金香成
同玉とさせて一三歩打となる。
こゝで目的が達する同桂となつ
てから一一へ玉を戻すわけです
以上

何とも云えない淋しさに捉らわれじつとして居れない気持です。是非続きを拝見したくお願いします。それはあのような傾向の作品として実に心理的にも鋭い真実性を齎しているからです。文中にもありました東京の或る雑誌のように創作的な作り話に終らないからです。小生にも若干Nさんと同じ傾向があります、妻との適当な協議と、一子誕生とにより、その傾向は正常に推移してゆくという自信を持つようになっています。この裏付けの欲しさから是非拝見したいのです。Nさんのためなら求められれば小生の記録も資料にして頂きましょう。奥様や御息女の御同意の下に発表して頂ける日をお待ちしてやみません。

(秋本正文)

僕は今年二十五才になる男性ですが、思春期よりずっと今に至るまでの男の人への愛情を感じるといった人にも云われないベデなるが故二十才位までは随分苦悩

したこともありました。僕の今住んでいる実家は静岡県の一町村なんです、いろいろのチャンスで一昨年から昨年、そうして今年の始めにかけて、主に東京を中心に京都、大阪と様々な男色の場所を渡り歩き貴重な体験をしました。京都 大阪はそれ程詳しくは知りませんけれど、東京のそれでしたら人には負けん位、いろんな場所しきたり、風俗等を知っております。

場所でしたら先ず日比谷公園、上野公園の池の周囲、四谷駅の近くのちよつとした公園、東京駅乗車口の男の便所、日劇地下街公衆便所、万世橋公衆便所、映画館(浅草日本館、浅草東京倶楽部、新宿文化劇場、新宿新星館)喫茶店(新宿「イブセン」「夜曲」「浅草「池の家」「ボンソワール」銀座「プランシユック」「クロスロード」新橋「折鶴」「からす亭」)等々、まだ其の他に斯の道の男色者達が集る場所は随分と知っているつもりです。

この期間中に僕は驚くべきいろいろの事柄を体験しました。現文部次官等とも遊んだこともありま。作家三島由起夫さんなど、新橋の「からす亭」へよく遊びに見えられましたけれど、そこではもうお由起さんのニツクで通つてい。のです。池部良なども、ちよくちよく日比谷公園等を十七八才位の可愛い男の子を連れて一緒に散歩に来ることもありました。舞踊家の益田隆など、その浮気が有名でニツクネームも「カルメンお隆」で通つて位なんです。僕は随分いろんな人を遊びましたが、やはり僕と同じ年位の人か、若い人が好きです。僕は自分でいうのも厚顔しいようですが、容姿は十人並以上だと人にもよく云われ、日比谷公園あたりでは随分ともてたことがあります、今は少し悟るところがありまして田舎に帰つて仕事をしております。

人御紹介願いたいのです。せめて文通だけでも出来たらと切に考えます。尚僕は同性の方から色々の責をされて見たい気持ちが多分にあります。又僕は全裸でそういうことをしている所を写真に撮つて貰えたら素晴らしいと思います。(貴誌か誰でもよいから)僕はそういうことは平気です。尚一層興奮すると思います。(久乃木利夫)

○ 奇譚クラブ十月号を当地書店で購入しました。誠にその内容の充実している事と、私の如き性質の者にとつて生れて初めての満足を覚えました。特に鬼山氏のへばきうりは本当に感心しました。一四六頁の下段から一四七頁の上段にかけて、更に同頁の中段から一四八頁、一四九頁の記述は実に堂に入つたものです。今後是非、このような年増の肥大した女の股の下、尻の下に押えつけられるような場面の記事をのせて下さい。

(横浜 芳沢生)

性愛描写の文学



紀市郁榮

その一「好色一代男」

井原西鶴作

好色一代男は、大阪の商人の息子に生れて六十歳のとき、伊豆国から女護島へ渡つて行方不明になるまでの、主人公世之介の好色に一代をかけた生涯を描いたものである。

世之介が始めて恋を知つたのが、七歳の時で、六十歳迄の五十数年間、腰元、遊女、私娼、後家、湯女、留女、人妻等々、あらゆる女を相手に、飽くことを知らない色慾生活を

送るのである。その間、十九歳のとき勘当を受けて諸国を放浪するが、父が死んで家業をうけついだ三十四歳の後は、金にあかしてよい伊達男となり三都の遊里を舞合に、一流の名妓を呼んで好色をきわめた。

作者西鶴がはじめて小説を書いた四十一歳の時の処女作で、極端な写実本位の筆致で、単的に性生活を描写している。次の一節は京都島原の、座敷上手だということで評判になった、太夫初音と始めて遊んだときの状況である。

て、今まではどの女が、こゝろを、いらひ候もしらずと、下帯のそこまで、手の行時きゆるがごとし、今はたまり兼ねて、断りなしに、のり懸れば、下より胸をおさえて、是は聊爾なさる、といふ。勘忍ならぬ、ゆるし給へといふ。又時節もあるべし、まづ今晚はといふ。世之介せんかたなく、かやうの事にて、江戸にてもおろされ、無念今にあり、独はおりられず、貴様に抱おろされてならば、おりやうといふ。兎や角いふうちに、かんじんの物、くなつきて、用に立難し、是非なくおるゝを、初音下より、両の耳挿へ、人の腹の上

―ともし火のうつり枕近く立より、それそれ、申し申し、めづらしき、蜘蛛がくくと申されければ、世之介夢おどろき、いやな事と起あがる所を、しかとしめつけ、女郎蜘蛛が、取つきますといひさま、帯とかせ、我もときて、是がわるいかと、肌まで引よせ、うしろを さすりおろし

に、今迄ありながら、只はおろさぬと、こゝろよく首尾をさせける。まれ或床ぶりなり。

世之介が父のあとをうけついで翌年、即ち三十五歳の時、京都の吉野太夫を身請けしたときの挿話が次の一章である。名も地位もない、小刀鍛冶職の熱意にほだされた吉野が、その男一夜の情をかけてやつた心意気に感じたのである。

——爰に七条通りに、駿河守金綱と申す、小刀鍛冶の弟子、吉野を見初て、人しれぬ我恋の関守は、宵毎くの仕事に打て、五十三日五十三本、五三のあたいをためて、いつその時節を待ども、雪般が雲のよすがもなく、袖の時雨は神かけて、是ばかりは偽なし。吹草祭の、夕暮に立しのび、及事の及ばざるはと、身の程いと口惜と歎くを、或者太夫にしらせければ、其心入不びんとひそかに呼入、こゝろの程を語らせけるに、身をふるはして前後を忘れ、うそよごれたる顔より、泪をこぼし、此有難き御事、いつの世にか、年頃の願ひも是運と、座をたつて逃てゆくを、袂引とゝめて、灯を吹けし、帯もとかずに抱あげ御望に身をまかすと、色々身をもたえて

も、彼男氣をせきて、勝門木綿の下帯とき懸ながら、誰やらまいると、起るを引しめ、此事なくては、夜が明けても帰さじ、さりとは其方も、男ではないか、吉野が上に適々上りて、空しく帰らるゝかと、脇の下をつめり、股をさすり、首すぢをうごかし、弱腰をこそぐり、日暮より枕を定、やうく四ツの鐘のなる時、どうやらこうやらへの字なりに埒明させて、其上に盃迄して帰す。……

以上の話を吉野から聞いた世之介が、「それこそ女郎の本意なれ、我見捨じと」その夜忽ち受け出して妻に迎えたのであるが、「奥様と成事、そなはつて賤しからず」とあるから、よほどすぐれた氣風で心優しい吉野だったであろう。

その二「舊主人」

島崎藤村作

田村泰次郎や石塚喜久三の戦後の作品を、性文学としてさわがれたが、既に数十年もの昔に藤村の書いた作品、例えば「春」や「家」や或はここにあげる「旧主人」など、現代のものに劣らない性慾的に激しいものを、発見することができるのである。

殊に藤村が新婚時代に書いた小説には、姦通を主題にした作品の多いことも世人の知るところで、大岡昇平の「武藏野夫人」が有名になつたのは、たま／＼デカタンな戦後の社会思潮に便乗したにすぎないのであつて、これと新しく珍しい作品でもなんでもない。

「旧主人」は明治三十六年十一月、雑誌「新小説」に発表されたが、発売と同時に発禁のうき目に会つた。人妻と齒医者との姦通を、女中の手記の形式で描かれているのである。

——奥様の御差図で、葡萄酒を炬燵の側に運びまして、玻璃盞がはりには京焼の茶吞茶碗を上げました。

とあるから、そのころ（明治三十五、六年）の家庭の容子にしては上流に属する。そして——旦那様は朝早く御散歩をなさるか御二階でお調べ物をなさるかで、九時には帽子を冠つて銀行へお出ましになる。思へば結構づくめの御暮しです。しかし、ひらけて、贅沢な東京の暮しを、一きれ提げて持つて来たやうな山家の町では、奥様のすることなすこと何かにつけての町の噂になり、春から夏、夏から秋へかゝる頃には、奥様は毎日退屈な日を御家の中で所在なく送るばかり……

というから経済的には恵れた家庭で、単調な田舎町の山家で、人形のように着飾つて据えておかれては、退屈するばかりで、いわゆる有閑マダムの気紛れな冒険から、恋愛に刺戟を求める結果になつたのであろう。

——無理やりに葡萄酒の罇を握らせて、男の手の上に御自分の手を持添へ乍ら、茶吞茶碗へ注ごうとなさいました。御二人の手はぶる／＼戦へて、酒は炬燵掛の上に溢れましたのです。奥様は目を閉つて一口に飲干して、御顔を炬燵に押宛てたと思うと、忍び音に御泣きなさるのが絞るやうに悲しく聞えました唐紙に身を寄せて聞いて見れば、私も胸が込み上げて来る。男は奥様を抱くやうにして、御耳へ口をよせて宥め賺しますと、奥様の御声は其同情で猶々底止がないやうでした。私はもう掻むしられるやうな悶心地になつて聞いておりますと、聴て御声は幽になる。泣き逆吃ばかりは時々聞える。時計は十一時を打ちました。

——狭い町では、もう噂が立つた。奥様の御静かな御顔にも時々焦々した神経が浮び、思いがけない声で叱られることもある。そんな

な事が度かきになると、私も段々奥様の御恩も忘れて、口惜しいと腹立たしさで身体の震へることがある。そして旦那様がたまらなくお気の毒になり、ある日、旦那様に今までのことを逐一御話申上げてしまつた。……

と物語は進んで、いよくマライマックスラストに近くなつて、小学校で行われる赤字の地方総会当日、主人が総会に出席するのを知つて齒医者が来るので、密に示し合はして二人の濡れ場を女中が主人に知らせる手筈になつていたが、（しかし旦那様はもう堪えかねて帰つて来られた）のである。次がそのときの面場。

——南の障子にさす日の光は、御部屋の中を明るくして、銀の屏風に倚添ふ御二人の立姿を美しく見せました。いづれすぐれた形の男と女——その御二人が彩色の牡丹の花の風情を脇にして、立つて居らつしやるのですから、奥様も、齒医者も、屏風の絵の中の人でした。儂い恋の逢瀬に世を忘れて、唯もう慕ひ慕はれて、酔ひこがる、時には何も御存じなく、何も御気の付かないやうな御様子。私は眼前に白日の夢を見ました。男の顔は少し蒼ざめた頬の辺しか分りません。——それも

陰影になつて。奥様の思ひやつれた容姿は、眉のさがり、目の物忘れをしたさまから、すこし首を傾げて、御顔を左の肩の上に乗せた迄も、よく見えました。御二人は燃えるやうな口唇と口唇とを押しあて、接吻とやらをなさるところ。奥様は乳房まで男の胸に押されて居るやうで、足の親指に力を入れて、白足袋の爪先で立ち、手は力なさうにだらりと垂れ、指はすこし屈め、肩も揚つて、男の手を腋の下に狭んでおいでなさいました。手も足も、身体中の活動は一時に息つて、一切の血は春の潮の湧立つやうに朱唇の方へ注いでいるかと思われるばかりでした。

あまりのことに旦那様は物も仰らず、身動きもなさらず、唯もう御二人を後から眺めて不動其処へ捧立ちの儘——丁度、釘着けして了つた人のやうに御成なさいました。……中略。

御二人とも目を丸くして振り返る途端——見れば後に旦那様が黙つて立つて居らつしやるのです。奥様は男を突退ける隙も無いので、身を反して、蒼青に御成なさいました。齒医者、は、もう仰天してしまつて、周章で左の手で奥様の頸を押へ乍ら、右の手で虫歯を抜くという手付きをなさいました。……

というのは悲壮なうちにも、思わず苦笑を洩らすようなユーモラスな描写である。

その三「腕くらべ」

永井荷風作

荷風は柳浪、鷗外等に心酔して文壇にまだ知られなかつた頃から、官能的な匂いの高い小説を書いた作家である。それも官能とか愛慾というような抽象的な観念よりも、もつと肉体的な、人間の本能、そのものを卒直に描き出して、彼の花柳小説では頂点を示したのもとして有名な作品である。

大正五年の八月号から翌年の九月号にわたつて、雑誌「文明」に連載されたもので、次に抜いた情景は荷風の私家版に出てくる部分である。一般の流布本にはかなり多くの削除が施こされてある。

腕くらべを發表したころの荷風は、芸者とか、妾とか、私娼など性慾生活に多くの経験を持つた女を好んで書いたが、腕くらべの女主人公も駒代という芸者。帝国劇場で学生時代を知つた駒代と、何年振りかで逢つた吉岡は、早速その夜待合へ駒代を呼んだ。

——男は煙草を吸ひながら駒代の腰から胴中をくびれるほどにした長い長い緋羽二重のしごきの一卷々々に解きほどかれて、敷いた着物の裾の上に渦巻くのをちつと眺めていたが、七年前まで二十になるかならずの時にもかういう場合に年増らしくませた取なしに馴れていた駒代、相応に苦勞もして今は正に二十五、六、女の中での女に成りきつた身は定めし又一倍、昔にくらべてどんな様子かと思ふと、遊び馴れただけに吉岡は始めて逢ふ女よりも一層激しい好奇心に、われとわが胸の轟くのを覚え、長いしごきの解けきるのが待ち遠しい程に思はれた。

駒代はやがてしごきを解きをわつて、くると此方へ向き直ると、裾の重みでお召の単衣はおのつとやさしい肩先からすべり落ちてぱつと電燈を受けた長襦袢一枚、夏物なれば白ちりめんの地を残して一面に螢草に水の流れ、花は藍染葉は浅葱で露の玉を見事に絞ぬいたのは、此の土地なれば定めし襦えんが自慢の品、減法に高さうなものといつものならば氣障の一つも言へる処、今は早やそんな余裕もない吉岡は、手も届かば矢庭に引寄せやうと無暗にあせり立つ。それとも心付かぬか駒代はぬぎ捨てた着物立つたなりに踵で靜に

後へ押遣る傍、今まで気づかずにあた女物らしい浴衣の寝衣。それと見れば矢張り女氣のあたり大事の長襦袢を汗にするでもない慾を出し「あゝ浴衣があつたわ」とひとり言。

吉岡は又もや身仕度に手間どれてはと少しやけな調子で「いゝじゃないか」といつたが、駒代は博多の伊達巻の端既にとけかゝつたのを其のまゝ手早く解きすてると共に此方に向いたなりで、肌襦袢重ねたまゝに螢草の長襦袢ぱつと後へぬぎすてたので、明るい電燈をまともに受けた裸身雪を欺くばかり。吉岡は我を忘れて駒代が浴衣を取ろうと折りかかんで伸す手をいきなり掴んでぐつと引寄せた。不意に引かれた女は「あらあなた」と思はずよろめき、むつちりと堅肥りの肌身横ざまに倒しかけるを、此方は丁度よく腕の間に受け留めたなり抱きすくめ、少しもがくのを耳に口よせて

「駒代、七年ぶりだな」

「あなた、これつきりぢやひどくつてよ。後生ですから」と女はもう駄目と思つてか、蔽うものもない裸身の耻しさに早や目をつぶつた。それなり二人は言葉を絶した。……

それから二人は火と燃える。女は（もう死

んだやう、乳房あらはなる胸の動悸のみ次第に高く烈しく、させて、吉岡は狂わしいばかりに濃厚な感覚に、すさまじい愛慾をたぎらせて（唇のみか乳房の先、耳朶のはし、ねむった臉の上、頭の裏など）（唇を押しつける情景が纏綿とつづいて……）

女の呼吸づかいはその度々に烈しく、開かれた口と鼻からは熱しきった呼吸がほとばしり出て男の肩にかゝる。駒代は遂に苦しむやうな声と共に、横にした片足をば我知らず踏伸して、身を反すと共に、今までは只畳の上に投出してゐた両手に男の身を此方からも抱きかけたが、熱い呼吸の烈しさいよいよ烈しく、再び唸るやうな声を出すにつれて其の手には恐ろしい程な総身



の力をこめて来た。ばたりと櫛が落ちた。その音に駒代はふと臉を半眼に開いて見て、始めて座敷中の明さに心付いたのか、声をふるはせて、「あなた 電氣を消してよウ」

然し男の接吻に其の声は半にして遮られた。女はもう蔽うものなき身の耻しさを気にするよりも今は却つていよいよ迫るわが息づかいの切なさ。男の手を下すのを此方からせがむらしい様子。吉岡は静にその腕から女の身を下へ寝かして、麻の搔卷を引きよせたが然し電燈は決して消さなかつた。

その時の吉岡の氣持を、（女が総身の快感に転々悶々する）容子をはつきりと（限なく熟視しやうと思つた）

のであると、殆どなめんばかりに強い刺戟を求めてやまない蕩児の本心を赤裸々に表現しているが、男が官能的に酔い痴れる姿態を、その後関係を結んだ芸者菊千代で、次のように描写している。

第一は肌の白さ、第二に肉付、（軟きに過ぎず又堅きに過ぎぬ丁度頃合な締りのよい肉付にはおのづから美妙極る弾力があつて抱きめる男の身体にすべくとしながらびつたりと隙間なく吸ひ付く——膝の上に載せるとはちきれるやうな乳房は男の胸の上に吸付きながらうごめき、ゴム鞠のやうな尻の円みは男の太腿の上にくびれてはまり込み、絹のやうなその軟い内腿は羽布団の如く男の腰骨から脾腹にまっはる。——いくら抱きめめて見ても抱きめめるそばからすぐ滑りぬけて行きさうな心持、腕ばかりでは抱きめめかねて男は身を海老折に両腿を曲げて支へれば、云ひがたい肌身はとろくと餡のやうに男の下腹から股の間に溶け入つて腰から背の方まで流れかゝるやうな氣持）第三には女の態度、特に閨中の情緒である。（これまでの日本の女のやうに燈火や日光を少しも恐れない憚らない。寝る仕度をしない前からでも男が誘ひさへすれば夜ふけ人静つた後のさまと少しも変

らない様子——吉岡はこれまでしたい三昧遊んでゐたものゝ、医者ならぬ身は未だ女の身体中で見残した所がいくつもあつた。さすがに強ひかねて言ひたいことも言はずにゐた事が沢山あつた。それ等の思ひ残りは一夜にしてこの菊千代によつて悉く満足される事が出来たのであつた第四には女の寝物語りで、情事にふさわしく、話題は、他の客との聞中の消息ばかりだといふのである。遊び馴れたさしもの蕩児、吉岡も、(一生涯にこの女ばかりはどうしても放すまい)これを放したら日本中これに代ふべき女は決してないと思ひ込んでしまふのである。

その四 「望みなきに非ず」

石川達三作

石川達三は小説の題名のつけかたの上手いことで、大分得をしている。戦後、間もなく発表した、女学校出の街の女を描いた「転落の詩集」にしても、この「望みなきに非ず」にしても、新聞記事のみだしや広告などに盛に使われて有名なことは、読者の既に周知の通りである。

さて本編は昭和二十二年の春、読売新聞に連載されて好評だつた小説で、大野木青年と

未亡人との愛慾描写であるが、悩乱した未亡人の愛慾の情念を、自然な雰囲気と洗練された巧妙な技巧で多分にヴォリュームを盛つて描き出されている。

次の一節は副島未亡人が自邸にダンスパーティを開いた夜の、大野木青年との愛慾場面であるが、芝生に降りた未亡人が、(良人以外の男は腰をおろしたことの無いベンチである。はからずも大野木さんが、良人に似た横顔をして良人の場所に坐つてゐる。これはいけない。いけないと思ひながら彼女はそつと腰をおろした。(ところが、遂に二階の大きなソファで歓喜の瞬間が果てるまでの情景を未亡人の理性との葛藤を残酷なまでに掘り下げて描いている。作者はこれだけの描写に原稿用紙十四、五枚を費しているが、次はその後半の部分である。

……彼女はじつと眼を閉じていた。皮膚がなお満ち足らぬ戦慄をつゞける意志が判断を失つて狼狽している。肉体が妥協を要求している。眼を開ければ妥協は成立しない。眼を閉じて居ては意志は敗北する。敗北すると知りながら眼を開けることが出来ない。夫人は喘いだ。喘ぎながら、

「もうお帰りになつて……」と言つた。

青年は黙つてゐる。眼を上げて見るとサロンの燈は消えてテラスに一つだけ電燈がともつてゐる。女中の姿はない。芝生に露が光つてゐる。二階の白いカーテンは風を孕んでゆるやかにふくらむ。青年は小さく溜息をついて、再び女の肩を抱きしめた。夫人の靴が再び闇のなかを銀色に動く。長い裾はベンチの下にこぼれて形の良い脛が見えた。両腕はしつかりと彼の首にからまつてゐる。大野木はしなやかな女のからだを抱いたまゝ立ちあがり、芝生の露を踏んでゆつくりとテラスの方へ歩いた。夫人は眼を閉ぢたまゝである。耳が抱いて行く方向を考えてゐる。一段高くなつたのはテラスへ上つたからである。もう一段あがつたのはサロンである。足音がゆつくりと静に床を踏む。左へ曲つた。曲れば玄関に出る。玄関はしまつてゐる筈だ。夫人の皮膚は再び戦慄した。嘗て良人はこのようにして彼女を抱き、このようにして此の道を歩いたことがあつた。サロンと玄関とのあいだで足音が立ち止つた。右に、階段がある。一瞬の躊躇。……それから上りはしめた。二段三段とあがる。

「駄目、駄目！」と夫人は息を切らして言つ

た。言いながら銀色の靴で宙を蹴る。足は逃れようとしながら、両手は更に強く相手の首にからみつく。

五段、七段と足音はゆつくり上る。上れば寝室があるばかりだ。現実と幻想とが激しく胸のなかで戦う。現実か、幻想か、いずれかに身をまかせなくてはならぬ。夫人はなお眼を閉じたまゝであつた。

ついに階段は終つた。抵抗するならば今が最後である。意志は抵抗を叫ぶ。心のなかのはるか底の方から抵抗を叫びつゞける。かすかな声だ。その声を掻き消す情熱の怒濤が彼女の意志を微塵に砕く。眼を閉じていれば七年まへの幸福な夜と少しも変わらない。この幸福を振り棄る自由を彼女は持たない。彼女は眼を開けることができない。

扉が軋る。肩で押しあけたのだ。寝室に続く隣の小部屋である。灯はついていない筈だ。一枚のレースのカアテンが寝室とのあいだになびいている。

「いけないわ、いけないわ！」

身をよじつて逃れようとする。貧弱な抵抗だ。抵抗というよりも一種の苦悶にすぎない。幻想に身をまかせるか、幸福を見すて、現実に戻るか、現実にはあまりにも味気ない。

彼女の全身のうちで、抵抗を主張するのはかすかな理性ばかりだ。肉体が理性を叱咤する。もはや血液は踊り狂っている。

「駄目！お帰りになつて。誰か来ますわ、誰か来ますわ」

天鵝絨の大きなソファがある。これこそは良人と妻との秘密の場所であつた。輝しい無言の愛撫に身をゆだねる神聖な場所であつた。

夫人は抱かれたまゝ静かにソファの上に横たえられた。眼を開いてはならない。良人は七年まへと同じようにこゝに居る。肩を抱き胸を抱いては彼女を戦慄させる良人はこゝに居る。どんな事があつても眼を開いてはならない。夫人はすゝり上げて泣いた。泣きながら男の首に頬を押しあてた。全身が歓喜の叫びを上げる。銀色の靴は死んだように動かない

長い裾は床にこぼれて白くひろがった。夫人はすゝり上げて泣きながら男の頬に唇をあて力を罩めて頬を噛んだ。両手に彼の頭を抱きしめ、長い髪の毛を掻きむしつた。もう駄目だ！私が悪いのではないと思つた。……抵抗する意志が消滅すれば、彼女の皮膚は積極的であつた。

一時が鳴つてから、夫人は廊下の突きあたりの扉をひらき、非常梯子を伝つて行く青

年の白い服を見おろしていた。夫人はゆるやかな水色の寝間着を着ている。心は平靜で、疲れていた。北斗星はずつと傾いて邸宅街はすつかり寝静まつている。静かに足もとを注意しながら青年は一段づつ降りて行つた。降り切つたところから五、六歩行くと、立ち止つて上を向いた。右手を上げるのが見えた。夫人はゆるやかな袖をひるがえして右手を振つた勤めに出て行く良人を二階の窓から見送るときのように淋しさと喜びとの入り混つた気持である。

大野木の姿は芝生を横切ると、植込みの中を右へ行き左へ行き、やが、枝をゆすつて柵榴の木に片足をかけると、塀の上にまたがつた。そこでもう一度手を上げると、かすかな足音を立て、外へ跳び降りた。夫人は非常梯子の上に立つて最後まで見送り、涼しい夜風に充血した肌を吹かれていた。からだじゅうの血液が甘くなつていゝような気持であつた。

意志と理性に狂わんばかりに悩んだあとで肉体の情熱を恢復した夫人の、墮落したとも悪いことをしたとも思わない、（開けて行く未来の生活が有るか無いかは知らない。たゞ今

日に悔いはなかつた」という気持は、彼女も所詮、弱い女であり、宿命的な人間の苦悶であつた。

その五「それでも私は

行く」

織田作之助作

織田作之助の戦後の作品には、好んで女の生理の脆さをとりあげ、その脆さのあわれを発見しようと努めた作品が多い。本編の相馬千枝子の場合がそうである。他にも例えば、昭和二十一年雑誌「人間」に発表して戦後の文壇に注目された「世相」の一節、

——静子に誘われてある夜嵐山の旅館に泊つた。寝ることになり、私はわざとらしく背中を向けて固くなつていたが、一つにはそれが二人にふさわしいと思つたのだ。それほど静子は神聖な女に見えていたのである。そして暫くじつとしてしていると、

「どうしたの」

白い手が伸びて首に巻きつき、いきなり接吻された。

あとは無我夢中で、一種特別な休息、濡れた。

たよう触感、しびれるような体温、身もだえて転々する奔放な肢体、気の遠くなるような律動——女というものはいやいや男のされるがまゝになつていゝものだと思ひ込んでいた私は、愚か者であつた。日頃慎しくしていてもこんな場合の女はがらりと変つてしまうものかと、間の抜けた観察を下しながら、しかし私は身も世もあらぬ気持で、「結婚しようね、結婚しようね」と浅ましい声を出していった。……

或は又、同じ年「婦人画報」に連載した長篇「夜の構図」の伊都子の場合——

「カーテン閉めませうか」

信吉は黙つて立ち上ると、カーテンを引いた。急に部屋の中が暗くなつた。

信吉はふと生唾をのみこんだ。椅子へ房りかけに信吉はつと娘の肩に手を掛けた。娘はちつと動かず眼を閉ぢた信吉はいきなりぐいと娘の肩を引いた。娘は立ち上つてばつと眼をひらいたが、そのまゝまた眼を閉ぢると唇を突き出して来た。

二人は唇を合せたまま、ベットのの上に倒れた。

「あ、それだけは勘忍して……」

「どうして……?」

「あたしこんなこと始めてなのよ」

しかし、もたえる動作がかへつて体をしびらせたのか、娘はもう信吉のなすがまゝになつてゐた。そして、

「後悔しないわ。あなただから後悔しないわ。あなたが好きだから。好きだつたら悪いことぢやないわ」

——火のやうな息を吐きながら、二人は絡み合つたまま倒れた。伊都子はシュミーズの下は、何も纏はず裸だつた。

「お風呂で洗濯したの。代り持つて来なかつたのよ」

信吉は顔を赧くした。

「誰も来ない? 誰も来ない?」

「来ない、大丈夫だよ」

さう言つてやると、伊都子は安心したやうに狂ほしく燃えて行つた。これが娘かと信吉は呆れてゐた。

やがてどれだけ時間がたつたのか、二人はがつくりとして、お互ひの浅ましい顔をそむけた。

「私、恥しいわ。浅ましい気がする。まるで

動物みたい。——人間てみなこんなのでせうか」

しかし、伊都子は信吉の手を握つて離さうとしなかつた。……

以上の例のように、哀れなまでに女の生理の真実を挺えようとした織田作には、表面デカタンに見えて心の底には悲しい人間の孤独を秘めている（宇野浩二弁）ことを、発見できなかつた多くの読者は、彼を好色作家と見做したのである。

その世評に対して織田は、僕の小説はロマンだ、と主張していた。そのことは彼の出世作となつた「夫婦善哉」を見出して文芸推薦作にした当時の審査員宇野浩二が、次のように言っている。

「織田は死ぬ前に、僕の小説はエロではないロマンだ。と言つたそうであるけれど、織田がロマンをこころざしたことは、織田の全作品を読めばよくわかる。……織田が一般の人からは大胆不敵とか、粗暴な性質ではなかつたか、というように思われていたようであるけれど、私の知つている織田は、そういう性質とはほとんど反対であつた。つまり織田はあん外内気で、人見知りをし交際も思ひの外

広くないようで孤独な人であつた」

さて「それでも私は行く」は昭和二十一年四月から七月へかけて、京都日々新聞に連載された小説で、彼はその年の暮れ嗜血して読売新聞の「土曜夫人」が連載中止となり「可能性の文学」が絶筆となつて、翌年の一月十日再度の嗜血で永眠したのである。

東京生れの相馬千枝子は両親がなく、妹の弓子と二人で罹災後京都の叔父を頼つてきた。その叔父が千枝子に挑んだ。姉妹は自活することに決め、千枝子が木屋町のヤトナ倶楽部に前借五千円で勤めることにした。（女学校出のヤトナといふので、千枝子はたちまち木屋町で評判になつた）のである。

——一週間ほどたつたある夜、貸席のおかみが、

「千枝子はん、今晚お泊りやすか。」

「えつ？」

千枝子にはおかみの言つた意味が判らなかつた。

「——泊るつて……？」

千枝子がきき返すと、貸席のおかみは、「二階のお客はん、あんたが気に入つたさかい、世話してくれ、お言いやすのどつせ。あ

んたお泊りやすか、どないおしやす……？」
やんはりした口調だつたが、千枝子は思はず胸がドキドキして、血の色がうすれて行くやうであつた。

おかみの言ふ意味はさすがに千枝子にも判つたのだ。お酌だけをすればいいときいて、木屋町のヤトナ倶楽部にはいつたのだが、京都のヤトナは大阪のヤトナと違ひ、お酌だけでは落さない——ということが「あかし花」とか「枕金」とかいふ言葉を耳にするうちに千枝子にも漸く判つて来てゐたのだ。そしてたいいての妓が殆ど例外なしといつてもいいくらゐ、そんな客を取つてゐるのである。

しかし、千枝子は幸ひに今日までそんなことはなく、無事な夜を過して来た。

ところが、今夜はじめて、

「お泊りやすか。」

とおかみに口説かれたのだ。
「あて、かなはんのどつせ。お母さん、かんにどつせ。」

千枝子は婉曲に断つた。木屋町へはいつてからも、千枝子は巧く京言葉が使へなかつたがこの際は京言葉の方が柔く断れると思つたので、一生懸命使つた。

おかみは執拗に口説いたが、千枝子が「か

んにんどつせ」で突つ張つたので、それ以上強制も出来ず、二階の客へ謝りに行つた。そして降りて来ると、

「お客さんには今わてがよう謝つといたさかい、ほな、お客さんに挨拶だけしてお帰りやす。」

「おほきに、お母さん、かんにんどつせ。」

千枝子はほつとして二階へ挨拶に上つて行つたが、客はいつの間にか部屋を変へてゐた。

「こちらどす。」

おかみに教へられて、洋室になつてゐる部屋のドアをひらいてはいると、客はもうベットのの中へ一人もぐり込んでゐて、千枝子の顔を見ると、

「君、そのマツチ取つてくれ。」

テーブルの上のマツチを持つてベットに近づくと、客はいきなりはね越きて、ものも言はずに千枝子を抱きすくめた。

「あつ！何をなさるの……？」

千枝子は身をもがいて逃げやうとしたが男は離さうとしなかつた。そして、背中を抱いた手を胸の柔いふくらみの方へ廻してギョツと力を入れながら頬をくつつけて来た。大きな声を立てるには千枝子はあまりにおとなし

い女であつた。たゞ低く、

「いや、いや！」

と、言ひながら首を動かしてゐると、酒くさい息がいきなり近づいて、唇が触れた。思はず、頸を引いて離さうとしたが、男の唇は執拗に追うて来た。

千枝子は必死になつて、唇を固く閉ぢてゐた。が、だん／＼息苦しくなり、

「ああ——」

と、唇をひらいて息を洩らした途端、千枝子は思はず熱っぽく酒くさい息を吸い込んだ。

やがて気の遠くなるやうな、やるせなさかふと千枝子の体をしびらせ、いつか千枝子の手は相手の背中を抱いてゐた。

「ああ、浅ましい。」

と、手を離れた途端、男は千枝子の体をベットのうへへ倒すと、パチリとスタンドの燈を消した。

「ああ、いけない。それだけは……」

暗がりの中で、千枝子は叫びながら、はね返さうと身もたへした。

……恐怖と恥しさと憤りと、何かにすがりつきたいやうな女の本能とが交錯した時間を妖しいリズムが刻んで行つた。

はつとわれに返つた千枝子の耳に、窓の外を流れる川音が聴へて来た。それがにはかに夜の更けた感じであり、そしてまた悔恨のやうな、あはたゞしい音であつた。

男は暫らく、ちつとしてゐたが、やがて手を伸すと、枕元のスタンドの燈をつけた。ぱつと照らされて、千枝子は思はず身をすくめ裾を合はせると、男の胸に小さくなつた顔をかくした。

そしてそのままちつとしてゐたが、そんな自分が情なかつた。

好きでもない男に暴力的に弄ばれながら、（なぜ強くはねつてなかつたのか、大きな声もよう出さぬおとなしい性質のためだつたらうか。それとも商売故の悲しさだらうか。こんなひどい目に会はされながら、しかもいつか男にしがみついてゐたといふ、女の生理の脆さも恨めしかつた）と自分を取り戻した千枝子は、やはり上ツつらの理性だけで意志の弱い旧い型の女だつたのである。（終）

x

x

x



切支丹迫害史

漆 島 迫 平

切支丹宗徒に対する唯政者の弾圧というものは、あらゆる刑罰の中でも最も慘酷であり執拗極まりないものであることは、次に述べる宗徒に転びを要求する数々の拷問の中に如実に現れている。

一世の英雄、秀吉が薨じて政権は自ら徳川家康の手中へと落ちていった。秀吉もそうであつたが、それにも増して一家一門の繁栄と子孫の安泰を願う事に切な彼であつたから異国渡来の邪宗門に対して弾圧の手を差しのべたのは当然の成行きであつた。家康に引続いて天下を握つた秀忠も父と同様に切支丹の迫害者である点については変りはなかつた。

慶長十九年に禁令を発して、日本人が宣教師やその協力者、若しくは奉仕者と聊かでも関係を持つ事、特に彼等に対して宿舎を提供

することを厳禁した。これを犯した者は火炙り、財産は没収ということであつた。この刑罰は訴人を除く罪人の妻子とその家の向う三軒両隣に及ぶのであつた。そして如何なる大名も切支丹宗徒を召抱えることを禁じられ、否彼等を領内へ置くことさえ禁ぜられた。

この禁令により江戸、京都、堺等の直轄地に於ては猛烈な迫害が始つた。地方の領主も身の安泰の為に信徒を犠牲にしてかえりみなかつた。一般に信者に対して殉教の慰安を与えまいとする方針で、長く時間がかゝつて苦しく、犠牲者を不具にし、廢人にする刑が考案された。例えば鼻や手足の指をバラバラに切つたり、脚の腿を切断したり、また熱鉄で烙印を押したりするのであつた。従つて傷は直つても人間らしい恰好はなく財産は没収さ

れ、その日の糧を稼ぐことも出来ず、哀れにも路頭に迷ねばならなかつた。

長崎の迫害

諸侯に対しその権力を誇つていた將軍秀忠は同時に外国人の侵入を憂慮し、宣教師はこれ等外国人の日本征服の先驅者と考へ、容赦なく冷遇を加えるばかりではなく、諸侯に対して彼等を弾圧すべく強制した。

天主教のメツカ長崎に於てはその威令に呼応して奉行長谷川権六が假借なき宗門迫害の火の手を挙げたのであつた。

勿論彼としても最初は懐柔、好言、約束等の手段で切支丹を改宗させようと試みたのであつたが狂信的な信者に対して、かゝる優しき遣り方では何の効果もないことが判明し

「転びバテレンのベトロ様がです」とそう答えた。穢しい拷問に対する無言の反抗から発した勇敢な諷刺は奉行を激怒させるに余りあつた。

彼は極めて強烈な焼酎を飲まされた。マチャスは正気を失つて頭はがくりと垂れ下り、舌が唇から出た。軽卒が頭を酷く撲つと、舌の先が齒に喰ひ切られて地上に落ちた。夜明け頃に至つて彼は漸く絶命した。死骸は海中に投げ込まれた。

豊前、豊後の迫害

豊前では領主の細川忠興は昨年(元和四年)加賀山隼人の一家を切支丹宗という名目で逮捕し山中の小屋に監禁した。忠興は將軍の指令により隼人に罪科十三条、即ち理由を添え使者を遣して死刑の宣告を与えた。その中最後の一条が重大であつた。それは切支丹なるにより、というのであつた。使者は彼に対して死刑の宣告はこれが主な原因で戒心すべき唯一のものであり、彼の釈放は棄教するか否かにかゝつていと云つた。

彼は使者に感謝し、夫人と娘とを呼び寄せて最後の教訓を与えた。次いで十字架の下に平伏して変らぬ天主に対する愛を捧げ神父の

贈物である洋服と美麗なマントをつけて小舟に乗つて刑場へ行つた。城下町小倉から一哩下つた所へ到着するや、隼人は修道服を脱ぎ同行の一切支丹に与えた。次いで彼は履物をぬぎ、跣足で丘に登りたいといつた。遂に彼は劊手の手により致命の一撃を受け十月十五日、五十四歳の一期を遂げた。

元和六年八月十六日、城下町小倉に於て五人の切支丹が城主細川忠興の命令で処刑された。清田朴齋は將軍の厳命や大名の忠告にも拘らず頻りに布教を續けていた。朴齋は捕えられ、妻のマグダレナと宿主トマス源五郎、その妻マリヤ、その子ヤコボの四人と共に役人の前に引き立てられ、神妙に自分の信仰を告白した。

子供のヤコボは、ひどく撲れて役人に言つた。「お役人様は、すかしても駄目なものを酷い目にあわして私を無理押しに説き伏せようとなさつても、それは尙更駄目です。私を子供扱いになさりたいのです。私の胸はこゝにあります。体はこゝにあります。お気にすむように突いて下さい。引きさいて下さい。私はキリシタンです。私はどこまでもキリシタンです。」

五人共、八月十六日、日出二時間後に処刑

された。彼等は倒磔になつた。朴齋と妻のマグダレナとは翌日息をひきとつた。トマス源五郎とその息子は丸三日間生きていて、最後に槍の止めを胸に受けた。マリヤの絶命した時刻は不明である。五人の死骸は焼いて灰にされ、海中に撒き散てられた。

豊後では領主中川内膳は將軍の寵を失うことなく、又領内に於ける自らの位置を安固にするために、迫害をする心組であつた。江戸から所領へ帰る途中、彼は所々に十字架が立ち、それに血塗れの犠牲者が晒されているを見た。彼は新に物凄しい火刑を始めようと考えた。然し彼の探索の手は教会の平和をかき乳し、自発的な亡命者の数が増してきたため、領内の人口の減るのを憂えて一時的に沙汰止みとなつた。

平戸の殉教者

長い戦乱から開放されて、日本は久方ぶりに平和を謳歌していた。此の年將軍秀忠は父家康を葬つた日光に詣つた。然し切支丹の教会は激しい暴力の嵐の中にさられていた。此の年(元和八年)だけで火炙りや斬罪に処せられた殉教者は百二十人を数えた。

目明し達が絶えず家々を見廻るので最早や

公然の礼拝も出来ず、十字架や聖画も公然とは表わせなくなつた。然し信者の会は依然として活動を続け信仰を維持していた。

六月二日、平戸から独立している壹岐の島で八十五歳の老人、平戸の天主堂の堂守である毛利孫左エ門は、足を縛られ、袋に詰め込まれ、頭には別の袋を冠せられた上、刑吏に足で踏みつけられたが、最後に彼は二つの大きな石を結えられ、生きながら海中に葬られた。その他、頑強な狂信者は或は食を絶たれ或は鞭打たれ、結局その信仰を棄てることなく惨殺された。

権六は平戸の領主にデ・ズニカ、フロレスの兩人並に他の囚徒達を送れと伝えさせた。日本人の囚徒八人は船に乗せられて出発した。

二人の神父が壹岐の島で捕れた。この修道服を着、顚頂を剃つた神父は手を縛られていた。そして首に船から外した鉄の環をはめられて身動きも出来ない程がっちり鎖でつながれていた。

神父デ・ズニカは昨年、オランダ人やイギリス人の商人達の辛辣な憎悪の的となり、彼等の立会の下に酷い処刑を受けたことがあつた。この時ズニカは袴下の外、着物は全部を

剥ぎとられ、手首や脚や腿を縛られ、十字架の形に台上に載せられ、ぎり／＼と締めつけられた縄の間から血が流れていた。襦ひたの多い布で顔を巻かれ、咽喉を締められた。処刑者たちは甕の水を頭や顔に注いだ。而も水は直ぐ咽喉に入らないのでズニカは窒息した。人々は甕の後に控え、奉行は此の有様を見て転んだと主張した。夥しい水がこの拷問のため使用されたが、削手は尙も此れで足らず、ズニカの腹をびし／＼と撲つて、口をはじめ総ての竅から体内の血の混つた水を吐出させたフロレス師も此の時、同じ拷問に遭い、死んだも同然となつたが、共にこの迫害は中止され一緒に牢獄に投じられた。

囚徒たちの船は八月十七日の朝、長崎に着いた。処刑は翌十八日に行われることになつてゐた。囚徒達に棄教させるために、転教者のトマス荒木に試みさせたが、それは無駄な努力に帰した。処刑の場所は、二つの山の間にあつて、町から海に延びている平原であつた。夥しい人々が此の処刑を見物出来るようにと考へて選ばれたのであつた。

此処は町から鉄砲の射程距離にあつて、五年前二十六人の切支丹が処刑された場所に近かつた。切支丹達はこゝを「聖山」と呼んで

いたが、他の人々は切支丹を嫌つていたから以来、総ての罪人をこゝで罰した。

刑場は木柵で囲まれていた。三本の大きな柱は火炙りになる切支丹のための処刑台であつた。薪や柴束はその周囲に堆高く積まれてあり、この柱と向合つて、木釘を一面に植えた長い卓が、斬首の宣告を受けた者十二人の首を載せることになつてゐた。此のような準備は娼婦の町に住んでいる当時日本では一番下級な階級とされてゐた皮剣職人の手によつて整えられた。

十九日朝、二人の神父と平山は漫火で火炙り、十二人の日本人は斬首という判決が下された。苦しみが長いほど、信仰の目から見ても殉教死は貴いに違ひなかつたが、とろ火の火炙りは処刑者の切支丹に対する激しい憤怒の現れであり他の者に対するみせしめでもあつた。

朝の九時頃は、囚徒の行列が町から降りてくるのが見られた。夥しい群衆が、原や丘陵に溢れ、湾は無数の船で船で覆れた。それは天迄響く大きな騒ぎであつた。三万人、否六万人と云われた人出で、その中から、男女の子供達の声で Halleluia (我が魂、主を崇め奉る) を唱えた。奉行たちは、相変らず厳肅

な表情で入口に向合つた丘の上に陣どつていた。フロレスが真先に囲の中に入り、続いてデ・ズニカと平山が入つた。彼等はすでに縄目を解かれ悪びれず静かに歩を運んだ。そして互いに抱き合い跪いて天主に祈りを捧げた。それが終ると立ち上つて銘々その柱の許にゆき、心から柱を抱きしめた。

此の時、十二人の者が入つてきて、跪いて自分から劔の前に首を差し出した。間髪を入れず斬首され、彼等の首は三人の面前に用意された卓上に並べて木釘でとめられたが、これは、彼等を恐がらせ、こうして刑を受けるのだという見せしめのためであつた。

罪人には手足を丈夫な綱で張りつゝと縛るのが普通なのであるが、今度は火に耐えるように白墨や泥を塗り込ませた柔かい葦が用いられた。その上、彼等が苦痛のため火刑場から逃れ、転ぶと申出られるように縄目をゆるくしてあつた。

この間に薪に火をつけよという命令が下された。然し、癩病のキリシタンの住つてい

附近の小屋では火種が見出せなかつた。それ故、火炙り用の新しい火が燐石で作られた。火煙が立ち上り、受刑者は煙にまかれて息を詰らせたので、劊手たちは火勢を弱めるために燃えた薪を遠ざけ、水をかけて湿した。そうして苦痛を長びかせとろ火で長い時間をか



Amplius Ota lappon, Societ. IESV capite,
indicatus modis Fidei. Kinokimio
Augusti 1622

父様、この試煉の中にある私をお助け下さ
れ」
すると、フロレスは彼に向つて
「我が兄弟よ、疑い給うな御身の聖なる大老
(聖アウグスチノ)は、御身の傍におられま
すぞ」と呼んだ。

同時に見物の切支丹達の祈禱
や殉教者達を励ます讃美歌の歌
声は地上や海上に響き渡つた。
火炙りは四十五分続いて、老齡
と伝道の労苦の疲労で衰弱して
いたフロレスが最初に息をひき
とつた。間もなく平山が絶命し
最後に若くて壮健なデ・ズニカ
が火煙に包まれて、その肉体を
焼きつくされた。

正午頃、女や子供は、そこを
離れて食物をとりに行つた。男
の人々は、殉教者の遺物のかけ
らでも掠めとろうとして夕方迄
物陰にかくれていた。奉行は刑吏に遺骸をか
き集めて番人をつけておく様に命じた。キリ
シタン達は囲いから離れず遺物を掠めとる時
の来るのを待ち構えて遠くから拝んでいた。
五日後になつて警固の兵卒たちが引き上げた

ので、遺物は宗徒達によつて取集められ、二人の神父と平山のを除いて、多くの人達にそれ／＼に分けられた。これらの信者にすれば柱の片端や血の染んだ土や灰迄一切が貴重品であつた。

□飽くなき迫害

長崎、大村、並に平戸から来た奉行たちは

將軍の命に應じて競つて苛酷な弾圧に狂奔した被刑者を拝むこと、彼等の遺骸を尊ぶこと彼等の犠牲の場所で祈ることを禁じられ、この違背者は、男は斬首、女は裸にして辻に曝すというのであつた。この威令に対しては尙秘かに犯す婦人があつた。これらの婦人は白風公然と裸にされ足に桎をはめられて晒され多くの人々の羞しめと輕蔑を受けた。これは彼女やその夫や子供にとつては、劔や火で殺されるよりも尙辛いことであつた。ところが女たちはイエズス・キリストの為にこの恥辱を受けるのを寧ろ誇りとして健氣にも堪えた。

切支丹が処刑される度、遺骸は兵卒によつて嚴重に監視され、一切の切支丹がどんな小片でも持ち帰らないように三日間張番された熱心な或る切支丹は兵卒に、姿を変えて刑場

にもぐり込み受刑者の一人の腕を奪つたが、忽ち捕えられて斬首された。三日の後、全部の遺骸は没収された御絵、ロザリオ、その他あらゆる物と共に、まるで伝染病菌のように一纏めにして、大きな堀に投げ棄てられた。この堀には、炭の層や柱や灰の残りや、斬首された人の遺骸が一かたまりと、それから木材が一塊り投げ込まれた。

尙宗教的なものは一切積み上げられて焼棄てられた。その外、灰やしぶきと散つた血の染つた地面までかき集められた。灰と土とは俵に詰め込まれて、沖に持ち出して棄てられた。この大規模な殺戮の後には、塵も跡も残らぬようにするため、船頭は裸にして沐浴させられ、俵から船まで洗わせられた。

六週間ドミニコ会の修道者の従僕リス彌吉に対して稀有の迫害が加えられた。彼は十七通りの戦慄すべき拷問にかけられた。普通の水責めの後、日本酒と水と塩水とを混ぜ合せたのを沢山飲まされ、次に二枚の板の間に挟まれると、二人の人がその上に乗り、その為に口や鼻孔や耳から水を吐くという仕掛であつた。しかも足に各々石の重りが結えられ腕を吊されて、そうして関節を外させ、脱臼させようというのであつた。

尙その上、駿河間いという勢よく旋回させる吊刑を受けた。彼は、肩や脛や陰部にまで熔かした鉛を注がれた。鉄の釘で同じ所を引つかゝれ、魂も引きちぎれるような苦痛を與えられた。更に膝と陰部には、木の錐を突きさゝれ、そこへ熔かした鉛がそゝがれた。尙バゲット・アルクビーズという吊刑も用いられた。

この前代未聞の拷問中、彌吉は「イエズス」と「マリヤ」の二語を口ずさむだけであつた。役人達はコリヤードと他の神父達の住居を明かせと責めた。彼は巧みに返事をして、新たに禍を醸しそうなことは一切、口に出さなかつた。

十月二日、奉行は彌吉に対して火炙りを宣告した。奉行所を出る時、彼は同じく宣告を受け、剣によつて殺されることになつていた妻のルシャと二人の八才と四才になる二人の子供と会つた。彌吉には刑場迄乗物で連れてゆくと申し出があつたが、彼は衰弱し、又身体中拷問の傷を受けながら大丈夫徒歩でゆけると答えた。そして刑場に達して火炙りの酷刑を受ける前に彼は目の前で最愛の妻と二人の子供が惨殺されるのを見なければならなかつた。言わば彼は三回死刑を受けたようなも

のであつた。彼に対する処刑も残酷を極めていた。新は受刑者より遠く離され、苦しみを更に増し悶え死にさせる方法を用いられた。然し彌吉の肉体は衰弱しきつていたので十分も続かなかつた。修道衣は間もなく焼け布切れはひら／＼と空中に舞い上つた。繩目が燃え切れて彼の身体は横に倒れた。

遺骸は三日間、そのまゝ晒され、それから灰にして、その灰は海中に放棄された。

江戸市中の迫害

熱狂的な殉教者の一人にヨハネ原主水がいた。彼は元和元年の迫害の折、手足の指を全部切られ、額に十字架の烙印を押されたのであつた。原主水はキリシタン宗徒の中でも無双の確固不拔の信仰ぶりの手本を示し、実に剛胆によく此の試練に耐えて、生きのびていた。

主水の一旧臣が彼をキリシタンの頭目として江戸の町奉行に訴え出て、同時に二人の修道者の居ることを明かにした。従つて主水は監禁され、神父たちを探し出すために厳しい搜索が始まつた。然し神父たちは知らせる者があつて既に遠くへ逃げのびた後であつた。この間にデ・アンゼリス神父の宿主たちが

拷問され色々酷い目にあわされ、遂に修道者たちの隠れ家も明らかにされたので、神父は立派な宣教師として名乗り出る決心をした。なんとすれば自分が捕えられ、ば、搜索は中止され、自分が命を捨てれば多く人々が助かるだろうと考えたからであつた。彼は和服を脱いで、顫頂を剃らせ、修道服を着て奉行所に名乗り出た。

デ・アンゼリスは奉行から調べられると、「私はイエズス会の司祭であり修道者である。イタリアの国はシシリイ島で生れた、日本人に救済の希望のあることを知り、一切のものを捨てて、この日本人の中に参つて真理を伝えようと思つたのである。私は、御国の風俗を採用し日本人のようになっている。二十年間の伝道のあらゆる苦勞、あらゆる困難は、私が自分の身がこの人民の救済のために捧げたものだから、よく使われたと思つております」

と答えた。將軍の意志の柔順な実行者である奉行は早速彼を牢獄に監禁した。

搜索は更に続いて、捕えられた囚徒の数は五十人に上つた。フランシスコ・ガルベス神父は江戸から海路鎌倉へ行き、一切支丹の家に匿れたが、彼は尙も危険を感じて、長崎へ

逃げるつもりで乗船しようとしていた時、彼等を追跡していた見廻りの者が追いついて召捕つた。囚徒たちは老中の前に引き出された。老中の一人はガルベスに対し、無智な人々の煽動者であると責めた。

全町は挙げて懊惱と混雜の中にあつた。目明しや隠密は増え、全町民の自分の属する宗旨と仏僧の名とを申出なければならなかつた。キリシタン達には、最早や一つとして避難する家とてなかつた。夥しいキリシタンが道々家族を養うために、着物の類まで全部売り払つて立退いた。

老中の報告を聞いた新將軍家光は激怒して「全国の叛乱も我が首府に二人の伴天連が現れた程に感じない。老中たちは昨年弾圧の後には何処にも伴天連がいないと言つたではないか。予はもう奴等の言葉を信じない。」更に激昂して言葉を続けた。

「長崎には二十人の伴天連がいるかも知れんこれはまだ大したことはない。然し、我が首府にこれが二人現れたのは不屈至極である。嚴罰にせよ。後から出て来た奴も皆同じ刑罰に処せよ」

宣告文には、修道者たちと原主水とは、往來を引廻した末、町の真中で火炎りというこ

とになった。老中は尙残りの五十人に対する処置を乞うた「奴等は皆火炙りにせよ。婦女子は他の犯人が見付かるように、吟味が終るまで牢につないでおけ」と將軍は答えた。

原主水はよく見えるように大きな馬に乗せ

られ、大路を引廻され先触れは

群集に向つて絶えず次の言葉を

繰り返した。

「將軍様がキリシタンをお嫌いなさること此の通り、御身内でも容赦はない」

十二月四日、奉行達は牢舎にやつてきて、罪人を縛つて町を通り町から刑場へ引立てゝ行つた。囚徒たちは首に縄をかけられ、手は後手に縛られていた。彼等は三組に分れていた。第一組の先頭にはデ・アンゼリス神父が駄馬に乗つて、名前と罪状を記した小旗を背に結んでいた。修士シモン・遠甫外六人の者は徒歩でその後に続いた。第二組は同じく馬上のフランシスコ・ガルベス神父と他に

徒歩の者が六十人であつた最後の第三組は手足を切断されたため、よく馬に乗れないので

縛りつけられた原主水であつた。牢内で教したキリシタンは火炙りの場所まで縛られて引いて行かれた。彼等はここで許されることとなつていた。キリシタン達が罪人に話しかけるのを妨げるため、四方八方から兵卒が警



戒に當つた。

刑場は最初は町の目ぬきの広場の筈であつたが、一層物々しくするため、江戸から京都へ通じる街道上の一つの丘が選ばれた。

五十本の柱が立てられた。町寄りの最初の三本は、他のものから離れてあり、柱と柱は

約一間位ずつ間を置いて、周りには薪が積まれてあつた。

広い原つばと周囲の丘陵にはどこも無数の群集が詰めかけていた。この群集の中には、新將軍家光の就任のために召集されて来た各地の大名が全部臨席していた。

原主水は刑場に着くと、話したい事があるといふ、馬上から群集に向つて口を切つた。

「私は異教徒の誤謬を憎んできた。この理由で長年の間火炙りになる今日まで、追放でも甘受して参つた。私が極端な責害にも耐えてきたのは、唯、キリシタン宗の真理を証據たてんがためである。私の指は全部切られ

足の踵も切られ、今生きながら火の中に投じられようとしてい

る。私のこの切られた手足が何よりの証據である。私はイエズス、キリスト様の御為に苦しみを受けている

イエズス・キリスト様は、私には永遠の報酬をお与え下さるでしょう」

二人の神父と原主水とは馬上のまゝ置かれ

他の四十七人は柱に縛りつけられた。同時に若干の棄教者は釈放された。

この時、突然一人の大名が大勢の家来を引連れて刑場に入ってきた。役人達は彼が將軍の命令を齎したものだと思つて囲いを開けて通させた。大名は馬を下り役人の頭に向つて口を開き、何故こんな人々が、この様な残酷な刑を受けるのかと訊いた。役人がこれは切支丹だからと答えると「予も又彼等と同じく、切支丹である。彼等と同じ運命に遭わして貰いたい」とその大名は言つた。奉行たちは狼狽して首席の老中に相談にやつた。老中が將軍に伺いを立てると、將軍は此の大名を他の囚徒と一緒に処刑せよと命じた。

その結果、彼は召捕られた。彼の家臣の中五人は直ちに彼の後を追つた。同時に尙も三百余人の者が役人の前に行つて跪き、キリシタンたることを公言し処刑を求めた。ところが彼等は警固の兵士たちによつて退けられ、且つ役人たちは騒動の起ることを憂えて処刑を急がせ火をつけさせた。

役人たちは、二人の神父に弟子共の苦しみ悶える姿を見せて、恐怖の念を起させたいと思つた。二人の修道者と原主水とが別々に置かれたというのもこの為である。然し二人の

神父たちは、天主に感謝を捧げ悠々たる態度で動揺もしなければ、歎息するでもなく、また顔を顰めることもしなかつた。一方原主水も彼等と同じく屈辱を忍んだ。

火焰と煙の中に四十七人の者が息を引きとると、修道者と原主水は下馬せしめられ、銘々に柱に結えられた。町方の第一番目が原主水で、次がデ・アンゼリスとガルベスの順であつた。火は忽ち拡がり渦巻いて天に上つた。その火煙の隙間から三人の姿が見えた。デ・アンゼリスは死ぬまで立ち通して説教を止めなかつた。時に彼の体は前屈みとなり、息を引きとつても、そのまゝの姿勢をくずさなかつた。

原主水は間もなく絶命した。焰を抱くように指を切られた腕を伸して、そのまゝ地面にうつむけに倒れた。最後のガルベスは柱に凭れたまゝ立つていた。

奉行たちと群集は茫然とこの有様を眺めていた。

刑死者の遺骸は三日間その場に晒されてた。第三日目に切支丹達が、うよく集つてきて多数の遺物を持ち去つた。

この事を知つた將軍はキリシタンは見つかり次第、全部火炙りにせよと嚴命した。すぐ

約三百人の者が召捕られた。かくして江戸市中に於ける迫害は日に／＼物凄くなつた。

十二月二十九日、三十七人の人々が殺された。この中には子供が十六人いた。或る者は磔刑、又或る者は、ずた／＼に膾切にされたマリヤ・竹屋といふ武家の婦人は酷刑にするとい威嚇にも、棄教すれば優遇するという懷柔にも一向平気で、また家族の上に当然かゝつてくる恥辱にも無関心で「どんなに酷くとも、この死は妾を招き引きつけます」と役人の前で叫んだ。彼女は馬にくゝりつけられて、他の者の先頭に立たされた。他に役人の前に応場に出頭して自らキリシタンだと名乗つた四人の貴婦人があつた。

次に十八人の子供であるが、これは既に殺された七八人のキリシタンの息子で、まだ恐ろしさを知らず、喜々として興じながらやつてきたのには、關係のない者迄涙をさそわれた。最初に処刑されたのは子供達であつた。彼等はひどく野蠻な取扱ひを受けた。或る者は首を打ち落され、又或る者は体を真二つに切られた。更に足を押えられて、胴中をずた／＼に切られた。

十一人の者が婦人を怖恐人させるために、目

の前で虐殺された上に磔刑になつた。十一人の者が息を引きとると、彼等の手に子供の首が突きつけられた。

火炙りになる筈の者が六人残つていた。火は点ぜられ、灼熱地獄の中に壮烈な犠牲を成就した。殺された者の中に、家をキリシタンに貸した將軍寵愛の小姓がいた。外に切支丹教徒でなくても、原主水を匿した為に処刑された者もあつた。

此の実例を見て恐れをなした江戸の市民は夥しいキリシタンを告発した。

◇ 各地方の迫害

切支丹に対する最も偉大なる迫害者である將軍家光は自ら江戸に於て激しい懲罰を盛んに加えつゝあつたが、必ずしも他の諸侯に対して迫害を強制はしなかつた。然し独裁者家光の忌避に触れることを極度に恐怖していた多くの大名達は挙つて江戸の迫害に倣つた。

出羽南部の領主、佐竹義宣は江戸の迫害に真似て家老梅津半右エ門に命じてキリシタンを探索せしめ、二十一人の武家をも入れて四十二人の者が投獄された。

宗徒たちは皆、厳しい試験の筈の下に呻吟しなければならなかつた。僅かな眠りと僅か

な食事は彼等に拷問として与えられた。ひたすら彼等はイエス・キリストのために死ぬことを熱望していた。

加倉井二郎右エ門の妻ルシヤは両親に連れ去られて大声でキリシタンだと名乗り出で父に「妾は仕方なくあなたのお側にいます。あなたが妾を牢舎に連れて行つて下されば、それを幸福に思います」といつた。サビナは火炙りにすると威されたが「妾の受ける迫害が更にひどく大きな報酬を受ける為に、火は漫火になさるといふ」と言つた。

萩原喜十右エ門の妻モニカは、柱に縛られ四日間食わずに放つて置かれた。この婦人は十才と三才の二人の子供を連れていた。二人の子供にもやはり食物は与えられず、母の首や足にとびついて、涙を流しながら父の居所を尋ねた。そして父は何時食物をもつて来てくれるだろうと訊いた。モニカは此の致命的な刺針にさされたが、此の無邪気な子供たちの不平と苦痛に抗することが出来た。彼女は足許に衰えて元気のなくなつてゐる子供たちを見て、天主に母としての苦痛を語り、万人の救済のために磔刑になつた聖なる主のことを教える心が強くなつて屈しなかつた。彼女は目の前で子供を殺すと威嚇された。

モニカは目を天に向つて

「撲つて下され、子供達の体の上で殺して下され、そうすると、あなた方は、妾どもに眞の生命を下さることにあります」と叫んだ。彼女は台所の用をさせられ、これが四ヶ月も続いた。次いで、彼女は他の宗徒と一緒にされた。

佐竹義宣に棄てられた侍妾の召使の一人、お岩は兄弟から切支丹以外の男と結婚するよりに勧められたが、断然拒絶した。そこで兄弟は彼女に一年間台所で働き、もつと卑しい仕事をするよう押しつけられた。親類の者から異教徒との結婚を尙も強制されるので、彼女は浮世を棄てた印に髪を切つた。親類の者は立腹して彼女を戸外へ連れ出し、地面に敷かれた席を示して

「汝、教をすてよ、さもなければ殺してしまふぞ」彼女が脆くと親類の者は刀をふるつた。彼女の首は前に落ちた。

二月十四日の事であつた。彼女は其の時二十七才であつた。異教徒から深く埋められた彼女の遺骸は数ヵ月後にキリシタン達によつて奇蹟的に取戻された。

(未完)

◎縛られた女の写真集◎

光沢面焼付 五枚一組（二集分）二百円
印画紙

（送料共）

◎目下分譲中のもの◎

第四篇（第三十一集より第四十集迄）十集
第五篇（第四十一集より第五十集迄）十集
第六篇（第五十一集より第六十集迄）十集

◇以上各集共一集分は各々五枚一組です◇
五集以上纏めて御申込の分には書留送料当方負担にて御送品申し上げます。

集を追うて充実発展して参りました本誌独特の責めの写真は愛好者の熱烈な支持により

原稿募集

- 一、すべて未発表の興味溢れる作品を望みます。
- 一、内容は本誌に相当と思われるものでしたら如何なものでも結構です。
- 一、四百字詰原稿紙五十枚迄の作品発表作品には発行後相当の謝礼を差上げます。
- 一、原稿は原則として返戻申し上げかねます。
- 一、締切日は特に定めません。
- 一、挿絵、口絵、写真、漫画、小話、笑話等も募っております。

（奇譚クラブ編集部）

まして、そのコレクションとしての役を果して参りましたが、多数の方々の要望に答え、猿轡や道具を用いて切実感の表現に意を用いたものを発表、その変った姿態美と見る者を恍惚境に誘い込む緊縛美には、一見した者の驚異の的となつて居ります。今回は遂に待望の各種姿態の逆さ吊りを敢行、従来の御愛顧に報いることになりました。読者サービスとして実費で分譲して居りますから、多少に拘わらず御申込下さい。毎月新作品を漸次追加の上旧作の分譲を中止致す方針です。

（代理部）

◎玲子画帖◎

着々進行中

玲子画帖の発表を致しました処早速多数の方々の御予約を頂き有難うございました。目下順調に着々と進行中でありましたので、予定通り皆様のお手元へお届け出来るものと思つて居ります。今暫くお待ち下さい。

KK通信

発送開始！

本誌愛読者を中心とした楽しいグループの自由な集いのパンフレット、見本十円切手にて急送。半年分実費概算百円御送付下さい。

先ず書店へ

御予約下さい

熱狂的な本誌ファンの激増により、各地で本誌の入手難を訴えられておりますが、毎号最寄り書店へ御予約下さい。確実に入手される一方法であります。

☆旧号は送料共一冊九十円にて御送付申し上げます。本年一月号以降より毎号若干保有しております。御申込下さい。

◎直接購読者募集◎

三月分三冊（送料共）二百七十円
半年分六冊（送料共）五百四十円
一年分十二冊（送料共）一千八十円

毎月品切れにて御迷惑をかけていますが、御買渡しの無いよう是非直接御購読の申込下さる様お待ち致します。半年分御申込の方には贈呈申し上げ致します。外KK通信贈呈

奇譚クラブ

第六巻第十一号 毎月一回一日発行

十一月号 定価九十円

昭和二十七年十月三十日印刷
昭和二十七年十一月一日発行

編集人 箕田 京二

印刷人 上田 庄之助

発行人 吉田 稔

大阪府堺局区内菅原通四ノ三〇

発行所 曙 書房

振替口座大阪三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。